郷土芸能と遊戯

一、概　説

宮城村の郷土芸能はその種類も少く、伝承の範囲もせまいようである。現在実演できるものは獅子舞、神楽、民謡などである。ただ一つ操人形芝居に他に例を見ないものがあることである。以下それらについて報告することとする。そのほか、競馬と子どもの遊びについての資料をまとめてみた。

（萩原　進）

二、柏倉箱田の操人形

大字柏倉字箱田に操浄瑠璃人形が残っている。筆者は以前北爪泰知さん宅に保管されているとき往訪したことがある。現在は村の新設の開発センター資料室に保存展示されているものである。この人形は一人使いの豆人形であるが、使い方に独自の方法が用いられている点で注目される。現在はもちろん使った者も生存せず、詳細については明らかでないが、現在保存されているものと伝承によって記すことにする。

カシラ　三個だけ現存している。一個は立役カシラで、顔面縦八・七センチ、横七・二センチ。カツラは植毛式である。彩色は肉色である。後頭部と耳の下に小さな穴があいているのは、ここに一メートルぐらいの細紐をつけたあとである。このカシラにはまだ黒い細紐がつけたままになっている。桐材。

人形カシラ（萩原　進撮影）

胴輪と足（萩原　進撮影）

女形カシラの一つは既婚の女カシラである。縦七・七センチ、横七・二センチ。後頭部に紐をつけた釘止めの小さな穴がある。いま一つの女カシラは未婚のもので、縦七・七センチ、横七・二センチである。やはり紐の付根の穴がある。首と串の構造は他の一人使いとおなじ。串はいずれも七センチ程度の短いもので一人使いの特色を示している。

胴輪と足　胴輪と足は接続しているが、胴輪は桐材の輪切りにしたものに晒（さらし）を巻いたもので、上部に串を挿し込む穴があいているから、カシラと首と胴輪・足が別々でなく、

連結していたことがわかる。胴輪は長さ一三センチ、足は大腿部と下腿部で一六センチある。足も晒で巻いてあり、やはり桐材である。これから見て人形全体は四〇センチほどと推測される。

衣裳　現在七枚ある。その一つは縮緬で金糸銀糸の刺繍がある。丈け四一センチ。絆天は丈け二五センチ、染めて青色である。ほかに男物の格子縞一、更沙でつくったもの一、縦縞物一、縮緬絆天二である。いずれも手づくりである。

人形使いの着用袴　二枚あり、人形使いが用いたものである。

舞台道具　伝承によると、この人形は村の蚕室などを利用したが、その都度の組立式掛舞台であったという。八畳間にピッタリ組み込まれるようになっていたというが、部材は遺っていない。次に舞台道具のうち現存しているものを掲げておくことにする。

(一)　襖　一六枚あり、縦八〇センチ横四一・五センチ。色紙や短冊の貼り交ぜが多い。舞台の背景や二重に使用したものであろう。

(二)　格子戸　三枚。八〇センチと六五センチ。

(三)　書割　書割はよく遺されている。種類別に見ると、城の櫓、燈籠、松の木、鳥居、船などで、いずれも切絵になっており、平面に描かれたものではない。これは舞台によってその都度吊り下げたものであろう。書割の一つに「辛酉雙洲」とか「癸未」などの干支が書かれているのはこの大道具の成立年代をさぐる手がかりとなる。

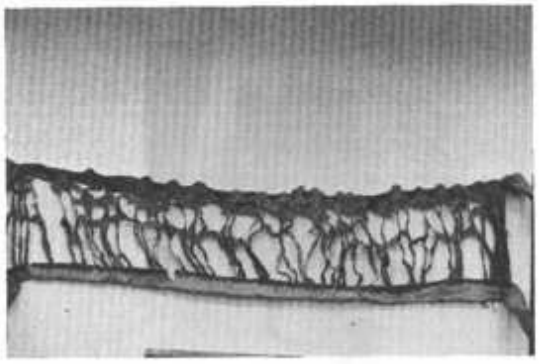
(四)　背景　舞台の背景に使われたものである。一つは二メートル四七センチ×八〇センチあり、図柄は城の大手門の図である。二つ目は山を描いたもの。三つ目は杉並木であるがこれは絵ではなく丹念につくられた切抜き絵である。

本人形の使い方　北爪房一郎さん（明治三十一年生）から、実際に使ったときを思い出して語ってもらったのによると次のようである。

一座は十人位であった。大正三、四年頃が最後だった。毎年土用干しをやり、北爪泰知さん宅に保管していた。使うとき人形使いは黒衣（くろご）をかぶり、左手で人形の串を握り、立膝で使った。拍子のトントンという音は膝でやった。右手でカシラについている紐を持ち、カシラを左右に動かし、口に後頭部の紐をくわえてカシラを上下させた。この使い方が他に例を見ない。もっとも武三番叟の甘楽郡南牧村星尾人形では、三人

衣裳の一部（萩原　進撮影）

書割と背景に使った切抜（萩原　進撮影）



珍しい切抜き背景――松並木（萩原　進撮影）

使いの大きな人形であるが、後頭部に紐がついていることからおなじように口にくわえたものと思われる。そうした使い方がこの人形に採用されたものであろうが、一人使いの人形では他に例がない。

三、大前田の獅子舞

宮城村にはただ一つ大前田の獅子舞があるだけである。現在でも毎年やっている。一人立三頭舞で、流派は地元では火挟流と称している。獅子は「父」「母」「息子」獅子とよんでいるが、父頭は黒ウルシ塗、母頭は朱ウルシ塗、息子頭は黒ウルシ塗である。父は角が二本、母は角一本、息子は角二本がついている。カシラは曲線的で、父と母は幅（左右）二〇センチ、横二四センチあり、息子は一九センチと二四センチである。付人は火吹男とおかめ。囃子方はササラ（二尺四寸ぐらい）を使う。するのは御幣束でするのが変わっている。笛は五、六人でやる。

大前田の獅子カシラ（萩原　進撮影）

曲目は「庭」「お諏訪様ぼめ」「やかたぼめ」「糸屋ぼめ」などがある。庭は外で舞い、諏訪様は神社、やかたは氏子の家で、糸屋は神社でたまにやる。獅子歌は現在次のものが歌われている。

お諏訪さま

お諏訪さま、いまがさかりと、うち見えて参る氏子に、福を賜わる。

中立

なかだちの、打つや太鼓に、はやされて、花を散らさで、遊べなかだち。

お宮参り

朝日さす、夕日輝く、日の下に、黄金づくりの宮が立ちそろ

この宮に、鷹がすむやら、鈴の音、何時も絶えせぬ、み神楽の音

お庭参り

参りきて、これのお庭を、眺むれば、黄金小草が、足にからまる。

獅子場には万燈を立て、その周囲をまわる形式で舞われる。定例上演日は十月十七日で、十月七日から練習に入るという。

由来徴証については次のように伝えられている。この獅子舞は龍頭獅子舞といい、その昔西原の下の諏訪神社で行われていたが、保存していた小屋が火災にかかったとき、獅子ガシラ三体は火の玉となっていまの諏訪神社の方へ飛んでゆき、それからいまの諏訪神社でやるようになった。記録にのこっているものを見ると、江戸時代の宝暦年間に始まったという。寛政十一年の夏に大旱魃があったとき獅子舞で雨乞いをしたところ大いに雨が降り出したという。その後も悪疫流行のときも、村中毎戸を廻って悪疫退散を行った。舞の種類は「渡り節」「すりこみ」「前立ち」「岡崎」「中立」などがあった。万燈は大きなものがつくられ、それに短冊がつけられ、短冊には、天下泰平、家内安全、五穀豊穣、養蚕倍盛、商売繁昌、悪疫退散などを書かれる。

獅子組は二五人ぐらいで組織されている。戦後護国神社、明治神宮、靖国神社に奉納したこともある。

四、三夜沢赤城神社の神楽

三夜沢赤城神社の神楽は次の十三座が舞われる。上が座名、次が舞人数、下が舞人の採物用品である。

四神舞　四人　幣・鈴・装束・とりかぶと

神　招　二人　幣・鈴・装束・鳥かぶと・翁面
国　堅　二人　返閉（へんぱい）の舞という。太刀・装束・鳥かぶと・天狗面
猿田彦　一人　鉾・鈴・装束・鳥かぶと・仮面
細女（うずめ）　一人　榊・鈴・巫女装束・仮面
岩　戸　一人　岩戸・鈴・装束・仮面
細　女　一人　扇・鈴・巫女装束・仮面
火　神　一人　太刀・鈴・装束
三器舞（みつのもの）　三人　鏡・太刀・玉・鈴・装束・鳥かぶと・仮面
千能利（ちのり）　二人　弓矢・装束・烏帽子
住　吉　一人　幣・鈴・装束・烏帽子・仮面
児屋根　一人　鈴・扇・装束・烏帽子・仮面
蒔　餅　一人

座名は独特の名称でよばれているが、全体的に見て、四神舞は神楽殿を清める四方拝、神招きは降神の儀で、神楽を奏する導入である。国堅めは返閉の舞ともいい、両足で力強く踏みしめる動作（返閉）から見ていよいよ舞に入って四方固めをする舞。猿田彦と細女は天の岩戸に隠れた天照大神を岩戸を開いて外に出す舞。岩戸で天照大神が岩戸を開き、外に出る場面。第二の細女はそれを祝う巫女舞である。火神は火の神迦具土神の舞で、刀を鍛えるもので他の神楽では鍛冶屋の舞などという。三器舞は三種の神器の天叢雲劔、八尺瓊曲玉、八咫鏡を祝う舞。千能利は他の里神楽にもある座名で千筥（ちのり）のことである。千筥とは靫（ゆき）にさした多数の矢のことであり、弓矢すなわち戦を意味する舞である。住吉は住吉神の舞。児屋根は天児屋根命の舞。蒔餅は神楽が舞い終わり、氏子に神楽殿から菱餅を投げる祝儀である。全体的に見て岩戸神楽の系統に入ると見てよい。仮面も、翁から始まり、かなりの数があるが制作年代は不明であるがかなり古い。衣裳は普通神楽装束である。

囃子方は横笛、太鼓、小鼓である。公演は五月五日の例大祭、一月元旦祭と一月五日の祭典に二度ずつやるが、元旦祭は「翁」と「国堅」、一月五日に「撒米」（おさごを撒く舞）と「おしどめ」の二座がやられる。全座をやるのは五月五日とされていたが、現在全部はやられていないという。

「延享三年丙寅卯月十一日大々神楽式」という記録があるが、これによると、七日間潔斎してから舞ったが、座の名を見ると、

三部大祓　一座
国　堅　二人
降　神　五人
猿田彦　一人　鉾八方
神　明　一人　太刀八方
神　子　一人　榊
稲　荷　一人　弓八方
経　主　二人　太刀八方
住　吉　二人　幣八方
戸　隠　一人　戸八方
神　子　一人　扇子
祝　詞
武　雷　一人　鉾
蛭　子　二人　幣八方
少名彦　一人　三器
軻句突智　一人　鉾八方
鶏　鳴　一人　三宝四方
神　子　一人　幣
山　神　二人　太刀四方
日　懐　一人　三方（宝）
細　女　一人　幣
火　焼　四人

蒔　銭　一人
蒔　餅　一人
神　湯　二人　以上

この座名の下に、舞人の神官名が記されているのは、当時の神楽は氏子でなく神官だけで舞われたことを示している。その次に当時神楽歌のあったことを知る記事がある。

神降歌　東―青幣　南―赤幣
　　西―白幣　北―黒幣
　　中央―黄幣

は、東西南北を守護する四神（青龍・白虎・朱雀・玄武）を色の御幣束で示したものである。寛保元年の神楽歌の記事がある。

神託歌　四つ
岩戸出詠歌　長歌
鶏明　長歌
園開祭歌　一つ
虫咒歌　養蚕歌
　いちむしの、てむしにかえる、たまむしの、そこ□とて、おおいとどまる
送神雑歌

とあるが、残念ながら歌詞を欠いているのは惜しい。この歌詞がわかれば群馬県の古い神楽の研究に貴重の資料となる。

由来徴証は、赤城神社『社家年代記』（宮城村誌所収）に、

貞享元甲子〇今年二月廿一日改元。紀州ヨリ右正ト云神職来リ火亘（渡）行事、神楽等伝授。東社神楽行事ノ始也。右正は杵築ノ社家共云。何カ板橋右京我侭ニテ籠舎申付タリ。

とあり、貞享元年に紀伊国より来た右正という者によって伝授されたとあるから、このときが創始と見てよいであろう。

享保十八年の条に「今年十一月朔日東社太々神楽執行、東上毛神楽ノ始也」は重要な記事である。東毛地方の神楽は二宮赤城神社東社の太々神楽が最初だというのである。

赤城神社例大祭　五月五日は三夜沢赤城神社の春祭りで、古風の神楽を演ずる。京都から伝わったといい、笛三人、太鼓一人でゆっくりした調子で舞う。神楽殿の北側に神座が設けられている。

舞は昔は二十四座あったというが、現在は十二座あり、種目ごとに担当者がいて、互いに冒さない。箱田から永代太々神楽の講中が五月六日に五十人も来ていたが、戦後の昭和二十五年ごろ止めた。当時三十円寄進したもので、戦後はとても維持できなくなった。

奉納神楽の次第は次の通り。（氏子総代倉橋四七八氏の記録による）
（○印は現行）

三夜沢赤城神社　奉納神楽の次第は次の通り　先一七日冬潔斎　次拝揖

三部大祓　吉田神道一座
○次　国堅　左近　左内
○次　降神　四神舞　織部左門　左内　神子
○次　猿田彦　鉾八方　左門　神招
次　神明　大刀八方　左近
○次　神子榊　細め舞
次　稲荷　弓八方　左近
次　経主　太刀八方　求女　織部　左近也
○次　住吉　幣八方　求女　左内　織部也
○次　神招舞　○　岩戸舞
○　四神舞　○　三器舞
○　鈴賛の舞
○次　戸隠　戸八方　織部
○次　神子扇子
次　祝詞　多中　織部也

次　武雷　鉾　左近
次　蛭児　幣八方　左門　織部
次　少名彦　三器　平馬
次　軻句突智　鉾八方　織部
次　鶏明　三宝四方（三器舞）　色部
○次　神子　幣
次　山神　太刀四方　色部
次　国懐　三方　左内
○次　細女　幣　左内　刃力二振
次　火焼　色部　左近　平馬　多中

永代神楽

次　蒔銭　豊前
次　蒔銭　将監
次　神湯　左門　織部

延享二年酉寅卯月十一日　願主　長沢　重衛門

三夜澤赤城神社（本宮）

奉納神楽の次第は次の通り　（倉橋四七八氏記録による）

先　一夜潔斎
次　拝揖　一座
次　神招舞
次　四神舞
次　国堅舞
次　細女舞
次　猿田彦舞
次　鶏明三器舞
次　千宜舞
次　細女舞
次　岩戸舞
次　鈴散舞
次　散米舞
次　住吉の舞
次　像義舞
次　ざうぎ舞

四方固

言譚　「像義の舞」の時にセリフをいう。

天若彦・大国玉命の二人がいい合う。

天若　斯る目出度き御神楽のところに於て我が名を尋ね給ふは何神なるぞ　とうとう名のれ　名のらじで辞退あるものなれば　かの神通の矢先に掛けん

大国　漸し待ち給へ　そも我が語って聞かさん　大元祖神天之御中主神高美結神神詰み神伊佐奈岐乃神伊佐奈美の神天照皇太御神の一子天の冬絹の命の末子大国玉の命とはそも我が事にて候

天若　然らば大国玉の命にましませば右の手に持ち給ふ千木は何のゆわれに持ちて候や

大国　かのち木の事にて候か　社頭に於てはち木勝男木舞った東方は甲乙の方春三ヶ月九十日木の難のおこることをついてつき鎮むる千木もって　舞った南方は丙丁の方夏三ヶ月九十日火の難の起る事をついてつき鎮むる千木もって　舞った西方庚申の方秋三ヶ月九十日金の難の起る事をついてつき鎮むるち木持って　舞った北方はみづのへみづのとの方冬三ヶ月九十日水の難の起る事をついてつき鎮むる千木持って　舞った中央はつちのへつちのとの方四季四土用土の難の起る事をついてつき鎮むる千木にて候

天若　然らば右の手に持ち給ふ尺は何のゆはれに持って候か

大国　斯の尺の事にて候か　天に立つるときは天の御柱地に立つる時

きは国の御柱　待った中央に立つるときは人子の神の御柱　人は即ちすぐなるを以って人としそうじて三十一字の言の葉一首つらねて以って候

天若　それにて御つらねこれにて聴文申べき事や候

大国　白金や小金のいんがへ手に持ちて神の御みをやもりやあげなんと一首つらねて以って候

天若　して又た珍らしき名歌にて候

大国　天若彦の命にましまさば左の手持ち給ふ弓は何のゆはれに以て候や

天若　かの弓の事にて候か　尺と一ば七尺五寸裏らはずわ天の二十八宿を表しもと端ずは地の三十六斤を表しにぎりを七つに握る時きわ七曜の星を表し　まった九つに握る時は九曜の星を表しつるかけたる時は半月の態なりつる引きふくらむ時は三五満月の態也　総じて五行様に作りつる悪魔しりぞけ給う弓にて候

大国　然らば右の手に持ち給ふ羽矢は何のゆはれに以って候や

天若　かの羽矢の事にて候か　羽を二つにはぐときは陰陽を表しまった三つにはぐるときは天地人の三才を表し　総じて三十一字の言の葉一首つらねて以って候

大国　それにて御つらねこれにて聴問申すへきことや候

天若　千早振る神の意垣に釣はりてむかう悪魔いでや払はん　一首つらねて以って候

大国　してまためづらしき名歌にて候　空に憂き雲足早しと見えたり矢先を見て射放つべきことや候

天若　然らば東方に向って射放つべきことや候

大国　漸しまち給へ　東方は木の神くぐ主の命の御鎮座なればその方より悪魔来らずや事や候

天若　然らば南方へ向って射放つべきやことや候

大国　漸しまち給え　南方は火の神火ごぬちの命の御鎮座なればかの方より悪ま来らずやことや候

天若　然らば西方へ向って射放つべきことや候

大国　しばしまち給へ　西方金の神金山彦の命の御鎮座なれば彼方より悪魔来らずやことや候

天若　然らば北方へ向って射放つべき事や候

大国　漸し待ち給へ　北方は水の神水はの女の命の御鎮座なれば彼方より悪魔来らずや事や候

天若　然らば中央へ向って射放つべき事や候

大国　しばし待ち給へ　中央は土の神埴立姫の命の御鎮座なれば彼方より尚ほ悪ま来らずや事や候

天若　大国玉の命にましませば四方四天と立ち塞がり矢先をいずこに向って射放つべきことや候

大国　吾れ聞く悪まはひつじ申の方にあると聞く　矢先を見て射放つべきや事や候　吾が事鬼門をついてつき鎮むる事や候

大・天　天下大平　五穀豊熟　養蚕倍盛　国家安寧の御神楽を奏し奉る

太々神楽和歌

東青幣　南赤幣　西白幣　北黒幣

中央黄幣

神托哥四つ

岩戸出詠歌　長歌　鶏明三器　長哥

園開祭哥一つ

虫咒歌　養蚕舞

いちむしのてむしにかえるたまむしの

その口とておいとどまる

道神囃歌　寛保元年の記録文書に依る

五、その他の郷土芸能

(一) 馬場の屋台囃子

馬場に屋台囃子があり、一時は盛んであった。笛一、鉦（径一尺位）一、大太鼓一、〆太鼓三で合わせた。昭和二十一年に屋台がなくなってからやられなくなった。曲目は「さんてこ」その他であるが、大間々の屋台囃子によく似ている。昭和五十三年に村の文化祭のときやった笛抜きのテープレコードが保存されている。

(二) 祭　文

柏倉の松村一郎という人が祭文をやった。祖父の彦次郎さんが祭文で有名であったがその系統である。現在錫杖と法螺貝がのこっているが、台本はみんななくなってしまって今はない。白井権八などがよく語られたという。

(三) その他

地芝居　諏訪神社に東の舞台、西の舞台とあって、互いに競走して盛んにやった。豆人形芝居も盛んにしたので、頭（かしら）がまだある。（柏倉）

舞台　鎮守諏訪神社の境内に、西柏倉が先に舞台を作ったら、東柏倉も負けまいと舞台を作った。同じ諏訪神社の氏子が、東西二つに分かれた。（柏倉）

盆踊り　むかしの盆踊りは、だれでも参加して、みんなして踊った。唄は音頭をとる者だけがうたった。

「盆の十三日におどらぬやつは、子でもはらんだか、初産でもしたか」

などと、うたって踊った。囃子はなかったか、笛だけだったと思う。稲荷山から稲荷藤ぶしを教えにきた。今の八木節よりもっと、長びいたようなふしまわしだった。「鈴木主水」などもうたった。

このつぎに（大正八・九年頃）「源太ぶし」がはやってきた。大正十二年頃、大胡のメイプ館に小源太がきて、源太ぶしをやった（鼻毛石）。

八木節以前の昔の盆踊りは、たるをたてにしてたたいて、はでにしたが、誰でも踊ったもので、三つ手ばたきをする踊り方である（柏倉）。

びわ　前橋から滋野提水などのびわ師が来てやった。（柏倉）

梅太郎楽隊　日露の戦いに出征する兵隊を送るために稽古したもので、大胡のザグリ屋が大太鼓を持っていたので、そこで手に入れた。指導者は岡山の音楽学校の先生だった人が当った（名前は不明）。六本木重郎治氏（明治三〇年生）が八歳の時に父親たち若い衆一〇人が寄って楽隊をつくった。時期は日露戦争の前だった（三十八年は困窮の年だった）。

馬場の屋台囃子——昭和53年（萩原　進撮影）

天王サマの屋台（馬場）（板橋春夫撮影）

梅太郎楽隊――明治38年創設
（宮城村柏倉）（関口正巳撮影）

楽器は太鼓が大胴1小胴1、笛は横笛3、鐘3、ほかにブリキで三角形を作った。父梅太郎氏が金を出したので「梅太郎楽隊」といい、出征する兵隊の出る帰るの送り迎えに演奏した。お祝いなどにも頼まれて演奏したので、柏倉・塩沢・富士見の時沢まで、出かけたが、無料だった。

制服はフラン布を黒く染めて作り、赤いたて線が脇に入ったズボンに、ラシャの上着で、帽子は赤い筋の入った学生帽で、頭に布を巻いた。

現在、運動会などの応援の時、年配者も演奏に参加してにぎやかである。青年会で作った応援歌もあり、楽隊に合わせて歌う。曲は「大平原」が得意な出し物である（柏倉）。

六、民　謡

本節では、労作唄とわらべ唄の二つに分けてまとめてみた。今回は、歌詞を中心としての調査を行ない、採譜をすることはできなかった。

本地区では、労作唄の中で、田植唄と麦打唄が目立った。田植唄では、朝・昼・晩の唄と、オサナブリの唄とまとまったものを調査することができた。

麦打唄では、「味噌玉娘」の唄が目立つ。

子守り唄では、「ネコのけつ」の唄が広くうたわれていたようである。ねむらせ唄の典型といえるであろうか。

わらべ唄では、採集例がすくないが、まりつき唄に特色があった。

(一) 田　植　唄

田植え歌　田植えは近所の人がユイ（共同）で植えたが、綱を張らないで、歌に合わせて植えた。「十七の…」の歌は、十七種あるという。一人前五畝植えた。

田植え歌を歌わないと、田植えがはかどらない。歌に合わせてちょいちょい植えた。疲れると、誰となく「歌にすべえ」といって、歌に合わせて植えた。（柏倉）

オサナブリのうた　オサナブリのうたは田の植えじまいの時にうたった。普通の田植え唄とちがって少しむずかしかった。（馬場）

朝　十七がこそでのこづまなぜ濡れた
　　苗マの露で濡れました

昼　時うつ鐘はいくつ打つ
　　五つも六つも七つも八つも九つも
　　きょうの日の時打つ鐘は　いくつ打つ
　　七つも八つも　九つも

夕　夕暮に浜辺をゆけば　千鳥鳴く
　　また鳴け千鳥　声をそろえて

雑　吉原のお女郎と寝ては　何もろうた
　　ひぜんとカサと　文もろうた
　　奥山のサカキの枝にハトが来る
　　ハトの子の寝言に　小豆ササゲはよしゃんせ
　　豆だら八斗も蒔かしゃんせ
　　十七を使いに出せば山かげで、帯とけ寝ろと、若い衆が
　　（柏倉　松村与一郎　明23）

○鎌倉の八棟造り　何でふく　ヒノキとサワラと　コケラブキ

（柏倉　大島てる）

○奥山のサカキの枝に鳩が来る　鳩の子の寝言に「アズキ・ササギは
よしゃんせ　豆だら八斗も蒔かしゃんせ　豆や豆六月のわせ豆」（柏
倉）

○朝露に髪ゆいあげて花つみに　花つみに行けばヤーハノ男がまねく
ヤーハノ花はたまらぬ（朝の唄）

○今日の田の時うつ鐘はいくつうつ　ヤーハノいくつうつ　七つも八
つもヤーハノ九つも（昼の唄）

○夕ぐれに浜辺をゆけばヤーハノ千鳥鳴く　千鳥鳴け　まーだ鳴け千
鳥なけヤーハノ声くらべ（夕方の唄）

○利根こえてやわたの森の八重桜（あざみの花は）ヤーハノいくえ咲
く　七重も八重も九重も

○十七が柳の下で糸とれば　ヤーハノ柳の色でヤーハノよれかかる

○伊香保では諸国の人がカルタとる　カルタはうそで女郎と寝る

○君が田と我が田と並ぶヤーハノあぜならび　わが田にかかれ君が田
の水

○水くれに山みちゆけば鹿がなくヤーハノ七こえ八こえ（……）

○奥山の榊の枝でヤーハノ鳩がなく、鳩がなく　鳩の子のおねごとに
あずきささぎ　よーしゃんせ　まめなら鳩もまかしゃんせまめのま
め　六月花のわせまめを（以上市之関）

○おめでたや　おさなぶり
来年ござれ　田の神
田の神は左坐に
太郎次は右坐に
おさかもりを　めしされ

（馬場　故小林まつ）

○玉村のお女郎と寝てはヤーハノ何もろた　何もろた　ヒゼンに痞に
ヤーハノ文もろた。

○十七を使いに出せばヤーハノはしがない　はしがない　わが身を橋
にヤーハノ渡らせる。（以上市之関）

○朝露に　髪ゆい上げて　ヤアハ
花つめば　花つめば　男が招く　ヤアハ
花は　たまらぬ　マダ　マダ
今日の日の大郎主のむすめヤアハ
くろに立つ　くろに立つ
どんすの羽織　ヤアハくろに立つ（朝の唄）

○今日の日の　時打つ鐘は　ヤアハ
いくつ　うつ　いくつ　打つ　マダマダ
ななつも　やっつも　ヤアハ
ここのつも　打つ（昼の唄）
夕暮れに　浜辺に行けば（オーイ）
千鳥鳴く　千鳥鳴く　恋くらべ（夕の唄）

（以上　苗ケ島）

○夕暮れに　山道ゆけば
鹿が鳴く　鹿が鳴く
めす、おい来いと
三声鳴く

○鎌倉の八ツ棟づくり
何で葺く　何で葺く
ひのきとサワラ
こけらぶき

○十七が向こうで招く
橋が無い　橋が無い
わが身を橋に
渡らせる

○利根こえて
八幡の森の　八重桜

（馬場　後藤もん）

七重も八重も
九重も　　（馬場　鹿田嘉一）
○米の山へ　登りてみれば
西は利根　西は利根
東はなぎさ
北は松原　　（馬場　後藤もん）
○朝露に髪結いあげて
花つめば　花つめば
男は招く　花はたまらん
○今日の日の時打つ鐘は　いくつ打つ　いくつ打つ　七つも八つも九つも　　（馬場　鹿田嘉一）
○吉原の出口の茶屋で
三味がなる
立ち寄り聞けば　女郎がひく
もうし寄らんせ
かけなんせ
奈良茶に　卵のふわふわ
どじょう汁
お前のことなら
ただ泊める　　（馬場　鹿田嘉一）

田植唄（断片）

○大黒が俵の上で
はやりうた　　（馬場　鹿田嘉一）

朝の唄

○朝つゆに髪ゆいあげて　ハアーマダマダ　ヤーハノ花つめば
花つめば向いでまねく　ハアーマダマダ　ヤーハノ花はたまらぬ
（以下囃子詞略）

昼の唄

○今日の日の時うつ鐘はいくつうつ　七つも八つも九つも

夕暮の唄

○夕ぐれに浜辺をゆけば千鳥なく　もっとなけ千鳥声くらべ

その他

○十七をつかいに出せば山かげで　帯とけねろと若い衆が（鼻毛石）
○きょうの日の　時うつ鐘は（マダマダ、イヤハアノ　エエ）いくつうつ
いくつうつ　ななつも　やっつも（イヤハノ）ここのつも（ハアソウダヨ　ソウダヨ）
○吉原の　出口の茶屋で（イヤハノ）三味がなる　三味がなる　立ち寄り聞けば（マダ　マダ　イヤハノ）女郎がひく
○奥山の　サカキの枝に（イヤハノ）ハトがすむ　ハトの子の　おねごとにゃ　アズキ　ササギはようしゃさんせ　マメなら　ハトもまかしゃんせ　マメはマメ（ヨウイ　ヤア　ハノ）六月花の（イヤアハノ）わせマメよ（鼻毛石）
○田植の一番しまいにうたう唄
今日の日の　タロウジのむすこ（マダマダ　イヤアハノ）どれがそうよ　どれがそうよ（オウイ）どんすの着物（マダマダ　イヤアハノ）紹の羽織（ハア　ソウダヨ　ソウダヨ）（鼻毛石）

(二)　棒　打　ち　唄

棒打ち　棒打ちはクルリでやった。麦を庭にほして打ったが、朝早いころ出して午前中ほし、午後隣り近所が手伝い合って夕方にならないうちに打ったもの。サンゾク雨がふるので暑いさかりにやらなければならず、苦しまぎれに歌をうたってやった。五人くらいで両方から向い合ってまわりながら打った。もとは木の棒のくるりだったが後にサケ（竹を五本くらいまとめたもの）になった。棒の方が力が入るようだが、竹になってからの方があたる面積が広くよく落ちた。

歌は
○おらが隣りのみそ玉娘
嫁に行くとて洗たくまでしたら
ヘソが出べソでチョイトきらわれた
アア打ちこめしゃなだれ
真石も粉になれ、青菜に塩かけしおれていやがれ
ダンゴの塩なら江戸までころがれ
ヘソの出べソはまだよけれど
鼻がお獅子でチョイトきらわれた
アア打ちこめしゃなぐれ
真石も粉になれ　青菜に塩かけしおれていやがれ
ダンゴの塩なら江戸までころがれ（苗ヶ島）
○浅間山から鬼がけつつんだして
アー、ドッコイ、ドッコイ
鉈でぶっきるような屁をたれた
アー、ブッコケ、ブッコケ
マエシモコナナレ、オヤマモクズレロ　（三夜沢　倉橋四七八）
富士の白雲　朝日でとける
とけて流れて　三島に落ちて
アー、ドッコイ、ドッコイ
三島女郎衆の化粧の水
アー、ブッコケ、ブッコケ
マエシモコナナレ、オヤマモクズレロ　（三夜沢　倉橋四七八）
富士のお山に振り袖着せて
アー、ドッコイ、ドッコイ
奈良の大仏を聟に取る
アー、ドッコイ、ドッコイ
マエシモコナナレ、オヤマモグズレロ　（三夜沢　倉橋四七八）

赤城山から沼田を見れば
アー、ドッコイ、ドッコイ
沼田こびき（木挽）がシラミ取る
アー、ブッコケ、ブッコケ
マエシモコナナレ、オヤマモクズレロ　（三夜沢　倉橋四七八）
おらが隣りの味噌玉娘
嫁に行くとて洗濯までしたら
ホイ、ドッコイ、ドッコイ
へそが出べそで嫌われた
アー、ドッコイ、ドッコイ
へその出べそはまだ良いけれど
ホイ、ドッコイ、ドッコイ
鼻がお獅子でやれ嫌われた
アー、ドッコイ、ドッコイ、マエシモコナナレ、オヤマモクズレロ
（三夜沢　倉橋四七八）
○浅間山から
鬼がけつつんだして
ナタでぶっきるような
屁をたれた　（馬場　鹿田嘉一）
○どうせなぐるなら
でかいことなぐれ
富士のお山に振り袖着せて
奈良の大仏さんを
やれ婿にとれ
アーブッコケ、ブッコケ　（馬場　鹿田嘉一）
○赤城山から沼田を見れば　沼田女郎衆がシラミ取り　（柏倉　大崎ゲン）
○富士の山へ振り袖着せて　奈良の大仏さんを　婿に取るよ　アーブ

ッコケ、ブッコケ　　（柏倉　大島てる）
○おらが隣のみそ玉娘　嫁に行くとて洗濯までしたが　へそが出べそで　ヤレ嫌われた
○へその出べそはまだよいけれど　尻がお棚でヤレ嫌われた　尻がお棚はヤレよいけれど　鼻がお獅子でヤレ嫌われた
○赤城山から沼田を見れば　沼田タボコが　ヤレ花盛り（柏倉）
○浅間山から鬼がけつつん出して、なたでぶっきるような屁をたれた。
○富士のお山に振り袖着せて、奈良の大仏さんを婿に取るよ（柏倉）
○おらが隣のみそ玉娘　アーブッコケブッコケ　嫁に行くとてせんたくまでしたが、へそが出べそで　ヤレ　嫌われた　へその出べそはまだよいけれど　尻がおたなで　嫌われた（鼻がおししで嫌われた）
この歌はいくらでも続いた。
赤城山から沼田を見れば　沼田タボコが花盛り（柏倉）
○おらがとなりの味噌玉娘
嫁にゆくとて洗濯までしたが
へそが出べそで　やれきらわれた
へその出べそは　まだよいけれど
けつがおたなで　やれきらわれた
○赤城山から沼田をみれば
沼田乞食が　しらみとる
○浅間山から鬼がけつつんだして
なたでブッカクよな　へをたれた
（以上市之関）
○浅間山から鬼がけつつんだして
なたでぶったぎるような屁をたれた
○おらが隣の味噌玉娘　嫁に行くとて　洗濯までしたが　けつがおたなでやれきらわれた
○けつのおたなは　まだよいけれど　へそが出べそで　やれほんにきらわれた
あいのてとして、「ぶっこめ　ぶっこめ　まいしも粉になれ」といった。（鼻毛石）
○おらがとなりの味そ玉娘　嫁にいくとて洗濯までしたがおへそが出べそでアラきらわれた　アーブチコメ　ブチコメ
○おへその出べそはまだよいけれど　お尻がでっかいのでアラきらわれた　アーブチコメ、ブチコメ（鼻毛石）
○おらがなあ　となりの味噌玉娘　嫁に行くとて　洗濯までしたが
鼻がお獅子で　やれきらわれた　ああ　ぶっこめ　ぶっこめ
鼻のお獅子はまだよいけれど　まだよいけれど　けつがおたなで
こいつもきらわれた
けつのおたなはまだよいけれども　まだよいけれども（アア　ブッコメ）へそがでべそで　そいつもきらわれた
（ハア）ぶっこけ　しょなぐれ　まいしも粉になれ　小山もくずれろ（アア　ブッコケ　ブッコケ）
○おらが　となりじゃよいむこもらった（アア　ブッコケ　ブッコケ）
大工なされば　しゃがん（左官）もなさる　悪いことには　えさしゅ（いしゃしゅ＝医者衆）が好きで（アア　ブッコケ　ブッコケ）
○長い竿のうらに　ちょいともちたけて　うらの細道　ちょっらちょいと　いきやる（アア　ブッコケ　ブッコケ）（鼻毛石）

㈢　子　守　唄

○守りっ子は楽なようでつらいもの
人の軒場で日をくらす
○ねんねんころりやおころりや
坊やはよい子だはやねむれ
あれ見よお日さんはいまねむった
かあかあからすにちゅちゅうすずめ

いっしょにねむるととんでいく

○ねんねんころりよおころりよ
坊やはよい子だねんねしな
ねんねしておきければおっぱいやるぞ
おちちの出ばながおいやなら……（鼻毛石）

○ねんねんころりよおころりよ。
坊やのお母さんどこへいった。
あの山越えて里へいった。
お里のみやげは何くりょね。
でんでんタイコにしょうの笛
坊やはよい子だねんねしな。（柏倉）

○ねんねんネコのケツにガニがはいこんで、
一びきだと思ったら二匹はいこんだ
二ひきだと思ったら三匹はい込んだ、とくり返す。（柏倉・鼻毛石）。
ねんねんねぶる子は日本人
泣くよな弱い子はロシヤ人。（柏倉）

(四) まりつき唄

○おおもんぐち　ぎゃまち　みのうら　たかうら　米屋のきみきみ道中が　みことのこと　はるさきむかいは花ひらき　あいがわ　ちよがわ　あいゆに染めて　信濃の善光寺　あのせ　このせ　やっこのせ　ああれみさい　もうこうみさい　ほうかけぶうねが　二挺つづく　二挺つづく　三挺つづく　つづいたお船に　おんじょろのうせて　おん客のせて　あとからやかたがおしかける　おしかける　船頭がとめる　とめてあいらのごしょいらぬ　ごしょいらぬ　ごしょいらぬ　あいらのかまげて　日もくれよ　日もくれよ　月もでようが　さんしき屋敷に出てはやす　出てはやす　おいどでではやす　おいどの名主のなかむすめ　色白で　桜色で　色しやく　しようわいもらわれて　あの庄屋は　だての庄屋で　なになに着せてあげます絹つむぎの　きんらんどんすの　あやむらさきが　七かさね　七かさね　八がさねそろえて　染めてくんない　こうやさん　こうやの役(やく)なら染めてあげましょ　はってもあげましょ　おかたはなになにおつきやる　うしろには雉子のめんどり　前白サギ　白ネズミ　まずまず一本かしました（鼻毛石）

○向うとうやのおりんべさまは
何かみのにつつんで　つつんで
ゆみはおりかたとみばおりか
大和にしきのはおりを　はおりを
そのはおりを誰れにやるのじゃ
おはま女郎衆にやるのじゃ
おはま女郎衆はどこへ嫁に行く
すずきすばらへ嫁に行く　嫁に行く
すずきすばらじゃ　かやで手を切る
松で目をつく…（鼻毛石）

○いちばん　はじめは　いちのみや
には[注1]　また　にっこう　ちゅうぜんじ
さんは　さくらの　そうごろう
しは[注2]　また　しなのの　ぜんこうじ
いつつは　いずものおおやしろ
むっつは　むらむら　ちんじゅさま
ななつは　なりたの　ふどうさま
やつは[注3]　やわたの　はちまんぐう
ここのつ　こうやの　こうやさん
とうは[注4]　とうきょう　はくらんかい

注1　にいとも。
注2　しいとも。

注3　やっつとも。
注4　ずいがんじとも。（市之関）

(五)　その他

地名を詠みこんだ俗謡　鹿田で鹿とって、鹿野かで皮むいて、桐生で切って、新川で煮て、膳で膳だして、波志江で箸出して、馬場（婆）さんが供宮で食って、杉の下で過ぎて、大原（腹）で板橋（痛）、室沢で漏って、香林草倉、鼻毛石の鼻が曲沢。（馬場）

七、娯楽と遊戯

本節では、娯楽と子どもの遊戯についての資料をまとめてみた。全体的に採集資料がすくなかった。

子どもの遊びについても、そのごく一部をとりあげたにすぎないが、草丁半（大前田）は、他地区では、わかいしゅがよくしたというが、ここでは、子どもの遊びとなっている。そのほか、小動物や魚をとる方法についての資料をまとめておいた。

(一)　娯楽

競馬　鼻毛石では天神前でむかし競馬をやったことがあった。本もの競馬の馬でなく、めいめいが飼っている農耕用の馬を持ちよって走らせた。主催者にいくらか包むと、弱い馬と組ませてくれたのでたすかった。タンスとか反下りの景品をもらった。五反下りになると、竿は松の丸太の太いやつで重かった。これをもらうと、つき馬が家までついて来たので、この人たちに出す御馳走に、たいへんなかかりがした。

昭和三年には、一之関で村をあげての競馬をやった。これは村の鎮守さまが村社に格づけされた祝いであったという。（鼻毛石）

(二)　子どもの遊戯

子どもの遊び　竹馬・こま廻し・ねっくい。なわとび・なんご（おたま）とり・あじとり・いしけり。まりは、マアリグサという水ごけをとって来て乾かし、糸を廻しながらかがって作った。おおばこやすみれ・ねじりぐさで、すもうをとらせる。きしゃごでオカッキリをしたり、アテナンゴといって、きしゃごを幾つか握り、当れば取られる。紙についているくじをはがす、モンヅケ・トッコウダンジュウや、十六むさしに似たウシオイという遊びもあった。木登り、けやきは登りにくい。赤松は皮がへげる。（大前田）

ネンネグサ　やぶかんぞう。葉で人形を作った。（大前田）

草丁半　けえば（飼葉）に混ぜる草を刈りに行き、刈った草を賭ける子どもの遊び。当ると、他の者の刈った草が貰える。（大前田）

ジョウリカクシ　「どこに置いたかな、どこに置いたかな」と、いいながら探す。（大前田）

手まりのつくり方　山からコケ草みたいなものをとってきて、干してかわいたのを、芯にして、木綿の細い糸でからげて作った。この草はマリ草といって、お正月近所にとってくるのがよい。

中にコンニャクみたいな玉（ハズミ玉）を入れると、よくはずむ。（鼻毛石）

ヒトト　ホオジロのこと。冬、ブッチメ（わな）かけをさかんにした。生きているように枕木をくふうしてまわりを笹でかこってつくった。学校帰りにまわってみてとった。（苗ケ島）

ワンナ　ヒワを篩でかぶせてとった。麦篩をかけ、棒でささえて立てておき、ひもでひっぱってかげでヒワが入ったものを見てひもを引いてパタンと篩がかぶさるようにしてとった。（苗ケ島）

イタチとり　細長い箱でしかけをつくり、中に肉を入れておいて、いたちが中に入るとパタンと落ちてとるしかけのイタチバコがあっ

た。本職の大人がやるのを見ていた。（苗ケ島）

ウナギバリ　夏になるとウナギが川に上ってきたので、いそうなところはカニのからがいっぱいあるのでわかる。こんなところにウナギバリをかけた。パン糸の一mくらいの先にウナギバリをつけ、エサにミミズやドジョウをさして流しておく。夕方かけて翌朝早く上げて来る。清水っけのある川のヨドのあるところがよくとれた。人のものを上げてそのあとに蛇をとってかけておいたこともある。（苗ケ島）

ドウ　いくらかやったがたくさんはしなかった。タニシを油いりにして中に入れてやったりした。いまはサト（平地）の方では金網のドウを使うというが、もとはみんな竹だった。（苗ケ島）

ケエドリ　川のヨドをケエレば（かい出せば）ドジョウがたくさんとれた。（苗ケ島）

夜ボリ　さかんではなかったがやったことがある。篠の先に縫針を植えたヤスをつくり、これで刺してとる。シケッタ（湿田）や苗間でやった。急須のこわれたものなどを利用して油を入れてあかりにしたり、針金でつくった中にヒデを入れて燃してあかりにしてウナギをとったこともある。（苗ケ島）

カジカ　川の石の下にいるので手さぐりで石をはがしてとった。正月に「イチゲンが来るのでカジカとりに行って来い」といわれたこともある。

お諏訪まつりにはカジカを七十五ひきとって神社に供えることになっている。（苗ケ島）

カジカゲエロ　アオンゲエロ（青蛙）のような蛙で、足に吸ばんがついていて石にはりついている。食べられない。（苗ケ島）

人の一生

はじめに

この地域での安産を祈願する神は、近くの旧城南村（現前橋市）下大屋の産泰様である。願かけの折に底抜け柄杓を供えるのは一般であるが、お礼詣りに柄杓の底を抜かないで供え（鼻毛石）たり、逆に底抜け柄杓を供える（大前田、苗ケ島、柏倉）という。富岡市の小桑観音では、妊娠祈願には底のある竹製の柄杓を、安産祈願には竹製の底抜け柄杓を供える習俗がみられるが、一般に県内の産泰信仰は安産祈願を主としており、その際底抜け柄杓を供える例が多い。甘楽郡南牧村などでは、五～十五ケの布の輪、竹の輪に紐を通して、勧請した産泰様の祠に供えている。こうしたことから考えてみると、底のある柄杓を供えるのは、底のない柄杓を供える習俗より新しいと考えるが如何であろうか。

腹帯は普通妊娠五カ月目の戌の日に締める。県下をみると長さは様々で六尺、八尺～一丈、一丈二尺などあるが、七・五・三の吉数を選んで七尺五寸三分とするのが全国的に多くみられる。

お産はこの村でも以前はナンドを産室とし、その姿勢は坐産で、この方が楽だったという。なかには如意輪観音のように立てひざで産んだ人がいたという。一般的には母親につかまって、布団か炬燵のヤグラに寄りかかって、モミ俵、稲藁束（二一束をしばったもので、産後一日一束ずつ抜き、全部なくなってウブアキになる）につかまってなどで、なかにはコノメとコノメの間につっぷして産んだ人もあった。

この村は前記産泰信仰圏ではあるが、一部水天宮や塩釜様の護符を飲む信仰もあり、また塩釜様の産み綱を用いる人もあった。

陣痛が始まると夫は石臼を抱いて家の周囲を廻る習俗が以前はあったという。

後産の処置については多くの方法が聞かれた。アキの方向に埋める。人の多くまたぐ所、トボクチ、墓場の隅、つぼ山、産土神の境内などに埋める。また一番先にまたいだ者をこわがるとする伝承、これらは何れも他県でも聞かれることであるが、一村でこのように種々の例がみられることは、それだけこのものに対する関心の深かったことを示すといえよう。

産婦の食事は県下一般にまことに粗末で、産後の肥立ち、栄養ということよりも俗信的禁忌が優先して考えられていたようである。そのなかでさすが味噌汁が主要な副食であった。また産見舞として力餅、力米が産婦の実家から贈られ、力づけられたものであった。

産神に供えるものは、オボタテ飯とともに、男児と女児で異なるが何れも成長後営むべき主要な仕事に関したもので、産部屋の正面に産神が在るとされていた。

生後七日目はオヒチヤ。赤飯をふかして祝うほかに、橋を渡らないで自宅のほか隣近所三軒の便所にオサゴを供えてオヘヤマイリする。このとき詣られた家では、男児は眉の上に炭点二つまたは「犬」という字、女児は紅、白粉を塗る。これをオボヤケにする地域が多いが、この村ではオヒチヤに行っている。なおこの日命名、チンゲを残してウブ毛を剃る行事があるのは一般である。

オボヤケ（ウブアキ）については、他県では男児の場合生後三十日、三十一日、三十三日などが多く、本県は男児二十一日、女児三十一日目というのが比較的多いが、ここでは男児十九日、女児二一日目で、全国的にも珍らしい例である。然し宮詣りするなどお祝い行事は、他所と同じである。本来はウブヤアキ（産屋明き）で、「忌み明け」のこと、岡山県の一部では「忌み明け」と「宮詣り」を別にしている地方もある。

いわゆる若衆組といわれるものの活動は聞かれなかった。語ってくれる人々は、若衆を大正初期から末期にかけて経験した年齢層の人々で、高等小学校を卒えて、青年会に入会した。青年会そのものの顕著な活動についても聞けなかったが、その動きの一面である夜遊びについては知ることができた。夜遊びは男女ともに楽しいものであった。「ほれて通えば千里も一里、広い田圃もひとまたぎ」といわれ、周辺の村々から遠くは桐生、更に西は前橋から高崎まで出掛けている。夜這いも十日夜の夜は特に「天下の許し」があるものとしていた。

通婚は赤城山中腹地域で行われている。このあたりの生活形態は概ね同様で、距離的には遠方を避け、一日で往復できる範囲内であったようである。また現今はみられないが、親類同志の結婚が親類がふえなくてよい理由で喜ばれていた。本県農村で共通して聞かれることである。

結婚について仲人のナナデンボと悪口をいわれながら世話好きな人はまとめるまで通った。嫌われる一面がありながら「仲人三年」の仁義は御定法であった。婚約（クチガタメ）が成されると、以前はそのとき仲人を中心にカドイレ（アシイレ、ミチアケ、トマリゾメ）の話をした。結婚式前に嫁が婿方に泊るこの習俗が普通のことで、これが行われると双方自由に往来したものである。労働力の交換も行われ、多くは経済的理由により、式は後日行われた。こうした関東地方にみられる足入婚の形が一般に行われていたようである。

嫁入り道具はオチュウゲンが運び、これを婿方の若衆が迎え、嫁は中宿で服装を整えて入家する。このときカドで迎え火が燃され、竹の棒をまたぎ、女仲人が縁側で嫁に菅笠をさし、姑が抱き上げる。馬場部落では婿逃げの習俗がみられた。

女一見はミツメの里帰りの日に行われた。赤飯をホケイに沢山入れて持って行くことになっている。五日目はアタマ洗い、ヒザナオシなどといって嫁は実家に帰り、泊ってきた。そして嫁は結婚した最初の正月四日、実家に米または赤飯を持って行く。正月十五日の御年始とは別で、ナベカリといって夫婦で御飯をたいてたべてくる。新嫁はそのほか農休みのイキボン、ホカケに実家に帰った。八朔に嫁が実家に帰ったときの実家から婚家へのお土産は、メケエから箕、そしてザマに変った。そしてその意義については、地域によって様々だが、ここでは姑に目をあいてもらう、大目にみてもらうというように、「メ」に視点が向いていた。

一部の階層の家庭でみられた嫁に同行して着衣の面倒をみるオキツケ、箱入り娘や息子に対するオキナツケの習俗は、今こそみられないことであるが、この地区にもかつては存在したということで注目してよいであろう。前者は「お着附け」で、一種の親代理ともいうべきものであり、後者は床入り式とカネツケ祝いが続いているようにもみえる。

婿とり娘は「ステバノオンバコ」にたとえられ、「ハバカリホウダイハバカル」とされた。かなり敬遠されたようである。

六十歳還暦の祝いについては関心がほとんどなく、喜寿には吹竹を配り、米寿は赤いちゃんちゃんこ、帽子を子、孫が贈り、これをかぶって宮詣りする。

厄年は子供が四歳、七歳、十歳をいい、四歳は本県中部一帯にみられる新田町反町薬師、あるいは太田市の呑竜様への参詣が行われる。前者が厄落し、後者は呑竜様に弟子入りすることによって、健康に育つことを祈るものである。大人の厄年は他の地域と同様で、厄落しに

節分の日にみかん投げをしたり、小正月に経費を出し合って、浪花節語り、琵琶語りなどを呼んで興行し、村人を呼んだ。

病気の治癒を祈って願かけした人が死去した場合、ここでは願戻しといって、扇の要を外してばらばらにし、神仏の名を書いて川に流すが、これは願をかける前の状態に戻すのではなく、願をかけた神との絶縁を示すもので、死後仏法に帰依することを示す呪法であり、実は立願を撤回して、前述の如く神と縁を断つ願ほどきである。また死者が出たとき神棚に笹を立てる習俗は、県内ほとんど全域にみられるものであるが、ここでは「神様にカゲをつくる」といって十日祭まで立てておいた。

棺巻きした一反の白さらしは、善の綱（縁の綱）と同意のものであろう。これがもとは霊魂を墓地に運ぶ布、古くは棺に死者の衣を覆い、墓地に運んだことの名残りとする考え方があるが、そうであるならこの白布が一般に寺や手伝い人に、寄進または与えられ、ここでは穴掘りをした人（トコホリ）が棺をかつぐのであるが、その人達に分けられ、而もそれを褌にするなど、その間に意義の変化を考えざるを得ない。このことは葬儀で最もおおごとをするトコホリに感謝をこめて白布を分け与えるということと、死者に最も縁の近い棺をかつぐ人に、死者の衣が分け与えられ、それを身につけるということが結びついたのかもしれない。

墓上に竹の先を割って四方に曲げて立てたイヌハジキ、それは本県ほとんど全域にみられ、地域によってエガキ、モガリ、など名称、規模、様式に相違はあるが、その適否はともかくヨモノ、山犬、テンマルなどが掘り返すのを防ぐためだと説明される場合が多い。柏倉では子どもの墓にこれを設けるという。子どもなるが故に大人の場合以上に不安が強く、動物が掘り返すのをより恐れたための所作であろうが、一方では子供は人の世界に入らず、従って再びわが家に戻ってきやすいように、いわば再生を願う気持のあらわれかもしれない。

県下各地で死者の霊魂は四十九日まで家の屋根棟におり、四十九日の餅をつく杵の音をきいて離れるという。鼻毛石ではこの日の餅を「四十九日の立ち祝い」といった。霊魂がこの家を立って祖霊となるべく天空に去る意識で、四十九日のダンゴも同様である。一臼あるいは一升の粉で四九コの餅またはダンゴをつくり、分割し、親戚を含めて葬儀参加者と死者が共食する「忌の飯」であると共に、食い別れの儀式、一つの忌明けの儀礼がきちんと行われている。

死者があるとその家の火はけがれる。そこでイロリにはカギ竹に笹を結びつける（三夜沢）という。この行為は前記神棚に笹を立て、ケガレの及ばぬようにするのと同じ意識であろう。また枕飯を炊いた灰をチョウッパシにのせ三本辻に出す（馬場）。このときオカマ様の在すカマドの灰も三本辻に出す（柏倉）。こうして火を改める忌みはしっかりと守られていた。（池田秀夫）

一、誕　生

㈠　妊　娠・出　産

妊娠　ハラムといい、先ず母親に話す。

妊娠したら高い所に手を伸すな、転んではいけない、たべものでは辛い物、スルメ、イカ（胎児がおりるという）兎肉をたべるな（三口の児が生れるという）などという。つわりのない人もいるが、初めの三ヵ月が大事である。仕事は何でもやった。腹が痛くなるまで生れるまで働いたものである。（大前田）

男女の見分け　産婦が左足から階段をあがると女の子が生れるという。（馬場）

あいばらみ　子どもをはらんでいる時は大猫をもらうものではないといっていた。（馬場）

双子　昔は双子を嫌った。男と女の双子は心中の生れかわりだとて特に嫌った。（馬場）

安産祈願とお礼参り　産泰様（下大屋）へは十年位前までは、よく行っていた。安産のお祈りをするときは、ひしゃくの底をぬいてあげた。

お礼参りは、子どもの、はじめてのほうそうみせ（種痘の検診）のとき行った。母親が子どもをおぶっていった。このときは、ひしゃくの底をぬかないであげた。

なお、産泰様の縁の下で、犬が子を生むとその年は難産になるといわれた。（鼻毛石）

水天宮、塩釜様の護符をのむ。荒砥の産泰様に底ぬけ柄杓をあげる。初産の卵を食べる。（大前田）

産泰様は安産の神様である。

お産の重い人はとくに産泰様を信仰した。

むかしは、子供のほうそうみせの日が、産泰様の祭日であった。この日に嫁さんたちは子供をつれて産泰様におまいりにいった。

なお、むかしからのいい伝えとして、産泰様の縁の下で、イヌが子供をうむと、その年は安産できるといった。（鼻毛石）

産泰様に本人または代人が、お産が軽くすむように欠かさず行った。妊娠したときお札を受け、生れるとお礼参りするのであるが、多くはほうそうをうえたとき子供をおぶってお礼詣りをした。また安産したらあげますと願をかけ、願果しには底抜け柄杓を供えた。（大前田）

安産祈願には城南の産泰神社に願を掛けて底ぬけ柄杓を上げた。（苗ケ島）

前橋の産泰様をおがみに行った。「底ぬけびしゃくを上げますから軽くうまして下さい」とおがむ。四里以上も歩いて、ほうそう見せの時にお願はたしに行った。ありったけの、一ちょうらの着ものを着せて行った。それがたのしみだった。自分でも銘仙のきものでも着て尻まくりして、メリンスの長じゅばんを出しておぶっておまいりした。すしをこしらえたり、大門のあきない屋で焼きまんじゅう、トコロテンなんか食べた。（柏倉）

安産のまじない　葬式のときの六地蔵のろうそくを一本もらってきて（盗んできて）お産のときに立ててもやすと、お産の時間がみじかくてすむという。またろうそくは人に見つからないようにとった方が、ききめがあるという。（鼻毛石・苗ケ島）

鶏の初産の卵の血のついたのをたべると、お産が軽くすむといった。（苗ケ島）

葬式ができたときに六地蔵をたてるが、このろうそくを人に見られぬようにいただいて来てお産がはじまるときにともす。これがもえきるまでの間に軽く生まれるようにというまじないであった。（苗ケ島・馬場）

オイナリサマにあげた水を飲むとすぐ生まれる。

産泰様で頂いてきたゴフウを食べると軽く生まれる。

産泰様からもらう貝みたいなものをにぎって生むと安産といわれた。（馬場）

腹帯　実家から贈られ、五ヵ月目の戌の日に腹帯をした。腹帯にも犬の字を書いた。犬は安産だから、それにあやかるようにと。（苗ケ島・馬場）

妊娠五ヵ月目、犬の日にサラシを腹に巻く。七尺五寸三分の長さのもの、或は六尺二寸の主人の褌を用いる。（大前田）

お産　身体の前に布団、ヤグラを置き、寄りかかって生んだ。母親につかまって生む人もいた。場所はナンドでお産をした。それも昔は畳のある家は少なく、コモかワラを敷き、その上にウスベリをおき、その上に煎餅布団を敷いて生む。坐産が楽であった。（大前田）・

子供がはじまるといちばん最初に実家の親に知らせた。

お産はナンドのタタミをはいですわって産んだ。（馬場）

むかしはお産をナンドでした。（鼻毛石）

ナンドの畳をはいで、わらを敷いて産室とした。塩釜様から石を借りて来て、握っているとお産が軽く済むといわれた。これを産み綱ともいう人がいた。

お産をする姿勢は、如意輪観音のように立てひざの形で生んだともいう。又、稲のわら束を前において、それに前身をもたせ、束をかかえるような姿勢だったともいう。初産は里で生んだ。（苗ケ島）

カマスを敷いて灰をおき、その上にワラを敷き、ボロを敷いてその上で子をうんだ。干したモミを入れたモミ俵を置いて、ワラをつかんで力を入れる。（柏倉）

母親のお産をするのを見た。北側のヘヤというおくりの座敷でワラを敷いて、洗ってしまっておいたボロを敷いてお産をした。このヘヤは死びとがあった時もここに寝かせる。

お産がすんで自分のふとんに寝る時ワラを束ねた枕をしていた。これは一束が両方の指を合せてゆっくり持てるくらいの大きさ。これを二十一束合せてきっちり縛って枕にかった。昔は枕が低いと乳があがるといった。モミヌカをつめたでかいヌカ俵を枕にした人もいた。枕にしたワラを一日一束ずつとって、このワラが全部なくなった時ウブヤキになる。（柏倉）

冬のさなかにお産した時はよっぽど寒くてボロにくるんでおいたらヘソノが凍ってた。お湯を浴びせたらブルブルッってふるえたこともあった。（柏倉）

○○さんがうまれた時は難産でうみ血をのんでいたという。ぐぐっと音がしたので見たら口から血のかたまりを吐き出したそうだ。（柏倉）

一月よめにきて、十月お産になったら「おみやげっ子」なんて嫌味をいわれた人もいたそうだ。（柏倉）

むかしのお産はふとんを高く積んで、よっかかってうんだ。今のようにアオにならないで高まくらでうんだ。ぼろを寄せて袋にぬってシビを入れたシビぶとんを作って使った。

また小さい部屋にワラを敷いて、ガバゴザ敷いた家もあった。だんだん時代が新しくなって油がみを敷くようになった。（柏倉）

後妻のおっかさんはお産がいつでも重かった。背中にたすきかせにケサをかけて左り足がさきに出たりした。十人うんで二人だけ育った。十五、六の時だったが、その時もお産が重くて「おっかさん待ってろ、おれが願かけるから」と井戸へすっとんで行って頭の毛を切って、体をきよめて軽くうませてくれるように願をかけた。その時はそれでも丈夫な子が生れた。（柏倉）

むかしは産婆さんも居ないし、いつ生れるのか予定日も知らなかった。腹が痛くても痛いような顔をしないで働らいた。お産で腹が痛くなった時も甘柿をうんと食べたから痛いのだろうと思っていた。糸ひきをしていたから、火をもしてまゆを三升煮て、ひいてしまって、糸を上げようと思ったが腹が痛いのでコタツにあたっていた。隣のおばあさんがきたから腹が痛いといったら「それじゃ子ができるんだんべ」といって世話をしてもらった。（柏倉）

トラ年うまれの人が赤児をとり上げるとその子が死ぬそうだ。初めての子は母親が取上げた。次の二人の子は近所のおばあさんが取上げてくれた。モミ俵を枕にしてよりかかってお産をした。湯をわかして、自分ですっかり用意してお産をした。コノメとコノメとの間にねるようにつっぷしてうんだ。

むかしは腹が大きくなってもできるだけかくすようにした。人に見られるのがはずかしかった。腹が痛いのも黙っていてできるだけ我慢した。お産の翌日は桑くれをした。（柏倉）

ある人がお産しのそばで何か一生懸命おがんでいた。聞いていると軽くうませてくれれば金の鳥居を上げるなんていってる。ねているかみさんが、「そんなこといったら困るべえ、金の鳥居を上げる金なんかうちにゃありゃしねえ」というと、「いま神様をだますんだから、こ

の間に早く子をうめ」といわれたそうだ。（柏倉）
子どもは「わらの上から育った」という。産部屋に二十一本のわら束を積んでおいて、一日に一本ずつはずしていって、なくなるとウブアケとなる。（柏倉）
お産と夫　むかしお産がはじまると、夫は石うすをだいて家のまわりをまわったという。またはじめてできる子どものお産のとき、夫が家にいると、その次できる子どものときにもいないと難産になるという。（鼻毛石）
初産の時、旦那がいない場合は、二番目のお産にもいない方がよいといわれていた。（苗ヶ島）
産婆　取り上げ婆さんともいった。産婆になる人は、世話好きの人が多かった。器用な人でなければ出来なかった。
おばやけ（明け）、お七夜、葬式の見送りの際は、産婆のところに付け届けを、取り上げ子が行なった。
名付けは産婆がお七夜につけた。（苗ヶ島）
仮親　とりあげばあさんにはお礼ぐらいですんだ。とりあげばあさんがなくなったときには、葬式のときに見送りに行った。穴端がにぎやかになるといった。
乳親に対しては、長いつきあいをした。盆正月には贈りものをしたし、葬式のときには見送りに行った。
もりっことのつきあいもみられる。
名付親との関係は目立ったことはみられないようだ。（鼻毛石）
ノチザン（ニザン）　アキの方に埋めた。この上に一番先にまたいだ者をこわがるといい、父親にまたがせた。猫がまたぐと猫をこわがるという。トボグチに埋める家もある。（大前田）
ノチザンはつぼに入れて、墓場のすみの方にいけた。（鼻毛石）
ノチザンを埋めるところは家によってちがう。
ひつじさるの方向で、日のあたらないところに埋める家もある。
人の通らないところに埋めろというので、敷居の下（台所側に入ったところ）に埋めた家もあった。（鼻毛石）
産土の神（鎮守様）の境内に瓶に入れて埋めた。道路工事で掘ったら沢山の瓶が出て来たから本当のことだった。（苗ヶ島）
ノチザンは墓へいけたり、つぼ山へいけた。その上に一番早くのっかったものをその子がおそれるという。ヘビが一番早く通ればヘビをこわがる子になる。（板倉）
ノチザンは人のたくさんまたぐところにいけろといった。昔はトボグチのすぐ外にいけた。（馬場）
後腹がやめる時。さつまいもをほどうむしにしたのを食べるといい。（板倉）
エナは人のふむ所、トボグチへいけた。ある時駐在さんがきて、どこへいけたか聞いた。「人のふむようなところへいけてはいけない。この次からはそういうことをしないように。近所の人にも話してくれ。」といった。近所の人で罰金をとられた人もいた。（柏倉）
へその緒　麻で結んで鋏で切ってとっておく。万病にきくよい薬だという（苗ヶ島）。
ひと握り残して麻でしばってカミソリで切る。そしてとっておいて、腹の痛い時にのませるといいといってとっておいた。（柏倉）
ツボ山にいけた家もあった。また、子どもが大きくなるまで、とっておく家もある。子どもが病気になったときに、これをのませたという。また、子どもがいうことをきかないときには、これを見せていましめたという。（鼻毛石）
へその緒はとっておいた。稲荷様に納めることはしなかった。針箱などに入れておいたりした。（三夜沢）
へその緒は桐箱に入れてタンスにしまっておいた。（馬場）
力米　お産をすると嫁の親が力米を二升か三升持ってくる。それをおかいに炊いて、おさんしが食べる。（柏倉）

子供が生まれるとすぐ、嫁の里から米が届けられた。この分量は適当。

さんしに力がつくようにと、この米でおかゆをつくって食べさせた。一生食べられるようにと、一升もってきたのもあった。（鼻毛石）

お産がすむとすぐ、ヨメの実家からチカラゴメとて米一升とカツオブシをもってきた。このチカラゴメを煮て食べると産婦のヒダチがよいという。（馬場）

産婦の食事　産婦の実家からチカラ米一升、（一生よく食べられるようにといって）、鰹節、魚（オカシラツキ、鰯など）が贈られる。米が十分たべられない時もあったが、米でなければ力がつかない。その他味噌汁、くるま麩などをたべた。腹がへって仕方がなくとも、これしかたべられなかったものである。

甘いものは乳が出なくなるといい、百日はたべず、油物も赤児にオデキができるといって口にできなかった。（大前田）

オビアキまで、おかいにかつぶしみそを食べた。ほうれん草はよくない。いかは子がおりる。甘いものは乳が上る。油っけも悪いといって食うものがなかった。（柏倉）

産婦はからいものはよくない、イカは食べていけない。草餅も悪いといった。産んでからは油気のあるものはいけない。里芋もよくない。ヤツガシラは特にいけない。ナスも食べてはいけない。（馬場）

お産の禁忌　火事を見ると赤アザの子ができる。葬式を見ると黒いアザができる。どうしても湯かんする時なんか帯の間に鏡を入れとけといった。（柏倉）

産婦が火事を見ると赤アザの子が産まれる。葬式を見ると黒アザの子が産まれる。これらを防ぐために産婦は腹帯の中に、手鏡を入れておいた。（馬場）

葬式を見てはいけない。みなければならないときは、鏡を腹帯の中に入れておく。そうしないと黒いアザのある子供が生れる。火事をみてはいけない。赤いアザのある子供が生れるという。（大前田）

妊娠中、兎の肉を食べると、三つ口になる。長湯をすると、子どもが大きくなる。火事にあうと赤あざが、葬式にあうと、黒あざが出来る。鏡を持っていればいい。鳥を撃つと、鳥の形のあざが出来る。（大前田）

妊娠中は四つ足のウサギなどを食べて栄養をつけることはよくないとされていた（苗ヶ島）。

お産前に馬の道具をまたぐとお産が重くなるという。馬は十二ヵ月で産むので重くなるといわれていた。（馬場）

妻が妊娠している夫は葬式の際の墓場の穴掘りはするものでないとしていた。なお、神社の前に行ってもいけないとされた。（苗ヶ島）

間引き　子どもが始まるとそれをおろすこともあった。ホオズキの根を用いたという。また生れてから膝の下において押えたが死なず首が曲ってしまったものもある。また間引かれた赤児は台所の隅にいけられ、味噌樽のこやしといわれた。（大前田）

むかしは生れた子をヒザの下でつぶして死産だったと届けたこともあった。（柏倉）

姑の命令でヒザの間で子をつぶした話がある。それでも助かって首の曲った人などがいたそうだ。「ひざ子」のことばはそうした事情を語るのかもしれない。

鏡のうらの赤く塗ったものをけずってのむとこけると聞いた。間違えば大事になる。（柏倉）

野菜、陸稲などを蒔いた数が多いときは間引をする。普通はスグルという。例えば大根をスグル。スグリ苗をさして来い、などといわれた。人間の間引もあったという。首の曲った人が昔いたが、間引に失敗した人が生きているのだともいっていた。間引は味噌桶の下に埋めたともいう。降すには、桑の木の液の白い乳、ホオズキの根、ナスのヘタを煮た汁を飲むとよいといわれていた。（苗ヶ島）

(二) 生児儀礼

ウブ湯　ウブ湯はオサンバサンがつからせてくれた。湯は近所の者がわかしてくれた。使用したウブ湯は暦で方位を見てアキノカタに穴を掘って捨てた。ウブ着は無理しても袖を通した。(馬場)

おぼ湯は庭に穴を掘っていけた。(柏倉)

産着　産着は嫁の実家から持って来てくれた。産着には背守りをつけた。背守りは家によってちがっていたが、松葉の模様や井げたのような形が多かった。(馬場)

産立飯　オボタテメシは大勢の人にたべてもらうと幸せになるといい、どの人でも来た人に、たとえ一箸でもたべてもらう。山かけ一升、イロリにあるヘッツイで煮る。(大前田)

生れた時、大勢で食べれば、大勢のくらしが食べられるといって、来た人に、一箸でも取って食べないかと、すすめる。(大前田)

男の子が生れると、俵を編むコモ石と、草刈り鎌をお膳立てして、オボタテの飯をたいて一緒に、産部屋の枕もと正面に供えた。

女の子が生れた時は、オボタテの飯とともに、オサ・糸巻きなど機(はた)織り道具や針などの裁縫道具をお膳立てして供えた。(柏倉)

里から贈られた米を用いた。力米とも言った。(苗ヶ島)

オヒヤ参り　生れて七日めをお七夜(ひちや)という。男の子はまゆの上に炭を二つぬり、女の子はべにおしろいをぬる家もある。額(ひたい)に炭の点を塗るのを、クライ星といい、そこに塗ると位が高くなるので、いい位につくように塗るという。

橋を渡ってはわるいので、橋をわたらないで、あたり三軒両隣の便所にお参りする。便所参りをして、おサゴをまいてまわる。(柏倉)

おへやまいりといってお七夜に近所の便所を二軒か三軒回る。おばあさんなどが抱いておさごを持っていく。赤んぼのひたいに口紅をつけてもらった。この時石橋を渡らないようにする。石橋渡ると乳があがる、といった。(柏倉)

男は墨、女は紅で、額に犬の字を書き、三軒まわる。(大前田)

おへやまいりを七日目にする。家の便所と近所の便所二軒をおがむ。行った先の家で子のひたいに口紅をつけてくれる。皿のようなものに入っていて、指先につばをつけて、ちょっととかしてつけてくれる。意味は分らない。(柏倉)

子供が生れて七日目をオシチヤ(お七夜)といい、この日、近所のトリアゲバアサンが、赤子を抱いて自分の家の便所と隣近所の便所を四軒ほどまわって歩く。オヘヤマイリという。来られた家では墨で額に犬という字を書いた。犬のようにじょうぶで豆にそだつように。(三夜沢)

生れて七日目にオヒチヤ・オヒヤサマといって額に犬という字を墨で書いて近所隣りの三軒の便所をお参りした。ここにはセツビナは昔からなかった。(苗ヶ島)

お七夜の日にオヒヤまわりといって便所まいりをする。まわる軒数はべつにきまっていない。便所にオサゴをまいてきた。また行った先で、子どもの額に犬という字を書いてくれた。(鼻毛石)

オヒガミサマ(便所の神、お姿はない)にお詣りするとして、近所の便所三ヵ所を巡る。嫁の親が赤児の額に「犬」とかいて抱いていく。(大前田)

お七夜にはオヘヤマイリをやった。稲荷様を最初にまわってから近所の便所をまわった。犬のようにコロコロ丈夫に育つように犬という字を額に墨で書いてやった。便所をまわってオサゴをあげてきた。橋を渡らずに近所をまわった。(馬場)

お七夜　赤飯ふかして、お頭つきでご馳走した。取上げばあさんはいくら、とはいわないから思し召しでお礼の金を包む。産婆さんならいくらという。(柏倉)

子どもの名前をお七夜につける。いくつか名前を考えて書いたのを

かんじんよりにして大神宮様へ供えてからくじをひいて決めた。

名が決まると半紙に寿と書いて、その下に名前と生年月日も書いて神棚へ下げておく。その紙はすすはきまでつけておく。次の子が生れるまでかけておいたこともある。（柏倉）

生後七日目、赤飯をたき嫁の実家の親、本家、仲人を呼んで祝う。この日命名する。字画を考え、暦もみて、名前を三つ程半紙を小さく切って記し、これをこよりにして屋敷稲荷様にあげ、子供がそのなかから一つさげてきてその名をつける。稲荷様からもらったとしたものである。（大前田）

産後七日目に名付けをした。名前は近所の物知りじいさんや神主につけてもらった。占いの本をみながらつける人もあった。三つほど名前を書いた半紙をこよりにして神棚にあげて子供にひいてもらう。子供のひいたこよりの名前をつけた。半紙に寿と名前、生年月日を書いて神棚に貼っておいた。初誕生くらいまで貼っておいた。（三夜沢）

六星
寿　○　○　○　○
昭和○○年○月○日

お七夜に名付けをした。あらかじめ三つくらい名前を決めて、半紙に書いてこよりにして桝に入れて大神宮様にあげておく。子供にひいてもらった。

オンタケサマをまつる人が居て、その人に名をつけてもらったこともあった。（馬場）

名前まけすることがあるので名前はあまりいい方でない方がよい。昔は丈夫に育つようにトラとか熊などの名をつけた。干支にちなんだ名をつけることもあった。

ちょいちょい生まれて、また出来たなどという時には「またじ」などとつけた。よすべえと思って「トメ」とつけることもあった。

女の子ばかり生まれると最後の子に男の名をつけると次は男の子が産まれるともいう。

弱い子は名前を変えることをした。生れてつけた名がよすぎて弱いのだという。丈夫になるように字を変えることもした。なかには大人になって不和なので、どこか悪いのではないかと占師に拝んでもらったところ、名前が悪いというので変えた例もある。最後の女の子として、男児の名のようだが「とめる」と命名した例もある。「あぐり」という名はこの村には居ないが聞いたことはある。（大前田）

ウブ毛　ウブ毛はお七夜にすった。チンケをとっておいた。このチンケは子供がころがった時にオボガミサマがそこをつかんでおこしてくれるといわれていた。（馬場）

つぼやま　つぼやまは神様の遊び場だからいつもきれいにしておいた。うぶ毛をすったらつぼ山に捨てた。今はすらないようだ。（柏倉）

出生届　昔、役場に出生届に行ったら、吏員が忙しいから後にして呉れと頼んだので二年待ったという話がある。

又、生れて一〇年目で届けた人もいた。

ある人は、あわてて届けておいて、徴兵検査になって出て来いというので行ったら、これは女だからだめだと返された者もいた。（苗ケ島）

アカダキ　御祝に新モス一丈とか反ものを貰った。アカダキをもらった人にはウブヤキの時に赤飯ふかして配った。（柏倉）

むかしは地じま一丈とか、染めがすり一丈、キジマ（木綿じま）がふつうだった。戦争中からファイバー（スフ）などをやりとりするようになった。（柏倉）

オボヤケ　男一九日め、女二一日めに、オボヤケの祝いで、赤飯をふかす。（柏倉）

オボヤケは男一九日目、女二一日目である。（鼻毛石）

ウブアキは男児は一九日、女児は二一日実家から贈られたウブギ（男児は五つ紋、女児は着物、長袖、長襦袢）を着てお宮詣りをする。

また実家にお客に行く。（大前田）

ウブヤキには実家から赤子のきものを持ってくる。いいうちは紋のついた裾に模様のあるもの、女の子はきんしゃ、男なら羽二重などの上着で下着は少しシナを落して重ねに作る。

ふつうはメリンスの着物などをかけて家の姑が抱いていく。おさごを持っておこわひと重箱もっていく。赤子の御祝を貰った家へ赤飯をふかしてウブヤキに配る。重箱の大きいのは一升入る。赤飯の上に南天の葉をのせてスルメをそえて配った。名前を書いたゴマ塩の袋と一緒に。この時のお返しはマメに育つようにと豆やアズキを入れて返す。お祝いの時の重箱は洗わないで返す。（柏倉）

男の子は一九日目、女の子は二一日目に宮詣りを行なった。このとき里から産着が来た。屋敷稲荷、鎮守様へ姑が連れて行った。（苗ケ島）

産着　扇子の丈に、背丈を作る。（大前田）

クイゾメ　男女とも生れてから百十日目にやった。お膳をこしらえて、俵をあむときの石（重石）をひとつぶ上げておいた。またお膳には飯ちゃわんと汁のちゃわんもそろえておく。これらの道具は新調しないで、あるもので間にあわせた。また、このときの子どもの世話はだれがやってもかまわなかった。石は歯がじょうぶになるようにとのこと。べつに石を食べさせるまねはしなかった。（鼻毛石）

「百日の喰い初め」といわれた。赤飯で行なった。（苗ケ島）

生れて百十日目に、一人前のお膳を作る。親の椀、汁椀、おかず入れに箸など一揃い、くれ方からやる。お膳には、頭がしっかりする、歯が丈夫で、石でも噛めるようにと、コモイシ（俵編みに使う石）をあげる。（大前田）

食いぞめは百十日目にする。その子の新しい茶わんを買う。おぜんに男は俵をあむ時のコモ石を置き、女の子はハサミを置く。男の子は力を、女の子は裁縫ができるようにだろう。米つぶを一つぶ口に入れてやる。（柏倉）

産後百十日に食い初めをやった。俵を編む時に使うコモイシというのを産後すぐきれいに洗って神棚にあげておき、食い初めの日に皿にのせておかずにした。堅く育つという意味であった。食器は嫁の実家からおくられた。（馬場）

クイゾメは生後百十日目、嫁の実家からお膳類一式贈られる。このとき俵を編むときのコモイシをおかずに入れた。（大前田）

(三)　育　児

カナババ　初糞をいう。黒いものでオムツに半紙をもんでおいた。カナババがつくとなかなか落ちなかった。（大前田）

初乳　生れると初めに砂糖湯を少しずつ吸わせる。また虫がきれるのでよいといって、ホオズキやマクリを飲ませることもしたし、母親は実母散を三度三度飲んだ。母親に乳が出ないと赤児にはスリエを与え、たいへんだった。（大前田）

オボスナ笑い　産まれたばかりの赤ん坊が、目も見えぬはずなのに、ニコニコと自然に笑い出すのは神様が笑わせてくれるんだといって、これをオボスナ笑いといっていた。（馬場）

育児　昔は子供を育てるのにザルに入れておいた。畑や田の土手においてあるいながら育った。（苗ケ島）

トウバッコ（塔婆児）　一〇ヵ月目に歯がはえると塔婆の「トウ」との語呂あわせでトウバッコといい、縁起がよくないといった。昔の人は一〇ヵ月には歯をはえさせたくないものだといった。（馬場）

歯がはえてきて一本しかはえてこない場合はオニッコ（鬼っ子）といい、箕の中に入れて三本辻に捨てて来た。隣りのオバサンがひろってくれた。拾い親というが特に永い交際はない。この拾い親は赤飯をお礼にもらった。（馬場）

捨子　子供が丈夫に育たない人は三本辻に捨子をした。あらかじめ

人をたのんでおいてひろってもらった。すぐつれてきてもらった。あとでいくらかつけとどけをする程度で、一生のつきあいはなかった。

歯が一本しかはえない子は鬼っ子といってやはり三本辻に捨てた。その子もだれかに拾ってもらって、うちまでつれてきてもらった。拾い親と、一生つきあうようなことはなかった。（鼻毛石）

十月目に歯が生えると十月トウバで縁起が悪いといった。鬼っ子だっていって、ゴザやボロなんか置いてそこへ捨てた。前以って頼んでおいた人に拾っておらう。（柏倉）

初誕生　もちをついて、ひと重箱も背負わせ「み」の中に入れて立たせる。（柏倉）

嫁の実家から履物が贈られる。生家では誕生餅をつく。大福餅で家族の人数によって、二〇～三〇コ作る。（大前田）

誕生日にもちをついて祝った。

子供には、この日歩けば誕生もちを背負わせた。一升もちをしょわせるという。

もちは、あんの入ったものを重箱に入れた。茶飲み茶碗より大きめのもちを、八つ、一八、二八と八のつく数を、重箱に入れて、風呂敷に包んでしょわせた。数は加減したが一八コがふつう。

もちをしょわせる部屋はどこでもよい。すこしあるきだすと、わざところがした。そうすると、身上をしょいださないといった。（鼻毛石）

誕生祝いには餅をつき、子供が歩き出せるようになっていれば、餅をしょわせて歩かせた。重箱に餅を八つとか一八とか二八コとかの数を入れてしょわせた。八つは少ない方で、ふつうは一八コであった。二、三歩あるければよいとされた。これを行う場所は、どこでもよく、また、子供の世話をする人もだれでもよかった。餅はアンピンで、茶飲み茶わん位の丸さのもの。すんだあとの餅は特別にはあつかわないで、食べてしまう。（鼻毛石）

初誕生には餅をついてしょわせた。少しでも歩かせるとよい。誕生前に歩き出すと箕の中にころがすこともあった。（馬場）

誕生餅は、重箱に入れて、風呂敷で包んでしょわせる。転がらなくちゃ、うまくねえという。（大前田）

むかしはお誕生であるく子はそういなかった。夏着ものが軽くなれば一年であるく子もいたが一年半ぐらいがふつうだった。今の子は十月であるき出すそうだ。誕生もちをついて重箱に入れてしょわせて、支えて立たせる。もちは近親にくばり嫁に持たせてお客にやる。

お返しはゲタかぞうりを買って返す。（柏倉）

初正月　男児には掛軸（加藤清正の絵、羽根つきの絵など）、女児には羽子板を贈る。（大前田）

初節供　男の子の節供は五月五日。初節供は鯉のぼりをもらう。紅白のもちをついて返した。嫁の実家のてえが手伝いにくる。二日がかりでもちつきした。今はカシワモチを注文すれば作ってくれるからせわはない。

女の子はおひな様をもらう。お返しは甘いアンコの紅白のもちをついて返す。（柏倉）

おひな様をもらったお返しはあんぴんを二二とか一八とか重箱に入れて返す。（柏倉）

男の子の初節供は近親がこいのぼりをくれる。嫁の実家からは両家の紋を入れたのぼりなどがくる。抗を打って竹を立て一番上にしょうぶの葉を杉っぱなどにさして立てる。御祝をもらった家へはかしわもちをついて返した。昔はかしわの葉をとってきて自分の家で作った。（柏倉）

嫁の家へやるお節供のもちは大きい菱もちをナガシブ（障子紙）で包んで紅白の水引きをかける。これがかどばっているからよく包めない。水引は右かん左はくといい右を赤にしてしばる。嫁の家は四、五年もするとあとはよした。そのあとも砂糖折りなんかやったりすることもありいろいろだ。（柏倉）

呑竜坊主　子どもが丈夫に育つよう呑竜様をおがんで呑竜坊主にする。女の子でもオケシ（頭の毛）を立てないこともある。七つになれば男衆がつれてっておがんでくる。新田郡の反町薬師へ行った。（柏倉）

子供が身体が弱いと髪の毛を切って呑竜様まで子供を連れていって祈願してくる。五つ坊主、七つ坊主にした。丈夫になるとお包みとお燈明をあげにお礼まいりにいった。（馬場）

四歳の厄落しには川崎大師、反町薬師、青柳大師などに昔から行ったものである。幼児は七歳までは神様がついているといい、転んでも神様が起してくれる。七つ坊主、呑竜坊主といってそれまでは坊主にしており、弱い児は太田の呑竜様にお詣りした。行けないときは親なり代りの者が着物を持って行って祈願してもらった。（大前田）

厄年子　四二歳の二歳の子は役に立たないと言って三本辻に箕の中に入れて捨てる。二五歳の場合も同じだという。（苗ヶ島）

役に立たないという。近所の人に予め話して、オボヤキ前に三本辻に捨て児をして拾ってもらう。（大前田）

厄年っ子は役に立たねえといってチョッパシの上に乗せて三本辻にすてた。あらかじめ拾う人を頼んでおいた。

男の厄年は二五、四二歳。女の厄年は一九、三三歳。前厄、後厄があった。（馬場）

名替え　身体の弱い人の場合には名前を替えることがあった。嫁に来て姑と同じ名の場合には嫁の方が名を替えた。（馬場）

子守　モリッコは村内の近所から頼む。一二歳～一四、五歳位の子供を、事情の判っている家から頼み、子守っ子はたまに学校に行き、忙しい時はヒマをもらって守っ子する。住込みで給金はなく盆、正月にシキセ（肌着、三尺、着物、羽織、腰巻等一式）をやることを第一の約束とする。（大前田）

ハシカ　子供は必ずハシカにかかるものである。西大室のお寺の太鼓橋を三つくぐると軽くてすむという。またハシカが流行するとソバガラ、アワをカドに撒いた。「そばまできてもあわずに帰る」という意味である。飯しゃくしに「馬」の字を三つ逆さに書いてトボグチに逆さにかけるまじないをした。（大前田）

疱瘡　疱瘡はメメ（器量）定め、はしかは命定めといった。「顔に三つに、背に五つ、おしもに七つで、七五三」といい、ジャンカになってもこのくらいなら苦にならない。疱瘡棚を作るウツギは、水音のしないところのを切る。疱瘡よけには、大室の橋を、三つくぐる。（大前田）

月経　月のものがあると神まいりをしてはいけない。自宅でも神棚に供えものをしてはいけなかった。カマドの別火というものはなかった。（三夜沢）

二、年祝い

㈠ 年祝い

年祝い　五五歳、六〇歳の祝いはなく、喜寿、米寿の祝いも昔はやらなかった。今では喜寿には本人が吹竹を作って親戚に配り、米寿には赤いチャンチャンコ、帽子を子、孫が贈った。（大前田）

六〇歳は還暦といい、子供にかえるという。

七七歳は喜寿といい、赤飯をふかして近親の者が神社にお詣りに行った。親戚、近所に火吹竹を配った。もらった火吹竹は神棚にあげておき、近所で火事があったときにその火吹竹で吹いてやると火がやってこない。

八八歳は米寿の祝いで赤いちゃんちゃんこを着てお宮詣りをして祝った。（馬場）

七七歳は、吹き竹を配る。八八歳は、赤い頭巾を被る。（大前田）

八八歳は米寿といって赤色のちゃんちゃんこと布団を子供が作って

くれた。

七七歳は吹き竹を作って村中に呉れた。屋根の棟に火がついた時、この吹き竹で吹くと消えるといわれていた。

六〇歳は還暦といっただけで何もしなかった。（苗ケ島）

火吹竹　適当な太さのマダケを二節残して切り、まん中の節をくりぬき、先の節に錐で穴をあける。風呂やかまどの火を吹く時に使う。灰が飛ぶので囲炉裏にはあまり使わない。七七歳の喜寿の祝に吹竹を近所や親戚に配るが、火災の時にこの吹竹で炎に向かって吹くと、火が逃げて類焼をまぬがれるという。（三夜沢）

(二)　厄　　年

厄年　四・七・十（シシチトオ）の年が厄年で、四歳の時は、反町薬師にお参りに行った。年廻りが悪いものは、神社にお参りして、年を貰ってふやすと良くなる。（大前田）

子どものやくどしは四歳。

女子は一九歳、三三歳。男子は二五歳、四二歳であった。（柏倉）

男女共、四歳のとき呑竜坊主にした。呑竜様の弟子入りだとも言った。学校に入学してからも首の根元に髪を残しておいて友達によく引張られた。

厄年には、川崎の大師様に正月に厄落しといってお参りに行った。（苗ケ島）

男は二五歳と四二歳。女は一九歳と三三歳。厄落しには川崎の大師様などへお参りした。また、むかしは厄年同士で金を出し合って、節分の日に浪曲を買ったり、みんなに、みかんを投げたりして厄落しをした。（鼻毛石）

やく落し　二五歳と一九歳のやく年の男女が芯になって、それより年上の者もまざって、やく落しに浪花節語りなどをよんできて村の人に見てもらった。こういうことにくわしい人に頼みに行ってよんでくる。会場は旧家などおおやを借りて舞台を作る。見にくる人は「連中へ」と書いてハナをあげる。ハナ返しは二割だった。その時に配って返すのが仕事だった。娯楽が無かったから喜んでくれた。みんなに喜んでもらうのがやく落しだった。

正月十四・十五日の二晩くらい興行をする。頼む時は口約束で終った晩に勘定をした。（柏倉）

厄落しには厄年の人が金を出しあって芸人を頼んでなにわ節をやってもらった。ムラうちの大きな家をかりてやった。春先にした。こういうときはムラ中で見に行ったものである。現在は川崎大師などに参詣している。（馬場）

厄年は男は二五歳、四二歳、女は一九歳、三三歳で、厄落しとしては、厄年の人を集め、前厄、後厄の人をかしよって旅行した。以前は鹿島、香取神社、最近は川崎大師や浅草観音などに神詣りして祈願し、厄のがれをした。また浪花節の興行を大きい家を借りて催し厄落しとした。（大前田）

厄年の人は、浪花節、琵琶歌を買ってきて大きい家を借りて村中の人に聞かせた。但し花があがるので自分ではあまり金を出さないで済んだ。

一人でなく厄年の人たちが話し合って行なった。（苗ケ島）

三、青　年　集　団

若連　青年会ともいい高等小学校を卒えて入る。三月中旬頃「ひきゆずり」のとき新らしい者が入会する。役員が「学校を卒えたのだから入ってくれ」といって回ってくる。（大前田）

青年会　小学校を卒業して（一五歳）から、二五歳までのものが、青年会に加入していた。結婚しても加入していた。

加入・脱会は四月。

むかしは、三〇歳とか三五歳まで加入していた。
加入するときには加入式があった。会則を読んできかせた。
脱会するときには、火鉢などの記念品を贈ったりした。
会員の中に非行のあった場合には、対象者を敷居の上に坐らせて、先輩が訓戒をした。
会員全員の前で訓戒を受けた。
今夜は訓戒があるからといって、みんなをよびあつめた。本人が来なければ、家まで行って引っぱってきた。
非行があると、会長のところへ非行の連絡があった。
訓戒をうけて、その場であやまって、行動をあらためた。（鼻毛石）

夜遊び　娘回りをした。知らない家でも出掛けた。冬はカルタ会をやっている所に行ったり、ヨナベで機織りをしている音が聞えるとそこをのぞいたりする。障子紙をなめて穴をあけ、のぞいたこともある。熱が上がると女の方から来るのもあり、今晩はといって入っていくのもある。娘が出てきてお茶を出したり、親が「どうぞ」と入れる家もある。こうして後に一緒になると、「クッツイタ」といって、一般には評判が悪かった。
村外では新里村山上（約六キロ）大胡町河原浜、堀越、お祭りのときは大間々、桐生へ、遠くは十日夜のとき高崎の清水観音様まで行った。大胡で芝居を見て、夜おそく歩いて行くので、高崎で明るくなる。観音様を拝んで帰ってくるのであるが、途中前橋で活動写真（一五銭位）をみてきた。普通五～一〇人と気の合った者同士で出掛けた。（大前田）

ヨバイ　七〇歳以上の老人たちなら知っている。昔は毎晩夜遊びをした。小若い衆を連れて行くのもあれば、一人でいくのもある。「ほれて通えば千里も一里、広い田んぼもひとまたぎ」というように、よく出かけた。
夏、蚕の時は風呂桶を庭に出し、杭を打って傘を立てて置く。夜遅くなって娘が入るのを、影に隠れて待っていてのぞいたりした。
流しの外に下水があって、真暗なので時々飛び込んだものである。（柏倉）
ヨバイは夏が多かった。夏は戸締りが簡単であるので、入りやすかった。
門のある家へは、門のしまる前に屋根の中に入ってかくれていた。
部屋へは窓から入った。
むかしは、ランプであったので、真っ暗なところへ入るわけだが、ランプをつけている間にその場から逃げてしまったという。また、夏なのではだかで部屋にしのびこむわけだが、すこし離れたところに着物をぬいでおいて入ったという。はだかであったので、つかまってもつかまえどころがなくて、逃げることができたとか。（鼻毛石）
この辺では大正十年ぐらいまでやっていた。先方の娘と話しあいができてから出かけていく時が多い。
ある青年がヨバイに行ったら、娘とあそべなかったので、その腹いせにカンソウ（さつまの干したもの）があったので、それを肥場（こえば）に捨ててしまった。このことがあとで知れて、青年会長から呼ばれた。お寺の本堂の敷居の上に坐らせられ、お説教された。他の青年会員も呼んで、見せしめにした。お説教は「ほかにどんなあそびをしたか」などと、さんざん問いつめられた。
また、ある人がヨバイに行ったが娘の家人に気づかれてしまった。下ごしらえがよくできていなかったので、逃げ場にこまって馬屋にとび込んだ。馬は大きなタネ馬であった。そのタネ馬は怒って「うー」とうなった。そのときのおそろしかったこと―。家の人は提燈を持ってあちこちさがしていたが、まさか馬屋に逃げたとは思わなかったのか、そのまま引き上げてしまったので、無事脱出できた。
ヨバイは暗いので、タバコを吸いながら、その明るみでしのんで行ったものである。（鼻毛石）

ある人が娘の所に行ったわけだ。夜、鍵が引っ張ってないから戸があかったので、寝床に入って、ランプが消しちゃって暗いもんだから、娘がいるかと手操りでなでたら、やかん頭をなでたんで、たまげてふっ飛び出したら、いろりのカギ竹に突っかかって、取っつかまったという話がある。失敗もあった。(柏倉)

ヨベエ(ヨバイ)は十日夜の晩に入れという。天下の許しだという。この晩は、供え物は何を盗んで食っても世話はなかった。アンジャネエ(心配はない)ことだった。

以前はヨベエに入っても世話はない、とくに十日夜の晩は世話はないといった。どうせ盗むなら、味のいいものを盗め、とがめないといわれた。(柏倉)

ヨバイから結婚にはならなかった。時には「娘を盗まれた。」といい、連れて逃げ出した例が大正末まではあった。女の方が親の許しを得られないから結婚にならなかった。(苗ヶ島)

四、婚　姻

(一) 結婚の条件

通婚圏　新里、粕川、大胡、滝窪、城南の範囲であった。大体二里の範囲が多かった。黒保根の山中などとは行ったり来たり骨が折れた。一日で往復することを考えていた。断わる理由に遠いとか、方角が悪いからということをいっていた。(苗ヶ島)

どの地域が多いとは限らない。親戚があると遠くからも来た。部落によっては結婚しないところもあった。(大前田)

どこから嫁をもらうという選り好みはしないが、鬼門の方角からはもらうなという。(市之関)

トリカエッコ　娘が嫁に行って、また、向うから妹娘でも当家の長男に嫁に来るような場合をトリカエッコという。(市之関)

鬼門　鬼門からヨメをもらうなといった。大胡は鬼門で粕川、新里、赤堀、笠懸との婚姻が多い。五〇歳以上の人の七割くらいはこの方面からヨメをもらっている。(苗ヶ島)

結婚　「くっつきあい。」「くっついて来た。」「おっつけられた。」「見つけて来た。」「提燈に吊り鐘」「びっこ過ぎる。」「似たもの夫婦だ。」などと結婚の出来るまでの経過を表現していた。仲人は、とにかく「帳場がおっつけばよい」として結婚式が無事に済めばよいとしていた。だから「おっぱめ仲人だ。」とか「はまった。」などと後になっていわれることが多かった。(苗ヶ島)

ヨメは仲人が立って、親と親で決めて、顔も知らない方が多かった。

自由結婚をするとヤクザをしたといわれた。

仲人七デンボウといって、ウソをついて仲人をするのがあたりまえだといわれた。(苗ヶ島)

見合　見合などといっても、一生の伴侶となる相手の顔をみられるのは余程のしっかりものである。娘は、どこへ行けという目上のもののことばがあれば、それに従うのが当然とされ、どんな不満があっても自分の意見など通るものではなく、見合などという気のきいたことはなかった。(市之関)

恋愛結婚　恋愛結婚の場合には、くっつき合いといった。(柏倉)

当世風の恋愛結婚のことを多少の羨望と非難の意をこめてくっつきあいなどといった。そんなときには、いろいろな経緯はあるものだけれど、最後には、男女どちらかの親が腹のできたひとを仲人に頼んでかたちを整え、丸くおさめる。

タノマレ仲人は、そこに坐るだけで責任はないともいう。(市之関)

いとこの結婚　いとこ同志の結婚は親せきがふえなくていいってよろこぶ傾向だった。心の中で思ってる人がたとえいたとしても、たいてい親のいいなりだった。(柏倉)

嫁入りの禁忌　一九は厄年で悪いっていった。（柏倉）
二二は並びどしでよくない。荷をしょって帰るっていやがる。（柏倉）

(二)　婚　　約

仲人　「仲人七でんぼう」といって仲人を務める人は嘘が言えなければならなかった。でんぼうだらけで仲人がはからった。親同志で相手を決めた。本人同志で決めることがあれば勘当になった。酒は一滴も飲めないという相手が大の酒飲みだったこともあった。（苗ケ島）
一人で双方の話をまとめる。世話好きな人がやった。（大前田）
仲人は「ナナデンボ」とか「タビッキラシ」「ゾウリキラシ」といわれた。仲人は近所の世話好きな人でデンボ（うそ）の上手な人がやった（馬場）。
別名ぞうり切らしといわれた。仲人になる人は、暇人、顔役、おじご、近親であった。仲人には、お茶は出さなかった。それは、お茶に濁すといって嫌った。なお、食べものも出さなかった。断わられても一生懸命に通った。娘の親からは、来ないでくれとまで言われても通った。別名のように、ぞうりを切らすほど通って話をまとめた。
これとは反対で頼まれ仲人というのもあった。仲人を見て嫁を呉れる人もいた。（苗ケ島）
仲人礼　両方の父親が御礼に行く。酒二升と金を包む。もらいかたが七、くれかたが三くらいで御礼をする。また「仲人三年」といい、三年間は暮におせいぼを贈る。これだけはキチョウにする。（柏倉）
仲人親　仲人を沢山すると「死ねば穴端がにぎやかになる。」といい、仲人をした子供（仲人子）が見送りに集って来るという。
仲人礼は三年間に限っていた。節供、歳暮は鮭だった。（苗ケ島）
仲人には三年間はつけとどけをするのが御定法だった。（馬場）
タルタテ　タルタテというのは仲人が話が決まりましたということで酒を一升もって伍長や親戚うちに立ち寄って親同志で酒を飲んだ。タルタテは婿の家でやっている。（馬場）
双方で仲人に、それではよろしくお願いしますと決めてから、早いもので十日位でタルダテをする。約束ごとの確認ということで、クチガタメともいう。
当日は、仲人が酒を一升用意して持参する。当家では、近所隣り組のひとたちをよんで、このたび、家のせがれがこれこれのひとと縁あって結婚することに決まりました。ついては、この方を仲人にたてるので宜しくなどと挨拶する。現在は伍長をよぶ程度ですます。（市之関）
クチガタメ　相談ができるとクチガタメをする。隣組長、身内の者を呼んで祝う。それから暦をみて幾日かたってタルダテをする。仲人が酒一升買い、双方の約束ができたとして祝う。（大前田）
クチサダメともいい、仲人が酒一升買って先に嫁方に持って行き、先祖様にあげてから娘は飲むまねをする。次で一升婿方に持って行く。このとき伍長、身内の人（親、本人、親戚—本家、新宅—兄弟代表など）が立合う。このときアシイレ、ミチアケの話をする。（大前田）
カドイレ　式の前に婿方に泊るのをいう。昔はほとんど全部カドイレをしたものである。日数は決まっていないが、大概一晩で、そのあと相互に往来してよい。仲人がカドイレをすることを決める。カドイレのあとよくないと、やめになったこともあった。「家風に合わないからないことにしてくれ」などという。（大前田）
結婚が決まった場合には嫁さんが婿の家に行ったりしてもよかった。公に認められた。
トマリゾメまたはカドイレといって仲人が連れてくる。長い場合には泊まることもあった。（馬場）
足入れ　とまらない場合もあるが、一晩とまるのが普通だった。また、農繁期にはじまりそのまま入るのや、結婚式一ヵ月前からそのままというかたちもある。

カドイレともいう。（市之関）

ミチアケ　式はあげなくともカドイレをして双方に往来するようになることをいう。交際の始まりで式をやらなくとも家族も往来する。葬式などあるとき、ミチアケをしてあると来られる。昼間は嫁は婿の家で働くこともあり、自分の家に居ることもある。また嫁が夕方きて朝帰ることもあり、双方手不足で往来することもある。経済的理由で式はあとにするのが多い。春にタルダテ、秋に式、この間半年もあるのでその間ミチアケをしておかないと交際ができない。（大前田）

結納　結納の時に目録をもってくるが、目録と現物がちがっていれば首切り道具になりかねなかった。（馬場）

式の前日納めるのが普通で、目録、衣裳などを差出す。（大前田）

くれかたは、結納金をもらいかたで決めてくれという。また世間並でいいから、と仲人にまかせる。結納は御祝儀の前の日にする。目録、するめ、こんぶ、しらが（麻）末広などを用意する。嫁の江戸づま、祝い着、丸帯、綿帽子、ひも、足袋などつける。黒もくをこしらえてやる家もある。目録に受取りをもらってくる。

米一駄が二十五円の時、結納金が三十円だった。（柏倉）

昭和四十五年頃は五万円だった。昔は御縁があるように五両が相場だった。昭和初期は三〇円だった。夫婦げんかをするとよく「一〇円で貰われて来た者だからそんなに働けない」といわれた。

口固め御祝儀の場合は、昭和四十五年頃三万円だった。本式の結婚式をしないで足入れ婚形式の場合の相場だった。結婚式は年回りの関係で年取り前後春彼岸前が多かった。（苗ケ島）

(三)　嫁　入　り

アサムコ　婿本人、仲人夫婦、新客として伯（叔）父、兄弟など七、八人が朝十時頃嫁方に行く。人数は一〇人にならないようにする。これに対し嫁方では最高の膳部を出し、お土産も持たせた。このとき婿は一足早く帰る。そして嫁方で出た御馳走は五種というように嫁方より多くせねばならないことになっている。（大前田）

婿はお菓子折をお土産に持って、迎え一見にいく。これをアサムコともいった。嫁をもらいに行った。アサムコにはオジ、オバ、兄弟が一緒についていく。昼前に行く。うんと飲まなくてはくれてやらねえというのでイチゲン客はたくさん飲まされるものであった。この時、婿は下座にすわった。（馬場）

御祝儀　季節は十月から四月までの間で嫁の都合のいい日を選ぶ。朝、ムコの兄弟や近い親せきがいちげんに行く。これをアサムコともいう。酒肴で御馳走になってくる。御馳走はもらい方がいい御馳走をする。嫁は島田を結ってきて、翌日丸まげに結う。（柏倉）

嫁入り道具　タンス、ふとん、げた箱、裁ち板、張り板、たらい、洗たく板など持ってきた。ふとんはお客用に使う。たらいも上げておいて赤ん坊ができてお湯をあびせる時に使った。（柏倉）

式の日の嫁の出発する前に運ぶ。昔はオチュウゲン（近所の若衆か親戚の者）に頼んで運んでもらった。荷物が着くと若衆が中途まで迎えに行く。嫁の家までは行くなという。（大前田）

嫁入り道具は、結婚式の当日、くれ方の近所の衆が仲間として運搬する。これをもらい方の仲間が荷車を用意して、ムラ境で引き継ぐ。（市之関）

迎えイチゲン　結婚式当日の朝、もらい方から仲人夫婦と婿、近親のものがくれ方に嫁を迎えに行く。一座敷が八畳の間がふつうだから、それにみあった人数で、兄弟・伯父御（叔父御）など総勢八～一〇人である。

くれ方では、お相伴つきの宴席が用意され、さんざ酒を飲んで、三時か四時頃になって嫁の行列が出発する。（市之関）

嫁入り　朝やって来たもらい方のイチゲンと一緒にくれ方のイチゲンがいよいよ出発する時間になると、娘は、長々とお世話になりまし

たと両親、家族にいとまごいし、一同揃ってミタマ様と稲荷様におまいりする。（市之関）

嫁入りは夜が多かった。弓張りをつけてやってくる。嫁についてくるのは仲人と送り一見がついてくる。嫁の両親はついてこない。

嫁入りの時は近所の人がムラ境まで送り、もらい方の近所の人が提燈をつけてむかえにいった。（馬場）

中宿　もらいかたの近くの家をかりて中宿に頼んでおく。化粧を直したり、ひと休みしている。用意ができるとお相伴が中宿に迎えに行く。それまで休んでいる。（柏倉）

婿の家の手前におく、通り越してはよくない。ここで嫁は休んで衣裳など仲人が直してやる。（大前田）

嫁の行列は直接婚家に向うのではなく、中宿で休息する。中宿の条件は、婚家よりもシモに位置することで、親戚の家がなければ近隣の家に頼む。嫁は髪直しをして、帯を前結びに仕度を調え、近所の若い衆が緊張した面持で、座敷の用意ができましたと告げに来るのを待つ（市之関）。

入家式　隣組の人が火をつけたタイマツを男蝶、女蝶の子供（または隣組の人）が持ち、竹をアワセンボウ（馬小屋で馬が飛び出さないようにおく棒）の代りに渡し、これを嫁が跨ぐ。貰い方の母親が、上を見ないように（下をみてよく働くように）と菅笠をかぶせる。そして手を引いて抱いて上げる。縁側に上るとき謡が終るように謡う。（大前田）

カド迎え　嫁がカドを入る時、松明を付けて若衆が出迎え、嫁に竹の棒をまたがせる。（柏倉）

中宿で嫁は、足を休め、衣服を改めて、綿ぼうしをかぶってうちかけで来た。帯は前帯だった。

街道で松明を燃して、竹の棒を嫁にまたがせた。家では謡を謡い、縁側まで奥から出て来る。

嫁は庭から縁側に菅笠をかぶせて上げた。その際、姑が嫁をだき上げるようにした。とりもちをするといわれた。座敷には、まちにょうぼうがいた。（苗ケ島）

嫁をカドムカエするときにカドで迎え火をたく。竹ざおの両端で麦わらをもやす。竹の棒をヨメがまたぐ。オキュウジをする男の子と女の子が持って火をつける。女仲人が菅笠を嫁の頭の上にさして「上を見ないように」という意味であった。

嫁は縁側からあがるが、その時に仲人が菅笠をさして、姑が抱き上げてくれる。（馬場）

門口うたいこみ　門うたいをする中をよめごは庭で竹の棒をまたぐ。高さは一尺ぐらい。嫁は縁側から上る。この時姑が手をそえて抱き上げるようにする。女の仲人さんはすげ傘をさしかけて縁側をあがる。（柏倉）

三三九度　固めの三三九度は近しい人の前で謡をする中で男蝶、女蝶の子どもが酒をついで三回ずつ酒をのむ。謡をしている間は謡を聞いていて、終ると干して嫁に渡す。（柏倉）

婿逃げ　高砂、四海波の謡が終わると座長の指図で婿はトリムスビの席を立って他の部屋にいってしまう。すると「婿がいねえ」と騒ぎはじめる。「どうしたんだや」などと席の人々がいいあう。「ああ、いくじがなかったなあ」そして若い衆に「居ねんじゃあ見つけべえ」といって見つけに行く。近所の男衆を適当にえらんで式場に来てもらった。野良着のままで婿の座にすわってもらうこともあったし、よそムラの人が歩いていたら捕まって座にすわらせられたなどということもあった。かわりの婿さんが見つかると「ああ、ようがした、婿さんが見つかって」と仲人が言い、千秋楽の謡をはじめてもらい無事に三三九度の盃をやった。（馬場）

取り結びの式の時、謡（うたい）の四番めころになると、婿が座をはずして、紋付を着替えて、家の中にいる。すると、婿が逃げたというので、仮

婿を立てて式を続けることになる。近所の組の者が酔っぱらって、「おれがなる、おれがなる」といって、代って座に着いて式をすませる。（柏倉）

婿とり　婿とりのときには、嫁は、嫁の仕度をして、よその家へいって待っていた。婿のほうが先に家の中に入った。このときは玄関から入った。婿は奥座敷に坐っていた。嫁は縁側から入った。女仲人が案内した。（鼻毛石）

婿入りは嫁を迎える結婚式と大差はないが、細部でやや異なる。興味深いのは、養子縁組を強調するためか、先に婿が当家に入り、嫁となる当家の娘が、中宿とする隣家から嫁入るかたちをとる。

また、ムラマワリについては、嫁入りにくらべるとよほどていねいにする。（市之関）

蓮華山　高足膳の上に一升の米をのせ、松竹梅を飾る。大根で亀をこしらえ、鶴は色紙で折った。トリムスビのときに中央に飾っておく。（馬場）

取り結びの式の時、島台に蓮華山を飾った。が、男のものと女のものを大根で作って、そろばんの上に乗せてあっちこっち転がして、おもしろがった。お高盛りにした飯は、一つ鍋に入れて雑炊にして（べべ雑炊という）、夫婦で食べるもので、ほかの人に食べさせてはいけないという。（柏倉）

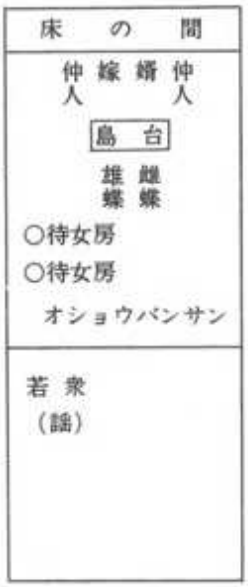
待ち女房　これは二人いて近所の既婚のおんなしを頼む。嫁と同じ支度あるいは前帯をして、あとは嫁と同じ支度をする。ある人は待ち女房をして三日目にお産をした。この時嫁にくる時に着た打掛を着て、前帯を結んでしたそうだ。（柏倉）

マチニョウボウをトリムスビのときにえらんですわってもらった。マチニョウボウは両親の揃っている既婚女性一人と未婚女性一人の計二名を頼んだ。マチニョウボウは黒の定紋つきを着た。（馬場）

ハナツキゴハン　トリムスビのとき、嫁の膳にハナツキゴハンとて茶碗に高盛飯をもりつけたのをおいておき、仲人がやしなってくれる真似をする。式後、夫婦が仲良く食べるものだという。（馬場）

披露　三三九度の式が終って奥座敷でする。嫁方のシンキャクが入り次いで婿方の客が入りチカヅキをする。これはオショウバンが紹介する。この時嫁は居るが婿は居ない。終り頃あるいは途中で酒注ぎに婿は出る。終ると若衆に御馳走する。（大前田）

三三九度の席



（大前田）

親戚の紹介　もらい方はお相伴がくれ方は仲人が紹介する。（柏倉）

チカヅキ　祝儀の場でトリムスビのあと双方の親戚が出て酒をのんだ。チカヅキの酒という。（馬場）

お相伴　組の代表者で酒ものめて取もちの上手な人がなる。祝儀の進行係もする。不調法ですがよろしくとあいさつする。（柏倉）

ナイザ　披露の最後の座敷で、丸く何事もなくすんだというお祝いの近所の人の座敷である。このとき嫁は酒注ぎに出る。（大前田）

若い衆よび　トリムスビの翌晩、ムラの若い衆をよんでゴタイギブルマイをした。このときは嫁が給仕に出る。（馬場）

御祝儀で家によって若衆への御馳走の出る家、出ない家とあった。若者は自棄を起してガッタンを吊して嫌がらせをした。ガッタンとは、石油の缶の中に小石を入れ、それに綱をつけて吊して、遠くで引いては放すと雨戸にあたるので大きな音がするものであった。ヨバイに行って成功しないときのいやがらせにも行なった。

又、柿の実が成熟する頃だと家の近くの柿の木に登り、一方では肥だめを家の回りにまいておいて、家に向って柿の実を投げると家の者が出て来て、ためですべって尻もちをつくのが面白くてやった。

その晩は、のぞきこみというので障子につばをつけて穴からのぞき見なども普通に行なわれた。（苗ケ島）

近所よび　最近の結婚式では、式の当日か後日都合の良い日に、近所よびをして披露する。御祝儀ともいう。（市之関）

嫁の一見　姑が嫁をつれて、婿のおじ・おばのところを一見まわりした。それは、おじ・おばによばれていく形、日時はとくにきまっていない。都合のいいときに行った。おまつりのときとか、お祝いごとがあったときなど。

むかしは、一日に一軒ずつまわったので、一年も二年もたってまわりきったという。

これは、おじ・おばの家族に会うこと、うちをおぼえることなどが目的であった。

婿も嫁と同じように、嫁方の親戚まわりをした。（鼻毛石）

女一見　この辺では、たいがいの家で女一見があった。式のあと、三日目の里帰りの日に行き来した。

はじめに、もらい方の女一見が嫁の実家へ行く。嫁・婿・おばさん・婿の女のきょうだいなど一〇人ぐらいで行く。婿は先方に行って、近所まわりをした。嫁方の近親者がつれて、嫁の実家の隣組程度の範囲をまわった。

嫁方で御馳走になって、もらい方の女一見は帰ってくる。そのあと、嫁方の女一見が同じ程度のメンバーでもらい方へきて、御馳走になっていく。（鼻毛石）

近所まわり　結婚式の翌日はカネツケ祝いといって、歯を黒く染め、髪をマルマゲに結った。今ではカネツケを経験したものはいない。ご支度ができると近所の顔役と姑が嫁をつれて神社に参詣したあと、手ぬぐいを名刺がわりに、区長・隣組などをまわる。ムラマワリともいう。婿はていねいにムラ中百二十軒をまわることになるので、朝から晩まで一日仕事になる。

近ごろは、ムラ寄合に酒を寄進することでかえる。（市之関）

村廻り　式の翌日嫁は婚家の御先祖様（仏檀）～氏神（稲荷様）～諏訪神社そしてムラマワリをする。身近な人（本家の嫁の場合は新宅の、新宅の嫁の場合本家の主婦）が嫁の披露として連れていく。隣組中～担当さん（大前田の場合四組あるので四人）～区・副区長の家に挨拶する。（大前田）

カネツケ祝い　翌日お祝いに赤飯をふかすが、今はカネツケはしない。（大前田）

ミツメ　女一見はミツメの里帰りの時に婿の女きょうだい、オバサンが仲人・嫁・婿と一緒に嫁の実家に行った。このとき赤飯をホカイに入れて持っていく。たくさん持っていくのでチカラダメシといわれた。赤飯には梅干しをつけた。しわの寄るまでという意味であった。（馬場）

三日目に婿の母と仲人が婿・嫁を連れて嫁の実家に、赤飯（四升入りのホカイに入れて）を持って日帰りで行く。嫁方の女一見がくる。（大前田）

アタマ洗い　式後五日目をアタマ洗いといい、嫁は実家に帰って泊まってきた。（馬場）

ヒザナオシ　五日目に婿の母と一緒に実家に行き、泊ってくる。（大前田）

(四)　そ　の　他

嫁が実家に帰る日　一、ナベカリ　結婚して最初の正月四日、実家に赤飯を持って行く。そのときのお返しとしては米を中に入れてくれる。

二、御年始　正月十五日、バン餅（箱膳より大きい形）三枚を水引き二本つないでそれで結えて持って行く。
三、節供　三月は菱餅とサンマの干物を持って、五月は赤飯とタラの干物をもっていく。
四、農休み　七月二十日頃三日間、嫁に来た年はよいシキセをしてやる。イキボンという。
五、八朔・新ゴボウその他野菜を持っていく。以前はお返しにはメカイを持たせた。その後箕となり、今はザマを持たせる。姑さんに目をあいてもらう。仕事ができなくとも大目にしてもらいたいという意味だという。
六、ホカケ　嫁に行って最初の年、七月あるいは八月の初めウドンコを持って行った。中元の意ともいう。
七、秋あげ　秋になって稲刈り、スルスヒキが終るとオハギを持って、嫁は毎年実家に行く。
八、ニアガリ　秋の穫入れが全部片づいた頃赤飯を持って行く。赤飯は家の神仏にあげた。（大前田）
嫁が実家に帰れる日は、年間八回あった。それは、正月四日のナベカリで米を背負って行った。
正月一五日、一六日の小正月で、地獄の釜のふたが開き、鬼の首もゆるすといわれた日でお客に行くことになっていた。
三月節供、五月節供、旧八月一日の八朔。八朔ゴボウの節供ともいった。
盆には、うどん粉を持って、盆の前に、生き盆に行くといった。
秋あげはぼた餅を持って行った。
お歳暮には、さけの塩びきを持って行った。このさけは、猫またぎといった。それは、猫も取って喰わないような固いものだったという。（苗ケ島）
三日の雛節供には菱餅とサンマのひらきを実家にもっていく。初節供は泊まるものではない。泊まると蚤がはずれるという。
五月五日は赤飯とタラの干物を二枚持っていく。
八朔には新ゴボウと赤飯を持って行き、お土産にメケエやザマ、箕などの竹製品をもらった。「めんどうを見てもらうように」という意味であった。
七月の農休みには婚家でゆかたをこしらえてもらった。ゆかたを着て、フカシマンジュウを持って行った。
生き盆にはウドン粉をもっていく。おかえしにフカシマンジュウをもらってきた。
正月四日にはナベカリといって餅をもっていく。この日は夫婦でごはんをたいて食べてくるという。
正月十五日は餅をもっていく。この日は泊ってもよい。お歳暮には塩びきを持っていく。
他に実家のムラの祭りにも帰った。（馬場）
ナベカリ　一月四日のこと。この日初嫁は婿と一緒に里へお客に行った。大ばんもちを三枚もって行った。今は一年だけでやめにしているが、むかしは何年か行った。この日は泊らずに帰ってきた。（鼻毛石）
女の年始　一月十五日は嫁は里へ御年始に行った。このときは、一晩泊ってきた。（鼻毛石）
節供　三月の節供のときには、サンマのひものと、ひしもち（紅白縁）を三枚もっていった。はじめての節供のときには、婿も一緒に行った。このときは泊らなかった。
五月の節供のときには、タラのひものを二枚と、赤飯（あるいはかしわもち）をもっていった。初節供のときには婿も一緒に行った。このときは嫁は泊らずに来た。つぐ年からは嫁だけで行って泊ってきた。婿が嫁の家に泊ってくると、はなったらしだと笑われた。（鼻毛石）
八朔の節供　この日嫁は里帰りをした。

里へは赤飯とゴボウあるいはショウガをもって行った。
はじめての八朔のときは泊らなかった。婿も一緒に行った。二年目からは泊ってもよいといった。
里からのおかえしとしては、箕あるいはざる、めかいなどであった。（鼻毛石）

イキボン　嫁が実家へ生きぼんに行くときには、重箱に山もりの新粉をもたせてやった。（鼻毛石）

ホガケ　新米ができると、嫁は、新米をもって、里へお客に行った。また、はじめて新米をつくときには、水車に一升、ホガケとしておいてきた。水車で一年中お世話になるというのでお礼をするのだという。
新粉をひいたときにも、水車に一升おいてきた。
農協の精米所をつかっている人も、新米を一升おいてくるという。（鼻毛石）

オキナヅケ　嫁にオキナヅケという者が付いて来た。これは大尽の家の場合で普通ではなかった。
嫁より大きい年齢の者で、一年間から三ヵ月ぐらいだった。嫁の身の回りの世話から、躾のことまで行なったという。婿の場合もあったという。（苗ケ島）
殿様時代（江戸時代）のかたい家の娘は男と遠ざけられ、箱入り娘に育てられた。男に白歯など見せるな、としつけられ、男もまた女ごなど知らない。子どものような男女だから、それなりの知識をこの機会に教えるのが「オキナヅケ」である。ずっと昔は坊主が立合ったともいい、また男仲人が嫁に教え、女仲人がムコに教えたという話もある。ほんとうかどうかは分らない。そういう話だ。

床入り　御祝儀がすんで後、組の者は座敷に、女衆は勝手で待っている。嫁とムコはびょうぶを立てた奥の部屋で嫁ごは口紅を濃くつけて床入りする。仲人の指導で儀式がすむと紙で口紅をぬぐって赤い印のついた紙を部屋の外に出す。その印が出るとめでたしめでたしと喜んで赤飯をふかして嫁の親もとへ組の若いしを走らせる。暗かろうが、あけがただろうが急いで届ける。「かねつけのおこわ」と「ただいまカネがつきました」という口上を聞いて親たちは円くおさまったと大喜びするのだそうだ。（柏倉）

婿とり　婿とりをする家の娘は社会常識がなく手がつかないのが多い。「ステバノオンバコ、ハバカリホウダイハバカル」という。姑の苦労を知らず、いいたいことをいうものである。「婿とりの娘は嫁にもらうな」といい、特に「婿とり娘だけどもらってくれるか」と念を押す。（大前田）

許嫁　血筋が絶える場合に許嫁を行なった。というのは身上を他人に取られるのでは残念という場合であった。大体「いとこかわせ」といい従兄妹同志であった。（苗ケ島）

おしこめ嫁御　若い男女の間で肉体関係があると結婚式の晩に女性が男性の家に問題として乗り込んで来たことがあった。そのために結婚式がだめになった例がある。その場合肉体関係のあった女のことを、おしこめ嫁御といい。これで一緒になる時は結納なしであった。ただで貰えると喜んだともいう。
この問題を金で解決する場合もあった。女振りのよい人によくあった。（苗ケ島）

年上の嫁ご　一つ年上の嫁はカネのワラジをはいてさがせという。また「メマス」といってよろこぶ。（柏倉）

離婚　ニゲタ〈逃げた〉――嫁がさっさと実家に帰って来てしまうことをニゲタといい、こういう時は仲人がうまくおっつけた。
エンキリ――仲人が仲介に入って正式に決めた離婚のことをエンキリといった。
タビゲエリ――縁切りしてから再婚したものをタビゲエリといった。（馬場）

嫁が実家にお客に行くとき、「ゆっくりしてこい」とか「長お客してこい」などといわれる。なかにはお客に帰ったあと嫁から断ってくることもある。（大前田）

女の暮し　めんめをゆでたゾウズを馬にくれたが、きれいなバケツにゾウズを入れて、その中にめんめをすくいきらずに残しておいた。馬にゾウズをくれたあと底に残っためんめに塩をまぜて暗いウマヤでかくれて食べた。そうして今夜はめんめを食べた。と自分にいって聞かせて満足した。（柏倉）

米俵にさしを突っ込んで玄米を出して食べたことがあった。よくかんでるとうんまいもんだった。嫁にくれる米はなくてもお客でもくると、ごちそうを作って、無理にしいて食べさせるのを不思議に思った。（柏倉）

用語　後家入り――再婚のこと。
取り上げ婆さん――素人産婆のこと。
えびすこうよめご――はたち過ぎるとえびすこうよめごっていわれた。（柏倉）

五、葬　制

(一)　死の予兆と死

死の予兆　烏鳴きによって死の予兆を知った。聞える中は死なないといわれた。向いている方角によって死ぬ人がわかった。烏が苦しそうな姿勢で鳴く。よい聲が出ない。

死相には、影がうすくなったという。寝ている場合は鼻節が曲ってくると死期が近いことだった。顔に死に黒子が現れる。普通の黒子は凸でいるが平面である。物欲をかくと、「死に欲」だといった。（苗ケ島）

病人が手をかざして見る。手鏡するようになると長くはない、といった。ふとんをかっぱいで天井を眺める時はもうひとみが開いている。こういう時は親類をよんで会わせる。（柏倉）

魂呼び　人が死にそうなとき、井戸の中へその人の名を、せっせと呼びつづけると生きかえるということを話には聞いた。そのことをなんというか知らない。（鼻毛石）

子供が死にそうになったり、ひきつけをおこしたりした時には屋根のグシにのぼって破風のところにむかって、その子の名を大声で呼んだことがあった。（三夜沢）

願戻し　病気になると身内の者が、病気が治るように神仏に願をかける。しかし、病人が死ぬと願戻しといい、願流しを行なう。それは扇の要を外して、ばらばらにし神仏の名を書いて川に流すことがあった。（苗ケ島）

笹引　人がなくなったときには近所の人がやってきて死者に会わぬうちに神棚に笹をたてた。けがれのないうちに笹をひいてもらった。神様がけがれないようにカゲをつくるという。この笹は十日祭までたてておいた。（三夜沢）

枕直し　仏になると北枕にした。これは一生の間北枕で寝ましたということだという。一般に北しょうぎといい、口を北に向けることは禁じられた。また箕も同じだった。「北箕、北しょうぎ」といっていた。（苗ケ島）

西枕は病気寝の時。北枕は死人がするからふだんは北枕にねるな、という。死んだ人は北枕に寝かせてフトンの上に魔よけの切れものをのせておく。（柏倉）

死者は枕なおしといって北枕に寝かせ、胸の上に刃物をのせた。これは猫が死者の上にのると死者が魔物につかれて動き出さぬようにというまじない。寝かせる場所はいちばんいい部屋にねかせた。死者の顔には白いサラシをかぶせておく。（三夜沢）

長病人は西枕はよくないといっていた。死者は北枕に寝かせた。（馬場）

死んだ人に猫がよりつくと、死んだ人の目がパチパチするという。だから死んだ人の上には刃物をおいておく。（鼻毛石）

ツゲ　死亡通知人をツゲといった。ツゲは必ず二人でいく。ムラの中から年頃の者が選ばれた。近所に行くときに二人ずれで入っていくと、「ツゲが来たんかと思った」などと冗談をいうことが多い。（三夜沢）

二人一組でちょっとしたタモトの羽織でも着て、自転車で行った。遠方の親類は電報を打つ。新田郡の方まで行った。「これこれでなくなったので頼まれてきました」という。湯かんはいく日にするとか、引返し七日をするとかなど話す。ツゲが通ると近所の人はそれと分るから、どこんちへ行くだんべと見送る。ツゲのきた時はできるだけ御馳走しろといった。ツゲがきた時困るからいつでも米を五合とっておけといった。ツゲットは白いごはんを出してもらって御馳走になってくる。（柏倉）

(二)　葬　送

葬式　死者があるとまず班長に話す。こういう訳でお世話になりたいと頼む。班長の知らせで皆が寄ってあいさつに行き、施主と相談してまず葬式の日取りを決める。友引きの日をさける。共に引かれるから。寅の日も悪い。トラは千里行って千里帰るといわれるから。隣接の班を頼むとか、役割りを決める。式は葬礼ともじゃんぼんともいう。ここ一〇年に神葬祭がふえて今は神仏半々ぐらいだろう。役割は二人一組でツゲに行く人。役場や医者など埋葬許可とか診断書とか手続きに行く者、穴っぽりなどがある。（柏倉）

枕飯　こぬかをぬかずにとがずに煮る。そのとき外に出し三本の棒をしばってそこにつるして炊く。茶碗に盛った上にダンゴのようにぎったのをのせ、箸を一本さして立てる。（苗ケ島）

ダンゴ　葬式の時、でっかいのは四十九のダンゴをつくり、串にさして丸めてつくり、野辺送りのあとヒッカエシナノカをして、紙の位牌とダンゴを親戚に配る。墓場へ上げるのはミズノミダンゴといい、凹みをつける。（苗ケ島）

ミズノミダンゴ　ショテビに使った残りをつくっておいて、墓参りのときつくる。丸くしたものを上から押しつけたもの。（苗ケ島）

湯灌　近親者が死者が寝ているおくりの座敷へ集まってする。男はふんどしひとつになってナワのおびをしめ、女もうす着になる。脱脂綿や手ぬぐいで死者をきれいにふいてきよめてやる。初めに水を入れ、あとから湯を入れた湯でふく。酒をふくと匂いが消える。

洗った湯や手ぬぐいはほんとうは墓場へ持ってくが、三本辻へ持ってって燃した。（柏倉）

男も女もなわおび、なわだすきで、裸姿で行なった。湯の捨て場所は墓地まで持って行って捨てた。（苗ケ島）

死者の着物　白い布（晒し）を買って来て布団、着物、帯、枕を作った。枕は籾ぬかを入れた。裁ち方は切りっぱなし（切ったまま）、縫った糸の端は玉を作らない。つまり結び目を作らなかった。（苗ケ島）

きようかたびら　さらしで縫う。長い針に糸を通して結びったまを作らない。ひっぱって何人かで縫ってもいい。ふだん裁縫する時袖を二人で縫うな、という。この時使った針を若いもんにやるとお針の手が上る、といった。ハサミを使わないで布を切る。さらしのじばん、さらしのおこし白足袋をはかせる。足袋は右左あべこべにはかせて、ワラジをはかせる。左前に合せて細っこをタテ結びにしめてやる。（柏倉）

棺に入れるもの　仏が常に好んでいたもの、たばこ・杖、酒などであった。小銭といって六文銭を入れた。神葬祭の場合は竹の杖で、仏教の場合は木、竹のこんごう杖といった。（苗ケ島）

六道銭　なくなった人には、道中が長いからとて、路銭をもたせて

やった。これを六道銭といった。
からみでは旅はできないといった。
六道銭とはべつに、かくしぜにを着物のつまに縫いこんでやった。（鼻毛石）

穴掘り　近所の人の役だった。四人で掘った。わらじが一足渡され、清めの酒が一升出た。この人たちが棺を担いだ。但し、妻が妊娠している者は穴掘りも、担ぐことも避けた。

最近まで土葬だったが二、三年前から火葬になった。カロウトが出来るようになってからのことである。穴に埋めるまでは、穴掘り人がするが棺のなわを切る者は長男と決っていた。これを「縁切りなわ」といった。（苗ケ島）

墓はお寺にある。共同墓地もある。穴っぽりは四人で施主が指定した所を掘る。葬式の当日に掘る。とめ穴は掘るもんじゃない、という。道具はくわ、シャベル、唐ぐわなど持って行く。これらは埋葬がすんで家へ持ってきても納屋の方へ一週間ぐらい置いとく。掘り上げるころ家からきよめの酒とちょっとした尾頭つきか、またお膳にキンピラ、おからなどとどく。これを御馳走になる。これは残すものではなくのみきる。（柏倉）

穴を掘る人のことをトコホリという。（三夜沢）

デバノメシ　坊さんが経を上げている間、重箱に白いごはんを入れて回す。（柏倉）

特に名はないが葬式で坊さんが拝んでいる間に重箱に入れた飯をまわし、二本の箸でとって食べる。葬式が長びくから腹をへらすなという意味だという。（苗ケ島）

棺おけ　大工がいれば大工が作ったり、板を買って近所の人が作った。線香たてなども作る。（柏倉）

棺おけの台　ワラでこもを編んで、その上に棺をのせて置く。枝のある竹を四本立ててたれをたらした。前に机を置いて線香立てを置く。線香たては棺桶を作る時にこしらえてくれる。（柏倉）

棺がかり　棺をかつぐ人は回りばんでする。帳面があってこれにキチンとつけておく。この棺をかつぐ人にはワラジが渡された。（柏倉）

白さらし　かん巻きした一反の白さらしは家からかつぎ出す時にとる。これは穴っぽりした人四人がもらって分ける。ふんどしにする。（柏倉）

野辺おくり　野辺おくりのときは、見送りの人に、ひやめしぞうりを呉れた。施主は裸足であった。

出棺のことを「野辺が出た。」という。庭で三回半回ってから墓地に向った。その時「出はんのごはん」といって、身内の者は、飯わんを持ち回して一、二粒の飯を食べた。（苗ケ島）

穴まわり　棺に竹の棒二本さしてかつぐ。庭で左回りに三回まわる。七回半の時もある。花カゴにこまかいカネをおひねりにして入れ、ゆすって落すとみんなで拾う。これを拾うと縁起がいい。（柏倉）

葬列　出る時に近所の人が役をよみ上げる。

1　先導　つゆ払いで伍長などがする。
2　ちょうちん
3　五色の旗
4　いはい（施主）
5　ひつぎ
6　写真
7　墓標
8　おぜん

葬式は縁側から出る。親戚は近い順につづく。（柏倉）

墓　土葬で伝染病でもなければ焼かなかった。昔は坐棺だった。（柏倉）

埋葬　棺おけは墓へ行って一旦おき、坊さんが拝んでから棺おけをしばった荒なわを持って墓におろす。そのなわを魔よけの刃もので切

墓地入口の六地蔵（苗ケ島）（阿部　孝撮影）

犬ハジキ　埋めた土の上に、竹の先を割って四方に曲げて立てる。神葬祭にはない。（柏倉）

竹の先を割って墓の上にさして夜ものが掘らないようにする。子どもの墓にする。（柏倉）

清め　野辺送りがすんで家に帰ってくるとカドに水の入ったタライを置いておき、そこでサカキを使って清めた。塩もつかう。（三夜沢）

三本辻に塩を上げておき葬式から帰る人がこの塩で清めた。（柏倉）

塩で清め、タライで足を洗うまねをして座敷にあがる。（柏倉）

(三)　葬後の祭り

引返し七日　葬式が出たあと祭壇の場所をかえて引返し七日になる。（柏倉）

七日の経　葬式のあとの膳が出るとその日に七日の経を一緒にしてもらって縁を切る。近親が砂をひとにぎりかける。（柏倉）

弓　ウシトラへ向って弓をいる。家と反対の方を向いて墓で弓をいる。（柏倉）

墓　　地（阿部　孝撮影）

しまう。（柏倉）

お念仏　葬式の晩お念仏をする。（柏倉）

座敷ぎよめ　不幸のあった家は、年内に神主を頼んで、座敷に火打石で火花を出して、清めてもらった。（柏倉）

葬式後　ちょうちんつけといい、葬式のあと一週間はおあかりを上げに行く。

七日七日に小さい水のみダンゴを作って行っておがむ。墓まいりに行って古い墓をおがむな、という。ブクをきているのは、今ではお棚上げまでである。（柏倉）

位牌分け　子どもたちにヒトナノカの墓参りに行ってきてから分けてやる。大きいダンゴを二個ずつつけてやる。また余ったごちそうを持って行くのを例とする。

オタナアゲのとき渡すことも多い。（苗ケ島）

紙位牌　子どもには位牌を渡すが、身内の者でもいとこぐらいまでは、戒名を紙に書いたものを渡してくれるので、これを持ち帰って四十九日の間拝むことになっている。（苗ケ島）

形見分け　従兄弟まで分けてくれた。生前身につけていた垢のついた衣類をくれた。

メハジキ（馬場）
（板橋春夫撮影）

死者の着ていた着物は近親の者が洗った。一週間は北向きに吊しておいて水をかけた。（苗ケ島）

兄妹や子どもに着物などをユズリとしてくれたが、これがもとでけんかがおこることもあった。（苗ケ島）

四十九日の餅　四十九の立ち祝いといって、この日には餅をついた。この日まで仏様の魂は屋根の棟にいて、餅をつく音を聞いて、そこからはなれていくという。餅はただあずきだけの入ったショウケシあん。人が死んでからこの日になって、はじめて餅は室内でつく。それまでは餅をつくときには屋外でついた。（鼻毛石）

四十九日に四十九のダンゴを作りお棚あげをする。葬式参加者をよび仏壇に入れる。いはいを子や兄弟に渡す。（柏倉）

四十九日のもちは小豆を煮ただけのもので塩味もつけない。親類に配るのは一升くらいの大きなものをつくり、身内の家へは二個ずつ持って行った。お寺へは小さくつくったもの四九個をワラヅトに入れて持って行く。寺ではカネをたたいて子どもたちを呼んで配ってくれたという。いまはまんじゅうなどで代用している。仏はもちをつく音を聞いて墓へ行ったという。だからその間は杵を使うなという。（苗ケ島）

四十九のダンゴ　上白米を粉にして、粉を余さないようにダンゴにつくる。六を使うきまりで、六合とか一升六合、二升六合とかにきまっていてそれで四十九のダンゴをつくり、オタナアゲのとき墓地へ持って行く。（苗ケ島）

納米　三角袋に米を入れて寺へ納めた。これは新盆の家でやること。このとき米を入れる袋は、野辺送りのときにお膳持ち（なくなった人が父親ならその息子の嫁にあたるものがお膳持ち）がかぶったもの。ぼうしともいった。

この袋をとっておいて、新盆のときに米を入れて寺へもって行った。米の分量にはきまりなし。（鼻毛石）

ノウイとかオサメギといい、ジャンボン（葬儀）でもすむと棺にかぶせた着物や新しくつくったりした着物を寺へ持って行った。（苗ケ島）

納米・納衣は、四十九日のおたなあがりをした家で（新盆のときに）寺へ納める。

墓
盆になるとまだ石塔をたてない墓の土盛りを修理して形を整える（市之関）　（都丸十九一撮影）

神葬祭の墓の新盆（市之関）
（都丸十九一撮影）

神葬祭の新盆の墓（市之関）
（都丸十九一撮影）

七杯袋（三角袋ともいう）に米をいれてくる。この米は寺であずかって、炊いて仏様に供える。

なお、三角袋は、お膳持ちのものがかぶった。これに米を入れて盆のときに寺へもって行った。（鼻毛石）

新盆　たいてい葬式にきた人がおがみにくる。干しうどんか粉をひと箱持って線香を上げる。うどんでも御馳走になるがお返しはしない。（柏倉）

盆の十三日　盆に死ぬと仏に、しらじ（すりばち）を被せて葬むる。仏が家に来るのに行く者があるかというので頭をたたかれるからだという。（苗ケ島）

初彼岸　近い親戚や近所も行って線香を立てるくらい。（柏倉）

(四)　年　忌

一年忌　死んだ翌年が一年忌。近頃は、やれば上等になり、簡素になった。（柏倉）

神葬祭　死後、座敷にお棚（祭壇）を作り、十日祭・二十日祭・三十日祭・四十日祭・五十日祭と供養をして、五十日祭には、お棚を上げて、墓参りをする。オタナアゲの後新盆をする。忙しい時期だと、日をくり上げる。そのあと一年祭、三年祭、五年祭、十年祭、二十年祭、三十年祭と祝詞をあげる。

三十年祭のとき先祖祭りをするので、神官にきてもらう。

柏倉では神葬祭の家が二五〇戸ぐらいあり、寺の檀家は一三二戸に過ぎない。（柏倉）

石塔　十三年忌に石塔を立てる人は早い方だ。生存中に作っとく人もいるがその時は赤い字で彫っておく。（柏倉）

(五)　そ　の　他

オカマ様の灰　仏式の葬式の時にオカマ様の所のかまどの灰を一つまみ取って、チョウバシ（さん俵・俵ばし）の上に乗せ、飯しゃもじを付け、幣束を立てて、往来の三本辻に出して置く。（柏倉）

葬式が出来た時、枕飯を炊いた灰をタワラッパシの上にのせて、ホドバライとゴハンシャクシを一緒にのせて三本辻におくった。（馬場）

死者があると必ず、イロリを清めた。イロリのカギ竹に笹をむすびつけた。これが清めの印であった。（三夜沢）

耳ふさぎ　ムラ内の同年者がなくなったときには、馬糞を紙に包んで耳におつける。これを耳ふさぎといった。なくなったということが聞えないということ（聞かないということ）であった。

なお、見送りには行った。これはムラの範囲内のことである。（鼻毛石）

耳っぷさぎといって、同じとしの人が死ぬと馬の糞を半紙に包んで耳の穴に当ててふさぐ。（柏倉）

流れかんじょう　お産で死んだ人があると、川の流れのはたに竹にしばりつけた色の布を置いた。そばにヒシャクを置いて、通る人に水をかけてもらった。色がさめると浮かばれるといった。（柏倉）

葬式まんじゅう　紙を敷いて葬式まんじゅうを五つひいた。これは三つ児までひいた。またおひらに粉菓子のはすの花も出した。（柏倉）

死者と近親　近い人がくると死者が鼻血を出す。また、ぶつぶつあわをふくそうだ。（柏倉）

先立つこと　おかみさんが夫より先になくなった場合には見送りはしなかった。

旦那が先になくなったときには、おかみさんは、自分の髪をきって、棺の中に入れてやるという。

おかみさんの棺の中には、旦那は爪を入れてやるものという。（鼻毛石）

シキビ　匂いがいいから死者の匂いを消すためにたく。（柏倉）

ダイバよけ　てんがいの赤いつぎを貰ってきて馬のタテゴにつけて

やる。耳をふさいだりお飾りにするがすぐとって捨てる。（柏倉）

無縁仏　妻帯しない人、供養をする人のない仏を無縁仏という。

盆の飾りの際、棚の下に飾って置き、供えものは、棚の上と同じ物だが、捨てるところは軒下に捨てる。それは、この仏が軒下にいるということからである。（苗ケ島）

この辺では、できるときできた子でない子どもの仏（月足らずで出産して死んだ子）や、小学校までぐらいの子どもの仏のことを無縁仏といっている。（鼻毛石）

和讃　昔はいざ知らず、覚えてからは神葬祭なので和讃を唱えることはない。（市之関）

年中行事

はじめに

赤城山南麓の宮城村に伝承する年中行事のうち、特色を示すと思われるものをいくつか取り上げてみよう。

この地域は北部の赤城山寄りにある三夜沢に赤城神社が祭られているため、以前は三夜沢の家々は赤城神社の祭事に参加し信仰を布教する役割りを担っていたものが多い。そこで早くから神葬祭に改められ、一般的な民俗行事などが薄れたりするような影響が見られる。

正月の年神棚を座敷に特設する家々が現在もかなりあり、一枚板の棚や組立式の棚を随所で見ることができたのは興味深かった。

正月三日までを三ガ日というのに対して、五かん日ということばがあり、六日年の前日の五日までも一区切りとしていたらしい。しかし、六日年の事は聞けなかった。六日年の分布上注意したい地域である。

ここでは六日は山始めで、山入りをして仕事始めの行事をすることになっている。この時、山の立ち木に「縛り幣」といって、わら縄を三所しばりに縛り付けて、幣束がわりとすることは、赤城山西麓の勢多郡北橘村下箱田などでも六日に山始めをして、立ち木に「エボツキ縄」を縛り付けて祭るのと同様である。榛名山東麓の渋川市行幸田や、藤岡市本郷などの山入りでも見られる祭り方だが、名称が判明した。

同じ村内でも十二日に山の神を祭り、山始めをする所もある（苗ケ島）。

十一日のサクタテ行事の時、倉の前に立てて置いた松を持って行って田んぼに立てて祭るのは、故今井善一郎氏が早くから指摘されたように田のサクタテと倉開きの行事が同じ日に行なわれ関連していることを示している。さらにオカマ様（カマ神）の松を持って行って立てる家もあるから、大事な米を作る田と、それを収納する倉や、煮たきするカマドの三者の関係の深さを示していて興味深い。

正月十二日は十二様と呼ばれる山の神を年頭に祭る日になっているが、この行事をヤマゲエと呼ぶのは何によるものであろうか。

大正月から小正月への飾り替えが一月十四日で、ハナカキとマユ玉作りをするが、マユ玉の十二玉は十二様（山の神）に供えるもので、十六玉は蚕神に供えるものといい（市之関）、供える対象がはっきりしていることに注目したい。柏倉では若餅を十二個丸めて、桑の枝にさして十二様に供えており、餅とマユ玉が共通して用いられる。

オカマ様の前の柱にマユ玉飾りを供えるが、柏倉ではツバキの枝にツバキの花の形や、豊年鳥という鳥の形を作って、さして飾ることは珍しい。さらに別の家で、マユ玉飾りをする時に、若餅の端を三尺くらいに細長く切って蛇になぞらえ、一、二本ほどマユ玉木に巻き付けて、養蚕の時の鼠除けを祈るのも興味深い習俗である。群馬郡倉渕村川浦では同様の餅の切れはしを「サギノ宮様」といい、やはり蛇を表わして、鼠除けであるというから、同種のものと思われる。

正月十五日ガユの時、カユカキ棒でカユをかき回すが、棒に挟んだマユ玉を食べると、マムシ（蛇）にかじられないというのは、前橋市東部の泉沢・下大屋などでもいわれたことで、十五日ガユが蛇と関係あることを示す伝承といえよう。

三夜沢赤城神社のお筒粥の神事占いが厳粛に伝承されているが、旧神職家である小野家の当主が主祭者となって、氏子総代が控えて合議制で判定意見を出すのは興味のあるやり方である。

四十五種もの多くの作物について、今年の作柄を占い、掲示板に書き出すが、当事者がすでにわからなくなった作物名も見えるのは、古い時代に起った由緒ある神事であることを物語っている。

道祖神祭りを正月十六日にするが、西毛地方で十四日が多いのと対照的である。小正月への飾り替えも、西毛地方では十二日か、十三日にモノヅクリをする所が多いので、ここが十四日にすることは一、二日ずれているように思われ、相対的に遅くなっているようである。ドンドン焼きはあまり盛んでなく、最近子供会などで復活する所も出て来たようである。戦後、森林保護の立場から門松を制限する運動が、山村だけに徹底したもので、現在でも村から配布された印刷物を門松がわりに、門口に貼布している家が多く見られた。そのため、ドンドン焼きも急速に衰えたものであろう。

次郎の一日（二月一日）にはアワ強飯を作るほか、若餅の供え餅を年神棚に供えてから、棚をはずすのは（柏倉）、正月が終って、区切りをつける意味であろうか。山村では正月二十日に正月送りをする所さえあるから、ここではかなりゆっくりして、暦どおりに正月を終えることになる。苗ケ島では「長男は正月一日に祝い、次男の次郎は二月一日に祝う」と説明しているが、この日の意味を伝えているものであろう。

節分の豆をいる時に作ったヤカガシは、ムシ歯が痛む時に突っつくと治るといったり、煎じて飲むと薬になるといったりする。ふつう、虫除けの呪いに使われるのでムシ歯にも適用させたものであろうか。

節分の呪、アーボヘーボ（アワ穂ヒエ穂）の行事があったことを、実際に見聞した人から聞けたのは珍しいことであった（柏倉六本木なつ氏談）。市之関で夫婦がいろりの回りを左右からはい回って、「アーボモヘーボモコノトオリ、コノヨノカマスニ十カマス」と唱えたという。本県内では実在が数例ほどしか知られていない奇習で、豊作を祈願する予祝・擬態行事の一つと考えられる。

旧二月二日は稲荷様が生まれた日という伝承に注意したい。この地域では二月初午に屋敷稲荷祭りをしていないようだが、そのかわりに蚕神・キヌ笠様を祭っている（柏倉）。

本県内で田の神祭りをする地域は東・中毛地方の一部に限られているが、本村も田の神祭りをする地域である。五月節供の朝、田のあぜに田の神のお仮屋を作って、赤飯やオミキスズ（竹筒に入れた酒）を供えて祭る。以前は各農家で盛んにやったが、最近は少なくなり柏倉などで見られるに過ぎない。本来、田植えがすんだオサナブリに祭るのを、早めて五月節供に祭ったり、遅らせてハッサクに祭ったりするようになったものという。

田の神はあぜの高い所で、ほかの田がよく見える位置にお仮屋を立てて祭る。お仮屋の柱は多くはツバキの枝を用いるので、それが根づいたりして、ツバキが生えている所に田の神が祭られている例が多いという。田の神とツバキとの結びつきは、ツバキが田の神のヨリシロだったことを示しているのだろう。サカキやグミの柱を用いる所もあり、田のあぜにそれらの木が生えているので、遠くからも田の神の所在を見分けることができる。

五月節供のコイノボリについて、子供の初節供の家では、ノボリ竿にヒノキやスギの長い丸木柱を用いる。その竿の先端はわざわざ枝を残して置き、飾りとして用いる方がいいといって、矢車はあっても使わない家がある。本来、ノボリ竿が神を招くためのヨリシロだったことを意識している伝承といえよう。

赤城山信仰も盛んな土地で、赤城山（大洞）の山開きは五月八日で、近郷近在から登山した。とくに前年に親を亡くした人は、赤城山で地獄めぐりをすると、どこかで親に行き逢うことができるといわれる。

祖霊信仰の山であることを物語る伝承であろう。

田植えがすんだオサナブリの祝いの時、一の田の水口の苗十五本を家に持ち帰って、箕の中に七五三に立てて、台所のオカマ様に供えるという。米を煮たきするカマドの神に米のなるイネ苗を供えて豊作を祈ることは、両者の関連の深さを示している。

盆の日取りが農作業の関係で九月盆から七月に変ったのは、期日を変えてまでも盆の祭りを大事にしたいという気持ちの表われであろう。現在は十日遅れの七月二十五日を中心に行なっているが、七夕は盆前七日にやるものとして、十七日に行なうのも、七夕と盆を一連の行事と意識していることによるものだろう。七夕飾りは単なる飾りでなく、ナス・キュウリなどの農作物やボタ餅を供えて、祭りの対象にしているのは、ヨリシロとしての本来の意義を伝えているといえよう。また、七夕様の色紙を取って置いて、髪を洗う時にとかして使うと、髪の毛がきれいになるというのも、七夕には身体の汚れを落とす行事があったことを示している。

盆の日取りは十日遅れの七月二十五日を中心にして、二十三日が盆迎え、二十六日が盆送りとなっている。盆棚は座敷に組立てるが、棚下に無縁仏のために杉の葉を置くと、一人前にならない子どもの仏が乗っているので、杉の葉の中から子どものしゃべる声が聞えるなどといわれるのも、実感がこもっている。

新盆棚をふつうの盆棚より一段下げた所に作ったり、別の所に作ったりするのは、新仏はまだ人並みに盆棚の上へ上がれないからだという。新盆迎えの家では寺参りをする時、ぞうりを一組持参して供えるが、先祖様がそのぞうりをはいて、家までお客に来るように供えるのだという。米は葬式の時のさらし布で三角袋を作って、米一升入れて寺に供えてくるのがしきたりになっている。新盆迎えに旅支度としてのぞうりを持って行く習俗は東上州の大間々町や勢多郡北橘村などでも見られた。

盆の食事として、二十四日の晩に餅をついて供えたのは、神葬祭のせいであろうか。

盆送りをする二十六日に草を刈ると、送り出した仏様の足を切るからといって、この日の草刈りが禁じられている。迎え盆の時にいわないのは脱落であろうか。勢多郡北橘村上箱田などでも、十六日の朝、草刈りに行くと仏様の足を切るから、行ってはいけないといわれるのは、同種の習俗であろう。北橘村小室では盆の十四日も赤城山から迎えにきた仏様の足を切るから草刈りするなという。

なお、盆の十六日（二十六日）は馬小屋の肥出しをする日になっていた。

ハッサクの節供には嫁が赤飯と葉ショウガを持って、実家へお客に行くが、お返しにはメカイ・ザル・箕などをもらって来る。たくさんの目でよく見てくれという意味だという。ゴボウの節供ともいい、ゴボウを手みやげにして行く家もある（苗ケ島）。

秋の収穫を祝う十五夜・十三夜・十日夜には、この村では餅をついて供えるという。これらの日が単なる月見行事ではないことがわかる。

旧十月の神無月にはオカマ様が留守居をしてくれるので、「オカマ様ノルスンギョウ」といって、ボタ餅や焼きまんじゅうを作ってお勝手に供えた。カマド神のオカマ様を大事に祭る地域である。ここでは稲荷様も家に残って留守居をしているという。

旧十月十日の十日夜を一日早く九日夜にする所もある（大前田）。その理由として「オ稲荷をつく」のを忌むためという。十日と稲荷の音の共通がこの祭日の決定に影響した事例といえよう。なお、九日夜を祭る例は東上州にはときたま見られる。十日夜の餅は白抜きに取り上げて、二色餅にして縁結びを祈る家もある。月見だといって、あん餅十個とススキ十本を縁側に供える所もあり、子どもが回って下げて行くのも、十五夜・十三夜に続く同じ習俗である。月夜に秋の収穫祭をする共通の意識がここには認められる。柏倉大沢地区には旧十月亥の

日にイノコロ餅をついて、十日夜をしない家もあったという。関西風のイノコの名称が本県内に伝わっている珍しい例で、どういう関係に由来するのか知りたい。

ツジュウダンゴは土の混じった粳を精製して作ったダンゴを、十一月二十三日夜、鬼が来ないようにヒイラギと一緒にトボグチにさしたという。ヒイラギは節分に使われる魔除けの呪物だから、ツジュウダンゴとともに使われたのであろう。

正月用の松飾りの松は山から迎えて来るが、赤松の三蓋松を取って来る。黒松は「苦労する」といって使わないという。また、黒松は水商売の家で飾るものだともいう。

以上、目についたものを拾いあげてみたが、これらの民俗には、赤城山南麓にあって東上州に近いことから、その影響が感じられる。

なお、調査資料の配列は、赤城山に近い北方の上の方から南方の低い方へ並べて、地域の変化が見られるように配慮した。

（関口正巳）

一　月

元　日

正月様のお札　区長が注文を取って、赤城神社から正月用のお札を受けて来て配る。わらを束ねた台に串をさして立て、正月棚に上げて祭る。御歳大神・赤城神社・赤城神社鎮火祭・年中清祓太玉串・諏訪神社の五本を並べて立てる。（柏倉）

正月のお札は天照大神は伊勢から来る。火ぶせのお札は赤城から来る。区長が注文をとる。幣束も注文でやっている。暮の二十日頃三夜沢では配布式をする。（苗ケ島）

年神棚　組立式の約五尺ほどの棚と、縄で吊るす六尺板とがある。

正月棚（組立式）右奥は常設の神棚（柏倉）
（関口正巳撮影）

その年の恵方を向けて座敷の天井から吊るが、普通は東向きに土間の方を向ける家が多い。塗り物の小鉢二個に供え物を入れて上げるが、年徳神と、他の神に供えるのだという。棚の左右に枝松を飾り付ける（柏倉）。

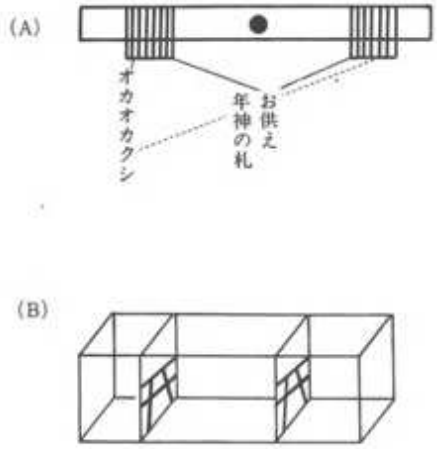
お棚はふしのない松板の一枚板を毎年新しくして使った。回転式に組み立てて、心棒で吊ってアキの方に向けるお棚もある。

正月棚を略して座敷に机を出して、その上に年神様や他のお札を立てて、供え物をする家もある。

笠間稲荷のお札を受けて来て、座敷の隅に棚を作り付けて祭る家もある。（柏倉）

正月のお棚には、三形式が認められた。(A)、長い一枚板、これをオモテザシキにアキノカタに向けて下げる。上に二カ所にオカオカクシの注連とそれぞれにお供え。その二カ所の中央に年神様のお札をたてる。(B)は作りつけのもので、二カ所に鳥居がつくってあるつり棚である。神葬祭になってからのものであるらしい。(C)は、オモテザシキの西北の隅と南東の隅につるす二つの棚で、どちらにもオカオカクシの注連を下げる。（市之関）

正月用の神棚は年神用の回転するもので、尺板を買って来て作る家もあった。その年によって、棚の方向が変る家もあった。（苗ケ島）



正月棚（一枚板）の前にシャケ・コンブ・マユ玉などを吊るす（柏倉）　（関口正巳撮影）

正月棚（上）と破魔弓（右下）（柏倉）
（関口正巳撮影）

棚を略して机上の正月様（柏倉）
（関口正巳撮影）

正月の札とシメ縄（柏倉）　（関口正巳撮影）

お飾り物　年神棚の前に手ぬぐい・こんぶ・みかん・塩びきシャケなどを、天井から吊るして供える。

正月様の供え物はカキアゲル（カキ）、ヨロコブ（コンブ）、カチグリ（栗）などと縁起物を上げる。ミカン・手ぬぐいなども上げる。供え物は日がたつと、いい加減で取って食う。かぜ薬になるといって、取って食ってもよい。（柏倉）

干柿、コブ、スルメなどを、ともに白毛が生えるまでというので、麻を使って下げる（苗ケ島）。

神の鉢　小鉢を毎年新しくして、神様ごとに供え物を入れて上げた（柏倉）。

松飾り　正月の門松は三だん、五だんに切って飾った。「芯を切る」といって縁起をかつぎ切らない人が多かった（三夜沢）。

戦後、しん松を伐ることを厳しく禁止

することになり、役場から松飾りを印刷した紙を配って、それを玄関に貼ってカド松の代りにするようになった。枝松を屋内に飾るのはかまわないが、それさえもやらなくなった。（柏倉）

外の松飾りは、カドへ二本、庭へ三本立てるほか、屋敷稲荷、井戸、便所、畜舎などへも一本ずつ立てる。ふつうはナラの木の杭をぶっ込んで立て、三がい松をしばり付ける。シメ縄に紙の幣束を付けて松に掛ける。立てた日から、朝夕に食事を供える。正月三ガ日間は、年男が雑煮・野菜などを箸を使って、ナラの木の杭の上に供えて回る。（柏倉）

門松は庭に三本、ケエドに二本、川棚に一本、稲荷様に二本、井戸神さまに一本、便所神さまに一本、土蔵に一本、薬師・荒神・馬頭観音などの屋敷神に各一本ずつ合計十四本の門松を立てる。門松にする丸太は正月が終るとまるいてしまっておく。（馬場）

オカマ様に供えた松の枝を下げて置いて、子どもがのどに何かつかえた時、その松でのどをなでると、さがるという。（柏倉）

女松を門松に使う。女郎屋やダルマ屋は男松。シンの松を使うと山が荒されるので枝を使う。

門松のシングイの穴にコメヌカを入れておく、次の年もそこへ松を立てる。

カドマツのクイはホウグイ（大きい方を下にする）に立てる。サカサグイを立てるなという。抜くのが楽なようにしてある。（苗ケ島）

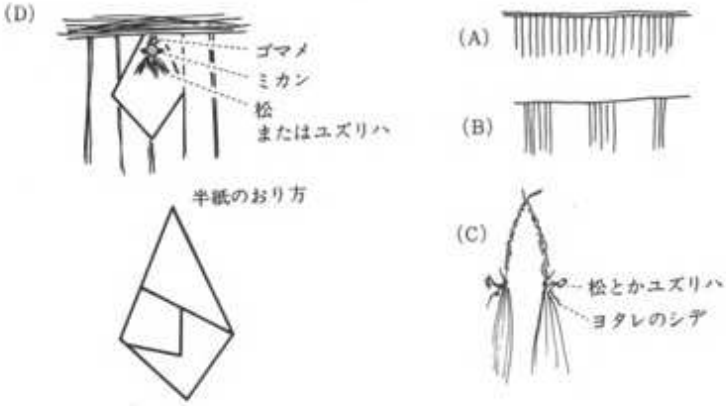
シメ飾り　細い一本ジメや太い棒ジメのほかに、上を三本にして円形に丸めて、宝珠の玉の形にしたシメ縄をつくり、ミカンを付けてかもいにかける。

年神棚の前方に横にシメ縄を張って、そこから奥は神聖な場所であることを標示する家もある。（柏倉）

七・五・三のタレを入口につける。正月用の神棚のある、八畳間に全部タレを下す家もあった。（苗ケ島）

宝船—正月の縁起物（柏倉）　（関口正巳撮影）

正月のしめは暮の二十五日になう。それまでは毎晩夜なべのわら細工をしていて、この二十五日にしめをなって以後夜なべはしない。注連には長じめ、七五三、ユツラジメ、オカオカクシなどがある。長じめは、長い縄につぎつぎにタレをつけたもので(A)、オモテザシキに飾る。とっておいて、田植のときのナエバ（苗束）をしばるのに用いる。七五三は(B)、門のところに張る。ユツラジメは(C)、二本の小じめを結びあわせたもので、室内外のいろいろなところに飾る。オカオカクシは(D)、正月棚に飾る。紙は左前にならないように注意する。しめを飾る場所は、神棚、トボウロ、恵比須様、お釜様、屋敷稲荷、その他。（市之関）



宝船　正月の縁起物としてわらで宝船の形を作って、年神棚の横や座敷などに吊るす家もある。六本木本家の老人が作って配ったが、三年前から作らなくなった。今でも作れる人がいる。（柏倉）

年男　三ガ日は年男が炊事をした。

正月三ガ日は朝だけ年男が神棚に進ぜたりおばんしをした。女衆は一年中食うことをするから三ガ日は男がしてその苦労を知るためだそうだ。（柏倉）

男しが全部する。食事の用意、若水を井戸からくんでくる。茶をわかす、餅を煮る、供える等。これらは元日だけでなくヤク日（三ガ日、七草、十四日のオカザリカエ、小正月、二十日正月、シマイ正月）は全部年男がする。（市之関）

正月三ガ日は女は勝手仕事に手を出さない（前原一家）。男衆が皆やる。（苗ケ島）

若水　元旦には井戸から若水を汲んで来て、お椀に入れて年神棚に供えた。（柏倉）

正月三ガ日、年男が井戸から手桶で水を汲んできて、料理をした。水がめの水は使わなかった。この間は、女性は料理には手をつけなかった。（鼻毛石）

若水手オケを暮に買っておき、元旦に家の主人が若水をくんで神にそなえる。

元旦の朝は雑煮をたべる。その中に若水を入れる。（苗ケ島）

若水は年男が丑の刻に汲んで来る。汲む時の唱えごとは「若水汲んで、古水捨てろ」という。（苗ケ島）

朝湯　近所中かわり番コに入りに行った。神様に供え物をする旦那衆が寄って入った。（柏倉平ガイト）

阿久沢イッケでは昭和十年前後まで朝湯に招きあう習慣があった。本家から順にまわった。正月元日からである。（市之関）

初詣　赤城神社や鎮守諏訪神社へ元日にお参りに行くが、大変にぎやかになる。（柏倉）

その年の明きの方へ向って元旦に歩いて行き、神社があるとお参りをして帰って来た。（苗ケ島）

これを「明きの方まいり」といった。あとは、三夜沢の赤城神社におまいりをした。（苗ケ島）

年始礼　戦前は年始礼に柏倉を全部回ったが、終戦後、神社に集まって神主も出て、拝賀式をしてすませるようになった。それでも、年始客が来るのはどうしようもない。

新しい靴を伍長が連れて挨拶に回った。（柏倉）

昔は隣り組からまわった。大正までは、手ぬぐいとシオガマを持って行った。今では一月一日の十時から寺を中心として合同年始会をするようになった。百五十人位は集る。（苗ケ島）

年頭回礼のため、元日には一戸一人ずつ出て、村中を回った。太陽の上らないうちから、区ごとにそろって、柏倉中を回って、家々に「おめでとうございます」と挨拶を述べて回った。羽織を着て、わらじばきの足支度をして歩いたので、家々の女衆はおちついて朝飯も食べられなかった。大正四、五年ごろまで回った。（柏倉）

年始　ある大雪の降った元旦に、わらじばきで年始まわりをしてこりた。そのときこりたので寺の本堂を借りて一戸一人出て年始のあいさつをするようになった。（苗ケ島）

元旦祭　正月元旦にはムラの人は元旦祭を赤城神社でとり行なった。必ず各戸一人ずつ出て、献せん用のひと重ねの餅を持って昇殿して祝詞を申して元旦祭をとり行なった。

元旦には畝いと豊作祈願の御神楽をムラ人が演じた。（三夜沢）

家例　奈良原家は正月三ガ日は雑煮縁起であった。アサミケ、ユウミケは別に炊いたものを年神様に供える程度であった。この三夜沢はほとんどの家が雑煮縁起といわれている。（三夜沢）

三ガ日は朝ソバが多いが、金子イッケ、鶴岡イッケでは赤飯、前原

イッケはメンバ板を出さず、モチ米（赤飯とモチ）を食べる。東宮家はトウフの田楽。（苗ケ島）

家例は三ガ日は朝ソバが多い。夜は赤飯などで、四日まで餅は食べない。（柏倉大崎イッケ）

三ガ日は朝雑煮を食べる家例もある。

三ガ日はハギの箸を作って使う。供え物をしゃくしに上げて、ハギの箸ではさんで供えて回った。ハギの箸は盆棚には使わない。（柏倉）

阿久沢イッケはワカモチがつけない。初午までは白が出せない。しかし暮に餅をついておくので、ヤク日には食べられる。たとえば元日から五日までは雑煮、七日はゾウスイ、十五日は小豆粥、十六日は雑煮である。（市之関）

二　日

正月仕事　家によっては正月仕事として、田植の日取りをきめておいた。

どこのマチは何月何日に植えると計画しておいた。それは田植のときの人手を調達する都合による。スウトメなどを、あらかじめ頼んでおいた。しかし、このやり方は、水利のいいところでないとできなかった。（鼻毛石）

一月二日は宮城村馬場にある馬頭観音様にお参りに行った。（苗ケ島）

初市　元日にはお金を出さない。二日は大胡や前橋の初市に出かけて初買いをした。子どもはこま買いに行った。（柏倉）

三　日

青柳大師　必ず大風が吹く日だった。

三日は青柳大師に参詣に行った。（柏倉）

四　日

ナベカリ　初嫁が実家にお客に行くが、日帰りした。嫁・婿そろって行く。大判餅という大きい餅三枚持って行くが、少し長四角で、水引をかける。上下が白い米の餅で、中に黄色いアワ餅をはさむ。贈ると、一枚返すもんだという。特別のご馳走はしない。節供ののりを貰って来るものだという。

ナベカリには初嫁から、二、三年は行った。（柏倉）

ナベカリには新しい嫁が米を持って実家へお客に行き、ご飯をたいて親に食べさせる。（柏倉）

ナベカリは新婚夫婦の年始で、米をくいぶちだけもって行く。嫁に行った覚悟をきめさせる。近くても、遠くても泊ってはいけない。日帰りするものだった。（苗ケ島）

新婚の夫婦は一月四日、でっかいモチを持ってさとへお客に行く。大判のモチを三枚包んで水引をかけて持っていく。お返しの浅草のりを貰って来ないといっておこられた人がいた。（柏倉）

四日は嫁・婿の年始日、大判の餅を三枚持って、嫁の実家へお客に行く。餅はアワ餅を中っぱさみにして米餅を上下にして、三枚そろえてみやげ物にする。

第一年目は泊ってはなんねえが、次ぐ年からは泊まってもいい。

一年目には嫁の実家でナベカリをして料理を作り、「家の嫁・婿が持ってきたものです」といって、近所の人にまで振る舞った。（柏倉）

嫁の年始は、正月四日であるが、この日は泊らない。十五日にも行くが、この時は泊る。（市之関）

正月四日は、女と坊さんの年始まわりだった。（苗ケ島）

オ棚サガシ　三ガ日供えたものを、四日に下げて置いて、七草ガユに入れた。（柏倉）

坊主の年始　「東昌寺で年始」といって、坊さんが各家を回る。子

ども二人がお供に歩いて行く。家では縁側にござを敷いて置き、来たらおひねり（お金）を渡す。
坊さんが上って休む家は、三軒だけ決まっていて、そこではお茶だけご馳走になる。（柏倉）

五　日

ゴカンニチ　正月の五日までをいう。（大前田）
五日は赤城神社が初めて祭られた日という。（三夜沢）
仕事始め　いくらか百姓の仕事をするが、決まった仕事はない。（柏倉）

六　日

山始め　カマに上げた供え餅と、ゴマメ二尾を持って山へ行き、山の入口に幣束を立ててそれらを供えてから、木の葉をさらい始める。クズ（落ち葉）をヒトセ（一背負い分）縄でまとめてしょって来る。（柏倉）
六日は山始めで、供え餅を持って山へ行き、十二様の宮へ、餅を焼いて上げてから、燃し木を取って来た。馬の年取りとはいわない。
山を買って伐採などの山始めをする時、立木に縄を三所（みとこ）しばりにしばって、イボ結びにしたシバリベエを作って、安全を祈る。隣地の人も呼んで、酒を一杯飲んだ。（柏倉）
山ハジメは一月六日。餅を細かく切って半紙にのせ、暮に切って用意しておいた御幣束を地面にさして拝み、そこで餅をやいて食べてくる。ボク（ヤマクワ・ナラ）・カゴギ（ミズブサ）は一月十一日になって伐る。
一月六日にお蒼前様のしめを外して、山へ行き、半日くらい薪をとりまたはくずかきをする。（市之関）
正月六日は山の仕事はじめの日で、山に関係のある仕事を少しでもすることになっていた。
一月六日は一年の山仕事にまちがいのないように十二様に、お供えをそなえた。（苗ケ島）
仕事始め　六日――さく立てをする日。畑に手鍬を持って行き、さくを切って来る。
十一日――倉を一日開けておく日。
十二日――山始めの日。山の仕事を始めた。馬を連れて行き、山の神にお供え餅を供えた。山に行き、明きの方に向って供え物をした。一年中の山の仕事の無事を祈った。（苗ケ島）

七　日

七草ガユ　一月四日の朝、三ガ日の間供えて置いたものを全部下げて、七日の七草ぞうすいの中に入れる。ナズナ・ニンジン・ゴボウなどと一緒にご飯の中にたきこむ。
セリタタキはしなかった。
七日は七草ガユで、セリ・ナズナなど七色入れたカユを作る。元日から神に供えたものが、小鉢にいっぱいになったので、全部おろして入れて、七草ガユにした。
カユに入れるものを庖丁でたたきながら、歌った。
七草ナズナ　日本の鳥と　唐土の鳥と……
羽根の生えた鳥と　羽根のない鳥と……
七日にはお松を下げた。（柏倉）
六日の夕方セリをとってくる。一夜ゼリなどといわない。七草は、セリ、ナズナ、フキ、ホウレンソウ、大根、芋、ニンジン、ネギなどの野菜。これらをきざんで雑炊をつくる。神様に供えるものは塩気を入れない。子どものころ次の唄を聞いた覚えはある。
七草　なずな　トウトの鳥が　渡らぬうちに
カッコロコーン　カッコロコーン（市之関）

七色のくさをとって、煮込んでおじやを作る。「七草なずな、唐土の鳥の日本にわたらぬうちに七草なずなの尻たたけ」といって菜を切った。

なずなが入っていれば七草がゆで、その中に三ガ日の供えものを入れた。（苗ケ島）

「六日夜取りはするな」といわれた。なずなやせりを取るなということらしかった。

唱え言は「七草なずな、とおとの鳥と日本の鳥とあわせてばた、ばた」であった。神棚の下でろうそくの明りで、まな板にのせた七つの草をたたいて、七草粥を作った。（苗ケ島）

蕪・大根・なずななどを、「七草なずな唐土の鳥が、日本の国に渡らぬ先に、トントコ、トントコ」と唱えながら叩く。七草の四つ（十時）前に爪を切れば、あとはいつ切ってもいい。「卯亥巳未に爪とらば（切れば）涙のかわく時なし」という。夜爪を切ると長生きしない。（大前田）

十一日

サクタテ　年神のさかきを取って行き、幣束を切って、短かく、三サクだけ切る。エホウに作る。（苗ケ島）

屋敷稲荷に飾ったお松を持って行って、田に立てて、サクを切ってくる。昔はよくやったが、最近はほとんどやらない。

「クワ開き」ともいう。倉の前に立てといたお松を持って行って田んぼに立て、小さい供え餅とおサゴ（米）を供えた。テンガ（手鍬）でサクを二、三尺切る。商人はこの日に倉開きをする。（柏倉）

クワビラキは一月十一日で、テンガを持って畑に行って、クワを使っていくらかでもサクをきり、サクキリ始メをする。この時に台所のオカマ様のお松を持って行って畑に立てた。オカマ様の近くに俵が積んであったが、別の神である。（柏倉）

一月十一日は倉をひらいて祭る。その日サクタテもする。松の枝にご幣束を下げてこれを畑に持って行って、麦のサク三サクきったところにたてる。その前に餅やごまめなどを供える。（市之関）

正月十一日は畑にさくたて始めの日。門松の枝に幣束を結びつけて持って行き、三さく、さくを切るまねをして、そこに立てておいた。（苗ケ島）

倉ビラキ　一月十一日に倉をあけて祝う。（柏倉）

一月十一日に倉を開いてお雑煮を供える。またサクタテをする。畑が凍っていても三サクだけはサクを切る。（市之関）

倉ビラキは一月十一日。倉の戸をあけて、俵の上に御幣を立て、供えものをあげて、おがんだ。この日は仕事をしないで休んだ。（鼻毛石）

土蔵の扉を開け、入り口の石段の一番上にあるケムリガエシ（煙返し）に、酒をあげる。（大前田）

十二日

十二様　マキ（たきぎ）切りなどの山仕事をする者が、始める時に集まって十二講をして祝い、ご馳走を食べた。十二様（山の神）の石宮が山のあちこちに祀ってある。仙太十二、市之関の十二など。（柏倉）

正月十二日は山の神まつりの日で山に行くものでないといわれた。山に行くとけがをする。赤飯を組毎に十二様に供えた。（苗ケ島）

十二様を祀る日を「ヤマゲエ」といった。若い衆が「ヤマゲエやるべえ」ということもあった。苗ケ島に十二様があった。山仕事をする人が御馳走をこしらえた。山の木にニボシを結わいつけて幣束を立てておまつりした。（馬場）

十二日には「十二講すべえ」といって、山の神に切り餅を持って行ってあげる。赤飯が好きだというので、お供えしたり、食べたりする。（大前田）

十四日

オ飾リカエ　松ノ内は十四日まで。外の松飾りの松の小枝を残して、ナラの杭にさして置く。十四日に飾り替る。

一月十四日はモチをつき、まいだまを作って百姓のおまつりだった。（柏倉）

ドンドンヤキ　一月十四日がおかざりかえの日、小学生が、各家をまわって、おしめ、門松などをあつめ、お金ももらってあるいた。このとき、「ほうが（ん）についてくれ」といった。なかにはもちっきれをくれる家もあった。これは、上級生が指揮をとった。

田の中に大きな小屋をつくった。それは組ごとに一つつくった（たとえば、中田で一つ、前原で一つという具合に）。小屋は三角錐のもの、子供だけではつくることができず、大人が手伝ってくれた。骨組は大人がつくり、そこに、わらをおっつけたり、おしめをはったりした。

大きな鍋を借りてきて、しるこをつくって食べたりした。

この行事は十六日の昼間の行事で、夕方まで遊んで帰った。

大正の末ごろまでしていた行事である。（鼻毛石）

お飾りかえは、一月十四日。いろいろのものをつくった。はらみばしはフシノキ（ぬるで）でつくる。ハナはニワトコでかく。カユカキボウもフシノキ。これは、苗代田の枚数だけつくり、十五日の粥をかきまわしたあとは神棚にあげておいて、苗代のとき、田の水口の畦にさしておいた。

繭玉もつくる。この中に十二玉と十六玉がある。十二玉は十二様に供えるもので、繭玉の大きい形。竹の枝に六段十二コをさした。十六玉は蚕の神に供えるもので、桑の株を伐りとってきて、大きい繭玉を十六コさした。右のほかに堆肥の上にはニワトコをたてた。（市之関）

ハナカキ　ニワトコの枝のふしとふしの間を、ハナカキナタでかくと、花びらのようになる。ふつうは二段にかく。ハギの枝でも小さいハナをかく。

ハナは松飾りをした所に、お飾りかえの時にさして置く。（柏倉）

ハナはニワトコやハギの枝の皮をはいで、白い所をハナカキナタで削って作る。ニワトコは前もって切って皮をむいて乾かして置く。ハギは固いので、ハナにかくと、ニワトコよりも細かくくるくるむけてきれいにかける。

年神棚、神棚、エビス様、ミタマ様（仏壇のことを神葬祭でいう）などに供える。（柏倉）

十四日のオ飾リカエの時、ハナカキナタでニワトコの枝を削って、ケズリカケを作る。長さ五〇㎝の棒に三段にハナをケズリカケにしたものを二本、神棚に上げる。長さ三〇㎝くらいのものを数本作って、外の松飾りをはずした所にさす。長い枝にハナを幾段にもかいたもの二本を、年神棚に上げる。

堆肥場へカキバナやアーボヘーボを立てる家もあった。（柏倉）

マユ玉　十五日に米の粉のダンゴを作る。丸形の小さいダンゴをたくさん作って、ミズブサの木の枝にさして、家ん中じゅうに飾り、蚕の上蔟の形にした。ミズブサの木は小枝が多くて、子どもがカギンボウにして引っ張りっこをして遊んだりした。

大きいマユ形のダンゴを十六個作り、十六玉といい、ヤマクワの木をクワの木根ッコにさして飾る。

十二様には若餅を丸くして十二個作り、やはりクワノ木根ッコにさして、十六玉とともに座敷のお棚の回りに下げて飾った。

座敷にはボクを立てて、マユ玉をいっぱいさして飾った。モナカの皮で作ったオ飾り菓子を買ってボクに吊るした。（柏倉）

ハナ　ニワトコをけずってハナをつくる。戸外の神仏は一本ずつ、年神さまには二本上げる。ミズブサはメエダマ木にはするがハナはつくらない。ニワトコは庭先に植えたり、畑のスマ（隅）の方に植えておく。（苗ケ島）

オカザリ　シメカザリの直しで、マユ玉を作り、ミズブサの木にさす。大きい十六玉というマユ玉はクワの木にさす。マユの格好をしたものを十六個作り一様にさす。小判の形などのオカザリ菓子を一緒につるす。

マイダマ　ソバマイダマやヒエマイダマはつくったおぼえがない。小正月のマイダマは、小さい粉のものは二斗も三斗もつくった。十六ダマというマイダマは大きく十六個つくり、桑の木にさして大神宮さまの蚕神さまの前に供える。

小さいマイダマはヤマクワの枝にさした。ヤマクワはつくっておいたものを使う。またエゴノ木の新枝にさしたものを大神宮さまに上げた。ミズブサ（ミズキ）にもさした。

大きいマイダマを十二個まるめてさす家もある。何に上げるかは知らない。

大きいマユ玉の形を十二個作って、桑のカブツに付けて上げる。また、大きいマユ玉を十六個、桑の枝にさす。飾り菓子も飾る。これらを神棚の前に吊す。もし、マユ玉が落ちると、蚕が外れるという。

お飾り替えにはミズブサの枝にマユ玉をさして飾る。青や赤の花菓子を飾った。桑の葉や小判の形をした花菓子を買ってきた。

カマ神に供えたマユ玉―ツバキの枝に、マユ玉・豊年鳥・花などの形をさす。（柏倉）
（関口正巳撮影）

マユ玉は丸玉のほか、サトイモの形、ツバキの花の形なども作った。ツバキの花の形はツバキの枝に二、三個さして、オカマ様の前に供える。豊年鳥といって、鳩の形をしたものを二個作ってさす。火事をさけるという。（柏倉）

カゴギは山桑、桑の木の株を取って来て小正月十二日か十三日に「じゅうに、じゅうろくのマユ玉」というマユ玉を、その木のすえに差して座敷に飾る木の株のことをいう。（苗ケ島）

十六玉は繭の形をした大きなだんごを十六個木の枝にさす。その間に丸または四角の餅を十二個さす。正月十四日にかざり、十八日におろす。十六玉は二十日の風に当てるなと言われる。（馬場）

山桑・水ブサ・エゴノキ・柿の木の枝・楢の木の枝などを正月の繭玉木として使う。山桑の根つきを盆栽のように仕たてて、たいらに生けて、この枝に繭玉をつける。正月が終ると枝を剪定して、又土におろして植えておく。この繭玉木は土間の下大黒の側に飾る。座敷の神棚にはエゴノ木の一年生の枝を切ってこれに繭玉をつけた。（馬場）

粉一升で十六の繭玉を作る。十二、十六というが、特に大きいのは、十六ダマだけで、あとは細かいのを作り、ショウマメノキ（秋葉が赤くなる。うるしに似ている。実がしょっぱい）にさし、ヤマグワ（山桑）のボクに立てる。このボクは、一年きりのもあるし、いけておいて毎年使うのもある。（大前田）

十四日のお飾りかえに十六まゆ玉をつくり、まゆ玉木にさす。この日、家例で餅をつけぬ家がある。阿久沢イッケは暮れにつくだけで、この日のほかに次郎の朔日にもつけない。（市之関）

正月十四日にマユダマをつくるが、このゆで湯を家のまわりにまいておくとマムシが入って来ないといった。（馬場）

若餅　小正月十四日にマユ玉を用意したり、若餅もこの日につく。十四日に飾り替える。

大正月に供えたものは、十五日の朝の風にあわせるな、病気が絶えないという。（柏倉）

ヘビ　十四日にマユ玉を座敷に飾る時、のし餅の端を三尺くらいに細長く切って蛇になぞらえて、一～二本ほど木の幹に巻き付ける。養蚕の時にマユを食べに来る鼠を蛇が取ってくれるように願って、蛇の形を供える。（柏倉）

マユ玉木はミズキを用いる。

針　小正月十四日には針をつかうなという。（柏倉）

蚕神　小正月にだるまや絹笠様の掛軸を掛けて祭る。オキヌ様のことは知らない。（柏倉）

便所の神　オ飾リカエの時に、テルテル坊主みたいな紙の人形を作って、目と鼻を書いて、便所のつくみの正面に下げた。自然になくなった。（柏倉）

オタキアゲ　十四日の晩、小鉢にご飯を一杯盛って、稲穂の形をしたハラミバシを十二ゼン（二十四本）、その上に立てて、神棚に供える。ハラミバシはフシの木（ヌルデ、ジョウ豆のなる木）でつくる。これをお正月様に上げろという。（柏倉）

一月十四日の晩に、オタキアゲをする。これは男がするもので、女の手をかけてはわるいという。

米を三合煮て、それを全部、こばちに山盛りにする。それに、ハラミバシを十二本（月の数だけという）をたてて、歳徳神様のお棚にあげる。

お飾りをしてからご飯を炊いてあげる。

これを一月十六日の朝さげて、十八げえ（雑炊）にして食べた。あずきのおかゆにし、もちなどを入れた。

このときにつかったうつわを洗った水を、うちのまわりにまいた（十八日）。これは、魔除けという。長虫がうちに入らないためといった。（鼻毛石）

十五日

十五日ガユ　カユカキ棒を二本作って、餅を挟んで十五日の小豆ガユをかき回し、白紙で包んで神棚に供えて置く。

カユカキ棒はあとで、苗間の水口に立てるので、苗間の数だけ作る。カユカキ棒に挟んだ餅を食うと、マムシ（蛇）に食われないという。

十五日ガユを吹くと、田植えに大風が吹くという。（柏倉）

小正月十五日の晩はオタキアゲといって小鉢の中に御飯を盛ってシオマメでこしらえた十二本の箸をさして神棚にあげた。このオタキアゲは男衆があげた。稲の穂をみたてたものであった。（馬場）

十五日の小豆がゆをカユカキ棒でかき回す。カユカキ棒は神棚に上げといて、二十日にハヨウ縄をなった時、しばり付けて下大黒柱に付けて置く。夏、苗代つくりの時に、苗間の水口に立てて、種モミを振る時に、まず水の取入れ口のくろにさして、種モミを三とこつまんでおいた。カユカキ棒の中に挟んだ餅を取って食うと、マムシにかじられないという。（柏倉）

十五日のアズキガユを食う時に、吹いて食うと田植えの時に嵐が吹くといっていましめる。（柏倉）

十五日粥は、小豆粥、餅も入れてつくる。これをふいて食べると田植に風がふくといっていやがる。ハラミバシで食べる。（市之関）

百姓は正月中に一年中の仕事と同じことをする。

小正月の小豆粥を一合位はいる小鉢に入れて、その中に孕み箸を十二本立てて神棚に供える。

孕み箸は稲の穂がよく孕むようにと作る。この箸は取って置き、稲に害虫がついたときに田に持って行って差す。なお、粥は熱くても吹いて食べるものではない。田植えの時風が吹くといった。（苗ケ島）

小正月十五日の朝、小豆粥をこしらえる。この粥はニワトコの木でつくったカユカキ棒の先を十文字に割って繭玉をはさんだものでかき

まぜた。カユカキ棒は半紙にくるんで水引をかけて神棚にあげておいた。小豆粥は水を多めに入れた。水が少ないと田んぼに水がなくなるという。この粥は吹いて食べるものではない。吹いて食べると田植えの時に風が吹くという。この小豆粥は少しくとっておいて、十八日にあたためて食べるものだった。

このカユカキ棒は苗代をこしらえる時、水口にさした。カユカキ棒についたメーダマを食うとマムシにかじられないという。（馬場）

カユカキ棒　十五日の小豆がゆにはマユ玉を入れた。ニワトコの木の先を四つ割りにしてマユ玉を挟み、小豆がゆをかき回した。（柏倉）

十五日ガユをかん回したカユカキ棒を、半紙に包んで神棚に上げて置き、苗間作りの時に水口に、そのカユカキ棒を立て、カユカキ棒にはさんだ餅を食うと、マムシにかじられないという。（柏倉）

カユカキ棒（柏倉）　（関口正巳撮影）

正月十五日の朝小豆粥を煮て粥かき棒でかきまわし、これを神棚に上げておいて苗代を作る時苗間の水口にさす。蝗よけになるという。だから、粥かき棒は苗間の数だけ作る。苗間は一マチ二マチというふうに数える。たいていの家には五マチぐらいあるから、粥かき棒は五本ぐらいは作るのが普通である。（馬場）

鉢を洗った湯　一月十五日のかゆを上げてさげたお鉢を洗った湯をヤカンに入れて家のめぐりにまく。ヘビなんかが入らないようにと。

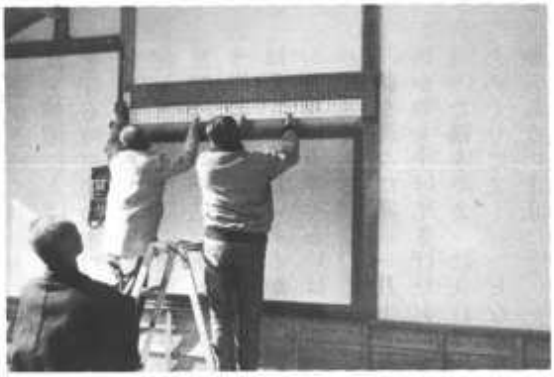
十五日にかゆをたいて、お鉢に入れて神様に上げる。そのお鉢を洗った水を家の回りにまくと、蛇が家に入らないといい、土びんに水を入れてまいた。（柏倉）

小豆粥を作った鍋、釜を洗った水を、家のまわりにまく。疫病が入らないようにという。ニワトコの木で、真中を太くして、稲の穂ばらみしたところをかたどった箸を作る。この箸で食べると、できもんが出来ない。同じ木で、ケエカキボウを作って、かきまわす。この棒を、苗代を作った時、水口に挿す。（大前田）

赤城神社お筒粥　十四日夜、神前に供えたお洗米を下げて来て、社務所で粥を煮る。この行事は代々小野家の当主が主宰することになっていて、奈良原宮司が立ち会い、総代四名が参加する。径四十一センチの鉄鍋に米一升、小豆½合、モチ粟わずかを入れ、水は適当に入れて、マキ（薪）を燃して粥を煮る（今はガスを用いる）。お筒は太いヨシ（長さ八センチ、径一センチ）を四十六本揃えて、麻紐で二カ所ずつ編み、左右にニワトコ（長さ五十センチ）を結び付けたもので、粥の中に入れて煮たてる。（ヨシは忠治温泉の方の国有林から七日ごろ取って来る。）お筒（ヨシ）の中に粥が入ったのを出して、社務所の机の上に広げて、宮司や総代が回りを取り囲んで見守る。小野氏が正面に坐り、小刀でお筒を端から割ってお筒びらきをする。回りの人が

赤城神社のお筒粥のヨシ
（三夜沢）　（関口正巳撮影）

赤城神社のお筒粥（三夜沢）　（関口正巳撮影）



赤城神社お筒粥の掲示

それを見て、粥がどれくらい入ったかを判断する。「よし、わるし、半吉、吉（きっ）」などと口々に言い合議して決まった判定を作物名を書いた板に貼った紙に書き付ける。「吉」はごく悪い方だという。（板はたて29㎝横185.5㎝厚さ2㎝）

昭和五十六年一月十五日の結果は次の通り。

ゆふがほ	よし	おくもち	わるし
わせいね	よし	かさなり	半吉
なかていね	半吉	とうほうし	わるし
おくいね	よし	わせむき	よし
ささのこ	よし	なかてむき	わるし
わせもち	半吉	おくむき	半吉
なかてもち	よし	わせこむき	半吉
なかてこむき	半吉	おくあふら	半吉
おくこむき	よし	こま	わるし
わせそば	よし	あきな	わるし
なかてそば	よし	だいこん	わるし
おくそば	よし	いも	よし
わせひへ	よし	ちゃ	よし
なかてひへ	よし	なすひ	よし
おくひへ	半吉	あい	よし
わせあは	半吉	はな	半吉
おくあは	半吉	きひ	よし
わせまめ	わるし	そば	よし
おくまめ	半吉	うり	よし
わせあつき	半吉	もめん	よし
おくあつき	よし	くは	よし
ささげ	よし	かひこ	よし
わせあふら	よし	よのなか	よし

昭和五十六年一月十五日

今年は四十五種の作物中、よし二十五、半吉十三、わるし七、と出て、昨年よりずっと好い占いが出ているという。昨年はほとんど粥が入らなくて、凶作だったという。サツマイモはここでは明治以降に栽培したので、筒粥の作物には登場しない。今ではわからない作物名もあるという。（ゆふがほ、ささのこ、かさなり、とうほうしなど）

筒粥の神事が終ると、拝殿に上り参拝して来て、割ったお筒は池の中に投げこむ。筒粥の結果を書いた紙を貼った板を社務所の東壁に掲示して置く。以前は結果を版木で写して、氏子に配布した。（三夜沢赤城神社）

成り木責め　昔、小正月時分に柿の木の根っ子の方を皮をむいてムシがつかねえようにといった。（馬場）

正月十五日の朝の繭玉のゆで湯を、柿・栗・桃・梨など成りものの木に鉈で傷をつけ「うんと成れ、うんと成れ」と唱えごとを言いながら切り口にゆで湯をかける。実をたくさん成らせるまじないであるという。（馬場）

うまやごい出し　一月十五日。暮のうちに一応は厩肥を出しておくので、そんなにたまらなくとも、この日は必ず出すことになっていた。（市之関）

ミタマ様　ご先祖様のことで、仏壇のことをいい、正月には別に祭らない。（柏倉）

嫁の里帰り　若夫婦は嫁の家にお客に行く、この時、とつぎ先から親もとへ三十㎝くらいのお膳モチを、紙かけて、水ひきかけて、三枚もらって来る。（苗ケ島）

ドンド焼き　おかざりの松を取って、近所のものを集めて、十四日に、ナエマに小屋を作り一晩泊まる。この晩は小遣いを五厘か一銭もらって、その小遣いで食べ物を買って一夜をあかした。ナラの木の良いものを切って三角の良い小屋を作り、十五日の昼すぎ火をつける。この火でモチを焼いて食べる。（苗ケ島）

十六日

道祖神　徳利を持った双神像の上に笠をかぶっている像があり、珍しいとされる。総高約一m、幅七七㎝、厚さ四十㎝もある。道祖神は盗ミットをするのを、なくするような神様だという。（柏倉）

ドンドン焼き　最近は子供会でまとめて、数カ所でやっている。年齢の上の子が大将になって、ドンドン焼の行事を進めた。正月十六日の夕方、子どもが「ドンドン焼ダゾー」とふれて回って、火を付けて松小屋を燃した。ドンドン焼の火で餅を焼いて食った。（柏倉）

十二山から長い心棒になる木を一本伐ってきて、空き地に立てて、まわりに竹を立てかけ、正月のお飾りを家々から集めておっつけたり、山師から竹や木の枝を寄付してもらったりして、松小屋を作った。中に子どもたちが入って、餅を焼いて食って十六日まで遊んだ。大正時代までは各組ごとにあちこちの空き地に作った。そこを通る人には「奉賀ツイテクンナ」といって、五厘・一銭などのおさい銭をもらった。その銭で菓子などを買って、寄った子に分けてくれた。道祖神は別に祭らなかった。（板倉）

ドンドンやきは一月十六日。かざりかえして松をもらい集めてやいた。その火で火事になった家があったのでやめてしまった。焼けた家は、今でもヤケヤのあだ名がある。（市之関）

正月十六日　ガキの首も許される日で、嫁や奉公人もゆっくり休ませる。十六日の墓参りはしない。

十五・十六日は奉公人も使ってはならない。鬼の首も許される日、死刑囚も許される日、といって、奉公人も遊べる日だった。盆と正月の十五・十六日は休んだ。

十六日は寺へ参拝する日だから、ご年始回りはよせといわれた。一月十五・十六日はやぶ入りで、奉公人を休ませる。よめごも砂糖ひと折ぐらい持ってお客に行く。（柏倉）

女の正月　十五・十六日に泊まりがけで実家へお客に行く。（柏倉）

十七日

まいかき　十七日にまいかきする。二十日の風にあわせるな、という。

正月十七日はマユ玉を取る日で、十八日の風に合わせるなといって、マユ玉飾りをはずす。石山観音の縁日で風が吹くが、その風に当てないようにマユ玉を取る。（柏倉）

マイカキは一月十八日の早朝。小正月のお飾りをとる。これをマイカキという。（市之関）

十八日

十八日がゆ　十五日のかゆを、十八日にアッタメガユにして食べると、むしにさされないという。（柏倉）

一月十八日に十五日ガユの残りを粗末にしないで、あたためかえして食べた。

なりくだ物の木の所へ、なたを持って行って切っかけて「ナルナ、ナルナ、ナラヌカ、ナラヌト、ブッキルゾ」といって、なたでカタッとたたいて、マユ玉のゆで湯をかけて、おまじないをした。（柏倉）

十五日粥の残りをとっておいて、これに餅などを入れてあたためて食べる。釜を洗った水を処理することはしない。ヘビ・ムカデの唱えごとは知らない。（市之関）

二十日

二十日正月　一月二十日に男衆がハヨウ縄や草刈り縄をなう。ハヨウ縄は、田んぼのシロカキの時のマンガ（馬鍬）かけに使う縄で、近所の者が寄って、長ハシゴに縄を掛けてよって作り、そのあと会食で一杯飲んだ。

一月二十日には縄ないをする。草刈り縄と馬に引かせるハヨ縄をなう。二十ヒロが一本になり、束ねて台所の下大黒柱にいわい付け、お供え餅を上げて拝む。

二十日正月にはハヨブチをする。馬の荷ぐらに付けて引く縄（ハヨ縄）を半日なう。わら縄をミコになうので、三人以上寄って共同で、三本のわら縄を下大黒柱にしばり付けて、たがらんでなう。田植えの時、馬で田をかくのに使う縄で、一本が二年ぐらいは使えた。馬は口をきかないが、縄が切れると休める。

田植えの用意をしておく日で、その行事をしてから休んだ。草刈り縄を一駄（十二本）以上作ったり、ヨツラ（束ねる縄）を作る人もいる。（柏倉）

この日供えもののオタナを下ろしたのでオタナサガシという。

この日ハヤオナワをなった。はしごになわを下げて三重にして三人がかりでなった。およそ二十尺くらい。これを下大黒に結えつけておく家が多かった。またこの日草刈り縄をなって同じく下大黒につるしておく家があった。（市之関）

わら正月　二十日正月をわら正月という。この日、草刈りなわ・肩かけなわ（二本）・ハヨウナワをない、シモ大黒にしばりつけて神さまに供えておくのがきまりだった。（苗ケ島）

もの作り　わら仕事で、糸なわだとか田植用の縄ないをする。これで正月は終ったようなもの。代かきのためのハヨ（馬がマンガを引く綱）や、一夏の田植に間に合うだけのものを作る。半日くらいで作る。太い縄は三本よりのため男衆三人で作る。二十日正月だから午後は休める。（苗ケ島）

一月二十日はしめえ正月といい、なわないを行なった。草刈り縄、馬に使うはむ、代なわ、井戸に使うつるべ縄などを作った。

井戸つるべの縄は、三本よりのもので近所隣りの人と共同で作った。（苗ケ島）

一月二十日ハヨナワを共同でなう。八ヒロあれば一年の作業に間に合った。ハヨナワは主に馬にマンガを引かせるのに用いた。（大前田）

エビス講　一月二十日の夜、エビス様を棚からおろして、お祝いをする。床の間や座敷で、勝手からおおく離れない所に茶ぼ台を置き、お宮の中から像を出して、エビス様の膳と大黒様の膳を供える。エビス講サンマといって、サンマを一匹ずつ平膳（ひらぜん）にあげる。古いお金も上げる。ご飯は正月は少々、暮にはごっちり盛って上げる。掛軸はめったにない。

商売する家では朝エビスで、朝赤飯をふかして、店先のエビス様に供えたり、銭箱を上げたものだが、一般には夜やった。

エビス様に前夜あげたご馳走は、出世前の子には食べさせない。エ

ビス・大黒はカタワッコで、縁が違いのでだめだ、嫁に行けないという。

正月にはご飯を少し盛ってやり、夏うちに一生懸命働いてもらって、暮にはうんと盛ってやるようにする。

桐生のエビス様で縁起物を買って来る。熊手でかき集めるように、熊手を供えたり、お金を「マスマスハンジョウスル」ように、五合（半升）ますに入れて供えた。

エビス様はふだんは神棚の続きで、かぎの手になった一段低い棚に置く。

一月のえべすこうは、あんまりごちそうするとえべす様が働かないから、ごちそうはしない。からっさいふを上げる。（柏倉）

初恵比須は一月二十日の夜する。供えものなど秋にくらべて軽い（少い）。秋は大盛り、正月は少くする。供えものは、未婚の者には食べさせない。恵比須・大黒は相手がなかったので。（市之関）

エビス講は一月二十日と十一月二十日にやる。床の間にエビス様と大黒様を出して、供えものをした。一月には、エビス様がかせぎに出かけるので、うんとかせいでもらうために、あまり金を供えない。十一月には御飯のほかに、さんま・さつまのてんぷら、また、柿（身上をかき上げるといって）、くまで（身上をはきこめという意味で）などをあげた。ここでは一月、十一月ともに夕方やった。朝エビスは商人がやるものといわれている。（鼻毛石）

二十三日

二十三夜マチ　旧暦二十三日夜、二十三夜マチをした。ダンゴを作って夜あかしをして、三夜様の月が上がるまでいた。庚申マチもあった。

「庚申マチだで　話においで、鳥が歌たら寝においで」といった。（柏倉）

天神講　小学生が、男女一緒にした。組ごとに宿をきめてした。時期は一月二十四日の晩から二十五日にかけて。

宿は、希望者とか、上級生のうち。

米とかお金はもちよせであった。各自布団をもって宿に泊った。

半紙を二つぎりにして、「奉納天満天神宮」と書いて八幡様の境内の天神様におまいりした。字ができるようになるといった。半紙は、お宮の格子のところへまるめてつっこんできた。

天神講がさかんであったのは昭和十年代まで。（鼻毛石）

二十五日

天神講　米五合、宿に持ち寄り、五目飯を作る。子供のいる、集りいい家が宿になる。（大前田）

二十八日

しまい正月　一月二十八日を「しまい正月」というだけ。正月棚をはずすことになっている。

しまい正月の一月二十八日に年神棚（お棚）をこわす。

「きょうは二十八日、尻まくりのご用心」といって、女の子の着物をまくりあげたり、下げたりして、キャーキャーいいながら、子どもが遊んだ。（柏倉）

しまい正月は一月二十八日。雑煮で祝うが、行事としてとくにすることはない。（市之関）

二　月

次郎の一日

次郎の一日　二月一日は仕事を休む日。アワ強飯を作るが、意味は不明。前日の一月三十一日に若餅をついて、お供え餅を作り、次郎の

一日に供えて、二日にお棚ばらいをして、年神棚をこわして、大神宮に移した。

次郎の一日は「黄金で祝う」といって、アワ強飯を作って、神様へ供えてから、正月棚をはずす。幣束としめ縄を川へ流す家もある。正月様のお札は神棚に上げた。（柏倉）

二月一日は二郎のついたちでアワ強飯をして供えた。棚を片ずけてから川へ流して「川へおさめる」と言った。（柏倉）

次郎の朔日は二月一日。赤飯。アワ強飯だった。「黄金で祝う」といった。とくべつなことはない。（市之関）

長男は正月一日にお祝いをしてくれるが、次男の次郎は二月一日にアワ強飯をして神に供えて祝う。（苗ケ島）

次郎の一日は二月一日、アワ強飯を炊いた。（大前田）

出カワリ

奉公人　二月二日は子守っ子・番頭・おバンシ（女中）などの奉公人が、昔は一年奉公で替ったので、この日に報しゅうをくれて、一週間暇をやった。仕着せは、取り決めによってした。奉公人は地元の人が多かった。蚕ビョウ（日雇）も、ここから出た人の方が多い。娘はそのまま嫁に入る者もいた。（柏倉）

節　分（三日）

豆　年取りにはホウロクで大豆を炒った。菊の枝・マメガラ・ナスの枝などをもして、「いいことキクガラ、借金ナスガラ」と唱える。豆を炒りながらその年の占いをした。（三夜沢）

「鬼の豆」といってハツにあげた豆は枡にとっておいて神棚にあげておき、初雷が鳴った時に食べると雷をよけられるという。年齢の数だけ食べるとよい。一年中、まめ息災に生きられるように福茶を飲んだ。

豆は神棚、床の間、オクリザシキの順に「福は内、福は内、鬼は外」といって、すぐ戸を締める。最後に赤城神社に行って豆をまいた。（三夜沢）

ヤカガシ　二月の節分のときにする。ヤカガシという。

クワ・ナラ・ミズブサなどの二股に、イワシの頭をさして、節分の豆を炒りながらやく。

このイワシは、としとりのイワシといって魚屋で売っているもの、あるいは魚屋が売りにきたものを買った。

イワシの頭をクワなどの二股の先にさして豆を炒りながら、ツバをかけながら、〇〇の虫の口をやくなどといってやいた。アブラムシ・シャッキラ・アオムシ・ホウジュク・テントウムシなどといえるだけの虫の名をいって、イワシの頭を真っ黒にこげるまでやいた。なお、このときキクとナスがらを燃した。これは、いいことときくから、借金なす（済す）がらということであるという。

これを、イロリのかぎ竹にさしておいたり、下大黒にさしておいたりした。

なお、イワシはとしとりにはつきもんだった。（鼻毛石）

またイロリのまわりにナラの木の二股の枝にイワシの頭をさして「耕作にたかる虫の口を焼き申す」といいながらつばをはいた。イワシの頭はヤカガシといってオカマサマに供え一年中そのままにしておいた。（三夜沢）

節分の年取りには、イワシの頭をザンマタにさして、虫がつかないように、ピュッピュッとつばきをかけて呪いをする。（柏倉）

豆を炒る時、イワシの頭をザンマタの木（豆がらか、ナラの木の枝）にさして、イロリにさして、あぶって虫封じをした。ツバキをピュッピュッとかけながら唱え言をいう。

虫の口を焼き申す
四十八種の虫の口を焼く

キュウリの虫を焼く

五穀、豆虫、アワ、ヒエ、キミ

四十二色の虫の口を焼きます

などと唱える。これをヤカガシという。

この時、イロリで、ナス・キク・豆の木を燃すが、

「借金ナスガラ、イイコトキクガラ、マメニナル」

という意味がある。

ヤカガシはオカマ様の近くの流しの上の屋根裏にさして置く。ムシ歯が痛い時に、ヤカガシで突っつくとなおるという。（柏倉）

節分の日に、ひいらぎの三叉の枝の先に、いわしの頭を二つさして、いろりで焼きながらつばをつけ、勝手の裏口の屋根うらに差しておいた。煎じて飲むと薬になるという。

このヤッカガシを焼くときの燃すものは、菊の茎、茄子の茎、豆の茎を使った。それは「良い事を聞く（菊）から、借金なす（返すこと、茄子）から、まめ（豆）で達者で働くから」という意味だった。（苗ケ島）

イロリでナスガラ、キクガラ（いうことをきくという意）を燃して大豆を炒りながら「害虫の口を焼き申す」と唱える。（油虫、シャッキラボウを焼くのだが、間違って桑の虫を焼くといったら蚕が外れたという）重箱か枡にこの大豆を入れ、その上にヤカガシをおいて神棚にあげ、次で年神様～玄関～外に豆を撒く。ヤカガシ（鰯の頭を焼いて栗の木の二股にさしたもの）は、北爪家では神棚にずっと置く。後藤家ではヤカガシを焼くとすぐこれだけをオカマ様（流しの神様）におき、阿久沢家では枡の中に入れて神棚に供え、次で豆を撒き終えてからオカマ様にあげ、中沢家は後藤家と同様で、このように多少の相違がみられる。（大前田）

ヤカガシは鰯の頭をナラの枝・ヒイラギの枝などにさしてこれをイロリの火でやく。その燃料には豆・茄子・菊などの枯れたのを用いる。

「マメになるように、借金なすがら、よいこと聞くがら」という。焼く時に「ネッキリ虫の口をやく。イナサク虫の口を焼く。アブラ虫の口をやく。ヨロズの害虫の口をやく。」などという。

豆投げ――よく炒った豆を神棚にあげておいて、夕食後、神棚から室内・便所・井戸・屋敷神、倉などにまく。馬屋にはまかない方がよい。「福は内、福は内、鬼は外。」と唱える。残った豆は袋に入れてとっておく。初雷のときに「鬼の豆を食べろ。」という。（市之関）

年取りの日にナラの木のニスの木をとってきて、それにイワシの頭をさしてイロリで焼く。焼くときに「虫の口を焼き申す」とか冗談に「バアサンの口を焼き申す」などといいながら、つばをはく。

年取りの豆はマメガラとキクガラでいった。「いいことキクガラ、借金ナスガラ」と言いながら。年取りの豆が生えると縁起が悪いとてよくいった。年取りの豆は年の数だけ食うものだ。福茶をのむ家もあった。

まめまきはいちばんはじめは大神宮様で、最後はイナリサマで「福は内、福は内、鬼は外」と大声でいいながらまいた。まくのは年男がやる。

イワシのヤッカガシは神棚にあげておいた。（馬場）

豆マキ　豆は土焼きのほうろくに入れて、手や火箸でかき回しながら、二回ぐらいに分けてよくいる。生ではよくない。その豆を枡に入れて、一旦は神棚に上げて置く。夕飯前にまく家と、夕飯後にまく家とある。年男がふろに入って、夕飯を食べてから、豆まきをする。枡に入れた豆をまいて回るが、「福は内、鬼は外」と唱える。

神棚、家の中に豆をまくと、トボグチから外に出て、稲荷・井戸・便所と回って豆をまき、川棚（川神様）にも豆をまいてくる。家の外へ出る時には「鬼は外」といって豆をまいて表から出て戸をしめる。家の内に入る時には「福は内」といって、表から中に入って戸をしめる。

豆まきは夕方、なるべく早くまいて戸をしめろ、もう外に出るなという。

豆は自分の年だけ拾って食うものという。

豆を取って置いて、初雷が鳴る時、出して分けて食うと、おっかなくないという。（柏倉）

山仕事の時なので早じまいして、山から二股の木をとって来て、イワシのあたまを刺して、土ホウロクで豆を炒りながら、イロリでイワシのあたまを焼きながら「なすゆうがおの、ムシのクチ焼く、ペッペ、四十二色の耕作のムシのクチ焼き」という。「イイコトキクカラ、シャッキンナスカラ」といいながらナスガラを焼く。豆が炒れたら、マスに入れて、神棚にあげる。「フクワウチ、フクワウチ、オニハソト」と年神様の前で始めて、部屋中をやり、オニハソトを大声で外をやり、フクワウチといって、ウチに入り、いそがしくとぼをたてる。

ヨソよりも一声でも早く豆まきをやりたいということで早くやった。暗くなりはじめたら、夕飯をたべたあと、すぐ年男が豆まきをした。

豆まきのあとの豆は、取っておいて、初雷の時に食べると雷がおちないといわれ、紙につつんでイロリのカギ竹の上においた。（苗ケ島）

まめに暮すようにと豆がらと、借金なす（返済）ようにとなすがらを燃して豆を炒る。豆は天道様の方に向いてまき始める。とぼ口を開けて、「福は内、福は内」といい、「鬼は外」といってしめる。まいた豆を、自分の年だけ食べる。また豆を紙に包んで、鍵竹に吊しておき、初雷の時に食べる。今は茶筒箇に入れておく。（大前田）

豆まきの豆は福茶に入れて、家の者が飲む。この時、冬至にみそ漬けにしたユズを食うと、中気（しゅうき）にならないという。

節分の夜は早く寝れば、白髪になるという。

同じことは大晦日にもいう。（柏倉）

年とり　年とりは早くねるとしらがになるという。（柏倉）

年とり前に霧がまくと、百日めに霜が降るという。（三夜沢）

アーボヘーボ　市之関のさとの隣には子のない夫婦もんがいた。子どものころよく遊びに行っていた。節分の時にも遊びに行って、何してるかな、って思って障子の穴から中をのぞいてみた。そうしたら旦那とかみさんで「アーボヘーボもこの通り、このよのカマスにとっかます」っていいながら夫婦して四つんばいになってイロリをこっちに回る人にあっちに回る人がいて両方から回ってた。何のわけだがな、おもしれえと思ったから家へ帰って見てきたことを話して「おらうちじゃああいうことをしねんかィ、とてもおもしろかったが」って言ったら「子どもはそんなもん見るもんじゃねえ」っておこられた。隣の人は小池さんて人でたしか大正元年ごろだった。（柏倉）

初　午（初午の日）

マユ玉　マユ玉を作って、一升枡に笹っ葉を敷いて、山盛りに入れて神棚に供えた。

アワゴワ飯をたいて、先祖様（仏壇）や大神宮様に供えた。

初午に仕事をすると火にたつから、仕事をするなという。女衆は針を使うな。

旧二月二日は稲荷様が生まれた日というが、初午に稲荷様は祭らない。（柏倉）

初午にもマイダマをつくるが木にはささない。一升枡に入れて上げる。（苗ケ島）

初午は二月。屋敷稲荷はとくべつに祭らない。オシラマチも知らない。しかし繭玉はつくって蚕神に供える。繭玉は、枡に笹を入れてその上にのせ、これを絹笠様の掛軸に供える。阿久沢イッケ・高橋イッケでは、この日、今年になってからはじめての餅をつく。（市之関）

火にたつ　初午に針を使うと、火に立つから、使うなという。風呂をたてるなとはいわない。（柏倉）

初午には一升枡に、山かけに繭玉を作る。餅もつく。丙午の年だと、火が早いという。火に祟るといい、この日は仕事をしない。（大前田）

キヌ笠様　二月初午か二の午に蚕神を祭る。西房にキヌ笠様の石碑があるので、養蚕組合でマユ玉を重箱に入れて供える。蚕があたるように、神主が拝んで祭る。マユ玉は混ぜて、各戸へ返す。（柏倉）

コト八日（八日）

メカイ　メカイの中にヒイラギをさして庭先に飾った。何故やるかは不明。（三夜沢）

コト八日は話を聞いていただけで、行事は知らない。

竿のウラ（先）にメケエを上げて庭に立てた。悪いものが来ないように、魔除けである。

この時、ミカイに草刈り鎌をしばり付けて立てた家もある。風を切るためという。風が強い時にも、そうにした。（柏倉）

ミケエ（メカイ）にヒイラギの枝をさして、竿の先に付けて、カイドに立てた。ミケエは上向きでも、下向きでもよいが、魔除けだという。鎌を立てて、西風の吹く方に立てたこともある。その日の夕方には倒した。年一回だけやった。

「カドにヒイラギ、セドにエンジ」または「鬼門にエンジ」といって、ヒイラギやエンジの木は魔除けになる。（柏倉）

お事八日は、二月八日。コトハジメということばはあったけれど何もしなかった。（市之関）

水も流さぬコト八日という。（苗ヶ島）

二月八日にはメケイにヒイラギをさして、口を上にむけて竿につるし、庭に立てた。また十二月八日には、同じようにしてメケイを竿につるしたが、このときは、口を下にむけた。大正いっぱい位までやっていたと思うが、この日をなんと呼んでいたかわからない。（鼻毛石）

竹の先にメケイを逆さにかぶせて、ヒイラギの葉、カマをつけた。カマで風を切るという。（苗ヶ島）

コトハジメは二月八日、コトジマイは十二月八日、この日メケにヒイラギをさし入れ、上を向ける（コトハジメ）。コトジマイのときは下に向ける。（大前田）

二月八日をコトヨウカといい、昔はメケエにひいらぎをさした。針供養といって、折れた針を豆腐にさし、流した。（大前田）

針供養　二月八日には針を使うなといい、針をとうふにさして納める。（柏倉）

天神講　二月二十四日に隣り組ていどの子どもの集まりで、尋常から高等の子どもたちが参加した。ごちそうはすし、ごもくめしくらいで、宿の家族が手伝ってくれてみんなで食べて泊った。翌朝（二十五日）「奉納天満天神宮」のハタを立てた。天神さまは苗ヶ島神社の境内にある。（苗ヶ島）

ヤセウマ　米の粉をこねて薄く切って、ますの中に笹の葉を敷いて入れ、神様に供える。家ごとにしたが、期日は不明。古い行事で、現在は行っていない。（柏倉）

三　月

桃の節供（三日）

ヒナ人形　以前は四月三日が桃の節供だったが、戦後三月三日に変わった。

白い米の餅や、ヨモギを入れた草餅をつく。最近は赤い色の餅もつく。餅はヒシ形に切ってヒナ様に供える。

嫁の実家の親元から、嫁に内裏様を贈る。

女の子が生まれると、親もとや親戚からヒナ人形を贈った。昔は坐りビナが多く、高砂のじいさん、婆さんなどの人形もあった。古いヒナ

人形も出して、前日にはヒナ壇に飾り、供え物をする。
ヒナ人形は節供が過ぎると、天気のいい日を見てしまう。あまり遅くまで飾って置くと、娘が嫁に行くのが遅くなるという。しまう時、古いヒナ人形や、こわれた人形は川に流した。（柏倉）

餅　嫁は大判の餅を三枚持って、実家へお客に行った。草餅を中に入れて、上下を白い餅にして、三枚重ねてみやげにした。（柏倉）
お節供のひし餅は、カドがあるから、うんと働くんだという。（柏倉）

節供の贈物　正月は四角の餅を二枚嫁は実家に届けた。あと、三月節供は菱形の草餅を三枚、五月節供は、たらの干物二枚、秋あげは、ぼた餅を持って行った。秋あげのぼた餅は馬のへらのようなぼた餅と言った。このお返しに箕を貰って来た。（苗ヶ島）

節供ガラ（三月四日）　節供の翌日を、節供ガラ・セチマという。「節供セチマに餅ついてくれろ」とシトト（ホウジロ）が鳴くという。（柏倉）
四月三日がヒナ祭りだった。女の子には内裏ビナを里親が買ってやる。親は嫁に行った娘にも三月前におヒナ様を届ける。娘の分と孫の分は別々に買う。ヒナ様は大胡、大間々、紬川の女渕、栃木県の佐野あたりのヒナ市に買いに行った。
ヒナ様をもらっても、もとは節供返しはしなかった。節供返しをするのは、ここ十年くらいのことだ。
四月二日に草もちをつく、菱形に切って三枚重ねて、ヒナ様にあげる。このモチは、後で焼いて、キナ粉をつけて、アベ川モチにして食べる。また、油揚ずしと、かんぴょう、ごんぼう、デンブ、ハスを中に入れた海笞まきを作る。ハスを煮たものやシメドウフなどもヒナ様にあげた。できる限り最高の、一番ぜいたくな食物を大皿であげた。
子供には晴れ着を着せて、モモワレ、タテ長の髪をして飾り、嫁の親元へ連れて行き、泊って来られた。（苗ヶ島）

梅　若（十五日）

梅若　三月十五日にもと餅をついたが、どういうわけか知らない。ウメワカといっていた。（市之関）

春の彼岸（春分）

墓参り　春の彼岸にはボタ餅を作って、墓参りに行き墓に供える。彼岸には入口、中日、走り口とある。彼岸の入口に、常例の道普請を組の者が出てやる。（柏倉）
「暑い寒いも彼岸まで」「くされ彼岸は七日ある」などといって、天候の変わりめで天気がわるいという。「秋彼岸から春彼岸まで夜なべをする」ことになっていた。
春彼岸に檀家に塔婆を配って、寺で施餓鬼をする。（柏倉）
彼岸には、入り、中日、ハシリロ、とボタモチを作り、仏壇にあげる。墓参りの時はボタモチをダンゴと同じくらいの大きさにして、一人一人の墓にそなえる。
彼岸の間は祝儀をしてはならねえ、病気見舞をしてはいけねえと言い、また、彼岸の中日は仕事を半日休んだ。寺との関係はあまりない。（苗ヶ島）

天道念仏　春の彼岸の中日に、一昼夜、ナンマイダと唱えながら、鐘を叩く。最後に杉の木のてっぺんに、ボンデンをあげる。子どもには、花菓子（梅の花や葉の形をしている）をくれる。（大前田）
蠟燭に火をつけて、終えるまで一人で念仏鉦を叩き、なんまいだんぶと唱える。春の彼岸はまだ寒いから、蠟燭を短くしてやると、あとでしめられる。天道様は一昼夜休まねえから、拝む方も、天道様の気になって休まない。それで天道念仏という。これがすむと、農作業が始まる。（大前田）
彼岸の中日にお萩をつくって休むくらい。走り口にお墓まいりする。

（市之関）

ぼた餅　春の彼岸はできるが、秋の彼岸は蚕にかかるのでできない。彼岸のいりくち・ちゅうにち・はしりくちには、ぼた餅を作る。（大前田）

社日　宿は廻り番で、社日様の掛軸を掛け、かてめしや、油揚・人参などの煮付けのお膳を男衆が作って供えた。（大前田）

春秋の社日には、田圃へ行かない。（大前田）

四　月

井戸替　お節供の時に、井戸替を行事のようにした。女衆はすしを作っていて、男衆が井戸替をすると、すしを食べた。自分の家だけでやった。（柏倉）

ひつ石祭り　三日に赤城神社の裏山にあるひつ石を祭る。（三夜沢）

芝居　薬師様のまつりには、大胡人形、あやつり人形を頼んで来て行なった。（苗ケ島）

四月八日　金剛寺のお釈迦祭、お寺で甘茶をくれた。あまりにぎやかではなかった。花見の方がにぎやかだった。（苗ケ島）

四月十五日　春祭り、金剛寺の花見、テント張りの出店が出た。赤飯をふかして食べた、仕事は休みだった。（苗ケ島）

蚕影山まつり　子どもの頃、蚕影山まつりというので金剛寺本堂でゴマをたいてお祭りをした。四月十五日に村の人がやったものである。新しいものでは神社の東に東宮租一郎さんの建てた石宮がある。（苗ケ島）

五　月

八十八夜

分かれ霜　八十八夜にはアンピンモチをこしらえて蚕神様にしんぜた。

九十九夜のことは特にいわなかった。（三夜沢）

シモップタモチ　八十八夜にはシモップタモチをついた。アンピンモチだった。

九十九夜を別れ霜という。（馬場）

苗代　籾をふるとき正月十五日にマユダマをさして小豆粥を掻き廻したニワトコで作ったケーカキ棒に、紙を巻いてオカマ様においておいたのをとり出し、水口にさす。従ってケーカキ棒は苗間の数だけ作っておくものである。（大前田）

五月の節供（五日）

節供　鯉のぼりを立て強飯をふかし、屋根にショウブ、モチグサをさす。蛇や魔物を除くためである。またショウブを徳利にさし（ショウブ酒）膳にのせてこれを飲む。（大前田）

五月の節供には、竹筒の徳利にショウブを一本さしたもので酒をのむ。（柏倉）

節供には、男の子に定紋つきののぼりを里親がくれた。里親の紋が下、親の紋が上、のぼりの絵には、ショウキ、源平合戦、加藤清正の絵などがあり、一反のたんものを使った。

五日には、ショウブ、モチグサを屋根に差し、ショウブ酒を作り、ヒナ様にあげてから飲んだ。これはヘビ除けになるといったが、少し臭かった。また、ショウブを束にして湯に入れショウブ湯にした。ク

スリ湯と考えた。ヨモギを軒下に差すのは、煎じればハラの薬になるので、とっておく知恵でもあったろう。キュウのモグサをヨモギで作ることもあった。（苗ケ島）

ショウブ　宵にショウブとヨモギを神棚に供え、屋根にもさす。魔除けになるという。またショウブを刻んで酒に入れて飲む。ショウブ湯に入る。（市之関）

酒を入れた徳利にショウブをさして、酒を飲むと、蛇にかじられないという。（柏倉）

ショウブ酒は五月五日の朝作る。ショウブの葉を、酒にちょっと入れて、匂いがうつるのですぐ出す。蛇にみこまれない魔よけになる。（大前田）

五月五日にはクズ屋根の軒にショウブとヨモギをさした。蛇を除けるためという。（柏倉）

四日に軒下にヨモギとショウブをさして魔除けにするが、今はトボグチの上にさす。（柏倉）

初節供　コイノボリや五月人形を親戚から贈られる。コイノボリを立てる竿はヒノキやスギなどの丸木を使うが、先の枝を残して置く方がいい。矢車は使わないで、わざわざ青い枝を残して置く。（柏倉）

ショウブの由来　じいさんに聞いた話だが、おおく慾が深いから嫁ゴの来てがいない人の所へ、食い物を食わないで働く嫁ゴが来たが、米が減るから変だと思ったら、頭の上にでっかい口があって、そこからみんな食っちゃったんで、こりゃ大変だ、逃げべえと思ったら、「この野郎逃げるな」といって、鬼になって追いかけて来た。そこでショウブとヨモギを投げて、家に入れないようにした。そこで、ショウブとヨモギをのき先にさして魔除けにするという。（柏倉）

田の神　五日の朝飯前に、田の神のお仮屋を作って、おこわ飯やオミキスズに酒を入れて供え、田の神祭りをする。田に入る時、けがのないように拝む。石宮もあるが、以前はみんな田の神を祭っていた。最近は少ない。（柏倉）

五日の朝、田のあぜに田の神のわら宮を作る。田植えのオサナブリに作るわけだが、その時期は忙しいので、ハッサク（八月一日）に作る家もある。宮城村では田の神祭りはザラ（普通）にやっていた。（柏倉）

田の神は田植え前の五月五日と、冬の屋敷祭りをする十二月十五日と、二回祭る。屋敷がつぶれたので、屋敷稲荷を田の神として、お仮り屋を作って祭る。（柏倉）

八日節供（八日）　五月節供の幟を下げる。（市之関）

赤城の山開き（八日）

赤城大洞　山開きは五月八日、近郷近在から登った。その次ぐ日は洗い流すので、必ず雨が降るといった。（柏倉）

親が死んだ人は、赤城山に登って地獄めぐりをすると、どこかで行き合うという。

十六歳の娘は赤城山に登ってはいけない。（柏倉）

五月八日には、赤城の大洞へ行った。この日が赤城の山開きで、大洞は人でいっぱいになった。（鼻毛石）

赤城の山開きは五月八日。若いころは必ず登った。近所のワカイシがつれだっていった。山上には三等ブチが出て、飴、干し柿・効きもしないような膏薬などを売っていてにぎやかだった。（市之関）

赤城の山開きは五月八日、大洞の赤城様にお参りする。戦争前までは、十六の娘は、蛇になるといって登らなかった。（大前田）

ひつ石　赤城山の中腹にある櫃（ひつ）石へ、肩がきのあるような人が登って祭りをした。特定の人以外は行かない。（柏倉）

花祭り（八日）

誕生仏　お釈迦様の花祭りで、寺で甘茶をくれた。小さい堂の屋根

にツツジの花を飾り、誕生仏を置いて、甘茶を汲んで頭からかけた。

最近は不動様を祭るように変わった。（柏倉）

藤の花　旧四月八日には藤の花を取って、家のトボグチに下げた。仏壇には下げない。（柏倉）

六　月

田植え

辰の日　辰の日に田植えはしない。辰の日に植えた稲の米は、「死に米になる」「タツ頭ののりになる」などと忌まれる。

そこで、坊さんが人を集めて、寺へ来て田植えをする。（柏倉）

田の神様のオカリヤ（柏倉）
（関口正巳撮影）

半夏　田植えのほんしんは、半夏のあとさきだが、半夏には、ハンゲサンが半分田に足を入れ、半分畑に入れて立往生したので、田植えをしない。（大前田）

半夏の日は忙しい日であるという。

半夏さまは、手鍬をもってつったったままで立往生したといわれている。

半夏の日には田植をするなといった。しかし、半夏の日に田植をした場合には、三年続けてしろといった。（鼻毛石）

オサナブリ　田植えが終った時、一の田の水口に植えた苗を十五本抜いて来て、その家の旦那が田植えの支度を取らないで、箕の中に七・五・三本に植えて、台所のオカマ様に供える。箕は口をオカマ様の方へ向けて置く。（柏倉）

田植えのおしまいの時、苗を束ごと洗って家へ持ってきて、家の中で祭って祝う。

オサナブリのお強飯は、必ず馬にもくれた。（柏倉）

田植えが終ると田の水口から苗を七株とってきて水できれいに洗う。これは女衆がとってきてとったあとには植えなおしをしておいた。

七株の苗は箕にのせてダイドコロのオカマサマの近くに飾った。アンコロモチをついて一緒に進ぜた。マンガアライといってマンガを洗って餅をついて嫁は実家に持っていった。オサナブリの苗は捨ててしまう。（馬場）

諏訪神社の中祓　六月三十日（柏倉）

七　月

八丁じめ　昔は区の仕事として、疫病よけに、村境に立てた。（大前田）

仕事休みの日　正月三ガ日、七日、正月十五日、十六日、三月節供、初午半日、五月五日、五月八日、この日は赤城山の大洞の山開きの日。

七月農休みの三日間、区長が決めるが夏なので半日ずつ、半日は草刈をする。この日はユデマンジュウを作る。（苗ヶ島）

農休み　七月二十二、三日ころ、三日間。仕事は半日だけする。ユデマンジュウとか、フカシマンジュウをつくり、オメン（うどん）もつくる。フカシマウジュウはタンサンを入れてつくるが、なかったころはユデマンジュウをつくった。塩あんのときもあった。（苗ヶ島）

天王様　もとは七月二十日だったが、今は八月一日に祭る。農休み

天王様（柏倉）
（関口正巳撮影）

が七月二十日～二十三日ごろなので、一緒に天王祭りをした。八坂神社の祭りで、昭和十年ごろまで、神輿を村中一五〇軒も担ぎ回ったが、若い婿が担がされた。灯籠がずっとついてきれいだった。大世話人が紋付、袴で付いて回り、一軒一軒回ると、寄付があった。太鼓をたたいて先触れが行った。暴れ神輿だった。今は八坂神社を諏訪神社に合併して祀り込んで、八月一日に祭る。大正時代には山車も出たことがある。保存するために、くさらないように池の中へぶっ込んである。松の輪ッカの車である。祇園ともいう。（柏倉）

八月（盆月）

八朔　八月一日に新婚の嫁が節供に行く。スグリゴボウといって大きくなっているごぼうを探して掘ったのを四・五本持って実家へお客に行く。またショウガ（ここではハジカミともいう）と、赤飯ひと重箱も持って行く家もある。季節もんだからこれだけのものができましたと持って行く。（苗ケ島）

釜の口あけ　ブツ（仏葬）のところはするが、ここでは神葬祭だから何もしない。（市之関）

オカマノクチアケで、この日、地蔵（赤城山）のてっぺんにオカマがあって、クチ（ふた）をしてあったのをふたをあけるのがオカマノクチアケといった。（苗ケ島）

八月一日に地獄の釜の口が開く。この日から十三日までに、一日十里づめぐらい、足の強い人も弱い人も一緒に出て来る。この間に死んだ人は、これから出かけるのに来たといって頭を叩かれるので、棺桶に入れる時に、頭にシラジ（擂り鉢）をかぶせる。（大前田）

カマビラキ　盆月の一日をカマビラキという。名称のみで特に何もしない。（三夜沢）

七　夕

七夕様　昔は七夕は九月七日であった。盆は九月盆でやっていた。蚕の関係で。現在は七月十七日。その年の真竹を切ってきて縁側の柱に結わいつける。芋の葉にたまった水で墨をすって短冊に「天の川」や願いごとなどを書いた。字が上手になるといった。この日はボタモチ、ナス、キュウリを七夕様にあげた。七夕には墓掃除をしろという。七夕様の色紙をとっておいて髪を洗うときにとかして使うと髪の毛がきれいになるといった。（三夜沢）

七夕は七月十七日、盆の一週間前に七夕をするので、盆の日取りが晩秋蚕の関係で九月一日～三日になったり、九月十三日～十五日になったりすると、七夕も遅くなる。七夕には墓掃除をする。（柏倉）

七夕には赤飯やふかしまんじゅうを作る。ナス・キュウリなどの野菜とまんじゅうなどを縁側の机の上に供えた。サマの格子窓の内側に、障子を開けて、供え物をした。（柏倉）

七夕飾り　竹飾りは前日の夕方、色紙を切ってイモの葉の水で墨をすって願いごとを書いて、太い所に飾り付けた。二階まで届く所で、先には網を吊るすことになっている。玄関の脇、トボグチの向かって左がわに立てる。（柏倉）

七夕飾りは里芋の葉の露で墨をすって、色紙に字を書いて笹竹に吊

るした。願いごとを書いて下げて置く。ナリンボウ（乞食）が来た時に、その家の願いごとを果たせるようにしてくれたという話がある。

子供は勉強道具を供える。筆・帳面など供え、字が上手になるように願う。

夕方は川へ納めろといって、川へ持って行って流す。（柏倉）

七夕には芋っ葉のつゆで、七夕を書く。ふかし饅頭を作る。この日汗もよけに、桃っ葉を入れた風呂に入る。竹は田圃のふちに立てたり、川へ流す。（大前田）

水浴び　「七夕には七回水を浴びろ」といった。川に麦わらで堰を作って、水をためて浴びたが、冷たかった。（柏倉）

墓掃除　七夕には盆の墓掃除をする。草を刈り、掃いて墓をきれいにする。墓が立つ前に墓穴を埋めて、盛り土をした土山の名称は別にない。（柏倉）

七夕は盆月の十七日である。十六日の早朝畑のサトイモの葉にたまった水をすくってきて、墨をする。願いごとを記した短冊や折り鶴、あみなどをこしらえて切ったばかりの青竹に飾り付ける。十七日の夕方、近くの川に流す。畑にさすのはない。

今年はムラうちでほんの数軒みかけただけだった。川に流さず川端におったててあるものをみたが、現在は水量も少なくとても竹は流れぬ。

また、この日、墓地の草刈りなどをして、盆迎えの準備をする。（市之関）

七夕の日の、七月十七日には、むかしからかならず墓掃除をやっている。朝、個人、個人でめいめいの墓の掃除をする。（鼻毛石）

二十日土用　土用をいれて二十日間のこと、二十日であける。土用中は土をいじるな、ネギをいじると枯れるという。寒は十日間ある。イロリは寒十日いじるなという。

また春はカマド、夏は井戸、秋は庭、冬は門をいじるなという。（大前田）

盆（二十三日～二十六日）

盆の日取り　盆は八月十五日や九月十五日のこともあったが、養蚕の関係で、現在は七月二十五日を中心にしている。したがって、七月二十三日盆迎え、七月二十六日盆送りとなる。七夕も十七日にして、墓掃除をする。（柏倉）

盆棚　七月二十三日の午前中に盆棚をこしらえる。床の間が清浄なところだというので床の間につくった。真竹を二本立てて注連をはる。シメ竹のうらは切らない。チガヤでコモをあんでその上におまつりした。神前に供えるものと同様にした。

盆棚につかった青竹は墓場に持っていって入り口にさしてくる。（三夜沢）

盆棚は組立式の棚を毎年使ってつくる。棚には新しい盆ござを買って敷く。荒物屋から色紙・造花・提灯などを買って、盆棚を飾る。

盆棚の四隅に新竹を四本立てて、チガヤの縄をなって張り回し、色紙を切って下げる。竹の枝は三蓋にする。（柏倉）

盆棚は三尺四方、新しい盆棚は新盆の時に作る。盆ゴザは毎年新しくする。（苗ケ島）

新竹を伐って盆棚の柱にする。「竹の柱に笹の屋根」という。盆花として、山からキキョウ・オミナエシなどを取って来て飾る。

盆花　山でとれるキキョウやオミナエシ、それに庭先で咲いている百日草、千日紅などを盆棚に飾る。根のあるもの（鉢植）やとげのあるもの（バラ）などはふつう避ける。また、盆花と称する造花は飾らない。近ごろは生花も町で買って来る家が多い。（市之関）

盆花はキキョウ・オミナエシ・カルカヤ・ユリ・ワレモコウなどを、山へ採りに行ったが、今は少なくなったので、夏菊などを買って供える家もある。ミソハギは知らない。（柏倉）

盆棚には位牌・香立て、十三仏の掛軸・お水・果物・盆提灯（岐阜提灯）などを置く。盆提灯は座敷に下げる。

盆棚に位牌を出す時、箕を使って運ぶ。（柏倉）

盆棚は七月二十三日に表座敷に作る。組立式の棚や、高机（テーブル）、八足（はっそく）という板に四本ずつ脚がついた台などを使い、上に畳表のござを敷く。前に青竹二本立てて、わらのシメ縄を張り、紙の垂れを下げる。盆棚には位牌を出して並べる。ナス・キュウリを紙の上に供え、ぼた餅・うどん・ご飯などを盛って供える。（以前は供え餅も供えた。）頭付きの魚を供えるが、サンマの開きや、魚のかん詰（づめ）で間に合わせる。水・塩・洗米などあげる。朝晩、お明かりを上げる。明かりは仰願寺ろうそくやランプを使う。（柏倉）

盆ござは荒物屋から買って来る。毎年新しいござを使う。（大前田）

無縁仏　盆棚の下に杉ッ葉を置くと、イッチョウマエの人になれない子どもの仏が入っているという。新盆の時、座敷に載せると、下の杉ッ葉の中で子どものしゃべる声が聞えるという。（柏倉）

無縁仏とは、当家の縁づかずに没したホトケのことをいう。盆中に特別なまつり方をする例は少ない。（市之関）

子供の位牌と無縁仏は盆棚の下に杉の葉をおいて、そこにおく。（苗ケ島）

盆迎え　盆様は二十三日に風呂をわかして、身体を清めてから夕方、夕飯前に提燈を持って墓地まで迎えに行った。墓地にある常夜燈に明りをつけて拝礼してくる。提燈をつけて迎えてくると正式な客うけ用の入り口から入って盆棚にお燈明をあげて、お茶を進ぜる。（三夜沢）

お盆迎えは現在、八月二十三日である。夕方、てのあいているものがお墓まで迎えに行き、その帰るのをみはからってカドで麦わらを燃して迎える。母屋へはトボグチから入る。

盆中は線香は用いず、コーガンジだけ用いる。（市之関）

盆迎えは寺へ行く、寺から線香と茶をもらって来る。家に入る時は縁側から入る。お寺からもらって来た茶を水にはなし、お茶を入れ、もらって来た線香は一番はじめに使う。（苗ケ島）

盆迎えはカドでたき火をして、先祖がわが家に着いたとして、カド火から線香に火を付けてきて、盆棚に上げる。

子どものころは、カドで迎え火を燃したが、今ではしない。七日火やカマノクチアケもしない。（柏倉）

二十三日に寺へ盆迎えに行く。（神葬祭の家は墓場へ盆迎えに行く）寺では役員が盆棚を作って置いて、盆迎えに来た人が棚の明かりの火を移して提灯の火をつけて来る。

盆迎えに行くことを、盆ブチに行くという。寺ではヒキ茶をくれるので、その茶をたてて盆棚に供える。（柏倉）

神葬祭の家では、大先祖の墓の前に笹竹二本立て、石塔の前に幣束を一本ずつ立ててくる。（柏倉）

新盆棚　盆棚と同じ形に作り、今年出た新竹を二本前に立てる。新しい盆様の位牌だけ出して飾る。

新盆棚は盆棚より一段下げた所に作り、新盆を祭る。まだ人並みに上に上がれないので。新盆棚を別の所に作る家もある。

新盆見舞に親戚や近所の者が来る。（柏倉）

新盆見舞　新盆の家にはウドン粉や干しウドンなどをもって「新盆様でおさみしゅうございます」とアイサツをする。現在は現金を包んでいくのがほとんど。新盆でも盆棚はひとつで位牌をいちばん前に出すだけ。（三夜沢）

新盆見舞として小麦粉を重箱に入れ、線香二本ぐらい持って行った。座敷で少しは酒も出たが、今のようにはでではない。（柏倉）

新盆はふだんの盆よりはていねいに祀る。最近は電気で動く燈籠などを飾る家も多い。新盆見舞いには親戚や近所のひとが、「ここの家は新盆でおさみしゅうございます」といって、粉か干しうどん三把くらい包んでおとずれる。近ごろは金を包むのがふつうになっている。当

家では、ご馳走して引物も用意する。（市之関）

親戚や近所の者が何か持って新盆見舞に行く。近親者は白米を重箱に入れて行った。うどん粉を重箱に一杯入れて、ろうそく代を載せて行くくらいで、清メのご馳走として、乾めんをゆでたものが出た。最近ははでになって、主としてお金を持って行くようになった。

神葬祭の家ではだんごは供えない。（柏倉）

新盆見舞にもとは粉を重箱に入れて持って行った。また線香代として三十銭ぐらい包んだ。今は粉でなく千円ぐらい包んで持って行く。このときの挨拶は「新盆でおさびしゅうございます」。（鼻毛石）

新盆の見舞いは、重箱に粉（小麦粉）を一つ入れて持ってゆくか、線香を二把ものせて行った。お返しはなしということだった。（苗ケ島）

盆のあいさつ　新盆の時は、「アラボンでおさびしゅうございましょう」ふだんの年は「結構なお盆でございます」

昔は、新盆見舞には、ひいた粉を重箱に入れ、上に線香をのせて持って行った。（大前田）

寺参り　新盆の家では、供え物を持って寺へ納めに行く。供え物は、ぞうりと米一升で、ぞうりはわらぞうり。竹の皮ぞうりで、先祖様がぞうりをはいて家までお客に来るように供える。今ではスリッパを供えると、あとで寺の住職などが使う。お返しはしない。

葬式の時のさらしの布で、三角袋を作って、その中に米を一升入れて寺へ供える。（柏倉）

盆中の不幸　先祖が帰ってくる盆中に死人がでると、入棺のときシラジをかぶせる。お客に来るものがあるに行くものがあるかと頭をたたかれるのを防ぐ意である。（市之関）

生き盆　親が生存している家では、盆の時に生き盆といって、子が親の所へ行く。（柏倉）

両親が生きている間やることで、盆前、たいがい農休みにやる。嫁に新粉をひと重箱もたせてやるもので、夫婦でゆくのは少なかった。実家の両親が生きているから盆前に行くので、両親がなくなれば生き盆でなく本当の盆のときに行くことになる。（苗ケ島）

生き盆はナベカリともいい、嫁が盆前の適当な日に実家に行く。干しうどん、コ（具）にする茄子など食物はみな用意していって、実家の用具をかりて近所の人にご馳走する。（市之関）

盆の食事　「盆にゃボタモチ、昼間はウドン、夜はゴハン」と決まっていた。二十四日の晩には餅を搗いてお供えにして主人が盆棚に進ぜた。その餅の名称は特にない。

毎日あげるお茶はニワにすててはいけない。神様にあげたものはニワにすてたりするとおこられた。オカッテにすてた。

ナスやキュウリの馬はこしらえない。（三夜沢）

迎え盆の食事は米の飯で魚っ気はない。盆は米の飯トウナス汁よ、というが汁でなく煮つけて食べる。昔の盆は九月だったから南瓜もできた。（苗ケ島）

盆の食事はぼた餅・うどん・御飯などを作って供えたり、食べたりする。供え物を下げると、水を上げて置く。盆魚は上げないが、トマト・果物など、できた物を上げる。八十年も昔は甘酒をかいて供えたこともある。

神葬祭では塩・水・お散米・コンブなどを供える。（柏倉）

盆の十四日、十五日は朝はボタモチ、昼はうどん、夜は御飯。（苗ケ島）

盆の食事　十三日夜　米飯、かぼちゃの煮つけ

十四日朝　おぼた

昼　うどん（ヒルバテエ）

夜　米飯

十五日朝　おぼた

昼　うどん（盆だなにニナワとしてかける）

夜　おぼた

十六日朝　おぼた（苗ケ島）

盆中の殺生　盆中には生きものを大切にしろといった。観念的にいわれているくらいであった。（三夜沢）

シラジ　盆月に死ぬと、先祖の一行に途中で行き会った時、「ひとはお盆に行くのに、お前は来たか」といって頭をたたかれるので、たたかれても痛くないように、頭にシラジ（すり鉢）をかぶせて埋めてやる。（柏倉）

先祖サマ　三夜沢は赤城様の氏子で昔からの神葬祭地帯なので盆中に仏様という言葉は使わない。先祖サマという。盆棚をおがむ時も線香など一切つかわず、玉串をあげて柏手をうつ程度であった。（三夜沢）

盆送り　二十六日には盆送りをした。「先祖様がお帰りになるのだから昼バテエをぶって送る」とてウドンをぶった。送る時はいままであげてあったものを全部下げて、オサゴ、水、あげてあったものを持って墓地で半紙の上にのせておくった。石塔ひとつひとつに玉串とヘイソクをあげた。譜代墓場にも玉串とオサゴをあげる。（三夜沢）

送り盆には、夕方盆送りをする前に、盆棚の位牌をミタマ様へ移す。盆棚に用いた四本の竹などは墓地にもって行く。（市之関）

盆送りは七月二十六日に盆棚に何か供えてから、墓まで送りに行く。墓は土葬が多いので、新仏（あらぼとけ）を埋めた土山（つかやま）の上に、ナスの馬を置いて、花・線香・水などを供えて、盆送りをする。（柏倉）

盆送りにはナスの馬をつくり、トウモロコシの毛を尻っぽに付ける。うどんを荷縄のかわりに背に付ける。ナスをこまかに切って、紙に包んで弁当だとして、キュウリなども付けて、三本辻または墓場に送り出す。

「イボキュウリ仏に好かれて馬となる」などと紙に書いて貼ってやる。

送り火をカドや三本辻で燃す。青竹なども送り出して、麦わらと一緒に燃やすと、その煙に乗って仏様が帰るという。（柏倉）

盆　送　り　家族が墓参りをして、花・水・線香などを供えて送り出す（鼻毛石）

盆送り一埋めた土山の上にナスの馬や盆花を供える　（鼻毛石）　（関　正巳撮影）

送り盆には三本辻で麦わらを燃す。煙に乗ってナスん馬で帰る。盆中は生きものを殺すな。盆中は豚が安くなるぞという。（大前田）

送り盆　里いもの葉の上にナスの馬をのせ、ケエバとして麦を馬の道中の糧として入れてやる。盆さまに供えたものをのせて門先におく。小麦わらを燃して送り火をたいて送る。（苗ケ島）

盆の十六日　盆の十六日には草を刈るな、仏様の足を切るからという。送り盆の時だけいい、迎え盆の時にはいわない。（柏倉）

盆の十六日は草刈りをしては悪い。仏様の足（または首）を切るからという。十四日と十五日は草刈りしてもよい。（市之関）

盆の十六日には、草刈りをしてはいけないといわれた。帰って行く盆さまの足を切るからだという。そのかわりこの日には、馬小屋のコエ出しをした。（鼻毛石）

十六日は、仏様の足を刈らないようにというので、草刈りするなという。その代り十五日にフタセエ（二籠）刈る。（大前田）

うまやこえだし　盆の十六日にはうまやこえだしといって、うまやの掃除を特別きれいにする。その際、汚物を全部出さないで、すみにわずか残すことをした。また、この日はウマの脚がくさるからと草刈りをしない。

正月の十六日も同様である。（市之関）

盆の十六日と正月の十六日は、馬屋の肥出しの日と決っていた。この日には人間と同じ食物を与えることになっていた。

又、オサナブリにも同じ食物を与えた。（苗ケ島）

ウマゲエダシは十六日、馬小屋から、馬の堆肥を出す。（大前田）

盆中の禁忌　盆中には生きものは捕らぬものだからと、子供がトンボや魚とりをするのをいましめた。また、十六日には草を刈ってはならなかった。（市之関）

盆ガラ　七月二十七日（盆の十七日）はボンガラで、盆様が無事にすんだというので一杯やるべえという日であった。一日農休みで、雇い人も休ませた。（三夜沢）

ボタ餅観音と呼ばれる上の馬頭観音を、盆送りの時に祭る。（柏倉）

盆踊り　大正時代から八千代組（滝窪）や弥生組、美好組などがあって、伝統的に八木節踊りなどをしている。明治神宮にも出演したことがある。

今は青年会が中心になって、男は傘を持つ笠踊り、女子は花を持って踊る。八月二、三日が村の納涼祭で、宮城小学校の庭に集まって踊る。出し物は「国定忠治」や「継子三次」などで、今でも歌える。（柏倉）

首なし地蔵　八月二十二日、二十三日。西房（二区）にある子供の神様で、首がなかった。（今はセメントで首を作ってある。）参道に灯籠を並べる。子供が回ってきて寄付金を集め、紙・ろうそくを貸して毎戸一個の燈籠を作らせた。（柏倉）

天神様　八月二十四、二十五日は天神様の祭りで、燈籠に筆で「御神燈」と書いて飾る。

夏休みに子どもが宿に集まって天神様を祭る。北爪本家の屋敷にお宮があり、戦前は参道に燈籠を二〇ぐらいあげた。（柏倉）

九　月

八朔の節供（旧八月一日）

新しい嫁は、こわ飯を重箱に入れて、上に葉ショウガを載せて、実家へお客に行く。お返しにはメカイをもらう。「目を確かめてくれ」という意味だという。今は大きなザマ籠などをくれる。子どもができるようになると行わない。ふつう四、五年は続ける。

メカイを返すが、箕を返す家もある。すくい込むという意味だとか、目をよく開いて、見てもらいたいとかいう。その後、ザルになった。嫁に行って、十年くらいは来た。（柏倉）

ハッサクは九月一日。赤飯をして、嫁の家にショウガ二本をそえてもたせてやる。このおかえしはメカイである。大目にみてもらいたいという意味だとも、たくさんの目でよく見てくれという意味だともいう。（市之関）

ゴボウの節供　旧八月一日の八朔の節供のことをゴボウの節供といった。嫁の実家にゴボウを持って行った。婿が、このような立派なゴボウが作れる腕を見せるためだという。普通三月に蒔くか二年ゴボウでないとよいものが出来ない。

お返しにメカイを呉れた。秋蚕の葉つみ用にした。（苗ヶ島）

八朔には夫婦で、さとへゴボウを持って行く。帰りには、ざる・めけえ・箕など見てもらいたいので、目のあるものをくれる。（大前田）

ぼたもち観音（九月九日）　六本木にあり、ぼたもちを重箱に一つ入れてお参りに行く。青年たちが、やぐらを組んで、盆踊りをしたこともある。（柏倉）

金毘羅様（九月九日～十日）　六本木の本家で持っていたいい石宮。赤城県道の川原（地名）にあったものを、今は個人の屋敷に移してある。木の枠の中にろうそくを立て、参道の西側に竹を立てて明かりを吊した。昭和十二年ごろまで盛んに祭り、一戸一つずつ明かりを吊した。

子供相撲や八木節踊りをしたこともある。（柏倉）

やきもち観音（九月十七日）　諏訪山東昌寺にジリヤキを供えて、食べに集まってお参りした。境内で盆踊りをした。（柏倉）

十五夜と十三夜　十五夜のときにはススキを十五本、十三夜には十三本あげる。長瓶にさして、縁側のお月様の見えるところに飾った。もちとか果物、野菜などもあげた。

このときは、お月様に供えたものを子供たちがぬすみあるいた。これは、ぬすまれたほうが縁起がいいといった。

十五夜のとき、かいこのあたる家の大根をとってくるとかいこがあたるといい、財産のあるうちのカブをとってくると財産がよくなるといった。（鼻毛石）

秋には十五夜・十三夜・十日夜と、三回の月見がある。（柏倉）

十三夜　すすき十三本、もちは十五夜のように大きくつくって供える。あとも十五夜と同じである。（苗ヶ島）

十五夜（旧八月十五日）　餅をついて、重ねないで一個だけオシラキ（木皿）に載せて縁側に供える。ススキ十五本を立て、スグリ大根や菜も一緒に供える。

十五夜には台をサマなどに出して、ススキを飾り、ふかしまんじゅう（もとは餅をついて丸めた）十五個供えた。

子どもが回ってきて、供え物を突かれるといいという。十五夜・十三夜・十日夜でも、子どもが下げ回った。（柏倉）

十五夜には縁側に台を出してもち十五個上げる。子どもにつかれた方がいいといって子どもがもちさげに歩いた。（柏倉）

十五夜にはこの村では餅をつく。

十五夜には餅をつく。お供えに一重ね大きいのをつくり供える。ススキ十五本とっていっしょに供える。団子はつくらない。（市之関）

十五夜の餅は、やわらかいもちを大きく満月のようにして一つをお膳の上に入れてお月様に供える。十五本のススキと、葉のついたままの里いも、サツマイモ、大根を供える。（苗ヶ島）

十五夜には曇るが、十三夜には曇りなしという。もし十三夜に曇ると、小麦に渋が出る、天気が乱れるという。（柏倉）

十五夜には蒲の穂を十五本供えた。十五夜は曇るが、十三夜には曇りなしという。この日曇ると天が乱れる。同じ場所で月見をしないのは片月見といい、孕んだ人が片月見をするとメッコ（片目）の子が出来る。（大前田）

十五夜と子ども　十五夜、十三夜には、子どもたちは竹竿の先にカギをつけ、家々をまわって供えてあるものを盗って歩いた。これは公認で、とられた家では「蚕が出る」といってよろこんだ。（苗ヶ島）

薬師さま　もとは九月十二日だったが、近年晩秋蚕がいそがしいので晩秋蚕の後にのばし十月十二日にする。世話人が昼食後集まってもちをつき、薬師さまのおそなえをつく。四升くらいのもので、これを七十軒もの家に供物で切って配り、まつり代を集める。またアンドンを貼り、竹を切って笹のついたものに下げて夕方灯を入れた。（苗ヶ島）

秋の彼岸　墓参はハシリロにする。（市之関）

十月

オクンチ　宮城村では以前のオクンチはハツグンチ（旧九月九日）、ナカグンチ（九月十九日）、シマイグンチ（九月二十九日）のミクンチのどれかにわかれていた。お互いによばれ合っていたが、それではたいへんだからとて村として十月十七日に統一した。市之関ではそのときから九月十九日から十月十七日になった。しかし鼻毛石だけは十月十五日にしてしまった。（市之関）

オクンチはお諏訪様の祭典。今日は十月十七日にやる。獅子舞をやる。（大前田）

モノ日　おまつりの日などを、モノ日といった。この日働くと「ものぐさものの節供ばたらき」といって笑われた。（鼻毛石）

十三夜（旧九月十三日）

十三夜に餅をつくが、重ねないで一個だけ、オシラキ（木皿）に載せて、縁側に供える。ススキ十三本を飾り、大根や菜を供える。（柏倉）

十三夜にはこの村では餅をつく。

餅をついてお供えにして、ススキ十五本とともに供え、またはアンピン十三こをお月様に供える。（市之関）

清水観音　十月九日夜、高崎の清水観音までお参りに行った。（柏倉）

エビス講　新十月二十日はエビス講でザスキ（座敷）にエビス大黒を出して東向きに台の上に飾った。御飯、サンマ、天ぷらをあげた。一升枡に金をたくさんあげた方が良いといった。ケンチョン汁もこしらえた。正月二十日はたいして御馳走をしなかった。（馬場）

諏訪神社　秋祭りは10月17日（柏倉）（関口正巳撮影）

諏訪神社に秋川魚を供えたツトッコ（柏倉）（関口正巳撮影）

十一月

神無月（旧十月）　神無月には出雲大社に神々が行く。旧暦十月一日にお神送りをした。夜、赤城神社に拝みにいった。旧十一月一日はお神迎えでオゴフウをあげる程度。

神無月には留守をする神様がいて、それがオカマサマで「オカマサマの留守行」といった。日は一定していなかったが、ボタモチや焼きマンジュウをこしらえてオカッテにあげた。（三夜沢）

旧十月一日の朝早く提燈つけて、神社へお参りに行った。神社の後の木の祠でお参りして、オサゴ（米）をまいたり、サカキを供えて来た。神様が出雲へ行くので送りに行くのだが、神様が白馬に乗って出るのが見えたなどという。

旧十月一日はお神送りだが、稲荷様は家に残っているという。旧十一月一日はお神迎えになる。（柏倉）

旧暦十月一日から旧暦十一月一日を神無月といい、この間は神々が出雲大社に行って休むという。この辺は旧暦十一月一日に総社神社にオカミ迎えに行った。赤城神社に行く人も居た。何か変わりものをこしらえた。（馬場）

オカマノルスンギョウ　旧十月神無月で神様が出雲に行くので、神送りのあと、ご馳走を作ってオカマ様に供えた。作るものは何でもいい。年一回だが、鼻毛石では三度やるという。今では親父の留守に内緒でご馳走作ったり、つまみぐいなどをすることを「オカマノルスンギョウ」という。（柏倉）

神様たちが出雲大社に行っている間、お勝手の神さまのオカマサマが残っている。それでオカマサマにボタモチをこしらえて供えた。「オカマサマのルスンギョウ」といい、あげる棚があった。（馬場）

九日夜　旧十月九日夜に、鼻毛石や西房では九日夜、餅をついて供える。（柏倉）

十日夜　旧十月十日に白スキ餅をつくる。白の中でついた餅を、とり粉を使わないで、取り上げてすぐオシラキなどに載せて供える。雑煮餅にする時も、白の中からすぐ水に取って煮る。大きさは適当。十日夜の餅は半紙を敷いて載せて供える家もある。

早く縁結びするように二色餅をつく家もある。かす米ともち米の餅をつく。（柏倉）

十日夜にはもちをつき、お重ねでなくオテマルをお膳にとって（オソナエの下玉のようなもの）、清水の観音さまに進ぜた。また小さいのを十個つくってこれもお膳にのせて十日夜さまに供える。（清水の観音さまにはよく行ったものである）。（苗ケ島）

旧の十月九日に十日夜をした。このときもちをついた。もちは縁側に机をだしてあげた。あんぴんをつくった。

わらでトウカンボウをつくった。わらを束ねて、イモガラを入れて、なわでまいたもの。これは大人がつくってくれた。

モグラをふせぐというので、近所の子供たちがそろって、近所をたたいてあるいた。

「十日夜、十日夜、夕飯食べてぶっとばせ」といったり、「十日夜、十日夜、おんまのまら、ぶっとばせ」とくりかえしいいながら十軒でも、二十軒でもついてあるいた。十日夜のときには、わかいものは、高崎の観音様へおまいりに行った。夕飯を食べてから出かけていった。前橋駅まで歩いて行って、前橋から高崎まで汽車にのり、高崎駅から観音様まで歩いて行った。おまいりして、お札をうけてきた。（鼻毛石）

昔十日夜の晩に、せいろをひっくり返して、前の毛を焼いたので、十日夜を、九日にやることにした。唱え言は「トーカンヤ、トーカンヤ、ウマノマラヒッパタケ」という。藁の中に、芋がら・茗荷を入れると、音がいい。叩き終ったあと、藁鉄砲を柿の木に、よく実がなるようにと、かけておく。もぐらがもぐらないように叩く。十日夜が境で、大根が太くなる。（大前田）

麦まきが終ると、旧十月十日に餅をついて、高崎の清水寺へお参りに行った。この夜は番頭も遊ばせた。

十日夜は大根やシトギを供えない。山へも行く行事はない。

十日夜のワラデッポウを柿の木に下げた。（柏倉）

十日夜は旧十月十日。アンピン十こをススキ十本とともに、さつまいも・栗・柿などとともに供えた。十日夜は月見である。といいながら、麦播きが終って、畑にモグラがもぐらないようにわらでっぽうで地面をたたきながら

十日夜　十日夜　夕飯くっちゃあ腹でいこ

と唱えた。そのわらでっぽうを成り物の木につるしておくと成りものがよく成るといって柿の木などにつるしておいた。稲荷様を強く信仰しているところでは（柏倉の諏訪神社の近くのムラ）「オトウカヲック」といって十日の夜をいやがり、九日の夜に餅をついて祝った。また十日夜の餅は、子供たちが竹や篠の先に釘などをしばりつけて、それを

さしてまわった。そうしてとられても苦にしなかった。（市之関）

十日夜にわらでっぽうをたたくときの唄。

「十日夜、十日夜、馬のマラぶったたけ、夕飯くっちゃぶったたけ」。（鼻毛石）

イノコロ餅　旧十月初亥の日に大沢の松村イッケや北爪イッケは、イノコロ餅をついて供え、十日夜はしなかった。途中から十日夜に変えた。（柏倉）

十日夜でなくイノコモチをする家もあるが十日夜の方が多い。（苗ヶ島）

お神迎え　旧十一月一日の朝早く、神社へオサゴ（米）を持って、三々五々、お参りに行った。若い衆は仕事を休みにして、総社の明神様までお神迎えに行った。遊び半分で行く。

お神迎えの方が、お神送りより盛大である。帰って来る時は、来年いいことがあるように、威勢よく拝んだ。いい人がないと、「帳面落ちだ、落とされた」などという。（柏倉）

むかし前橋の総社の明神様へ神迎えに行った。めいめいお札を受けてきて、自分の家の神棚にあげた。当時、

「さそわれて、ホンニソージャと利根の橋

それもソージャの明神様だ」

などとみんながいっていた。こちらから明神様へ行くには、県庁のそばの橋を渡って行った。（鼻毛石）

ツジュウダンゴ（二十三日）　秋の稲刈りが終って、こなしが終ると土とまじった粟をよなげて（水の中に入れて）団子にして食べた。三本指でつぶした団子と丸団子をこしらえて、鬼が来ないようにヒイラギと一緒にトボグチにさした。十一月二十三日にやった。（三夜沢）

脱穀した時にこぼれた米を集めて、川で洗い出して石を沈め、干して石臼でひいて粉にし、だんごを作った。ネジッコにしたり、だんごにしたりして、二個ずつカヤの串にさして、屋敷稲荷様やカド神様に供えた。翌朝、下げて食べた。ツジュウバタキはしなかった。（柏倉）

秋のとり入れでこなしたあとの足元に出た粟を石臼で粉にひいてつくる。萱の穂の軸に二つさして屋敷中の神に上げる。

カナゴキ（千把こき）でこいたり、はきそうじをしたりしたときまとめてとっておいたもの。（苗ヶ島）

ツジュウモチ　ツジュウダンゴともいいするすひきが終ってから、粟のこぼれたのをひろって集めてヨナゲテ（洗って）乾して粉にして団子にした。（市之関）

モグラップサギ　麦蒔きが終るとすぐに、ぼた餅を作って、神様に上げたり、食べたりした。田んぼには供えなかった。（柏倉）

秋あげ（日不定）　秋のすべての作業を終って、スルス引きも終ると、あん餅を持ったり、ぼた餅を重箱に詰めたりして、嫁が実家へお客に行く。（柏倉）

十二月

川ビタリ　行事は別にない。（柏倉）

カービタリ餅の名を聞いた記憶がある。（市之関）

オコト八日　十二月八日。ことばをきいた程度でどのような行事か知らない。もっとも、魔よけに鎌をたてておくという。小堀一三さん宅では、今でも庭先にそういうことをしておく。（市之関）

屋敷神（十五日）　真隅田家は乾の隅に左から稲荷様、ジジンサマ、渭漢之塔を祀っている。東向きに立っている。渭漢之塔は三隣亡よけという。（三夜沢）

稲荷祭りは十二月十五日、旧十一月十五日が祭り日だったが、新十二月十五日に変えた。鼻毛石では十二月十二日に稲荷祭りをする。（柏倉）

屋敷稲荷はウジ神でもあり、石宮は冷たいというので、木の宮に作り替えた家もある。十二月十五日がお祭りで、以前はわらのお仮り屋

新築した屋敷神（柏倉）
（関口正巳撮影）

渭漢之塔―三隣亡除け（三夜沢）
（関口正巳撮影）

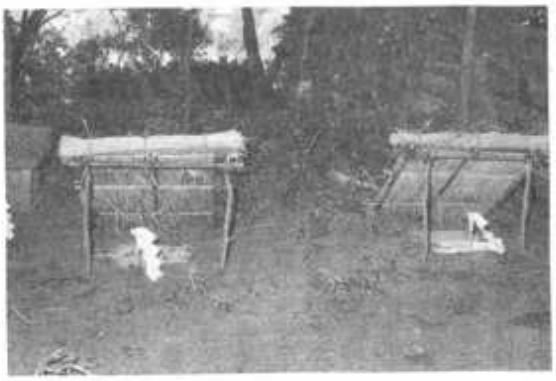
屋敷神は乾の方向にまつる。イナリサマとかウジガミイナリとかい、屋敷まつりはもとはニアガリと一緒の日にした。日をみていい日にする。石宮があってもお仮屋はつくるもので、「もっと大尽になればもっといい家（祠）をつくって上げます」というわけでお仮屋は毎年つくりかえるという。イワシのかしらつきに赤飯で、ケンチン汁をつくる。（苗ヶ島）

屋敷稲荷のおかり屋は前に竹二本立てて、カヤ（またはわら）屋根をふく。地面には二〇㎝角くらいに敷きわらをして、竹を割って押さえる。（柏倉）

屋敷稲荷は稲荷様と呼び、屋敷神とはいわない。屋敷の西北隅に祀るが、一つのおかり屋の中に、幣束を一本立てる家と、二本立てる家とがある。若宮八幡は一緒に祀らない。オシラ神・オシリョウ様という名は聞かない。（柏倉）

稲荷祭りの供え物は、赤飯をツトッコに盛り、イワシ二匹ととうふをツトッコに入れて供える。とうふは四隅を落として、八角形になった中だけ供え、隅は汁の中に入れて食べる。ツトッコはこの時だけ使う。（柏倉）

稲荷様は屋敷神様ともいい、赤飯とイワシ二匹を供える。帰る時に後を振り向くと、神様が食べないという。子どもが後から下げて回っが多かった。最近はほとんど石宮になった（柏倉）。



屋敷稲荷（ウジガミ）のお仮屋（柏倉）
（関口正巳撮影）

屋敷神のお仮屋（柏倉）（関口正巳撮影）

た。ある時は、年寄りがイワシ七尾も供えたら、その年は少しも下げなかったので、「おれが死ぬんかな」といったら、ほんとにそのあとで死んだ。下げられないとよくないことがあるといって嫌がる。（柏倉）

稲荷祭りは十一月十五日、屋敷内の神様がにぎやかに祭ってあり、魚九匹もあげる家がある。家の人が死ぬような時には、犬も猫もその魚を食わなかった。

稲荷様はウジガミ様、屋敷神様、お狐様、オトウカ様などという。わら宮で毎年作りかえる方がよいというが、今は石宮が多い。場所は住む家の床よりも高い方がよいという。（柏倉）

屋敷の稲荷様のまつりを、十二月十二日にしている家と十二月十五日にしている家とあった。昭和四十年代以降は、十五日にする家が多くなった。

カド神一家の入口に幣束を立て12月15日稲荷祭りの時に赤飯を供える。（柏倉）　（関口正巳撮影）

十二日に稲荷祭りをしていた家では、稲荷様は山の神、山犬様は十二様、山犬様も稲荷様もキツネで山の神様だから、十二日にまつっていたと説明している。しかし、よその家で、十五日にまつっているので、最近は十五日にまつるようになったという。（鼻毛石）

稲荷祭りは十二月十五日、稲荷様はウジ神様、屋敷神様といい、テンデンに（めいめいで）祭る。自分の神様だから、気が向いた時に祭ればいいという。そこで、「稲荷祭りは一軒一軒、馬のまらはドッキン　ドッキン」という。年一回だけ祭る。

イッケごとに神様を祭る風習がある。北爪イッケは稲荷様、阿久沢イッケは住吉様、大崎イッケは天神様などで、村社に合社したものもある。（柏倉）

稲荷様に九頭竜権現を祭る家がある。歯が痛い時には、九頭竜権現に「初ナシを上げます」といってお願ショウする。（柏倉）

ニアガリ　秋のほしもん（麻ほし）が終ったときぼたもちをつくった。もとはこの日に稲荷まつりをしたものである。（いまは十二月十五日に稲荷まつりをする）。（苗ケ島）

油餅　十二月二十日ごろ（冬至前）、餅をついて大神宮様（神棚）に上げたり、けんちん汁に入れて食べた。

尻っぱしょりして、お客に呼ばれて行った。

深沢イッケは晩に火事を出したので、油餅がつくれないという。（柏倉）

油の祭りで、冬は油を使うので、無難にすむように祭る。油しめは、昔は玉村や稲荷山へ頼んだ。（柏倉）

十二月に油をしぼってもしぼらなくてもアブラモチといって餅をついた。（苗ケ島）

冬至　冬至餅をつく。幣束をきって屋敷の四隅にたてておく。ゆず湯に入る。こんにゃくを食べる。これはからだの中の砂はらいだという。また「冬至とうなす」といってかぼちゃを食べる。（市之関）

この日は神のさしさわりのない日という。なにをしてもよい。なにを動かしてもいい日だといった。

ユズ湯をたてて入ったり、ユズもちをついて食べたりした。（鼻毛石）

大師がゆ　大師ガユは知らない。（柏倉）

大掃除　スス竹は二本の竹で作る。（スス男とはいわない）スス竹は終ると、せどの竹やぶに持って行く。

す　す　竹
3本作り、大掃除後、庭の陽に立てる（柏倉）
（関口正巳撮影）

大掃除の時は、神棚の神様は一番しまいに出して、終ると一番先に家に入れろという。箕を使って神様を運ぶ。

大掃除が終ると、白飯をつくって神棚に供える。（柏倉）

すす竹は笹っ葉三本で作る家や、四本で作る家もある。青竹の葉をつけた枝に、二本の枝を付けたものもある。柄が一本のものもある。最近は竹ぼうきで間に合わせる家も多い。

すす竹はあとで川に流したり、家の隅に棄てたりする。（柏倉）

煤掃きは、昔は十二月十三日ときまっていた。本家では、今でも十三日ときめている。最近はいろいろになっている。ササ（竹）ボウキは、竹を二～三本寄せてつくる。二階から掃きはじめて下にくる。終った夜は白い御飯などしてススハキイワイという。ササボウキは、お稲荷さんの裏の堀につんでおく。毎年のものがそこにあったがこの時燃してしまった。（市之関・阿久沢倉造家）

松迎え　（十二月三十日）この日取りは地区によって異なる。

一夜飾りをしないといって、二日前までに山から松を取って来て飾る。方角はいわない。赤松の方が形がよいので、三蓋松を取って来る。黒松は「苦労する」ので使わない。黒松を飾るのは、「男を待つ」芸者などだけ。

カドにナラの木の杭を打って、松を飾り付ける。（柏倉）

松飾りは十二月三十日、「一夜飾りをするな」といい、二日前の三十日に飾り、餅もその日についた。

カド松は細い枝松を立てた。まず、ナラの木の杭を立てて、松・葉付きの竹を付けて立て、その間にシメ縄を張って垂れを付けた。

赤松の下をくぐると、年を取ったことになる。黒松は使わない。（柏倉）

正月の松はクズカキの折、帰りがけに赤城山から伐ってくる。十二月十四、五日のころである。三蓋松がよい。家の中におく。またがないように注意する。（市之関）

暮れの二十七日か二十八日に松迎えを行なった。芯松を迎えて来た。自家だけならよいのだが芯松を切る者が増すので廃止になった。（苗ケ島）

松飾りは三蓋松を飾る。枝なら、どこのを切って来てもいい。（大前田）

しめかざり　一夜飾りはしない。餅つきの日にする。飾りつけはたいてい三十日である。（市之関）

〆なわには、そう〆、こじこめ、おそうでんじめ（下大黒の柱にゆわえた）、みつよりなどがあった。（苗ケ島）

一夜餅　一夜餅は搗くものではない。二十九日には餅をつかない。この日に間違って搗くと苦労が絶えないという。（三夜沢）

正月の餅はヒトイロに餅はつくなといい、米の餅に米の粉の餅、アワ餅などをついた。さかんな時には一俵もついたものだった。（苗ケ島）

破魔弓　子どもが生まれると、嫁の実家や仲人から、「破魔弓」といって、掛軸や羽子板飾りなどが、年の暮に贈られる。正月に座敷に掲げて飾って置く。（柏倉）

年取り　年取りの晩に早く寝ると白髪が生える。（柏倉）

大晦日　この晩、としこしそばを食べる。
大晦日には早く寝るものではない。年をとるといった。また、火を絶やすなともいった。（鼻毛石）
あいさつ　冬場のいろいろのできごとのあいさつは、米を重箱に一つ入れて持って行った。（苗ケ島）

口頭伝承

はじめに

豊かな伝承の泉は、今も絶えることなく湧き出ている。「俵藤太と道元の娘」「ムカデ山」「松飾りの話」などに、それを感ずる。

昔話は、数多くの仙太話が採集された。デンボウ話・大力話は、村人に最も好まれる話である。時に、実在の人物として語られ、伝説と昔話とが入りまじっているのが興味がある。

五平どりの話も、その例である。「群馬県史　民俗3」にも、勢多郡黒保根村下田沢（「五兵衛鳥の話」）と、邑楽郡明和村田島（「ごへいの話」）の話が載っている。しかし、大前田の五平は、正しく実在の人で、その印鑑が残っている。この風呂敷大根と、料理の風呂吹大根と、実によく似ている。その先後は知らないが、全く無縁とは思われない。

また番頭の話の中には、艶笑譚も含まれている。

江戸時代の庶民文芸についての知識が全くないが、「てにを」と呼ぶ運座が、大正までも名残りをとどめていたのは、稀な例ではないかと思う。

（上野　勇）

一、伝説

俵藤太と道元の娘　仙太の弟に勢多五郎という人がいた。その人が伊勢参宮へ旅行に行って、近江の付近で旅人同志で出会って、どうもこの話には確かに「瀬田の唐橋」というのは、でかいにはでかいが、おらが方の「勢多の唐橋」からみると、いわくが通んねえ、こういう話を宿屋でしたんだそうだ。そうしたら上州のお客の「勢多の唐橋」はどういうんかい、おらが方の橋はえれえもんだ。第一、こっちのがんな規模はでっかいけんど理屈が伴っていない。それじゃどういうんだい。実はおらが方のは赤城神社もりっぱな赤城神社があって、そこに俵藤太が植えた俵杉も現在あるんで。

その俵藤太が赤城神社へ登山する時に通って来た、今そこん所に矢田つう地名があるんだけど、そこを通るべえと思ったところが、一帯に湖になっている。通れねえんで、北へ南へと通っているうちに、にわかに橋がかかったんで、これはいいやと思って渡って東に行って、まあよかったつんで、あとを向いたら、その橋が自然すぐなくなっちゃった。ああ嫌の所だなあ、「ヤダ」といったのが、実際の矢田という地名であって。

それを渡って、深沢さんが現在持っている、あれがカノエ塚という塚のあった土地なんで、あそこへ行ったら、婦人が子ども連れて、しくしく泣いているんで、なんだといったら、実はこのムカデ山から、夜になるとでっかいムカデが出て来て、女子をみんな刺し殺っちゃうんで、とにかくこの子も一人残ったんだけど殺される。だからまああんたにぜひ呉れたいというんで、それゃおれも旅から旅へする旅人なんだから、欲しかねえけど、そういうんじゃかわいそうだからもらって行くべえつんで、カノエ塚で子を一人もらって、赤城神社に行って、赤城神社に現在も俵杉はでかいんがあらあね、あの俵杉を植えて。

そして、あれを下って、赤堀の道元まで下って、道元で酒屋してる

人で、酒飲みながら、そこに一泊して、やあ旅人でもいい女子を連れているが、わしらがには子がいねえんだが、くれてもらえべえかというんで、やあ、結構な話だ。欲しかねえけど、無理に赤城のふもとでもらって来たんだから、ぜひくれたいというので、そこへくれた。

そして、道元で十六歳までその子をおいたらば、えらい熱が出て病んで、これはどうもどういう手当をしても直らねえんで、その娘の最後にいうことには、小沼の水でもせいせいと飲んだら直るだろうといういうので、組の人をみんな頼んで、そして小沼へ担いで行って、小沼のフチ（縁）へ行って休んでいたら、霧が山から降りて来て、一寸先見えねえような暗闇になったんで、弱っていたら、そのうちに沼の真中に行って梵天姿になってその子が立って、おれはもうこういう姿になったから、皆さんは急いで家に帰ってもらいたい。ただし、わたしを沼まで担いで来てくれたんで、その恩として小沼の水下全部のものに、小沼のシラニ（白土）という水をかければ、稲は水下は肥やしが無くも繁茂して、いい米が食べられるから、それがわたしのすべての恩だといって、湖に沈んだというんだね、その娘が。それでしょうねえ、みんな帰って来て。

現在、わしらが戦前までは、娘十六は赤城へ登るもんではないということを、年よりがみんないって、登るものはなかったんだいね、娘は。

そして最近まで赤堀村からは、白木の箱にこわ飯（赤飯）をつめて、赤城へ村中で納めに来て納めた。

この話を武子先生にしたら、やあ、後ろのおじいさん、そのこと、黒保根のお寺（医光寺）にその娘の着ていたじゅばんと帯があって、学校から旅行に行って、そのお寺で見せてもらって、今でもありますよという。その沼のフチから拾って来て、昔のことで、それが沼に入った娘の主の着たものだといったら、嫌になって寺へ納めたものらしい。

こういうう説明をしたら、関西のお客も実に驚いたそうだ。（柏倉、大崎義一、明治四十年三月生）

赤堀道元の娘　赤堀道元の娘はきりょうのいい娘なんだけど、うまれながら蛇体で、土蔵（くら）ずまいをしていたんだが赤城山へ行ってみてえと、つね日頃いっていた。近所の人と一緒に赤城へ行った。

小沼のところへきたら、娘が、おらあ、あんまりのどがかわいてかなわねえといって、小沼の水を口にしたら、うまくていい気持だ。近所の人にいうことに、おらあ、みんなに世話になったが、こんないいところへきたから、おらあ、みんなとわかれるからといって蛇体になって小沼へ消えたという。

小沼の主は、赤堀道元の娘という。

年が十六歳であったので、十六歳の娘は、赤城へのぼらせるなと、むかしの人はよくいったものだ。（三夜沢）

大尽の娘小沼に入水の話　むかし、あるところに大尽の娘がいて、（十六歳のときか）はじめて赤城山へ登って、男を見染めて、それでつぐ年また赤城へ行きたいといったが、親が許さなかった。それで赤城へ行って、身を投げて沼へ入ってしまったという。

おともの人がさがしたら、小沼の真中に姿をあらわして、こういう姿になったから、さがさないでくれといったという。

そこで、おともの人は、うちへ帰ってそのことを知らせたという。

その家では、命日には、沼へ供えものをしていたという。

それからは、十六歳の娘は赤城へ行くなといっている。（鼻毛石）

ムカデ山　昔、大ムカデが住んでいた山で、俵藤太が矢にツバキをつけて、ムカデを射て退治したという。頂上に石宮が南を向いてあった。（十二様かもしれない。）暮になると、古い幣束を新しいのと取り替えて、まとめて納めたが、最近、山の土を取るために崩したので、石宮を南下の道路ぎわに移した。藤太がムカデの目を射たためか、赤城下には目のショウロクの人（両目がしっかり見える人）はいないという。（柏倉）

俵藤太　柏倉にムカデ山という小山があり、その下に赤城神社へいく幹線道路がある。そこにセタガ橋がかかっていて、俵藤太伝説が伝わる。（柏倉）

勢多の唐橋　大崎仙太郎の弟に勢多五郎がいて、伊勢詣りに行った時、近江国の付近で旅人に行き合い、勢多の唐橋の話を聞かされた。そこで、ここのは規模はでっかいが、理屈が何もない。おらが方の勢多の唐橋はえらいもんだ。そばに赤城神社があるし、俵杉もある。矢田の一帯は湖で通れない。にわかにベータの橋が失くなったので、「ヤダナア」といった。そこを矢田という。（柏倉）

勢多が橋　セタガ橋というのが柏倉にあってこの橋のところで俵藤太秀郷が大きなムカデをしとめたという。このムカデは悪いことをしていたといわれている。（三夜沢）

セタ橋（左手前）とムカデ山（右奥）俵藤太のムカデ退治の伝説がある。（宮城村柏倉）
（関口正巳撮影）

田原杉　三夜沢の赤城神社の本殿は拝殿のあいだに杉の大木が三本ある。これを田原杉という。

この杉は、秀郷が七本植えたものという。（三夜沢）

地名伝説　宮城村の大字の地名はすべて赤城神社にちなんだ名であるといわれている。田の水を使うので市之関があり、苗をつくるので苗ケ島、その苗を植えたところが大前田である。馬場は神事に馬かけをしたところ。鼻毛石は八幡様のところに鼻の穴のような大きな石があって、春先になると草がはえて鼻毛のようになるのでついた。三夜沢はトヨキイリヒコノミコトのひ孫が群馬郡に住まっていて、大渡をとおっておまいりにやって来た。そして三日三晩泊まったので三夜沢といわれている。（三夜沢）

兜石　河原浜と鼻毛石の境あたりに兜石がある（鼻毛石の小字名になっている。）この石については、次のような伝説がある。

むかし、日光街道を往来する人が、ここで休んだ。あるとき、武士がここで休んで、かぶとをかけておいた。そのために、この石のことを兜石とよぶようになったという。（鼻毛石）

鼻石　八幡様の敷地内になっているが、八幡様の南方、鼻毛石の集会所の西方の道路端にある石、この石に鼻の形に小さな穴があいている。この石のことを鼻石といい、これがこのムラの地名のもとになったという。

八幡様の祭典のとき（四月十五日、十月十五日）にしめをはる。

この石の上へあがってはいけないという。（鼻毛石）

硯石　八幡様の境内にある岩（石）。

むかし、東北の方へえらい方が悪者を征伐に行くときにここを通った。そのころ、ここには人家が何軒もなかった。山の中のさびしいところであったとい

鼻　石
石の上方の穴が人間の鼻の穴に見える。鼻毛石の地名もここからきたという。（鼻毛石）
（金子緯一郎撮影）

う。

神社の境内で休んでいたえらい人に、ムラの人が、殿方どちらへおでかけかと聞いた。東北へ行くといった。ぜひおともにしてくれとムラの人はたのんだ。

そこで、名簿をつくろうとしたが、水がなかった。

石の上をみたところ、石の上の穴に水があった。その水を汲みとって名簿をつくったという。

それで、その石のことを硯石とよぶようになった。

早魃のときに、石の上にのってこの石の穴の水をかきまわすと、雨が降るという。

そのために、ふだんは、この石の穴の水をかんますなとか、この石の上にのるなといっている。

むかしあるとき、神社で芝居をしたときに、子供がおもしろがって、この石にいたずらしたら、雹が降って、ムラ中青いもんなしになった。ふだん絶対に硯石にあがってはならないといっている。（鼻毛石）

三日堂　昔ここにお堂を建てたところ、三日たつと燃えてしまう。このあたりを馬に乗って通るとふり落されてしまうので、石で囲って、悪霊を中に封じこめた。それで、この地を三日堂と言うようになった。（馬場）

ツカバタケの二つの五輪塔　斉藤某家で霜月道者が来たので石臼で餅をたくさん搗きはじめたところ、手あわせをしていた女中が、ちょいとホマチして餅を口に入れたところ、のどにつかえて窒息死してしまった。その家では正月が来るので忙いで穴を掘って埋けてしまった。ところがそこの家の番頭さんがその女中にほれこんでいたので墓地に行き、恋しくなったので穴を掘って女中の髪の毛を見て、顔も見てえとその髪をひっぱったところ、のどにつかえた餅がおりて息をふきかえした。それでこの番頭と女中はめでたく夫婦になったという。それで今でもツカバタケというところに二つの五輪塔があるという。（三夜沢）

三　日　堂　（根岸謙之助撮影）

仙太十二　仙太が立てた十二様（山の神）が、富田分にある。（柏倉）

カノエ塚　カネ塚ともいい、赤城の櫃石からカノエ（庚）の方向にあるという。豊城入彦命との関係を説く人もいる。（柏倉）

宮城　豊城入彦命の宮城があった所というので、宮城村の名が付いたという。（柏倉）

ウズラ山　笠丸山にはウズラ山があり、何かうずめた所ではないかという。（柏倉）

田　地名に田の字のつくところには石はない。「田面田の中、米の中、嫁に行くなら田面においで」といって、田のつくところは米がうまい。（大前田）

山の神　田圃のところに来ると、馬があらしを吹いてはずなを引いても動かない。山の神様が怪我をしていた。今そこに山の神様が祭られている。（大前田）

アズキトギババア　アズキトギババアがメオト橋の近所に出たという。夕方遅くなると、小豆をとぐかっこうしていて、子どもをさらったという。「アズキトゴウカ、人取ッテ食オウカ、ゴショゴショ」といって、子をしょって歩いた時に、ジレッ子（ぐずついている子）を寝かせるために、よくいったもの。（柏倉）

神戦伝説　赤城の神様と日光の神様とが戦場ヶ原で戦って、赤城の神が手負いの傷を受けてしまって追貝まで逃げてきて、追貝の湯で

なおったという。その日は追貝の温泉は一般客の湯を休むといわれている。赤城の神が追われてきたところなのでオイガミという地名がつけられたといわれている。（三夜沢）

弘法大師爪引不動　この不動様は、弘法大師が爪で自然石にほりつけたもので、この名があるという。（鼻毛石）

北爪家の由来　この地方の北爪姓のもとがここの北爪という。

吉井侯が北陸征伐にきたときが、ちょうど夏で、旱魃のときであった。その人たちがここの神社で休んでいた。そこへ、地元の人がいって、家来にしてくれとたのんだ。そのとき、連判状を書こうとしたが水がなかった。ところが、神社の境内に岩があった。それに水がたまっていた。その水で墨をすって連判状を書いて、吉井侯の家来になって、北陸へのぼった。それで、この岩（石）のことを、硯石というようになった。

そのあと、吉井侯の一行は、北陸征伐から帰ってきて、皇居へ行ったんだそうだ。そこで、（皇居の）門番にしてくれといったら、皇居の北の門の門番にさせられた。それで北詰（きたつめ）というようになったという。苗字をもらってきた。なお、紋所は、弓矢のぶっちがえた下に十六の菊の紋がはいっていた。しかし、陛下と部下の紋が弓矢のぶっちかえがあるだけのちがいでは申訳がないというので、菊の紋を改めて、八重菊にしたという。（鼻毛石、北爪　嚴、明治三十年三月生）

アズキトギババアの出た沢
（柏倉）　（土屋政江撮影）

松飾りの話　赤城下で富士見村の小暮の須田といえば、この界隈の財産家で、そこん家が困る時に、借金取りに追われて、それで飾りができねえで、夜、夜ナベに行ってそれ（杭）を取って来て、ナラの木だんべと思ってクリを伐って立てて、次ぐ朝、夜が明けて見たら、「ヤレ失敗したで、ナラの木の杭をぶったと思ったら、クリの木だ、まあ弱った」といったら、そこへノラボウ（乞食）が来て見て、「アア、コリャ縁起がいい。」「何だ、お前（おぬ）、」と聞いたら「ナラヌ身上（しんしょう）クリ回ス」つって、「こりゃ縁起がいい」とほめたら、それからどんどんどんどん須田は大尽になって、あそこまでくり上って、こんだえらい大尽になってから、またそれをしたら、えらい築山（つき）をついて、須田で力（つと）んでいたら、乞食が来て、りっぱな築山だから旦那様がりきんでいたら、「ヤア、こりゃどうも、須田マツは秋の身上のツキ山だ」といったら、それからどんどん終えちゃった。

そうだから、昔は正月乞食が来るつうと、乞食は尊いもんなんだ。へたな因縁をつけられると、身上が終えちゃうんだいね。乞食には何いったって、うちの子にくれないものだってくれてやったんだ。こごとなんどいえない。（柏倉　大崎義一）

二、昔　話

話じいさん　大胡の河原浜のはるさんという人は話好きの人であった。越後のごぜさんからいろいろむかしばなしを聞いて、それをムラにひろめたという。

家のまわりで焚火などしたときに、みんなあつまれと子供たちをあつめて、むかしばなしをしてくれた。

それを今もおぼえている。（鼻毛石、吉田きく、M45生）

市がさかえ申した　この言葉は、会議など終ったとき、おひらきに

しようというときにいった。この言葉がでると、あぐらをかきなおす者はいなかった。

また、なにか相談していて、いきづまったときもいう。話がいきづまって、前へ進まないときの言葉でもある。こうしたときにはべつの言葉として、「モグラが岩につっけえた（つっかえた）」ともいった。

また、天上から、長ふんどしがさがったような話じゃ、うまくないともいった。長話ではまずいということをいったもの。（鼻毛石）

話の終りには、「市がさかえ申した」という。（鼻毛石）

ホトトギスとモズ　ホトトギスは自分でえさをさがして食うひまがないという。一日に八千八声なかなければならず、なくのがいそがしくて、えさがさがせない。そこで、モズがえさをさがして、ここにあるぞと、桑の木などにさしておくという。なお、ホトトギスは、「おとうと悲しや、ポットッキッタ」となくという。（鼻毛石）

カケス　カケスは物忘れのひどい鳥だ。クリの実をとってきて畑に置いたり、カエルとかカマギッチョをとってきて桑の枝にさしておく。このとき空の雲の位置をみて置き場所をきめる。ところが雲が動いてしまうので、置いたところがわからなくなって、あちこちにカケスの置き忘れがある。物忘れのひどい人をカケスともいう。（市之関）

五平どり　昔、大間々へ行く途中富士山のふもとを通ると、「五平五平、フルシキ大根よこせ」という声がするので、「フルシキは借り物だから、駄目だけど、大根だけ置いてきますよ」っていった。（大前田）

ごへえふるしきでえこん　苗ヶ島に、北爪五平という人がいた。あるとき、五平さんが大根ばたけにいると、「ごへい、ふるしきでえこんよこせ」とフクロウがないたという。五平さんは、それをきいてたまげて、ふろしきでえこん（大根）をおいてきたという。（苗ヶ島）

スズメ孝行　ツバメはおしゃれで、親が死ぬという時に、しゃれかえっていて仲々行かなかったので間に合わず、食べ物に穀を与えられないで、虫を食っていろといわれた。そのために虫がいなくなる秋から冬には、南の方の虫のいる所に渡らなければならない。スズメは親の死に目に間に合ったので、一年中穀を食って生きていけることになったという。（柏倉）

ショウブの由来　おじいさんに聞いた話だが、昔、おおく慾が深えから嫁ごの来てがいないったら、わしゃ食い物を食わねえで働くつう嫁ゴが来たんだって。そうしたら、米が減るから変だと思ったら、頭の上にこんなでっけえ口があって、そこからみんな食っちゃったんだって。こりゃ大変だてんで、逃げべえと思ったら、こん野郎逃げるつうんで、いろいろして鬼が入れないように、ショウブをトボグチにして、家に入れないようにしたんだって。それで、その女が鬼だったんで、ショウブ取って来う、モチ草取って来うといって節供の行事に飾るようになったんだって。（柏倉、六本木なつ）

食わず女房　むかし欲が深くて食いものを食わねえよめごがほしいって言ってた男がいた。そうしたら丁度よく食わねえよめごがきた。仕事に行って家を留守にして帰ってくると米が減ってる。おかしい、と思ってある日仕事に行がねえでかくれて見てたら頭にでっかい穴があいててそこへめしを入れて食ってたそうだ。（柏倉）

ショウブ酒　五日の節供にショウブ酒を飲むのも蛇が教えた。昔の民話だんべが、蛇の息子がきれいな若衆になって、山奥に行って蛇の自分の親に、「おれはもう最高だ、人間の娘に子をこさえて来たから、おれははあ何も苦はない」ということを蛇の息子がいったら、親が「やあ、ばかなことをいうんじゃねえ、人間つうものはりこうなもんで、五月五日に蛇酒を飲めば、魔神の子を妊んだものはみんな出ちまうんだから、おめえがいくらそんなことをいったって、五日の日のショウブ酒を飲まれりゃそれでおわりだ」と、蛇がうちうち話をしていたので、それで五月五日のショウブ酒はかかせないというのが、今でもショウブ酒はみんな飲む。軒端にもモチ草とショウブを、どこん家でも家例としてさしたもんだ。三本ずつさした。

ショウブ酒は魔よけで女衆に飲ませろ、やくざ蛇が入らないようにという。（柏倉）

四日の夕方、モチ草とショウブを三本ずつ軒端にさす。（柏倉）

シジ・タケ・フナ・ニワの由来　シジは獅子みたいに蚕の口がはれてきて、タケには蚕の姿が竹をぶっきったようになる。フナには蚕が船のようになる。ニワは忙しくなるから庭で休ませろといった。（苗ヶ島）

馬鹿婿の話（みみかけうどん）　馬鹿むこさんをつれて、嫁御さんを見に行ったん。もこ（婿）は馬鹿むこどんつう。馬鹿なんだつう。

馬鹿でもいいよ、みて、まあがまんが出来るんなら、（嫁に）くれるっつうわけで、つれてったけなんだいね。そいで、なんでも、仲人様のいうとおりにしていろっつうわけで……仲人様、耳がかゆくなったんで箸でちょいとかくべえと思ったら、うどんが箸にひっかかって、うどんが耳にひっかかってしまったんだって。そしたら、すぐむこさんも真似して「それなんていうあれだい」「へえ、こりゃあ、わしらのほうじゃ、ちゃんとしたところへくると、こりゃあ、みみかけうどんていう。」「ああ、そうですか」っていうんで、それはそれですんだ。仲人さんがそういってくれたんで、なんでも、その仲人のいうとおりにすればいいからっていうわけなんでしょう。

だから「むこうの人がなにかいったらね、ここで、私にいったら、私が答えるけれど、おまえにいったときは、おまえがさようでございますっていえばいいんだ。」

そういう訳なんだから、なにもかも調子よくいって、まずいうことがねえんで、これじゃあ（嫁に）くれべえつうわけで、うち相談してね、あの、あの、くれるっちゅう話になったん。ほんで、はあ、仲人様も、きまっちゃあ、これより行って、いろいろきかれてねぼっことしたんじゃあ、しょうがねえから、早く行くべえと、そう思ったん。そこんどこい（へ）、ネコがきちゃったん、それで、仲人様もめんどうなんだい。その、そんな馬鹿げな話が、昔、あったんだかなんだか、一応はいうけど、あの、さおの頭に糸をくっつけて（むこを）つれていったわけなんだい。そのあがったりするうちはそのままで、あがっちゃって、ほれ聞かれると、その馬鹿なんだから、むこうが何かいって、その糸をひいたら「さようでございます」というんだよ。ようくいったんで、それで、仲人様が、馬鹿だっていうから話しかけるっつうんで、そうして、したところが、なに、馬鹿ずらねえや、おめえ、ちゃんと答えるものっていうわけで、まあ、いいところで、早く帰るべえと思って、したところへ、やっぱりおごっつおうが、酒の肴などがでたもんだから、ネコがすっとんで来て、その足をひっからまっちゃって、そいで、ネコは足にひっからまっちゃったから、はなすべえと思ってしたら、「さようでございます。さようでございます」って、きりもなくいうんで、むこうの人もうったまげちゃったん。

ネコが足にひっからまっちゃったから「さようでございます、さようでございます」って、ひっきりなしにいったんだんべえ、そいで、おおかひかれたら「さようの頭がもげたそうでがんす。」っていっちゃったんだ。おおかネコにひっぱられたんで「さようの頭がもげそうでがんす」っていったんで「もらえねえで、おわりでございます」それは、そんなはなし。（鼻毛石）

馬鹿婿　むかし、むかし、あるところに馬鹿婿どんがいて、人になったんで、嫁ごもらうんできめに行ったんだって。

つれてきてみてくんろというので、仲人さんが嫁ごのうちへ婿をつれて行ったって。

仲人は婿に、「おれのいうとおりいえ」といって、「なにをいっても、さようでございます」といった。

くれる約束で、嫁ごの家へもらいに行った。

むこうでうどんをだした。仲人さんが食べようと思ったが、耳をかいたら、うどんを耳にひっかけたって。そしたら婿がその真似をして、

うどんを耳にひっかけたって。

それをみていた人たちが、これはほんとに馬鹿婿だといって、それで、嫁ごははずれてしまったって。（鼻毛石）

あるところに馬鹿婿がいたが、そんなにえれえ馬鹿でもなかった。嫁ごをもらって、その晩嫁ごさんがよなべを教えたわけだ。

してみたら、ばかにいいので、つぐ日は二人でせどの山で竹の枝をかたづけていたって。嫁ごもやろう（婿）もよかったので、竹藪で一発やったって。婿はほっかぶりで、てめえ、えれえことした。皮がねえや。さっきしたとこはあそこだ、ここだとさがしたって。

そうしているうちにまた皮がもどってかぶっちゃったって。そしたら、皮があったのでよかったというはなし。（鼻毛石）

馬鹿聟　馬のお尻に、掛軸をかけるといいっていった。（大前田）

無い袖は振れない話　むかし、かせえでもかせえでも大尽になれない男がいた。見回すと近所のてえも同じように貧乏だった。だが貧乏だけどおれたちもお伊勢様へ行ってみてえもんだ、と話し合った。そうだよ。お伊勢様は運だめしの神様だそうだから、おれたちの運が開けるかどうか行ってんべえ、と食うもんだけ持って出掛けた。ゼニがねえから野宿した。箱根街道を歩いて野宿してるとおとむらいの行列が通って近場の墓場に入って消えた。その時、生ぐさい風が吹いてきてぞっと気味が悪くなってきたと思ったらうらめしやが出た。皆で一生懸命逃げたが一番足ののろいやつが追っつかれて背中にうんぶされちまった。そうして「この先の大尽やに連れてげ」っていうんでその通りにしたら、うらめしやはその大尽やの嫁ごで気に入らない嫁ごがいじめ殺されたんだそうだ。女はこれから先は自分で無念を晴らすと言い、御礼に着てた着ものの袖を片方もいでくれた。困る時はこれを振れば米でも何でも好きなものが出る。だがこのことは誰にも話すな、と言われて男は袖を大事にかかえて帰ってきた。それから男はものもちになった。一緒に行ったやつが変に思って聞くので気のいい男はついしゃべってしまった。そいつは俺も袖がふりてえから貸せって言った。男は一回だけって約束で貸してやったらそれがなくなっちまって借りたやつも貸した男も困ってしまった。かみさんが米がなくなったから、また袖を振って米を出してくれって頼んだ。男は困ったなあ。袖がなくなっちまったよ。ない袖はふれねえで、と男が言った。というお話。（柏倉）

三、世　間　話

番頭の話(1)　とんちのいい番頭がいて、弁当をこうりに軽く詰めたら、「ハエがむぐっちゃう」といったので、つぐ日はしっかり詰めてやった。そしたらハエのやつ、きょうむぐったら、首っ骨ぶっくじゅく」といったという。（柏倉）

松ヤンが雨っ降りに縄をなうと五つまでしか数えられないが、ツーツーといいながら二十ひろで一ボウと数えたから大したものだった。（柏倉）

番頭に夜ナベをさせたら、「オラのオッカァ（家内）は夜の分まで給金をもらったのか、オッカァに聞いてんべ」といったという。（柏倉）

番頭の話(2)　主人が田の真中に一升徳利置いて、番頭に田の草取りをさせたが、番頭は田の回りべえ田の草を取って、見られる所だけぐるっと回った。かんじんの一升びんは主人があとで持って来て、「おれはこんないい宝を置いたが、そこまでしなかった」といって、旦那ひとりにその酒を飲まれちゃったという。（柏倉）

主人が番頭に対して、でかい弁当鉢にいっぱい飯を詰めて、「弁当の前もあるんだから、それだけの仕事ができる」といったら、番頭は、エンガ（柄鍬）に弁当をしばって置いただけで、仕事をちっともしなかったので、仕事にならなかったという。（柏倉）

番頭の話(3)　昔、ある所にえらい大尽の家があって、番士番頭を召

し抱えてりっぱな家に、一人息子がいてネ、そういう家庭だから、まさかいい嫁ゴを親心として貰って預けてえというんで、辺り近所をみんな探ねて歩ったところが、ナミ子さんといういい女に出ぐわしたので、この子をうちの一人せがれに嫁に貰ったらよかろうと、こういうので嫁に貰ってやって。

ところがどうも「月にむら雲、花に風」で近所中で今度泊りがけで、参宮旅行に行ぐわけで。今だら新幹線に乗って行げば一日帰りで行って来られるようなのが、昔は行ぎに十五日、帰りに十五日、三十日もかかる奥州の奥りなんで、はて、あんまりいい嫁ゴを貰って、俺もここで三十日も明けるんだが、とくとオナミという女が男好きで、毎晩毎晩、男に抱かれなければ気の済まないような男好きの女なんで、カカアを三十日も明けて俺も参宮に行くんじゃ、何としても女もかなわなかんべし、俺もかなわないが、それにしても、連れにかしょわれたんで、カカアに引かされて、連れの旅行に行げねえつうようでも困る。人に笑われるから、まあ我慢して行きましょうと。

それでいよいよ、あした旅立ちだという時になって、ヤツ考えて、番頭に墨をすって来うというんで墨をすらせて、そのオナミさんを裸にして、白い雪の膚のような股に馬を、股に毛の生えている芝を食いながらの馬を一頭描いた。「ヤレ、ナミ子、馬を大事にしろい。俺が行って来るまで決して粗末にしねえで、大事にしとけ」そう言い残して、そうして出て行った。

それでね、参宮に出かけて、一晩二晩なオナミさんも我慢なったが、三晩目になると何としても我慢なんねえで、行燈の火が消えねえで、オナミさんが部屋に行燈がともしているんで、一番番頭がそうっとのぞって見たら、下腹をなでながらオナミさんがひとりでしょんぼりしているんで、こうのぞき見してみたところが、いい花嫁ゴが下腹なでているんだから、番頭はつい我を忘れて飛び込んだ。飛び込んだとたんにいいことやっちゃったらしいんだいな。

そうしたところが、その晩からハァ「毒なめりや皿まで」ちゅうんで、毎晩毎晩、旦那の帰って来るまで、それ繰り返してやっていたら、そのうちに馬がだんだん消えちゃった。いよいよ旦那が今帰ってくる時に「ヤレ、馬が消えちゃった、馬を描かなくちゃなんねえ、それでは馬を描きましょう」というんで、番頭が馬を描いたつうんだね。番頭の野郎、初手の馬よりでっかい、肥えたえらい馬を書いて置いた。

いよいよ旦那さんが帰って来て「オナミ、馬を見せろ、馬大事にしといたんべな。」見せろというんだからしようがねえ、見せたら「こりゃあ、俺が書いたんとまるで違うじゃねえ、えらい馬じゃねえか」「ハァ、そうだよ、旦那、出て行く時に馬を大事にしろというんで、番頭さん頼んで一生懸命馬に飼い料したら、馬も育った」といったというんだ。(柏倉　大崎義一)

仙太話(一)　柏倉に大崎仙太郎という奇人がいた。墓もあって実在の人物だが、いろいろとおもしろい話が伝えられている。自分で話をするので、話が上手な人だった。

ある時、鉄砲ブチに山へ行ったら、鹿が七匹も昼寝をしていた。追い出して鉄砲でうったら、八方へ逃げて行った。鹿は七匹なのに八方へ逃げるのはおかしいじゃないかといわれると、「ナニ、おれが一方さ」といったという。(柏倉)

仙太話(2)　仙太が梅の木沼へカモブチに行ったところが、カモが飛び出したので、鉄砲でぶったら、カモに当たって、池の真中へカモが落ちた。一羽だと思ったらカモがつるんでいて二羽だった。それへ泳いで行って、カモを拾って丘へ上るべえと思って、木の根っこにつかまって上るべえと思った。ところが兎が昼寝していて、その兎の後足をつかまえたから、兎がもがいたら、トロイモ（山芋）を一貫めも握り出した。ようよう上に上ってみたら、六尺フンドシがごそごそするので見たら、ザゴ（魚）が一貫めもかかっていたという。

仙太のおかみさんは、仙太がなにもデンボウ（うそ）をいっても、

反抗を絶対にしない人だった。「そうだいなあ、おばあさん」というと「ああ、そうだよ、その通りだよ、じいさん」といって調子を合わせた。そこで仲のいい夫婦を「仙太郎夫婦のようだ。」「ほんとに調子べえいい夫婦だ」とよくいった。（柏倉）

仙太話(3)　村の人が集まった時、仙太に「デンボ話（うそ話）聞かせないか」といったら、「それじゃエンマ帳を持ってくるから待ってろ」といって出かけたが、それっきりいくら待っても来ないで、だまされた。（柏倉）

仙太は田の草取りに行って、田んぼじゅうはわないで、水口に行って水をにごして、ひとまわりにごった水が回るまで待って、「はあ全部終えた。田んぼに行ってみろ、みんなにごっていらあ」といったという。（柏倉）

仙太話(4)　仙太はわらじづくりが上手で、朝飯前に十三足のわらじを作った。ある時鉄砲ブチに行くとって、「台公（台吉）行ぐべや」と呼んだら、わらじが七足きれたという。いい加減べえのわらじだった。（柏倉）

田んぼを耕すのに馬を飼わないので、自分の腹に綱を掛けてマンガ（馬鍬）を引っぱった。「それ引け、じいさん」「それ押せ、ばあさん」と、二人してよっさらよっさら耕した。（柏倉）

仙太わせというんとわせ、稲をつくり、早くこなしてスルスで引くと、「新米ができたので、食べてくんろ。」と、新米を少しずつ配って回る。そうすると、しょうがない、今度は米が取れた時には、前にもらった返しをやるべえと、ちっとべえは持っていけないから、二斗も三斗も持って行くから、仙太はこてえられなかった。（柏倉）

仙太には子がいないが、墓は残っている。（柏倉）

デンボの話　苗ケ島にはデンボ〇〇サンと呼ばれる人がいた。このデンボ〇〇さんはある時、警察に呼ばれていった。そして警官が「おめえはデンボが上手だからデンボをやってみろや」といった。デンボ〇〇さんは「デンボをやる本を忘れて来たからだめだ」といった。警官が「デンボに本が必要か」とおこったら、デンボ〇〇さんは「そもそもこれがデンボのはじまり」といってのけたという。またこのデンボ〇〇さんは関西の方に行って「おらあのうちはヒョウの皮で葺いてあるから見に来てくれ」とデンボをいった。実際には俵でふいてあった。

金剛寺の藤づるはどのくらいの長さがはっているかという質問にデンボ〇〇さんは「九里はっている」といった。寺の坊をクリともいう人もいる。（馬場）

デンボウエイサン　エイサンに、デンボウ一ついってみねえかいっていうと、デンボウなんかいっていられるかい。誰それさんが死にそうだっていうので、行ってみると、ぴんぴんしていた。（大前田）

デンボウヨシサン　有名な人で、「どうだい、デンボウ言ってかねえかい」といったら、「デンボウなど言っていられるかい。今は家の者がぐあいが悪くて医者呼びに行くところだい」といって行ってしまったが、それがまったくのデンボウだったという。

デンボウヨシサンのところは、自分の家から出た火もあるが一代に三度も火事にあった。そのうちのある火事のとき、そのときの調べで「ツケ火だ」という人があったが、「火のつくのが早い」といったところ、「へエ、じゃあツケ火の時間は何時から何時までの時間でしょうか」といったという。（苗ケ島）

速い人　村に速い人がいた。この人は胸に三度笠をあてたまま東京を日帰りしたという。本当の話は、身内の人が上野のどこかにいたので、朝早く出て、夜、先方の人が寝てしまわないうちに着いたという。足の長い人でやっちゃんという。（苗ケ島）

大前田栄五郎　身が軽い人で、オオセカゴを、にわに置いて、とべるかっていうと、何をそんなことを、いま一つ持って来いって、二つ並べて、縁側からとんだ。大間々のはね滝もとんだ。（大前田）

力持ちの話　村に大変な力持ちの人がいた。ある時、この力持ちが大将で、子どもたちに馬方をさせて何頭も馬を引かせて米俵をつけ、年貢米を運んで行ったところ、「子どもだからこちらへおろしたいから」というのでかけあったところ、舟の方の者がいばって「昔通りにおいておけ」といばるので、その力持ちが「じゃあ、おれが舟の上へ投げるから受取ってくれ、舟よりこちらへ落ちたら俺の責任で、向うへ落ちれば舟の方の責任だから」といって二俵ほど放り投げ始めたら向うへ落ちるので、おどろいた船頭たちがあやまった、という話が残っている。（苗ケ島）

鬼きたさん　本名は木村多吉。力があるので、よそんちへ仕事に行って、セエフロ釜水をはったままかかえて行って、おんまけて来た。エンガ（柄鍬）を使うのに、足を使わないで、手で使った。よそで足で使うのを見て、こっちでは、足で使うのかっていった。口が大きいので、アンピンモチ（大福餅）を、奥の方まで入れて、三日月型に少し残して、このアンピンには、あんがないよっていって、すましていた。（大前田）

かもとりの名人　さんのうのこうきという鉄砲打ちがいた。この人は、カモとりの名人で、原沼へカモをとりにいったら、カモが沼の真中ごろにおりてきたので、ふんどしいっちょうで泳いで行って、カモをとってきた。

沼のはじまで泳いできて、フジつるだとおもってつかまえたら、ウサギのあとあしだったと。ウサギは前足でかっぱじいたら、山いもがでてきた。

それで沼からあがったら、ふんどしの中にざっこがいっぺえかかっていたって。

この人は、カモとって、ウサギとって、山イモとって、ざっこをとったという。（苗ケ島）

梅の木沼　仙太さんが梅の木沼へカモうちにいった。鉄砲をぶったらカモが沼の中に落ちたので、沼の中へはだかで、ふんどし一つでカモをとりにはいった。沼からあがるべえとおもって木の根だとおもってつかまえたのが昼寝をしていたウサギのあとあしで、ウサギは前あしでにげようと思って土をかいたので山いもを一貫匁も掘り出した。沼からあがってみたら、ふんどしの中に、ザッコが一貫匁もはいっていたという。（柏倉）

大五郎　大五郎、この人も鉄砲ぶちであった。ある時、仙太さんが、同じ鉄砲うち仲間の大五郎さんと、「おおい、大こういくべえや」とよばって、庭さきまでいった。そしたら、仙太さん、大五郎さんに、「わらじが七足もきれた」といったという。こんなふうに、大げさな話をする人でもあった。（柏倉）

屁そうさん　鼻毛石にいた人で、注文通りに屁をした。得意なのは、梯子っ屁で、くさびまでした。（大前田）

深津の人　深津に大まらの人がいた。おのいちという人であった。まらが大きいので、背中におんぶしていたら、ある人に孫さんが大分大きくなりましたねといわれたら、孫じゃねえ、せがれですよといったって。（三夜沢）

ヤシャの実もぎ　北松がヤシャ道へ、ヤシャの実をもぎに行った。ヤシャの木にはい上ってもいでいるうちに、チンボ（男根）をすりむいて怪我をした。女房に「しばってくれ」といってしばらせたが、しばろうとすると大きくなり、やがてしなびるので、すぐゆるんでしまい、「またしばってくれ」といって、とうとう、半日もいじらせたという。（柏倉）

光りもの　大胡に行った時、夜遊びの帰り十二時過ぎ、火の見のあかりかと思ったが、火の見のかどに、光りが強くなり、二つになる。さみしくなる。見えたり見えなくなったりして段々近くなる。玉になり、うちの近くになると消えた。後光がない。ただ光る。カネダマは赤い。うちの屋根に落ちると、ますますよくなる。ヒトダマは、アオ

ビを引く。（大前田）

お稲荷の嫁入り　雨の降る晩、天神山の近所にあった。頂上から右へ提燈行列が続いたので、「オトウカッ火が出るぞ」という。（柏倉）

市之関の方で天神山にオトウカの嫁入りが出たのを見たことがある。（馬場）

ふり米　死にそうな病人に、竹筒に米を入れてそれをふってきかせたら、病人が生きかえった、などという話はここらへんでもあった。（市之関）

カラス　カラス鳴きが悪いと、人が死ぬ。

カラスは大日様の眷族だから、朝は太陽を迎えに飛んで行く。夕方は太陽が沈むのを追っかけて行く。

カラスは色の黒いんは憎まれないが、口のわるいで憎まれる。

カラスは墓場にダンゴを上げると、よく下げに来る。

カラスは大日様の眷族でえらい鳥だという。子は大きくなっても、親に餌を運ばせるので、親はきりもなく餌を運んでくれるのは、とてもかなわないので、九月に栗のいががえむ時期になると、子が明いた口の中に栗のいがを突っ込んでやる。子はヤがさって痛くて、こんなひでえ親からは餌がもらえないと、「泣キ別レ」をするという。（柏倉）

四、なぞ・ことわざ・その他

(一)　な　　ぞ

○紙園バヤシとかけて何ととく、ヤキモチとといて吹いたりたたいたり。（馬場）

○朝早く起きて細い道通るもの。戸

○畑で、ドウバナたらしてるもの。綿

○丸まげとかけて、東郷大将ととく、その心は手柄を立てる。（大前田）

○池にそり橋、だんごちんこなあに―やかん　鉄瓶

○朝早く起きて、細道を通るものなあに　雨戸　（鼻毛石）

○東柏倉とかけて何ととく、離れ馬ととく、そのこころは、くらがねえと。むかし、ここに蔵がないことを言われたそうだ。

うちのくらは天保時代、遊び人が金を借りにきたが貸さなかったので、火つけされた。そのとき「着るもんがなくっちゃ困る、寒い思いをしちゃなんねえ」ってはたあしだけを出した。このとき出したいざりばたがまだ残っている。（柏倉）

(二)　諺

○秋山春里　秋は山から、春は里のほうから天気が変ってくることをいったもの。（鼻毛石）

○半夏半田植　半夏の日に田植をするなといった。もとは、田植は半夏が中心であった。

しかし、実際には半夏前に田植をしてしまった。（鼻毛石）

○御荷鉾の三束雨　御荷鉾のほうからくるかみなりは早いという。ムギを三束まるかないうちにやってくるという。時には雹をもってきた。（鼻毛石）

○大豆は売っても小豆は売るな　小豆を売ると薬代になるといった。小豆の売り手はないという。（鼻毛石）

○四月ゴボウは馬鹿がまく。（鼻毛石）

○茄子は照り作

○三月のサラッ田

○彼岸すぎての麦の肥

○麦は十七がり

○稲のしだれ刈り　昔は霜が降らないうちは刈らせなかった。

○稲の六十刈り

○ネギを北根に植えると病人が絶えない。北根とは、東西方向の畦の北がわ。
○遠くの上田より近くの疎田
○千駄のこやしより一時のまきしん
○あずきは卯の花のさかり（以上市之関）
○赤城のかみなり来たことない。赤城山の方からおこるかみなりは、たいてい東へながれてしまって、この辺へはあまり来たことがないという。（鼻毛石）
○惣領十五が貧乏世ざかり、末っ子十五は身上世ざかり。（鼻毛石）
○居候はおいてあわず、いてあわず（鼻毛石）
○ものぐさもんの節供働き。（鼻毛石）
○一見葬礼火事見舞　一枚しか着物をもっていなくて、どこへでも同じ着物を着ていくこと。家によっては、ちょいちょいぎのことをこういう場合もある。（鼻毛石）
○半纏半日おび三日　半纏は半日ぐらいでできるが、帯は三日もかかった。かえし針で縫うと三日はかかるという。（鼻毛石）
○手前味噌はしょっぱい。（鼻毛石）
○ウダツの年は困窮年だ。
○辰でまきあげてミでこぼす。
○巳年の者は金運がある。
○寒ドウカは祀るな。（馬場）
○からっ茶は麦ボウチよりもつらい。（三夜沢）
○コゴミ女にソリ男　女は下向き、男は上向きの方がよい。（柏倉）
○仲人三年　仲人に対しては、三年の間は盆・正月にあいさつに行くものだといった。
　今は仲人礼を十分にして、あとはつきあわないというのもある。たとえば、仲人礼を五万円くらいなら盆・正月にあいさつに行くが、十万円なら行かないという。

　暮には塩引きをもっていき、お中元にはビールなどをもっていくのがふつう。（鼻毛石）
○仲人三年という。嫁・婿が、年始・節供・歳暮などに贈り物をするのは三年が普通である。（市之関）
○いとこはとこはチンピの皮　チンピはみかんの皮を干してくだいたもの。いとこ・はとこはカラッ他人ではない。さりとてごく親しい親類でもない。（市之関）
○師走女に角が出る。あんまり忙しいので。（市之関）
○親のはたへ子がはいる　親のまねを子がすることをいう。（柏倉）
○ジュウサンガツヅラ　いつも正月のようなのんびりした顔つきをしていることを。十二月の次の十三番目が十三月にあたるから。（大前田）
○千三ツマンカラ　うそつきの人をいう。（柏倉）
○一つものは縁遠い　ご飯を食べるとき一杯だとそういっていやがった。「もう一杯」といって、ご飯をすすめる。（柏倉）

(三)　そ　の　他

モズとカケス　モズとカケスは忘れっぽいという。（鼻毛石）
しゃれ　にほんばし行って来る、便所へ行くこと。昔の便所は、二本板が敷いてあった。（大前田）
湯治　麦を乾している時、夕立が降って来た。「お爺さん、雨が降って来たから」と声をかけると、「四万・草津に行ってるに、そんなにちょいと出られるもんか」って、湯治に行ってることにして、手伝わなかった。（大前田）
　淡島様のようだ　ぼろをきていると、よく「淡島様のようだ」といった。（鼻毛石）
カマキリ　ハイトリババアという。カンカチとはいわない。獅子舞はしない。（柏倉）
てには　農閑期や社日に、廻り番の宿に集って催した俳句の運座、

女は出られない。席題には、春・ひばり・むぎなどあり、節をつけて読み、点を入れ、付け木やマッチをくれた。満作の話実の入る社日講という句があった。当日は、まかないも男がやる。大正まで続いた。（大前田）

人の呼称　人をよぶときには、つぎのようにいう。

○○やん――親しみやすいいい方で、目下に対して使う。（柏倉）

アンニャ――兄やん、子どもに使う。（柏倉）

舎弟――弟、おとなの人に使う。（柏倉）

ネェヤン――姉ゴ、姉さん。（柏倉）

オトッツァン――父、チャン。（柏倉）

オッカサン――母、オッカンともいう。（柏倉）

オメエ――同輩か目下を指す語。（柏倉）

旧家の家の人に善意の愛称をつけていた。決して軽べつでない呼び方をした。

例えば、俵を沢山積んで持っているので家の中が暗い意から「くらやみの長さん」

言葉の間に「とにかく」というので「とにかくとうさん」

同じく「べらぼうな」というので「べらぼうなべさん」。（苗ケ島）

地名　土地の呼称につぎのようなものがある。

矢田――山合いの田で、川のふちにある嫌な場所である。（柏倉）

ショウブ田――けんかしたことがある田、水がない所で、水げんかをしたためか。（柏倉）

クボ田――じめじめした湿田。（柏倉）

アナ田――水が下に通ってしまう田。（柏倉）

コサ地――日影の地。（柏倉）

ヤチッ田――湿地、一毛作地。（柏倉）

スミ塚――境にあり、炭が埋けてあるのか。（柏倉）

方言　調査中にでてきた方言をまとめてみる。

おばんし　炊事。また炊事する人。

なれ合い　恋愛で結婚すること。

ありご　アリ

おんかはれて　公然と

あんじゃねえ　心配ない

いごねてねえ　素直

ておれた　素直になる。

よつっぴる　早目に食べるひるめし（鼻毛石）

よっこ　よけい、よぶん（柏倉）

ホカケ　初めて新米を食う時に「ホカケだ」という。（柏倉）

宮城村の民家

一、はじめに

民家は、永い年月にわたって営々として積み重ねられた祖先の知恵が象形化して生み出された遺産である。しかし、昭和四十年代以降の近代化の波は特に著しいものがあり、古い草葺民家は加速的な速さで消滅していった。私が十三年前に見た当村の景観と今回の調査で見た景観とは全く異なるほどの変貌ぶりである。

古民家を記録にとどめようということで、十三年前の昭和四十二年、当時前工の生徒を引きつれて当地の古民家調査に訪れたことがあった。その時はまだ村内の道路も砂利道が多く、グシに草を生やした草葺民家を多数見受けたものであった。実はその時の調査がきっかけとなり、その後世に出ることになったのが阿久沢秀夫家（昭和四十五年国指定重要文化財になる）であった。また、すでに遺構は消滅して現存していないが、今回取り上げた樺沢幾喜家旧母屋と星野栄一家旧母屋はその時調査した記録を活用したものである。

今回の調査では一九世紀に入ってから建造されたとみられた比較的新しい遺構が大半を占めた。しかし中には大崎身知男家や前原伍作家のように十八世紀初期以前に溯る特別古い遺構も二例存在した。いずれにせよここに掲げた民家は近代化の波をいち早く受けて、やがて消滅してゆく運命にあることを考えると、ここに取り上げた記録は将来かけがえのない貴重なものになること間違いないであろう。

各家の調査に当っては御多忙中のところにもかかわらず、仕事を休んで待機までしていただいたあげく、家の隅々まで快く開放し見せていただいた各家の所有者ならびに家族の方々に心から厚く御礼申し上げる。また調査補助員として御協力いただいた田島豊穂・村田敬一両氏に心から御礼申し上げる。

（桑原　稔）

二、調査対象民家

この調査で対象とした民家は江戸時代から大正初年頃までに建造された農家および町家を含むその他の民家とした。しかし、実際に調査された遺構は地域柄もあって総べて農家であった。

以前に調査し記録を保存しておいた阿久沢秀夫家旧母屋・樺沢幾喜家旧母屋・星野栄一家旧母屋を除く二十一棟の遺構について今回詳細な調査を実施した（表―1参照）。この中には役職の明確になった例だけをあげても、名主の家七棟、組頭の家一棟を含んでいる。

三、調査方法

この民家調査は第一次調査（予備調査）と第二次調査の二回に分けて実施した。第一次調査は教育長と村の長老上野丑之助氏の御案内によって村内でも「古い家」、「特徴のある家」、「古くから養蚕をたくさん行なっている家」、その他「この際ぜひ調査してほしいと思う家」などを順次みせていただいた。そしてこれらの家の外観と土間部分を簡単にながめさせていただき、合わせて簡単な聞き取調査を行なった。

第一次調査の結果から次のような諸点を重視して、第二次調査の対象となる民家を選定した。

(イ) 江戸時代に建造されたといわれる民家は、改造されていても当初の痕跡を確認できて復原可能な遺構の場合、総べてとり上げた。

(ロ) 調査遺構が平面的にみて、ある特定地域に片寄って集中することのないよう選定に当って努力を払った。

(ハ) 県内においてその昔、特に養蚕の盛行した地域であるので、養蚕農家の典型的な遺構とみられるものを極力とり上げた。

(ニ) 建造年代を明確に示す棟札・普請帳・墨書および裏付のしっかりした伝承等を有している遺構は総べてとりあげた。

主に以上のような四つの点を重視しながら選定された第二次調査の対象民家は、大字別に整理すると表―1のようである。

表―1 第二次調査民家の地区別件数表

地域(大字)	調査対象民家の所有者名(敬称略)	棟数
市之関	阿久沢倉造・阿久沢一郎	2
柏倉	大崎身知男・大崎正夫・北爪佳彦・前原要・松村忠次郎・六本木進・北爪元二	7
苗ヶ島	前原伍作・上野丑之助・東宮惇允・前原盤根	4
鼻毛石	吉田時雄・北爪寿雄・深沢一司・富田弥佐次・北爪政則	5
大前田	宮田信治	1
三夜沢	板橋元雄	1
馬場	井上作夫	1
	第二次調査民家総合計	21

第二次調査の内容は母屋を中心に実測および聞き取調査を行なった。調査遺構はいずれも現状平面図・痕跡図・断面図を採取し、写真は屋敷構えをはじめ母屋の外観・内部等を一棟当り二十枚前後撮影した。聞き取調査は建造年代、各種の改造年代、室名および各室の昔の使われ方、柱をはじめ各種部材の名称、禁忌作物等の多数に及んだ。

四、遺構にみる間取の形式

表―1に掲げた今回の調査民家二十一棟に、昭和四十二年に調査し記録を保存しておいた三棟を加え、二十四棟について以後取り上げることにする。

二十四棟の遺構にみられる現状平面はどれも建造当初の状態より室数を増加しており、しかも開放的になっていた。また古い遺構の場合柱を抜き取っている場合もかなり見られた。これらの遺構は痕跡をたよりにして復原すると、次のような五種類の平面形式に分類される。

(一) 二間(ふたま)の家→二間取型

(二) 三間(みつま)の家→広間型

(三) うしろの部屋の狭い田字の家→不整形田字型

(四) 田字の家→田字型

(五) 間取の多い家→多間取型

右の上段の呼び名は主に地元の人達の呼んでいる名称である。しかし、これらの呼び名は長すぎて不都合なものもあるので、これを簡略化する意味で矢印の下段に掲げたような呼び名で仮称し、以後本文中においてもこれにしたがうものとする。

表－2　宮城村における民家の形式分類および編年表

番号	所有者名	所在地（大字）	間取の形式：二間取型	広間型	不整形田字型	田字型	多間取型	柱間装置：表側（コザ（オクリ）の壁を残す）	中柱あり	サカ3ミ	サカ2ミ	コザとナンド（ヘヤ）境の壁で閉鎖	壁を残す	中柱あり	中柱なし	間仕切	表側（ザシキ側）の壁を残す	サマあり	中柱あり	中柱なし	構造：大黒柱の位置：棟の真下	棟下より遊離	大黒柱の逃げ：なし	あり	表側の構造：軒下し	セガイ	土台：なし	あり	設備・仕上・その他：トコ：なし	あり	書院：なし	あり	大黒柱の仕上：チョーナ	併用	カンナ	二間の柱間寸法内法（尺）※	建造について の記録等：不明	建築されたまま	移築されたもの	職業・家柄等	建造年代（含推定）（世紀）	備考
1	阿久沢倉造	市之関	○						○										○							○		○		○	○					12.00		○		農	19末	明治11年の建造と伝える
2	大崎身知男	柏倉		○				○				○				?					○		○		○		○		○		○		○			12.20	○			〃	17末	柏倉７屋敷の１つであるという
3	阿久沢秀夫	〃		○				○				○				○	○				○		○		○		○		○		○		○				○			名主	17末	国指定重要文化財
4	樺沢　幾喜	〃		○				○				○					○				○		○		○		○		○		○		○					○		農	18初	初代の先祖が建った、初代の没年元文元年(1736)
5	前原　伍作	苗ヶ島		○				○					○				○				○		○		○		○		○		○		○			12.12	○			〃	18初	
6	大崎　正夫	柏倉		○				○					○				○				○		○		○		○		○						○	12.14	○			名主	18中	
7	吉田　時雄	鼻毛石			○							○					○					○	○		○		○		○		○		○			12.10		○		農	18初	
8	北爪　佳彦	柏倉			○				○					○					○			○		○	○		○			○	○				○	12.06		○		〃	19初	赤城型、「新宅之日記」より文政7年（1824）の建造
9	北爪　寿雄	鼻毛石			○				○					○						○		○		○		○	○			○	○				○	12.05		○		組頭	19初	初代（嘉永三年没、83才）が建てたもの
10	深沢　一司	〃			○				○						○				○			○		○	○			○		○	○				○	12.03	○			農	19中	草葺総２階造り
11	前原　要	柏倉			○				○					○						○		○		○		○	○			○	○				○	12.03		○		〃	19中	赤城型、天保14年生の弥一郎が7歳の時建った
12	宮田弥佐次	鼻毛石			○					○				○						○		○		○		○		○		○	○				○	12.00		○		〃	19末	赤城型明治14・５年頃の建造という
13	松村忠次郎	柏倉				○			○					○				○			○		○			○	○			○	○				○	12.07	○			〃	18末	開口高の低い赤城型
14	宮田　信治	大前田				○			○					○					○			○		○		○		○		○	○				○	12.00	○			〃	19中	赤城型
15	六本木　進	柏倉				○			○						○					○		○		○		○		○		○	○				○	12.05		○		〃	19中	普請帳（安政５年12月）あり、赤城型
16	阿久沢一郎	市之関				○				○					○					○		○		○		○		○		○	○				○	12.03		○		名主	19末	明治４年の建造という、赤城型
17	北爪　元二	柏倉				○			○						○				○			○		○	○			○		○	○				○	12.00		○		農	19末	明治12年の建造という。赤城型
18	板橋　元雄	三夜沢				○					○				○					○		○		○		○		○		○	○				○	11.94		○		〃	19末	切妻総２階、80年前に建てた
19	上野丑之助	苗ヶ島					○		○					○					○		?			○		○	○			○	○				○	12.07		○		名主	18末	赤城型、3代目の庫七郎（安永七年没）が建てたという
20	北爪　政則	鼻毛石					○			○				○						○		○		○		○		○		○	○				○	12.05		○		名主	19初	赤城型、剣道の道場を兼ねる
21	東宮　惇九	苗ヶ島					○			○					○					○		○		○	○			○		○	○				○	12.09		○		赤代表	19初	板葺２階造、享和３年（1803）の棟札あり
22	星野　栄一	〃					○			○					○					○		○		○		○		○			○				○	12.03		○		名主	19中	
23	井上　作夫	馬場					○		○						○					○		○		○		○		○			○				○	12.00		○		農	19末	明治５年の棟札あり
24	前原　盤根	苗ヶ島					○				○				○					○		?		○	?			○		○	○				○	11.85		○		〃	20初	大正５年に建てた

注　※：コザの表側の内法寸法による

五、編年の指標

二十四棟の調査遺構中で棟札・普請帳あるいは裏付のはっきりした伝承等で建造年代が明確になった遺構は阿久沢倉造家・北爪佳彦家、前原要家・宮田弥佐次家・六本木進家・阿久沢一郎家・北爪元二家・板橋元雄家・東宮惇允家・井上作夫家・前原盤根家の十一棟であった。この他に建造年代をほぼ推定できる遺構は樺沢幾喜家旧母屋・北爪寿雄家・上野丑之助家の三棟であり、また国指定重要文化財の阿久沢秀夫家はすでに一七世紀末期頃の遺構と推定されている。[11]

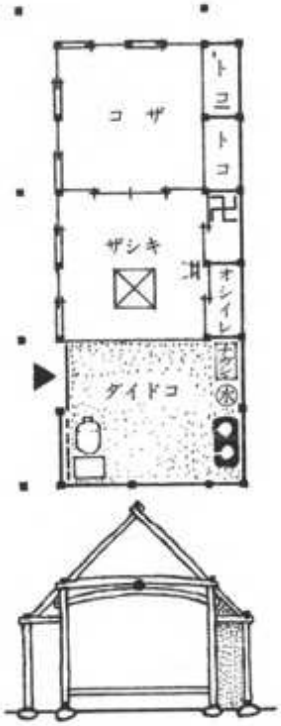
そこでこれら十五棟の示す原形にみられる各種特徴と、建造年代の不明な遺構にみられる原形の示す平面・構造をはじめ、細部の各種特徴等を比較、検討して編年の指標を求め、調査民家全体を平面形式別に区分し、さらに階層差も考慮に入れて、編年系列をつくると表―2のようになる。

前述したようにこの調査では二十四棟中十五棟の遺構の建造年代が判明あるいはほぼ推定し得た。したがって他の建造年代不明な遺構についての推定建造年代も、少し細分し過ぎるように思えたが、一世紀を初期・中期・末期の三等分に分割し推定しておいた（表―2参照）。

六、二間取型の民家

この形式の遺構は阿久沢倉造家ただ一例だけであった。当家のいい伝えによれば火災にあい、五代目の新次郎が明治十一年に仮普請として建造したものという。建造当初は現在置より少し西寄りにあって東向きの家だったが、大正七年に現在の南向きになおしたという。

阿久沢倉造家（写真―1）の平面は図―1のようであり、桁行方向に二室ならべたものである。上手（かんて）の室を「コザ」といい「トコ」を二つ備えている。下手（しもて）の室は「ザシキ」と呼び、室のほぼ中央にイロリを設け、裏側には「オシイレ」と「ブツダン」を備え、この前面上部に横板を渡し神棚としている。



阿久沢倉造家

二間取型の民家
（復原平面・断面図）

当家は阿久沢一郎家の分家という。即ち、当家は、本家（阿久沢一郎家）から親が二男をつれて隠居に出たのを始まりとすることから、屋号を「ウチデノインキョ」といい、次のような系譜になる。

初代（新左衛門）→二代（定右衛門）→三代（新左衛門）→四代（菊三郎）→五代（新次郎）→六代（清次郎）→七代（倉造）

市之関には一七戸の阿久沢姓があり、昔は皆一家だったという。そして一之関における阿久沢一族の禁忌作物はゴマであり、そのいわれについて次のように伝えている。

大先祖は阿久沢能登守と伝え、ある時戦に参加したが、ゴマの切株で負傷した。それ以来阿久沢一族はゴマを作らない習わしであるという。話の内容は大変古く、戦国時代にまで溯る。筆者のこれまでの経験によれば、古い伝統を持つ農家の場合、何らかの禁忌を今日でも守っている場合が多い。そしてこの禁忌の中に、その家の遠い昔の一端を偲ぶことができるのである。

七、広間型の民家

ここでとりあげた二十四棟の調査民家中、広間型に属す遺構は五棟であった（表―2参照）。

これら五棟を、痕跡にしたがって建造当初にもどした復原平面図・復原断面図は図―2のようである。

大崎身知男家（写真―2）は柏倉の七屋敷の一つといわれ、柏倉に住みはじめた最初の七戸のうちの一戸といわれている。この七戸は当家の他に阿久沢秀雄家・大崎又十郎家・入沢恒雄家・大崎一男家・寄居の木村家の住む屋敷・阿久沢カズエさんの住む屋敷であるという。

大崎身知男家の建造当初の規模は梁間四間、桁行八間半余りであった。上手の表側に「コザ」裏側に「ヘヤ」を配し、この両室は丁度棟の真下で土壁によって仕切られている。

「コザ」は正式な客室、あるいは冠婚葬祭時に主室として使われる室であるが、表側の半分を土壁にし、他を板戸二枚障子を嵌め込む古い方式としている。「ヘヤ」は「コザ」と同じ二間四方の大きさにされ、「ザシキ」の裏側寄りに開いた半間の出入口以外を総べて土壁で閉鎖している。「ヘヤ」の用途は寝室であったから、このように土壁で囲った方がその機能にマッチしていたものであろう。

「ザシキ」の表側は現在中柱を取り除き、かつ「コザ」と「ザシキ」境にたつ柱の表面に板を打ちつけている。このことから「ザシキ」は表側の半分を土壁にしていた可能性もある。しかし、それを確認できなかったので復原図では「ザシキ」の表側上手寄りを点線で表わしておいた（図―2参照）。

「ザシキ」は表側から裏側まで続く広々とした一室空間とされ、中央よりやや裏側へ寄った土間（ダイドコと呼ぶ）側に「イロリ」を設けていた。「ザシキ」では「イロリ」を囲んで家族の団らんや食事が行なわれた。しかしまた穀物の収穫時期になると、土間と一体になって使われたり、藁仕事などもこの室で行なわれた。即ち脱穀は土間で行なわれ、たくさんたまった籾は一時「ザシキ」に山積みされた。「ザシキ」に山積みされた籾はここから庭へ運ばれて天日乾燥され、乾燥した籾は再び「ザシキ」に山積みし、これを土間で籾摺して俵に詰めたのだという。さらに養蚕の時は「ザシキ」と「コザ」及び「ダイドコ」を主に使用したという。以上のように広間型遺構における「ザシキ」の機能は一面において家族の食事や団らんを司るという居住空間でありながら、他面では作業のために欠くことのできない重要な空間であった。

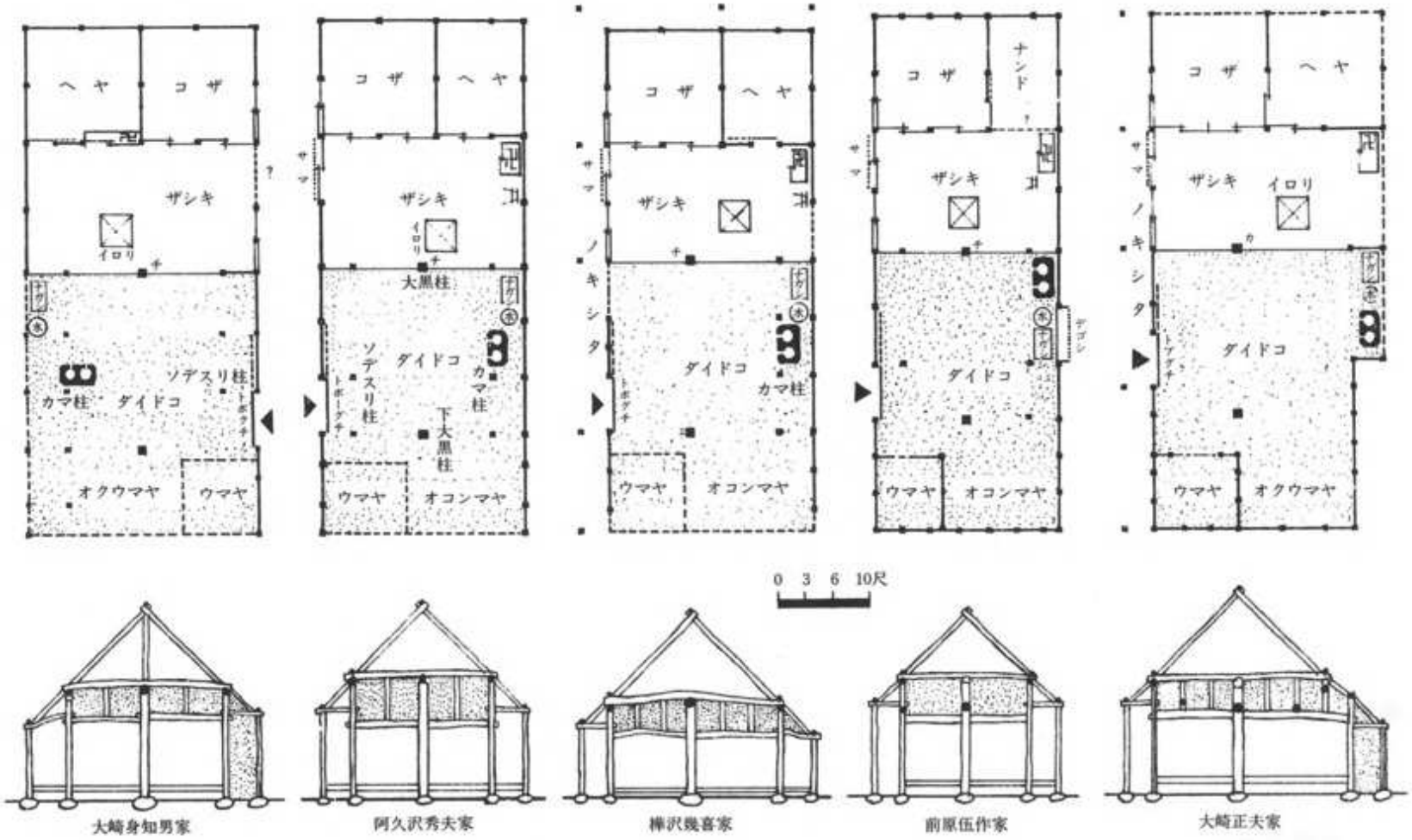
広間型遺構における「ザシキ」の機能はいわば居住空間兼作業空間であったのだ。そして「ザシキ」での作業は土間と一体となって行なわれる性格の強いものであったため、「ザシキ」と土間との境は建具を嵌めず、開放にするのが広間型遺構の特徴である。

土間をみると上屋柱の省略がほとんどなく「トボーグチ」の近くに「袖摺柱」を残し（写真―3）、これと対応する裏側には「釜柱」も残している（写真―4）。この両柱をそろって残している家は村内においても当家と、阿久沢秀夫家の二棟だけであり、極めてめずらしく住居史上貴重な遺構といえる。

構造をみると二重梁の使用がなく、架構は単純でサス組内に棟束をたてている。以上のような各種の建築的特徴等から推察して、当遺構の建造年代は阿久沢秀夫家と同じ頃、あるいは阿久沢秀夫家より少し溯る時期とも考えられる。しかしここでは建造年代を明らかにする具体的資料に欠けるので、一七世紀末期頃に建造された遺構とみておけば妥当であろう。

阿久沢秀夫家（写真―5）も大崎身知男家と同様に極めて古い建築的特徴を示している。

当家の先祖は安部頼時の二子、宗任の後裔と伝え、江戸時代初期の



図—2　広間型の民家（復原平面・断面図）

頃より当地で永代名主を務めた家柄である。屋根は茅葺寄棟造りで軒を低く葺き下しているため、建物全体をおおう屋根は大変大きく感じる。これは古民家の示す外観の共通した特徴である。この他に古民家の外観にみられる著しい特徴は、開口部が極めて少ないことである。即ち、当遺構では「ダイドコ」への出入口である「トボーグチ」と「ザシキ」表の「サマ」と「コザ」表に建具の入った幅一間の開口部があるだけで、外まわりはほとんど土壁で閉鎖されている。恐らく雨天の時など昼でも屋内は薄暗く、夏は蒸し暑かったであろう。

このように日本の古い民家は、地方差を問わず閉鎖的であり、一般に古い遺構ほど閉鎖性が強くなる。

今日、日本の民家は古来より開放性が強く、各柱間には壁のかわりに障子や襖などの建具を入れて、夏はその建具を開放して蒸し暑さを避けてきたのだと、多くの人々に理解されているようである。しかし、これは全く誤った認識であり、民家が今日のように開放的な間取になったのは一九世紀以降のことである。なお、当遺構は一七世紀末期頃に建造された古い民家として、昭和四十五年に国の重要文化財に指定されている。

樺沢幾喜家（写真―6）はその後取り壊わされてしまったので現存しない。当遺構は表側の上屋柱に外壁をつけ、この外側を「ノキシタ」にしているため、「ダイドコ」に「ソデスリ柱」が露出しない。しかし「ダイドコ」の裏側では「カマ柱」を残していた。当遺構は建造年代についての記録を残していなかった。しかし、当地に落ち着いた大先祖（初代を指す）が建造したものと伝えていた。当家に残されていた位牌によれば、初代の大先祖は元文元年（一七三六）に没していることから、当遺構の建造年代は一八世紀初期頃とみておけば妥当であろう。

前原伍作家（写真―7）は当地における前原姓の大本家と伝え、江戸時代初期の頃より前原の姓を名乗っている。当家に伝わる古い位牌三つをあげると次のようである。

「心月英安大姉霊位」貞享五戊辰三月十六日、七良兵衛母。

「映槿道哲居士」宝永四丁亥九月八日、五左衛門。

「薬散妙保大姉」延享二丁酉年正月初王日、前原七郎兵衛ツマ

当家は遺構の建造年代についての記録やいい伝え等を一切残していない。しかし復原された建築の原形にみる各種特徴等から、当遺構の建造年代は一八世紀初期頃とみて妥当であろう。

大崎正夫家（写真―8）は調査した広間型遺構中で、最も新しいものであった。当家は大崎又十郎の分家というが、いつ頃分家したか全くわからないという。江戸時代は名主を勤めたこともあるといい、正面に立派な門を構える。

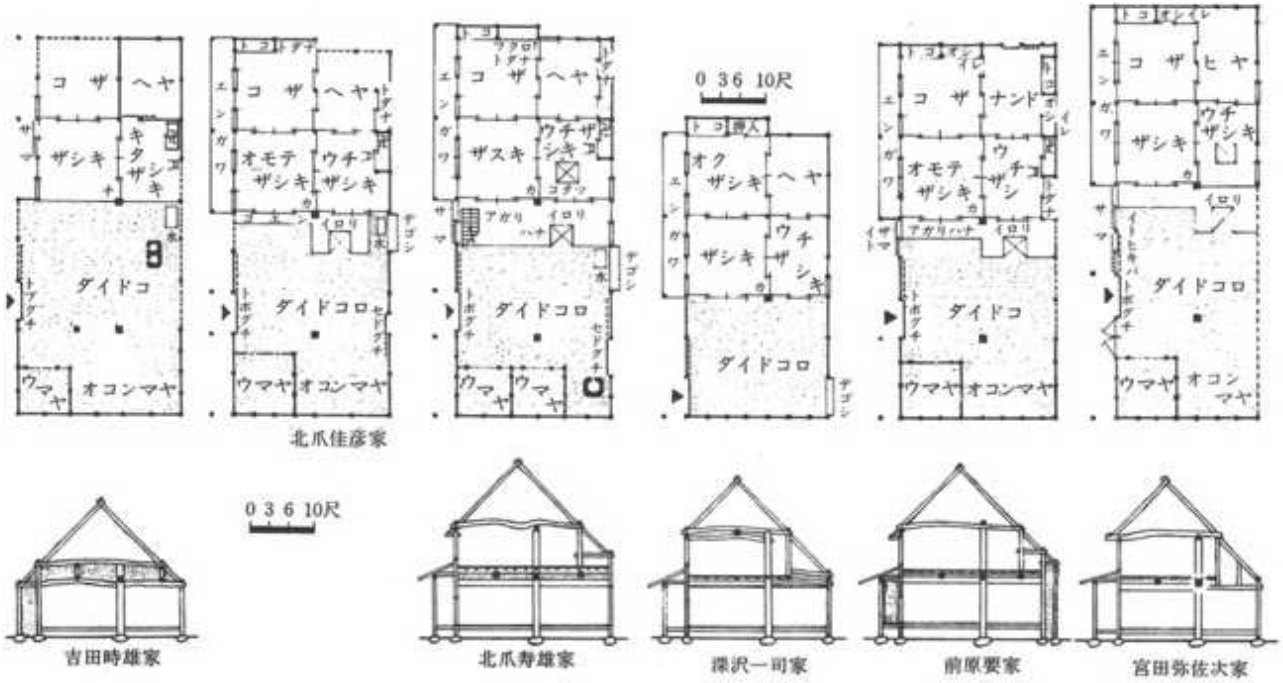
当家の平面をみると「コザ」の表側では半分を土壁とし、「ザシキ」表には「サマ」を残しているなど古い特徴を残している。しかし「ヘヤ」と「コザ」境は半分を開放して建具を嵌め、大黒柱をカンナで仕上げているなど新しい手法もみられる。当家も建造年代についての記録・伝承等を残していない。そこで復原された建築にみられる各種特徴より推察すると、当遺構の建造年代は一八世紀中期頃とみて妥当であろう。

八、不整形田字型の民家

表―2に掲げた二十四棟の調査民家中、この形式に属する遺構は六棟（25％）であった。

吉田時雄家（写真―9）は現在中央部の屋根を幅三間にわたって突き上げ、屋根裏を利用している。しかしこれは後の改造によるもので、当初は屋根裏を利用できなかった。

当家は不整形田字型の中で最も古い遺構とみられたもので、「ヘヤ」は閉鎖性が強く、「ザシキ」表に「サマ」も残している。



図―3　不整形田字型の民家（復原平面・断面図）

土間寄りの室は表側を「ザシキ」、裏側を「キタザシキ」と呼んでいる。しかし一般的には裏側を「ウチザシキ」と呼ぶ場合が多い。

「キタザシキ」は家族の居間であり、食事室に使われ、「ザシキ」はふだん軽い来客の応待に使われる室であるが、穀物の収穫期になると脱穀した籾を「ザシキ」に山積みし、ここから庭へ籾を運び出して天日乾燥し、乾燥した籾を再びこの室に山積みし、「ダイドコ」で籾摺りして俵に詰めるのだというから、広間型の「ザシキ」と同様な使い方である。

当遺構では「ザシキ」・「キタザシキ」とも「ダイドコ」との境に建具を嵌めていなかった。この大きな理由は両室とも広間型の「ザシキ」のように「ダイドコ」との関連が相変らず強かったことを示す証拠であろう。

構造をみると架構は広間型遺構に似て、極めて単純である。しかし大黒柱が棟下から遊離し、「ザシキ」と「キタザシキ」の間仕切線上に据えられるようになるのが大きな相違点である。従って「下大黒柱」も大黒柱に対応して、棟下から裏側へ移行しているのを特徴とする。

広間型の大黒柱と下大黒柱をみると、いずれも棟の真下に据えられている。これはさらに溯れば大崎身知男家のように大黒柱や下大黒柱上に棟を支持する棟束を支えていたことに関連するものであり、いわば構造的に棟下に配置されなければならない理由を持ち合わせていたのである。しかし、不整形田字型になると大黒柱や下大黒柱は構造的な意味よりもむしろ間仕切の都合によって、間仕切線上に配置されるようになるということである。

吉田家の初代は北爪の姓であったが、夫婦養子になり吉田の姓を名乗るようになったという。そして当主時雄さん（大正三年生）で六代目になるが、遺構は二百年以上前に建ったものといい伝える。復原された建築の各種特徴等から、当遺構は一八世紀初期頃の建造とみておけば妥当であろう。

なお、当家は屋号を「イケノシリノホンケ」といい、禁忌作物は「キューリ」であるという。しかしその理由は明らかではない。

北爪佳彦家（写真―10）は現在総二階造りにしている。しかしこれは昭和五年に改造したもので、それ以前は赤城型の屋根形式であったという。当家の初代である房右衛門（寛政十二年三月三日生）は前述の阿久沢秀夫家で生れた人であるという。二男であったため、当家の裏の家（本家に当る）に婿養子に来て、さらにその後当地に分家したものといい、明治十二年一月三十一日に七十九歳で没している。

当家には表紙に「新宅之日記」、裏表紙に「文政七甲、歳十二月廿三日、西柏倉村北爪房右衛門」と墨書された家作に関する古文書を残している。この文書から当遺構は文政七年（一八二四）に建造されたことを知ることができた。

北爪寿雄家（写真―11）は草葺の赤城型屋根（地元の人は「切りあげ屋根」と呼ぶ）で初代の人が造ったものという。初代の人の位牌には次のように記されている。

表…「大聖仁哲寿翁居士霊位、嘉永三庚戌年八月廿九日」
裏…「北爪岩右衛門享年八十三才」

このことから当遺構は一九世紀初期頃に建造されたものとみておけば妥当であろう。なお当家は江戸時代に組頭を勤めた家といい伝える。表側の軒裏を〝セガイ造り〟[2]にしているのはそのためであるとみてもよいであろう。

当家は母屋の西南部に「トオデエ」とよぶ小さな平家の建物を残している。現在屋根を瓦葺入母屋造りとしているが、当初は草葺であった。内部は「トコ」に天袋付の「タナ」を備えた八畳の室を南北二室並べ、この二室を囲むように北・東・南側に縁側を廻し、土間を設けていない。

この建物は主に隠居に使ったということであるが、室内の造りの豪華なことから、上層農民の間に流行した来客接待のための離れ座敷と

みた方がよいであろう。今回の調査でも「トオデエ」のある家を数例調査することができた。しかし母屋と「トオデエ」の両方共草葺にしている家は松村正一家（柏倉）の一例だけであったので、特に写真を掲げておいたので写真―12を参照されたい。（松村家は時間の余裕がなく写真撮影だけに終ってしまった）。

北爪寿雄家は今でも屋号を「シンタク」と呼び、禁忌作物はトウモロコシであるといい、現在でもトウモロコシを作らないという。その理由は先祖がトウモロコシ畑で負傷したからだといい伝えている。

深沢一司家（写真―13）は草葺総二階造りでありながら土間にウマヤを設けていないめずらしい農家遺構である。深沢家の初代は明治六年生の新次郎だが、新次郎の入居する前から当遺構は存在し、新次郎は屋敷と遺構を買って入居したものという。したがって当家には遺構の建造年代を示す記録や伝承等を一切残していない。しかし復原された建築の各種特徴等から一九世紀中期頃に建造された遺構とみておけばよいであろう。

前原要家（写真―14）は現在屋根の前面を幅六間にわたって切りあげている。しかし痕跡によれば建造当初の切りあげ幅は三間であった。「トボグチ」の左手には幅一間の「イトザマ」を設け、この内側で糸ひきをしたという。当遺構はいい伝えによれば天保十四年九月十三日生の弥一郎が七歳の時建造したというから、嘉永二・三年頃の建造ということになり、復原された建築の各種特徴からみてもいい伝えの通りと考えてよいであろう。

宮田弥佐次家（写真―15）は不整形田字型遺構の中で最も新しい建築的特徴を示す遺構であった。例えば「コザ」や「ザシキ」表をはじめ各室境では中柱[33]を省略して差鴨居を多用し「トボグチ」の上手はすべて「イトザマ」にし、ここより採光して「ダイドコロ」内を明るくすると同時に、「イトザマ」の内側を「イトヒキバ」と呼んで、ここで盛んに糸ひきをしたということである。

ここで不整形田字型における各室の使われ方を総括して述べておこう。

まず「コザ」は「イチゲンザシキ」とも呼ばれ、冠婚葬祭時の主室となるもので、主客は「コザ」に招かれる。したがって嫁・仲人・イチゲン客や神主・僧侶などは「エンガワ」からいきなり「コザ」に上る習慣であるという。

「コザ」の裏室は「ヘヤ」・「ナンド」・「ヒヤ」などと呼ばれるが、「ヘヤ」と呼ぶ家が最も多かった。この室は普段、家族の寝室に当てられている。しかしお産をする時や死人の湯灌をする時も「ヘヤ」で行なうのが習わしであるというから、この世に生れ出る時と、この世を去る時に「ヘヤ」が重要な役割を果す空間に当てられているわけである。

「コザ」の下手の室は「ザシキ」・「オモテザシキ」・「ザスキ」などと呼ばれるが、「オモテザシキ」と呼ぶのが適当であろう。一九世紀初期あるいはこれ以後の遺構になると、「オモテザシキ」は土間との境に建具を嵌めるようになり、大黒柱も土間側に逃げて据えられるようになる。これは建造当初から「オモテザシキ」に畳を敷き詰めることを考慮したものであり、「オモテザシキ」を作業空間でなく、居住空間として強く意識している証拠であろう。事実のところ冠婚葬祭時や多勢の寄り合などの場合は、「コザ」と「オモテザシキ」境の建具を取り払って、「コザ」と「オモテザシキ」を一体にして使用するのである。ここではすでに「オモテザシキ」は「コザ」に付随した接客空間と化しているのである。即ち不整形田字型の新しい遺構における「オモテザシキ」は以前のように養蚕や穀物の収穫期には作業空間として使われたこともあろう。しかしそれは作業よりも接客の行為を強く意識した居住空間として位置づけられているところが、広間型や不整形田字型の古い遺構である吉田時雄家の「ザシキ」の機能と異なるところである。

「ウチザシキ」の当初の機能は家族の居間であり、食事室であった。そのため不整形田字型の古い遺構では、ここに「イロリ」が設けられた。しかし新しい遺構になると土間に板張床を張り出し、ここに「イロリ」を設けるようになる。そして「イロリ」の裏側寄りの少し広くとられた板張りのところで食事をするようになる。こうなると「ウチザシキ」の機能は純然たる居間であり、家族のためのチャノマとなり、やがてここに「コタツ」が設けられるようになるのである。そして「ウチザシキ」では常に仏と神が家族の団らんを見守っているのである。

最後に不整形田字型遺構は広間型から生成したと考えられるので、その根拠をここで述べておく。

まず不整形田字型の中で最も古い遺構であった吉田時雄家をみると、多くの点で広間型遺構に類似した特徴を示しているので、それらの主な点をあげると次のようである。

① 「ヘヤ」が極めて閉鎖性の強いこと。
② 「ザシキ」・「キタザシキ」とも土間側に建具を嵌めないこと。
③ 大黒柱はチョーナ仕上げで逃げもないこと。
④ 屋根裏利用を考えていないこと。
⑤ 「ザシキ」表に「サマ」を残していること。

また、広間型では大黒柱を棟の真下に据えたが、広々とした「ザシキ」を前後の室に二分する際に、「コザ」と「ヘヤ」境の間仕切線の延長上に大黒柱を移行して長者柱と対応するように据えれば、不整形田字型が実現する。即ち不整形田字型の古い遺構は広間型と同様な特徴を多数有し、かつ「ザシキ」を二分するために大黒柱を間仕切の都合に合わせて少し棟下より裏側へずらしたものとみられるのである。

以上の諸点から不整形田字型は広間型をその前身型とし、これから生成した形式であると推察する。

九、田字型の民家

二十四棟の調査民家中、この形式に属する遺構は六棟（25％）で、それらの復原平面図および復原断面図は図―4のようである。

松村忠次郎家（写真―16）は六棟の田字型遺構中で最も古いものである。

「ザシキ」表に「サマ」を残し、大黒柱は棟の真下に据えられ、土間側に逃げていないのも古い特徴である（写真―30参照）。当遺構は現在前面の屋根を突き上げている。しかしこれは後の改造によるもので、建造当初は開口高（床から桁下まで）三尺五寸の低い赤城型であった。

当家はすぐ裏の本家から分家したものというが、いつ頃の分家か、また遺構はいつ頃建造されたのか全く不明であるという。しかし復原された遺構の原形の示す各種特徴等から、当遺構は一八世紀末期頃に建造されたものと推察する。

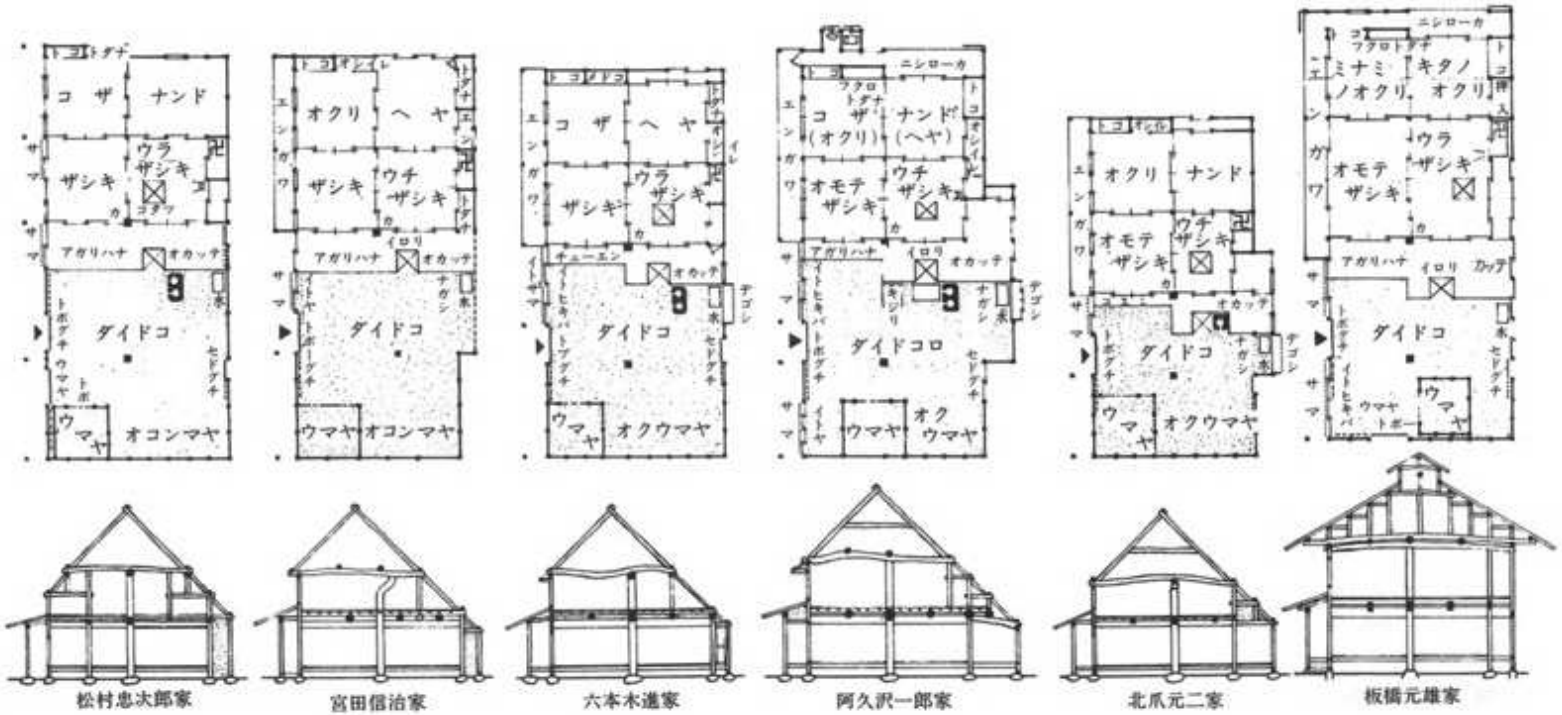
宮田信治家（写真―17）は建造年代についての記録・伝承等を一切残していない。しかし復原された建築の示す各種特徴等から一九世紀中期頃に建造されたものとみておけば妥当であろう。

六本木進家（写真―18）は「トブグチ」の上手（かみて）二間を「イトザマ」と呼ぶ格子棒を嵌めた窓とし、この内側を「イトヒキバ」といって、ここで「糸ひき」をしたのだと伝える。各室境の間仕切部では差鴨居の多用が目立ち、建築手法も進んだものがみられる。

当家には安政五年十二月十日の普請帳を残していることから、遺構は安政六年（一八五九）に建造されたものとみておけばよいであろう。

阿久沢一郎家（写真―19）はその昔、六本木の姓であったという。いい伝えによれば戦国時代の黒保根城主阿久沢能登守の娘が、当家に嫁に来て以来、六本木姓を阿久沢姓に改め、現在に至るのだという。

屋号を「ウチデノホンケ」といい、江戸時代は名主役を勤めた家柄



松村忠次郎家　宮田信治家　六本木進家　阿久沢一郎家　北爪元二家　板橋元雄家

であり、禁忌作物はゴマであるというから阿久沢倉造家と同様である。

遺構の建造年代は明治四年と伝えているので、復原された建築の各種特徴等からみてもこのいい伝えの通り、明治四年に建造されたものとみてよいであろう。

北爪元二家（写真―20）の周囲には現在でも堀がある。この堀は当家とその西にある二軒の計三軒の屋敷にまでめぐっており、戦国時代の城跡であるという。当遺構は三代前の増平さん（明治十二年生）が腹の中にいる時建造されたものと伝えるから、明治十二年の建造とみておけばよいであろう。

板橋元雄家（写真―21）は田字型遺構の中で、最も新しいものであった。各室の境や建具の入る間仕切部ではすべて差鴨居を使用し、総二階造りとして屋根を切妻造りの板葺にしている（現在は鉄板葺）。「トボグチ」の左右を土壁でなく「サマ」とし、「ウマヤ」を裏側へ寄せて、「ウマヤ」前面にできた広い空間を「イトヒキバ」にしている。「イトヒキバ」の前面は「イトザマ」と呼び窓台を低い位置に据え、座繰りで糸を引く場合、なるべく手もとが明るくなるように配慮している（写真―22）。

当遺構は今から逆算して丁度八十年前に四代前の隼次さんが建てたというから、明治三十三年に建造されたことになる。

田字型民家における各室の使われ方は、不整形田字型の新しい遺構の場合とほとんど同様である。「ダイドコ」のウマヤ裏の「オクウマヤ」と呼ばれるところは、俵を積んでおいたり、味噌樽や醤油樽を並べて置いたところである。

田字型民家は一九世紀中期以降の比較的新しい遺構に多く見受けられ、建築にみられる各種の特徴も不整形田字型より新しいものを持っていた。このようなところから田字型は不整形田字型における裏側の二室（ヘヤとウチザシキ）が、表側の二室と同じ広さに発展することによって生成した形式と考えられる。そして、田字型は近世における一般本百姓層の完成された平面形式であるとみてよいであろう。

十、多間取型の民家

四室より間取の多い遺構を多間取型と仮称したのであるが、この形式に属する遺構は六棟（25％）であった。六棟の復原平面図および復原断面図は図―5のようである。六棟のうち江戸時代に建造されたとみられる四棟は、すべて名主および永代名主の家柄であることから、多間取型遺構は村の中でも特別な有力農民の住居として位置付けられよう。

上野丑之助家（写真―23）は現在瓦葺総二階になっているが、昭和三十年まで草葺の切り上げ屋根（赤城型）であったという。当家は当主で九代目になるといい、初代からの系譜は次のようである。

①文右衛門貞家→②新六郎正友→③麻七郎→④文右衛門充雄→⑤文右衛門貞雄→⑥文右衛門具雄→⑦古文治→⑧富太→⑨丑之助

遺構は三代目の麻七郎（安永七年六月五日没）が建てたといい伝えている。復原された建築の原形の示す各種特徴等から推定して、また階層差を考慮に入れた上で一八世紀末期頃に建造された遺構とみておけば妥当であろう。

北爪政則家（写真―24）は江戸時代初期の頃から剣道の名門道場として、上州一円に知れわたっていた。前橋市飯土井町にある石綿益太郎家（江戸時代大名主を勤めた）の先祖儀八富章は宝暦八年（一七五八）、当北爪道場から剣道師範の免許皆伝を受けた[5]。その後儀八富章は前橋藩の剣道指南役に登用され、多くの門人を育てたという。

北爪家は代々当主の名を与市右衛門といい、神道流・荒木流・一伝流の奥義を伝え、文化・文政のころは門人三百余人におよんだという。

当遺構は政則氏の話によれば道場を兼ねて造られたものといわれ、

土間（ダイドコ）は道場に使われたため特に広く造られているという。平面図（図―5）をみると下大黒柱を特に妻側に寄せて、大黒柱と下大黒柱間をできるだけ広くとろうとしている意図が窺われるのはそのためとも考えられる。そしてこの土間で多くの門人が汗を流し、剣の道を極めたという。

当主政則氏になって道場を閉鎖し、剣の道と縁を断ったが、戦前までは見知らぬ人達が聞き伝えに剣をたずさえて訪ねて来たという。

道場を兼ねたという母屋は草葺入母屋造赤城型の西に十畳の「デエ」（平家）を付けているため、棟は高い部分と低い部分の二段構えになって、風格のある変化に富んだ外観をみせている。恐らく平家部分の「デエ」は道場主が来客と謁見する時に使った、対面の場（現代的に言えば応接間）であったと考えられる。「デエ」にトコを設け、長押をつけて他の室より特に念入りに造作しているのはそのためであろう。

遺構は建造年代についての記録や伝承等を残していない。そこで復原された建築の原形の示す各種特徴等から推察すると、一九世紀初期頃に建造されたものとみておけば妥当であろう。なお、当家の禁忌作物はキュウリというが、その理由は明らかでない。

東宮惇允家（写真―25）は永代名主といい、立派な門と屏をめぐらした豪華な屋敷構えに往時を偲ぶことができる。屋号を「シマヤ」あるいは「クサワケノヤシキ」ということから、当家は当地に落ち着いた最初の家であったとみられる。[6] また、当家は旅籠もしていたというから「シマヤ」の屋号はその時のものであろう。なお当家には江戸中期の尊王論者である高山彦九郎も宿泊しているという。

遺構は二階の柱に棟札を打ちつけていたので、これをはがしてみると次のような墨書を認め、建造年代と大工棟梁名を知ることができた。

「享和三癸亥年四月吉辰、棟梁北爪浅右エ門正明、当所八代住東宮佐次右エ門正喜」

この棟札によって当遺構は享和三年（一八〇三）に建造されたことが明らかとなった。

トボグチの上手（かみて）は低い位置に窓台を入れた「イトザマ」になっている（写真―26）ことから、この内側で「糸ひき」が行なわれたものであろう。

星野栄一家（写真―27）は昭和四十三年に取り壊わされてしまって現存しない。当家に残る位牌によれば初代は星野正定といい、貞享二年（一六八五）七月に没していることから、江戸時代初期の頃より当地に居住していたものと考えられる。また、江戸時代には名主役も勤めていた家柄という。

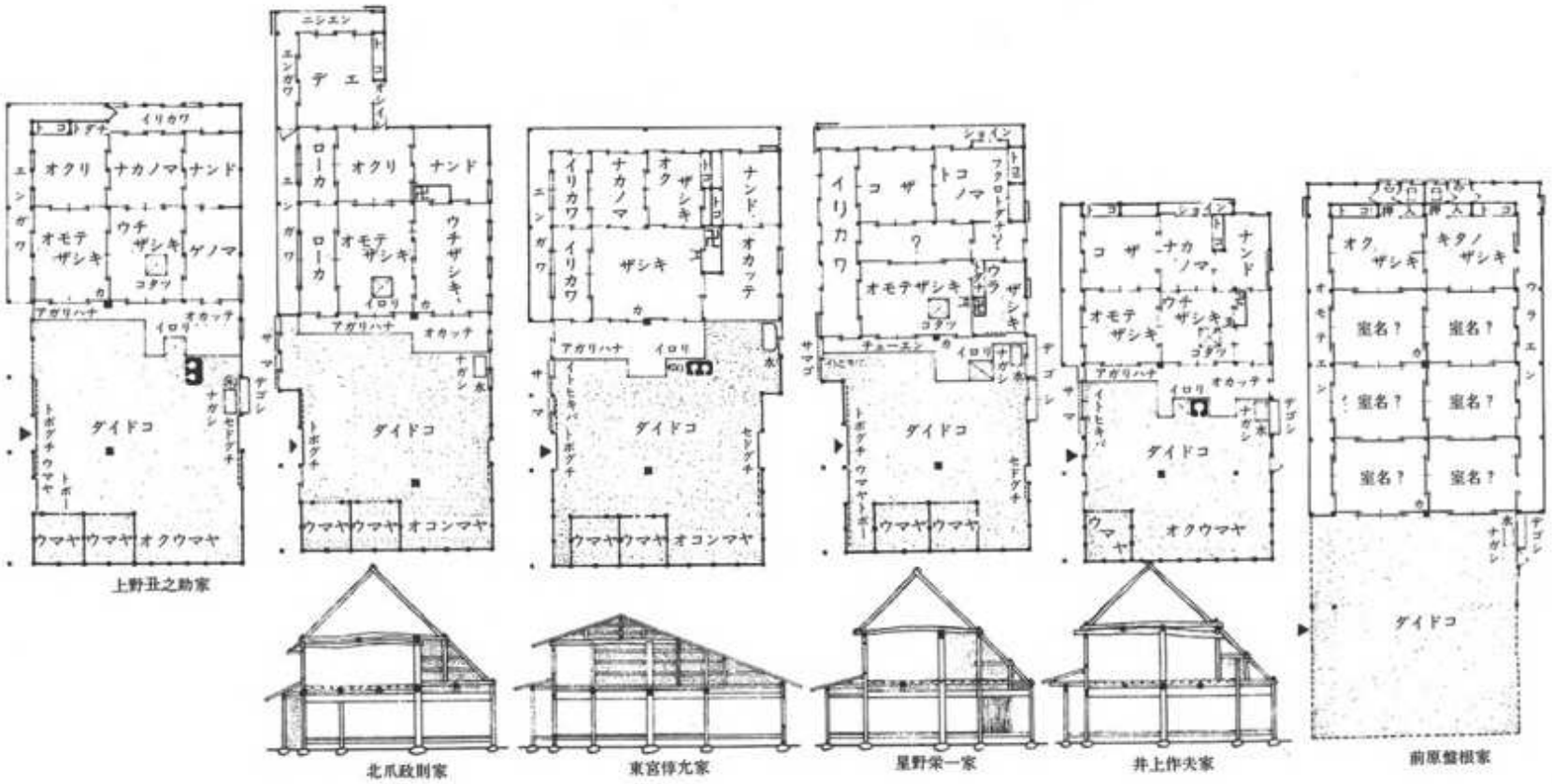
図―5に掲げた遺構は「トコノマ」に正式な書院である「付書院」を備え、前面の軒裏を「セガイ造り」にしている。これらのことは江戸時代、一般農民に許されなかった設備であるので、いい伝えの通り名主を勤めていた家柄とみてよいであろう。

当遺構は建造に関する記録類や伝承等を一切残していなかった。しかし、復原された建築の各種特徴等から一九世紀中期頃に建造されたものと推定される。

井上作夫家（写真―28）は入母屋造りの赤城型屋根とし、棟には養蚕時における換気のための「ヤグラ」をのせている。近くの八幡様のお祭りは十五夜の晩に行なわれ、井上一族でとりしきるのだという。当家の屋号は「カシヤノホンケ」といい、禁忌作物はキュウリであるという。

遺構は建造時の棟札を残しており、これに「明治五年壬申三月造之」と墨書されていることから、当遺構は明治五年に建造されたものであることが明らかとなった。

前原盤根家（写真―29）は木造切妻造り三階建で、調査遺構中最も新しい養蚕農家造りの民家建築であった。当家は屋号を「至誠館」といい、昭和十八年まで蚕種業を営んでいた。最盛期には五十数名の人が当家で働き、番頭四人、女中二人を常時雇っていたという。



図―5　多間取型の民家（復原平面・断面図）

遺構は現在土間の妻側を三間半ほどもぎとってしまっているが、木造三階建の大建築に最盛期の養蚕農家の面影をしのぶことができる。なお、この遺構は二代前の勝馬という人が大正五年に建造したものという。

十一、柱の名称

図―6に掲げたように土間（ダイドコ）の妻寄りにたつ柱1を「下大黒柱」と呼び、2の柱を「大黒柱」と呼ぶ。床上の中心にたつ柱3は「長者柱」といい、縁側の中央にたつ柱4を「テントー柱」と称する。

「トボグチ」のすぐ内側に建つ柱5と、これと対応して土間の裏側に建つ柱6は主に十八世紀初期以前に溯る特別古い遺構でないとみられない柱で、5の柱を「袖摺柱」といい、6の柱を「釜柱」と呼ぶ。そして「釜柱」には釜神様を祀っている場合が多い（写真―4）。

なお、一九世紀初期以降の比較的新しい遺構になると、「トボグチ」の上手に低い位置から開放した格子棒の入った窓を設け、これを「イトザマ」と呼び、この内側で「糸引き」をしたのだという家が多かった。そしてここを「イトヒキバ」あるいは「イトヤ」と呼んでいる例が多かった。（図―6参照）。

(1) 群馬県教育委員会編「群馬県の民家」

(2) 外側の柱頭部から長さ一～二尺程度の腕木を出し、これに板を張って軒裏に小天井を造り出したものをいう。建物が立派にみえるため江戸時代は一般の百姓に許されていなかった。

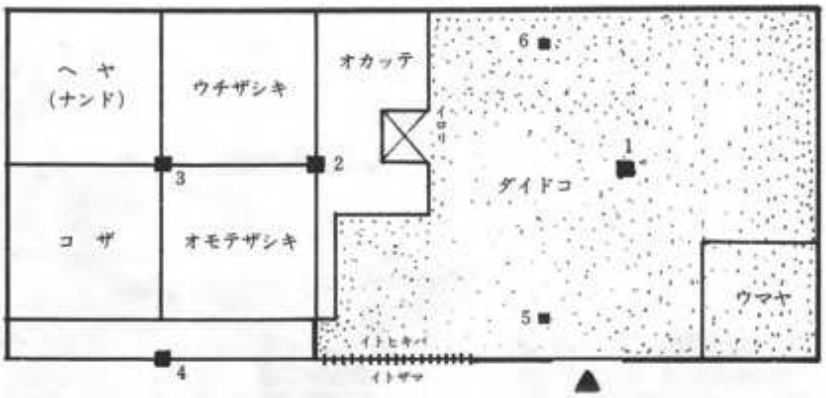
(3) 間仕切の中央にたつ柱を「中柱」という。

(4) 床上四室の接点にたつ柱を当地方では「長者柱」と呼ぶ（図―6参照）。

(5) 石綿家は今でも当時の免許皆伝書を大切に保存している。

(6) 最初に土着し、土地を開墾した家のことを「草分」といい江戸時代は特に尊敬された。

(7) 「テントー柱」には七夕様の竹飾りをゆわえて七夕祭りをし、十三夜、十五夜の時はそれぞれ十三本あるいは十五本のススキを花瓶に差してこの柱の近くに進ぜ、さらに柿・大根・サトイモ・栗など秋の収穫物を「ミ」に入れ、饅頭といっしょにやはりこの柱の近くに進ぜるのだという。



図―6　柱の名称図
1：下大黒柱
2：大黒柱
3：長者柱
4：テントー柱
5：袖摺柱
6：釜　柱

〔写真―1〕阿久沢倉造家（市之関）

〔写真―2〕大崎身知男家（柏倉）

〔写真―3〕大崎身知男家の袖摺柱、トボグチのすぐ内側にたつ。

〔写真―4〕大崎身知男家の釜柱、柱に釜神様のお札を貼っている。

〔写真－5〕阿久沢秀夫家（柏倉）

〔写真－6〕樺沢幾喜家旧母屋

〔写真－7〕前原伍作家（苗ケ島）

〔写真－8〕大崎正夫家（柏倉）

〔写真―9〕吉田時雄家（鼻毛石）、屋根中央の突き上げた後の改造による。

〔写真―10〕北爪佳彦家（柏倉）

〔写真―11〕北爪寿雄家（鼻毛石）

〔写真―12〕松村正一家（柏倉）、左の小さな建物が「トオデエ」である。

〔写真—13〕深沢一司家（鼻毛石）

〔写真—14〕前原要家（柏倉）

〔写真—15〕宮田弥佐次家（鼻毛石）

〔写真—16〕松村忠次郎家（柏倉）

〔写真—17〕宮田信治家（大前田）

〔写真—18〕六本木進家（柏倉）

〔写真—19〕阿久沢一郎家（市之関）

〔写真—20〕北爪元二家（柏倉）

〔写真—21〕板橋元雄家（三夜沢）

〔写真—22〕板橋元雄家の「イトザマ」

〔写真—23〕上野丑之助家（苗ケ島）

〔写真—24〕北爪政則家（鼻毛石）

〔写真—25〕東宮惇九家（苗ケ受）

〔写真—26〕東宮惇九家の「イトザマ」

〔写真—27〕星野栄一家旧母屋（苗ケ島）

〔写真—28〕井上作夫家（馬場）

〔写真—29〕前原盤根家（苗ケ島）

〔写真—30〕松村忠次郎家の大黒柱、大黒柱は間仕切の中心線上に据えられている（古い遺構の特徴である）。

〔写真—31〕阿久沢一郎家の大黒柱、この大黒柱は間仕切の中心線よりダイドコ側に逃げて据えられている。これを大黒柱の逃げがあるといい、新しい大黒柱の特徴である。

る

ルスンギョウ ……182

れ

令眠 ……66
変愛結婚 ……165

ろ

労力小作 ……53
六三除け ……120,122,128,131
六尺ぎもん ……10
六尺ふんどし ……14
六地蔵 ……154
六道銭 ……174
六文銭 ……174
ロソウ ……68

わ

ワカ隠居 ……98
若い衆 ……92,169
若衆組 ……85
若水 ……186
若宮八幡 ……216
若餅 ……103,187,191,197
分かれ霜 ……203
若連 ……163
和讃 ……179
早生十文字 ……68
わたいれ ……13
綿くり ……16
ワタリガユ(小豆粥)……38
わらじ ……19,77,174,175
ワラジ銭 ……80
わらじぬぎ ……86,101
わら仕事 ……78
わら正月 ……196
わらぞうり ……19
ワラヅト ……177
藁鉄砲 ……214
ワラビ ……24
ワラ葺 ……9
ワラ葺屋根 ……10,38
ワラブトン ……46
わらみや ……59
わら餅 ……24
割りはん ……31
ワリメシ ……27
ワンナ ……149

モノビ ……21,27,75,213
もみぬか ……83
木綿 ……51
モモヒキ ……13,14
ももわれ ……20
もりっこかぶり ……19
もりっこばんてん ……16
モロコシ ……47,51
モロコシ粉 ……32
モロコシネジ ……26
もろこしだんご ……26,27
もんつき ……11
モンヅケ(遊び) ……149
もんぶく ……12
モンペ ……13,14

や

ヤエバサミ(八重挟み) ……126
ヤカガシ ……198,199
焼き穂 ……34
焼きまんじゅう ……30,31,213
ヤキモチ ……21,25,26,76,77
やきもち観音 ……212
ヤキヌカ ……65
八木節 ……123,142,211
厄落し ……152,163
ヤクザ ……165
ヤクザヨメゴ ……64
薬師様 ……212
厄年 ……92,152,163
厄年子 ……122,162
厄日 ……186
厄病神 ……120
ヤグラ ……247
ヤケゴウロク(焼合力) ……90
やけど ……125,129,131
やけっぺ(やけど) ……43
ヤケヤ(焼家) ……195
八坂様 ……113
八坂神社 ……112,206
屋敷稲荷 ……59,116,159,160,200,215
屋敷内の神 ……35
屋敷内植物 ……127
屋敷神 ……33,35,59,101,107,116,215,216,217
屋敷取り ……33
屋敷祭り ……204
屋敷林 ……33,34
ヤシボ(湿地) ……24
ヤシャの木 ……134,230
ヤシヤビシャク ……18
ヤス ……150
屋台 ……114
屋台囃子 ……142
やつがしら ……27
やつくち ……16
矢抜の餅 ……109
屋根うら ……199
屋根替え ……38,118
屋根型 ……37
屋根坪 ……72
屋根の棟 ……177
屋根ふき ……37,38,50,72,73,74,75,104
屋根屋 ……38,49,92
山犬 ……95
山かけ五合 ……31
山かけ三合 ……31
山カンピョウ ……24
ヤマクワ ……190,191
ヤマゲエ ……180
山ごぼう ……24
山仕事 ……28,189,200
山取り ……22,71
山の神 ……106,115,188,189,223
山の口 ……76
山はじめ ……115,188
山開き ……80,181,205
山伏 ……118
山弁当 ……25
ヤマメ ……22
山マユ ……67,130
山宮 ……106
ヤリ ……80
ヤンメ ……128

ゆ

湯当り ……130
ユイ ……143
結納 ……12
友禅染め ……12
ユウミケ ……186
湯灌 ……174
雪かき ……80,92
ユズぼし ……31
ユズリ ……177
ユツラ ……57,78
ユツラジメ ……185
ユデマンジュウ ……205
弓 ……176
弓はり提灯 ……46
百合根 ……25
ユルリ ……39

よ

夜遊び ……93,164
八日節供 ……204
養蚕教師 ……64,65
養蚕用具 ……66
養子 ……98
ヨカヨカアメ屋 ……83
夜刈り ……64
夜蜘蛛 ……120
ヨコバイ ……56
ヨシ ……193
よそいぎ ……11,12,13,16
予兆 ……120
四つ足門 ……34
よつっぴよ ……22
四ツ身 ……10
ヨツラ ……196
夜泣き ……119,128
ヨナベ ……19,75,77,164,185,202
夜這い ……93,94,164,165,169
夜ボリ ……150
ヨムシ(夜虫) ……127
嫁入り ……167
嫁入り道具 ……152,167
嫁が君 ……127
ヨメゴ ……121,127
よめご着 ……12
ヨメゴ招び ……105
嫁の一見 ……170
ヨモギ ……18,204
ヨモノ ……127
寄り合い ……89
ヨロク ……100

ら

雷電様 ……122,133
楽隠居 ……98,99

り

離婚 ……172
リヤカー ……81
竜柱 ……37
隣保班 ……87,105

豆人形 ……135
豆人形芝居 ……142
まゆげ ……19
マユダマ・56,113,190,191,192 193,195,196,200,203
魔除け……34,122,173,192 201,204,215
マリ草 ……149
まりつき唄 ……148
マルブキ ……38
マルマゲ ……20,170
まるめもの ……42
まわりこ ……16
廻りツゲ ……88
マワセン棒 ……70
マンガ ……52,55,58,59,196
マンガアライ ……52,58,205
万才 ……84
まんじゅう ……121
まんじゅうがさ ……13
マンゼロク(呪言) ……121

み

箕 …43,52,58,59,81,127,171 172,202,205,208,211,218
見合 ……165
ミガキ萱 ……37
ミカキニシン ……32
御荷鉾 ……132
ミコ ……196
ミコシ ……114
ミゴ箒 ……47
水浴び ……207
水争い ……62
水かけぎもん ……15
水がめ ……41
水のみダンゴ ……174,176
水番 ……61,62
水引き ……63
ミズブサ ……190,191
ミズムシ ……130
味噌 ……23
味噌蔵 ……118
みそこうじ ……23
味噌汁 ……23
みそたき ……23
みそ玉 ……23
味噌玉娘 ……143
味噌樽 ……23
味噌漬 ……24
みそかそば ……30
ミタマ様 ……168,190,195,210
ミチアケ ……152,166,167
道草刈り ……80
道しるべ ……46,79
道普請 ……79,89,90,92
三日堂 ……223
ミッツ坊主 ……125
三ツ身 ……10
三峯講 ……96,114
三峯さん ……80
ミツメ ……170
三つ物 ……29
みつより ……218
水口 ……49,55,193,203
水口グレ ……56
水口の苗 ……58
みなさんよび ……87,103,104
みの ……16,60,78
耳だれ ……59
耳の神 ……119
耳ふさぎ ……132,178
宮詣り ……160
みようが ……23
三夜沢小豆 ……106,110,111
三夜沢式 ……111

む

六日夜取り ……189
無縁仏 ……179,182,208
迎え一見 ……167
迎え火 ……168
ムカデ ……106,111
ムカデ山 ……220,221,222
麦打唄 ……143
麦打ち台 ……52
麦刈り ……13,76
ムギキリ ……26
麦こなし ……34,50
麦のさく切り ……50
麦ボウチ ……110
麦まき ……53,75,214
麦味噌 ……23
麦飯 ……20,21
婿 ……98
婿とり ……169,172
婿逃げ ……152,168
ムコウユルリ(ダンナザシキ) ……42
ムジナツキ ……122
ムシロパタキ ……54
無尽 ……80
息子頭 ……137
むすび ……25,30
ムナフダ ……37
ムラ入り ……86
村共有 ……89
ムラ境 ……86,167
村組織 ……87
ムラ人足 ……89,90,98,99
村のまつり ……88
村八分 ……91
ムラマワリ ……169,170
村寄り合い ……89,170

め

明治神宮講 ……96
メカイ ……171,172,201,211
メクラ植 ……56
メケイゴ ……128
メケエザル ……80
飯しゃもじ ……178
メシヤキモチ ……26
メズラ ……23
メーダマ ……38
めちゃばた ……16
メド飼い ……65
目の神様 ……119
メマス ……172
メメズ ……129,130
メンパ ……25
メンパ板 ……29,32,187
メン棒 ……32

も

モグラ ……214
モグラップサギ ……28,53 105,215
モシキ ……44
モシキ売り ……83
もしき小屋 ……33
モズ ……225
もち ……9,27,28
モチアワ ……22
餅食い道者 ……95
モチグサ ……28,30,68,203
モチ米 ……187
餅拾い ……37
モッケダ(忌み田) ……54,58
モッコ ……81
ものづくり ……103,196

ブノビ ……99,100
ぶら提燈 ……46
ふり米 ……231
振袖 ……11
フレ ……61
風呂 ……38
分家 ……101
粉食 ……25
ふんどし ……14

へ

ヘイグシ ……37
ヘエカキ棒 ……45
ヘクサヅル(ヘクソカズラ) ……77,130
ヘクソリ ……78,99,100
ヘソの緒 ……156
下手の長糸 ……17
ベータ(棒) ……35,44,82
別火 ……162
ヘッツイ ……22,41,42
蛇 ……32,134,192,193,204
ヘビ除け ……203
ぺぺ雑炊 ……169
ヘヤ 39,155,238,240,243,244
便所 ……34,38,126
便所の神様 ……35,126,192
便所参り ……126,158
便所のまわり ……15
ペンチャカ雨 ……132
ペントナイト ……52

ほ

ホイロ ……31
棒打ち ……50,52,145
棒打ち唄 ……145
方角 ……126
防火林 ……34
防寒着 ……13
箒 ……47,126
箒神 ……126
ホウグイ ……185
防空頭巾 ……14
方言 ……233
ぼうこう炎 ……129
奉公人 ……28,195,198
豊作祈願 ……186
ぼうさんかぶり ……19
豊蚕祈願 ……69
坊主の年始 ……187
坊主麦 ……50
疱瘡送り ……122
疱瘡棚 ……162
奉納相撲 ……114
防風林 ……33,34
訪問着 ……11
蓬莱山 ……169
ホウロク ……200
ホオジロ ……149
ホカイ ……31,36,47,105,170
ホカイ返し ……37
ホカイヅキアイ ……47
ボク ……122,188,190
ホカケ ……64,105,152 171,172,233
宝登山講 ……80
干しウドン ……208
保存食 ……20
ぼたもち ……27,29,53,64 202,203
ボタ餅観音 ……123,211,212
墓地 ……99
ホッカケマキ ……50
ホッカブリ ……9,19
掘立小屋 ……75,90
ホド ……26,41,42
ホド神様 ……118
仏様の足 ……182
仏様のたたり ……122
ホドサン様 ……114
ホトトギス ……225
ホド灰 ……42
ホド払い ……43,178
ホマチ ……78,100,223
ホマチ田 ……54
ボヤ ……44
保有米 ……25
ホラ貝 ……82
堀さらい ……90
ボロ織り ……17
ボロットジ ……77
盆 ……22
盆送り ……207,210
盆踊り ……142,211
盆ガラ ……75,211
盆暮勘定 ……83
ホンケエド ……79
盆ござ ……207,208
盆棚 ……122,187,207
盆中の禁忌 ……211
盆提灯 ……208
盆の食事 ……209
盆の十六日 ……210
盆の精霊 ……35
盆の日取り ……207
盆花 ……207
盆ブチ ……208
盆迎え ……182,207,208
本家 ……87,101
ホンジロ(本代) ……57
本裁 ……10,11
ボンデン ……202

ま

マアリグサ ……149
まいかき ……195
マイカゴ ……81
マイシ ……83
埋葬 ……175
前掛 ……15
マエスベリ ……19
マキ ……44
巻きわら ……22
マグソ拾い ……51
枕苗 ……59
枕直し ……173
枕飯 ……58,174,178
マクリ ……160
曲げ物 ……25
マゴタロ虫屋 ……84
マゴモ ……38
まじない ……121
またたび ……24
待ち女房 ……168,169
松飾り …184,185,190,218,224
松ゴク(松葉) ……44
マツコぶち ……42
松小屋 ……195
マットクレバカマ ……14
松迎え ……218
間取り ……235
間引き ……157
マブシ ……66
マムシ …19,180,191,192,193
マムシ酒 ……130
まむしよけ ……13
豆柿 ……24
豆粕 ……52
マメガラ ……199
豆投げ ……199

馬頭観音 ……47,116,123,187
ハナ ……190
鼻石 ……222
ハナカキ ……190
話じいさん ……224
ハナツキゴハン ……169
はな結び ……13,19,76,78
パネツルベ ……35
母頭 ……137
破魔弓 ……218
ハヨウ縄 ……78,103,192,196
ハヨブチ ……196
腹帯 ……154
はらみばし ……190,192
バラの箸 ……121
針供養 ……17,201
針仕事 ……77
春ウナイ ……68
春駒 ……84,92
春蚕 ……64
ハルタ ……54
春祭り ……203
ハレ ……44,107
番板 ……62,88,194
半夏 ……57,58,205
半夏田植 ……58,120
半夏ッタマ ……58
ハンコトリ ……82
番水 ……62,63
ハンダイ ……50
パンダイモチ ……28,115
番帳 ……61
絆纏 ……13,75
番頭 ……74,75,198,227
ハンドリ ……55,59
半人前 ……39
半飯 ……21
パン餅 ……171

ひ

日一両 ……72
ヒイボリ ……77
ヒイラギ 34,126,199,201,215
火打石 ……176
ヒエ ……31,51
稗ぬき ……63
ヒエマイダマ ……191
ヒオオギ ……130
日陰干し ……18
檜笠 ……106,110,111
彼岸 ……77,120,202,212
挽臼 ……32
引返し七日 ……174,176
ひきがえる ……22
ヒキツケ ……129
ひきゆずり ……88,89,163
ヒキワリ …9,20,21,26,30,49
ビク ……78,81
火消し壺 ……45
ひざ子 ……157
ヒザナオシ ……152,170
菱餅 ……104,171,202
ヒシャク ……178
ビションメイ ……67
ヒデ(エ) ……45,77,150
ひつ石 ……203,204
ひっつめ(髪型) ……20
ひとえもん ……13
ヒトコ(萱一刈り) ……38
ヒトセ(背) ……188
ヒトタナ ……133
一つ身 ……10
ヒトト(ホオジロ) ……149
ヒトニワ ……113
人の呼称 ……233
一マチ(苗間) ……193
ひとまるき ……36
ひな市 ……82
ヒナ人形 ……201
火にたつ ……200
ヒネジイサン ……97
丙午 ……201
火の神様 ……43
ひのきがさ ……13,60
ヒバ ……24
火箸 ……44
日機 ……16
火鉢 ……45
被布 ……15
火吹竹 ……163
火伏せ ……96,183
日待 ……114
ヒメコンジン様 ……122
ひもかざり ……16
ひも足袋 ……19
百姓の神様 ……96
百たたき(刑罪) ……91
百度まいり ……131
ヒヤシル ……9,23
ひやめしぞうり ……175
病気見舞 ……98,104
ヒョウソ ……131
ヒョウソク(ランプ) ……77
ヒラウエ ……56
ヒラボリ ……50
ヒラモチ ……28
ヒラワリ(平均割) ……89
肥料 ……51
ヒルバテエ ……30,209,210
ヒロモ(田の雑草) ……63
ヒロイナエ ……56
拾い親 ……160
広間型 ……238
ピワ ……34,121

ふ

夫婦養子 ……98
深井戸 ……35
フカシマンジュウ・171,205,206,207,212
フキ ……24
葺刈り ……39
吹竹 ……162
ブク ……176
腹痛 ……129
フクロバタキ(末っ子) ……98
不幸見舞 ……104
フジ ……77
藤岡ガワラ ……38
富士講 ……96,114,131
フシノキ(ヌルデ) ……190,192
藤の花 ……205
フシッコ(病蚕) ……66
不祝儀 ……11,12,27,30
フスマコウジ ……23
不整形田字型 ……240,243
舞台 ……142
舞台道具 ……136
譜代墓場 ……210
双子 ……154
フタセエ(二籠) ……211
二間取型 ……237
フタミソ ……23
ふだんぎ ……11,12,13,16
仏壇 ……41,43
ブッチメ ……149
筆子塚 ……125
不動様 ……123,205
フナ餅 ……28,66
フナヤスミ祝 ……66

二十三夜マチ ……197
二十三夜様 ……96
二色餅 ……214
ニシン ……31,57,77
日光街道 ……79
日光の神様 ……223
ニナイモッコ ……80
ニナワ ……209,210
二年ごぼう ……211
ニハク(馬毛の特徴)……70
にはり棒 ……76
二番ざく ……50
二番ドウシ ……63
ニボウトウ ……25,30
入家式 ……168
ニワ(庭)……34
ニワオキ ……67
ニアガリ ……28,54,64,171,216,217
ニワトコ ……190,193
ニワ箒 ……47
妊娠 ……153
ニンソク ……90
妊婦 ……126

ぬ

盗っ人蜘蛛 ……120
盗ミット ……195

ね

ねえさんかぶり ……13
根刈り ……68
ネギヌタ ……29
ネギバラ ……130
猫足膳 ……31
ネコ車 ……81
猫のしっぽ ……98
猫またぎ ……171
ネジッコ ……26,215
寝小便 ……129
ネジリ木 ……119
ネジリヅッポ ……15
ねじりはちまき ……19
ネズミ返し ……68
根っこ大尽 ……86
年忌 ……178
年始 ……104
年始会 ……88,92
年始礼 ……186
念仏 ……176
念仏鉦 ……202
念仏講 ……95
念仏橋 ……79
ネンネグサ ……149
ネンネコ ……17
ねんねこばんてん ……16
燃料 ……44

の

ノウイ(納衣) ……177
農耕禁忌 ……127
農地改革 ……49
納米 ……177
農休み ……60,76,90,91,96,171,205,209,211
のし糸 ……16
のし餅 ……192
のぞきこみ ……93,170
ノチザン ……156
のどのつかえ ……128
野辺おくり ……175
のぼり ……203
野まわり ……63
のらぎ ……11,13
野良仕事 ……14
野良襦袢 ……13,15
ノラボウ ……84,92
野良股引 ……15
ノリ刈り ……39
ノリ仕事 ……76

は

バアサンカブリ ……9,19
配札区域 ……110
配札担当 ……111
配札場 ……109,111
ハイトリババア ……232
羽織 ……11,12
墓掃除 ……206,207
バカナエ ……56
袴 ……12
バカ豆 ……23
馬鹿婿 ……226
ハカリサシ ……92
ハギ ……190
萩の箸 ……25,187
掃立 ……68
履物 ……18,19
ハクバ ……70
ハクラク ……69
馬喰 ……43,69,70
箱飼い ……65
箱膳 ……20,22,125
はこせこ ……12
箱火鉢 ……45
ハサミ ……160
ハシカ ……128,162
橋掛け ……89
ハジカミ ……206
はじきいも ……23
梯子の屁 ……230
葉ショウガ ……211
走り口 ……202
ハズミ玉 ……149
機織 ……16,77,78,164
機織道具 ……158
旗頭 ……112
ハタキ粉 ……26
旗番 ……112
ハタッペ ……70
ハタヤマ ……48,50
八軒グルワ ……91
八合コバチ ……49,50
八十八夜 ……60,62,90,203
蜂の巣 ……132
ハチマキ ……9
八丁注連 ……86,119,120,205
八幡様 ……113,117
八朔 ……104,152,171,204,206,211
初市 ……82,187
初卵 ……32
初午 ……17,74,75,120,187,200,201
初恵比須 ……197
八海山 ……114
二十日正月 ……103,196
二十日土用 ……207
初雷 ……43,133,198,199,200
ハツグンチ ……213
初正月 ……161
初節供 ……161,171,204
初田植 ……56
初誕生 ……159,161
八反どり ……63
初穂 ……110,118
初詣 ……186
初嫁 ……171,187
ハデカケ ……64
ハト ……133

天狗様 ……96
天神講 ……85,95,197,201
天神様 ……96,211,217
天地返し ……68
電灯 ……46
天道様 ……48,200
テントー柱 ……249
天道念仏 ……202
天王馬 ……114
天王様 ……46,144,205
天秤 ……82
テンポシ ……70
デンポの話 ……229

と

ドウ ……150
トウガイ ……46
トウカンボウ(十日棒) ……214
十日夜 ……28,53,152,164,165,182,212,214,215
道元の娘 ……220,221
冬至 ……77,200,217
湯治 ……130,232
トオシミズ ……61
道祖神祭り ……119,181,195
胴ヅキ ……32,52,89
トオデイ ……38,242,243,252
トウバッコ ……160
豆腐 ……29,187,216
トウボウシ ……49
唐箕 ……81
堂宮 ……73
道了様 ……119
灯籠 ……46
道路普請 ……90
胴輪 ……135
毒消し売 ……83,92
ドクダミ ……130
トゲヌキ ……131
トコ ……237,247
床の間 ……38,39,43
トコホリ ……153,175
年祝い ……162
年男 ……186,199,200
年神様 ……103,200
年神棚 ……183,185,186,190,198
としこしそば ……219
歳徳神 ……192
年取り ……20,21,198,199,200,218
土するす ……52
土蔵 ……28,37,38
土地柄 ……91
とちの木 ……24
土地の呼称 ……233
トッコウダンジュウ ……149
トナイチ様 ……122
トバヲキル ……90
ドブッタ ……54
ドブロク ……32,106,109
トボグチ ……38,41,199,204,208,215
ドボシ(土干し) ……64
トマリゾメ ……152,166
土室育 ……65
とめ穴 ……175
とめそで ……11
友引き ……174
土用 ……121,127
豊川稲荷 ……69
トヨキイリヒコノミコト ……222,223
取上げ婆さん ……156,158,173
トリカエッコ ……165
トリムスギ ……11,39,168,169
とりもち ……168
とろめし ……27
とろろ ……103
ドンドンヤキ ……190,195
トンビノハネ ……104
呑竜様 ……152
呑竜坊主 ……125,162,163

な

ナイザ ……169
無い袖は振れない話 ……227
苗ヶ島神社 ……60,72
苗かつぎかご ……82
苗代 ……55,77,120,192,193,203
苗代田 ……190
ナエバ ……49,55,56,58
ナエマ ……52,55,185,192,193,195,203
ナオライ ……86
長居客 ……121
名替え ……162
長着 ……11
ナカグンチ ……213
ながし ……20,41
ナガジブ(障子紙) ……161
中祓 ……205
長火鉢 ……45
長持ち ……47
長屋内 ……34,37
流れかんじょう ……178
流星 ……70
仲人 ……152,159,166,168
仲人親 ……103,166
仲人子 ……166
仲人三年 ……166
仲人礼 ……76,166
名古屋帯 ……12
ナス ……48,51,122
なぞ ……231
菜種油 ……46
夏まつり ……109
夏弱り ……128
七草粥 ……103,187,188,189
七つ泣き鼻取り ……57
七つ前の子 ……122
七つ坊主 ……125,162
七でんぼう ……165,166
ナナモト(七株) ……58
浪花節渡り ……163
七日の経 ……176
七日火 ……208
ナベカリ ……104,152,170,171,187,209
ナミノハナ ……121,127
ナメサキ(舐裂) ……93
納屋 ……33
成り木責め ……194
成り物 ……214
ナリンボウ ……207
縄帯 ……18
なわない ……77
南京米 ……32
ナンド ……39,41,46,151,154,155,243
ナンマイダ ……202

に

にぎりめし ……31
肉食 ……22
肉たたき石 ……22
荷ぐら ……196
荷車 ……81
にこにこかすり ……12
二ザン(後産) ……156
西枕 ……173,174
西宮 ……108

タネコ(蚕種製造)……64
タネコウジ ……32
タネツケ ……64
種の要害 ……51
種もみ ……94,95,192
種屋 ……64
田の神様 …43,49,56,57,58,59 60,106,181,204
田の草取り ……63
田の字型 ……39
田字型民家 ……244
タノマレ仲人 ……165
田の水口 ……59
足袋 ……11,19,120,126,174
タビッキラシ ……166
タビゲエリ ……172
食べ合せ ……126
タマネギの皮 ……18
ダマモチ(粳・糯の混餅) ……57
魂呼び ……173
タマンメイ ……67
溜池 ……48
タライ ……176
タラの干物 ……171
たらべの芽 ……24
タルタテ ……166
タレッコ ……66
俵あみ ……77
俵杉 ……111
俵藤太 ……220,222
タワラッパシ ……178
ダンゴ ……27,174
タンジャクギリ ……56
ダンナザシキ ……41,42
誕生仏 …… 205
誕生餅 ……161

ち

地下足袋 ……9,13
チカヅキ ……169
近戸神社 ……106
チガヤ ……207
力石 ……93,133
力米 ……31,156,157
チカラダメシ ……170
力持ちの話 ……230
地形 ……36,37
千キンタン売り ……83
地獄の釜のふた ……171
地獄めぐり ……181,204
地芝居 ……114,142
地じま ……159
父頭 ……137
乳ばれもん ……129
地鎮祭 ……36
地坪 ……72
血どめ ……129
地祭りの竹 ……36
地名 ……233
地名伝説 ……222
チャノマ ……244
ちゃんちゃん ……13
チュウメイ(繭)……67
中宿 ……152,168
ちょいちょいぎ ……11,12
長者柱 ……244,249
チョウチョウ摘み ……68
チョウチン ……46,66
チョウチンギョウレツ……66
提灯つけ ……176
帳箱 ……88,89
チヨウッパシ ……153,162,178
丁半打ち ……53
徴兵 ……99
チョッポ(麦蒔)……50
調味料 ……9,23
帳元 ……88
チリメン ……16
チンケ ……125,159
鎮守様 ……160
賃機 ……16

つ

通婚圏 ……165
ツカ ……71
つかみつけ ……89
ツキボシ ……24
丑の刻参り ……131
ツクネル ……81
ツクミ ……38
作り格子 ……41
つげ ……105,174
ツケ木 ……44
ツケギヤ ……83
付書院 ……247
漬物 ……9,24
つけやき ……28
ツジュウダンゴ ……183,215
ツジュウバタキ ……215
ツジュウモチ ……30
頭痛 ……129
筒粥 ……108,109,194
つつそで ……13
筒っぽ ……15
葛籠 ……47
ツヅラフジ ……47
ツトッコ ……116,117,216
つのかくし ……12
ツノガラ大師 ……123
ツバキ ……59,181,191
つぶし島田 ……20
潰れ屋敷 ……101,117,118
つぼき ……34
ツボ山 33,34,35,122,156,159
ツミッコ ……9,26
つみざまの縄 ……78
ツミザル ……81
爪引き不動 ……114,123,224
ツリボシ ……24
つりマンガ ……50

て

デエ ……33,37,99,247
出かせぎ ……64
出がらまゆ ……67
出ガワリ ……74,198
できもん ……130,193
テコ ……38
手甲 ……13
テショク ……77
デスイ ……55
鉄びん ……43
鉄砲打ち ……74
手拭 ……9
てのこり ……100
出針 ……18
デハのめし ……175
手袋 ……19
出不足金 ……89,90
デホミズ(出穂水)……63
手間交換 ……90
手まり ……149
テミ(箕)……81
寺の田植 ……120
寺参り ……209
デロレン ……84
テンガ ……55,58
田楽 ……187
天気まつり ……60,91,133
天気予報 ……82

スネ切り ……50
諏訪神社 ……112
炭買い ……83
炭やき ……71
スミドウフ ……118
相撲 ……94
住吉様 ……217
住吉神社 ……113,116
ズリ(鋸)……44
スリエ ……160
スルスヒキ ……171

せ

精魂水 ……63
セイスケ(桑の品種)……68
青年会 ……92,143,152,163
青年勤労会 ……92
精米所 ……32
セイモン ……84,91
西洋ランプ ……46
セガイ造り ……242,247
世界てらし ……46
施餓鬼 ……202
セキアガリ三寸クチ ……55
石工 ……71
席順 ……86
石塔 ……178
赤飯 …27,28,95,186,187,189
堰普請 ……90
石油ランプ ……46
セキレイ ……131
世間話 ……227
勢多の唐橋 ……220,222
セチマ ……202
せちもち ……28
節供 98,104,171,187,202,203
雪駄 ……12
節分 ……22,132,198
セナゴ ……97
ゼニックビ(着物の着方) …126
背守り ……158
せり ……24,67
セリタタキ ……188
浅間神社 ……91
線香 ……209
染色 ……18
センゼエ畑 ……33
ゼンソク ……129
先祖様 ……200,209,210
先祖祭 ……103,178
仙台平 ……11,12
洗濯場 ……36
ぜん棚 ……22
仙太話 ……228,229
先端伐採 ……68
せんつう ……59
センフリ(薬草) ……130
千本づき ……23
洗米 ……108
ゼンマイ ……24

そ

桑園づくり ……92
葬式 ……29,47,87,98,104,105,157,174,178
総社神社 ……214,215
ゾウスイ ……187
総代 ……87
ソウデン祭 ……70
雑煮 ……23,28
葬式まんじゅう ……178
ソウモン(馬毛の特徴)……70
ぞうり ……9,182
ゾウリキラシ ……166
そうりつくり ……77
葬列 ……175
俗信 ……18
底ぬけひしゃく …119,151,154
ゾウズ ……173
ソデガキ ……43
袖摺柱 ……238,240,249,250
ソバ ……9,29,30,50,51,162
ソバマイダマ ……191
染めがすり ……159
ソリ鎌 ……76
反町薬師 ……119,162,163
祖霊信仰 ……182
ゾロ ……63
ソンマ(馬肉)……22

た

田植……13,14,21,27,56,57,75,120,185,187,196,205
田植唄 ……56,143
田植時の間食 ……31
田植ぎもん ……13,57
田植禁忌 ……57
田植食事 ……30,57
田植昼食 ……31
田植ニシン ……31
大黒様 ……196
大黒柱 …240,242,244,249,257
代参 ……80,96,114
大師がゆ ……217
太子講 ……72,85
大正飴屋 ……92
大正桑 ……68
大食会 ……92
大神宮様 ……28,200
太々神楽 ……94,139
太々講 ……85,94,114
ダイドコ ……39,58,240,242,243,247,249,257
ダイニチ様 ……119
ダイバよけ ……70,131,178
推肥 ……36,81,190
松明 ……168
代用食 ……9,25,27
内裏様 ……201
台湾米 ……91
田かき ……77
高遠石工 ……71,72
宝船 ……186
タキオトシ ……45
タキツケ ……44
竹飾り ……206
田下駄 ……52,77
竹筒 ……60,111
竹皮ぞうり ……209
竹箒 ……47
竹藪 ……133
多胡早生 ……68
たすき ……16
たたり ……122
立ち祝い ……80,177
タツッコキ(たつむすび) …126
脱穀 ……38,52
タツ膳 ……126
辰田植 ……57
辰の日 ……51,57,205
タツミカイド ……33,35
たつみぐら ……33,37
タデ ……23
タテゴ ……178
タテズマシ ……23
建前 ……47
立役カシラ ……135
棚飼い ……65
七夕様 ……20,182,206,207
ダニ ……70
タニシ ……150

シビ……34,78,111
シビぶとん……46,155
しぶっかき……31
シブト(死人)……127
四方がため……36
シマイグンチ……213
しまい正月……196,197
しまだ……20
シマダまぶし……66
シマナエ……120
シメカザリ……49,185,191
シメ竹……207
シメドウフ……202
シメ縄……208
下大黒柱……41,49,55,64,78,191,192,196,198,242,249
霜月道者……106,110,223
シモップタモチ……203
シモヤ(下屋)……38
霜よけ……51
ジャガイモ……51
ジャキクダシ……130
尺八……93
シャックリ……128
ジャクロ……121
社家……106,110
社家年代記……139
社日……203
社日講……85,96,114
しやもじ……42
ジャンボン……174,177
収穫祭……182
祝儀……27
十五日ガユ……192,193,196
十五夜……28,212
十三夜……28,102,212,213
十二講……76,85,95,115,189
十二様……35,107,115,120,180,188,189,190,223
十二玉……180,190
十能……45
十八日がゆ……196
主婦……98
重兵衛膏……131
ジュウロウタ……78
十六玉……180,190,191
シユロ縄……78
春分……202
順養子……98
しよいおび……16
ショイデエ……81
ショイダンゴ……96
ショウ(松露)……130
ショウガ……172
常会長……87
正月……28,86
正月様……183
正月仕事……187
正月棚……183,197
ショウギ……52,81
ショウケシ(塩消)……177
精根刈り……76
精進講……96
条桑育……65
上簇……65
定使い……82,88
上棟祝……28
上棟式……36,37,104,105
上棟もち……28
定番……61
ショウブ酒……203,204,225
ショウブの由来……225
ショウブ湯……203,204
ジョウメイ(上繭)……67
常夜燈……46
醤油……23,24
ジョウリカクシ……149
ジョウリ下駄……19
少林山……114
常例普請……93
食事のしつけ……125
食生活の禁忌……126
燭台……46
職人……92
食用植物……24
しょんべんぎもん……15
シラニ(白土)……52
シラジ……23,178,209,210
シラニ(火山灰)……49,55
しりっかあせ……99
尻まくり……197
尻水口……55,57
尻糯……57
ジリヤキ……26,31
汁かけ飯……125
しるこ……28
二郎の朔日……30,181,197
シロカキ……196
白さらし……175
白麦……50
白無垢……12
神祇世話……112
シンキャク……169
仁義連……92
シンコク祭……110
新ゴボウ……171
伸子……18
神社世話人……113
信州ザル……82
信州高遠……72
神裳……109
身上まわし……99
身上わたし……99
親戚づきあい……103
神泉……106,111
神戦伝説……223
神葬祭……108,132,174,178,180,183,208,209,210
親族呼称……97
シンタク……101,118
新米……172

す

スイッコウシ(水ぶくれ)……130
水車……32,52,89,100,172
水神……35
水天宮……151,154
スイトン……26
水盤育……65
吸い物……9
水利慣行……48,60
スウトメ……13,56,57,75,187
末っ子……98
スガケ(簀掛け)……41
スキ……52
すぐり……24
スグリゴボウ……206
スグリ大根……212
管笠……110,128,168
スズショウギ……81
煤掃き……159,218
スズメ……22
スズメ孝行……225
硯石……60,111,119,122,222,224
すすりだんご……25,26,27
捨子……160
ステバノオンバコ……152,172
すっぽう……13
スナ桑……68
スナメドジョウ……22

コモイシ ……158,160
コモチ ……28
子守 ……16,77,143,147,198
小紋 ……12
コヤシザル ……81
コヤシムシ ……129
五輪田 ……121
ゴロ ……66
コワリゲー……53
こわりもち ……30
紺がすり ……12
金毘羅様 ……212
紺屋 ……18

さ

細工職人 ……72
催青 ……68
サイの神 ……119
栽培禁忌 ……52
歳暮 ……104
裁縫塾 ……17
裁縫道具 ……158
祭文 ……142
逆さ苗 ……56
魚の骨 ……64
魚屋 ……83
坐棺 ……175
作業着 ……11,13
作業小屋 ……38
サクタテ ……188,189
サクバミチ ……79
作番頭 ……74
作物禁忌 ……127
サクラ肉 ……22
坐繰業者 ……67
サケ ……145
サゲ穂 ……51
サゲミズ ……61,91
笹引 ……173
ササラ ……137
坐産 ……151,154
差鴨居 ……246
ザシキ ……237,238,240 242,243,244
座敷ぎよめ ……176
サツマイモ ……21
里芋 ……25,27,206,210,212
砂糖 ……23
砂糖味噌 ……28
里帰り ……170,195
里のもん ……91
里宮 ……106
里山 ……72
サナダ(麦打ち台)……52
ザマ ……30,81,171
ザマ篭 ……51,211
ざる ……66,160,172
サルゴマ ……29
サルスベリ ……34,71
猿田彦大神 ……116,117
猿回し ……84,92
サンカ ……81
サンカクスゲ ……63
三角のおにぎり ……122
三角袋 ……177,178,182,209
三月節句 ……22,28,202
山菜 ……24
三歳駒 ……69
サンザイロク ……133
三三九度 ……168,169
産室 ……155
サンジャク ……11,12,16,17
サンショウ ……23,24,25
サンショウミソ ……27
産神 ……151
サンゾク雨 ……145
産泰様 ……119,128,129,151
サンダル ……9
サンチュウ ……83
サントウブチ ……114
サントク ……45
三斗まき ……133
三年ビネ ……23
三年味噌 ……23
三番ドウシ ……63
産婆 ……156
サンパク(三白)……70
産婦の食事 ……157
産部屋 ……39
三宝荒神 ……118
三本辻 ……107,120,122,153 160,161,162,174 176,178,210
さんま ……22,171,196
ザンマタ(三又) ……198
サンヤヅキ ……104
三夜待 ……114
三隣亡 …34,116,117,121,122,131,215

し

仕上げ職人 ……71
塩あん ……26
シオガマ ……104
塩釜様 ……154,155
塩引 ……104
シオマメ ……192
ジオヤ(地主)……53
鹿の頭 ……112
シキセ ……64,75,171,198
四季の木 ……34
シキビ ……178
しけっ田 ……50,54,64,150
しごき ……12
仕事着 ……11
仕事のしつけ ……125
仕事始め ……188
仕事休み ……205
私財 ……99
自在鍵 ……43
自作農 ……49
持参金 ……99
獅子 ……84,112,113
獅子舞 ……137,213
シジ,タケ,フナ,ニワ ……226
じじま ……12
死者の着物 ……174
死者の部屋 ……39
四十九のダンゴ ……174,177
四十九日の餅 ……177
シジンカミ ……116
ジジンサマ ……116,215
自然暦 ……133
しそっぱ ……23
七坏袋 ……178
七夜ぎもん ……15
しつけ ……124
しつけ糸 ……125
シド ……49,54
シトギ ……27,28
シトト ……202
しにっかわ ……15
死に米 ……205
死に黒子 ……173
篠箒 ……47
死の予兆 ……131,173
芝居 ……203
シバットリ ……22
締り幣 ……180,188

クルミ ……18
クルリ ……34,50,52,145
クルリ(組) ……103
クレ ……50,55,61
クロ ……48,55,56,192
黒アザ ……157
クロクワテンガ ……49,79
クロケシ ……71
くろぬり ……75,76
クロマワシ ……55
黒無垢 ……12
桑市 ……82
桑切りがま ……68
クワゼ ……55,56
桑ぜえ ……22
桑摘み ……67
クワデ ……68
桑場 ……69
食わず女房 ……225
群馬赤木(桑の品種) ……68
群馬用水 ……61,62,63

け

ケ ……107
競馬 ……149
畦畔 ……99
ケエド ……33,35,79
ケエドリ ……150
ケエバ ……210
ゲエロ ……79
ゲエロッパ ……24
下向祝い ……80
下山祝い ……95
化粧 ……20
下水マワリ ……93
ケズリカケ ……190
下駄 ……9,19
けだし ……11
結核 ……129
結婚 ……165
結婚式 ……29,46,104
潔斎場 ……108
ケツメド ……25
ケデエ ……35,63,78
ケバカイ ……92
下馬杭 ……108
ケムリガエシ ……189
ケヤキの芽 ……120
源太ぶし ……142
けんちん汁 ……23
ゲンノショウコ ……129
玄米パン屋 ……84
県有林 ……71
元禄袖 ……13,16

こ

コイ ……30
コイノボリ ……204
小泉ガワラ ……38
郷倉 ……90
後見役 ……88
交際 ……103
高札場 ……82
コウジ ……24
ゴウシュウ ……92
講集団 ……85
庚申組 ……86,87,105
庚申講 ……12,95,96,114
庚申様 ……116
庚申待 ……85,87,197
荒神様 ……42,43,118
耕地 ……49
コウデ ……43,121,128
弘法大師 ……129
コエ ……31,57
肥出し ……70
コカイ神社 ……69
蚕影様 ……69,113,203
五月節供 ……104,132,202
五月人形 ……204
ゴカンニチ ……180,188
コクソ ……69
国有林 ……71
後家入り ……173
五穀豊饒 ……111
九日夜 ……182,214
コゴタ ……24
コザ …39,41,237,238,240,243
こさ切り ……89
小作 ……53
小作百姓 ……91
小作料 ……48
腰あげ ……10
コシゴ ……80
こじこめ ……218
コシマエ ……49
腰巻き ……11,14
コシマキ ……49,54
コシマキダ ……100
コシャリ ……66
ご祝儀 ……30
小正月 ……22,28,171,191
コジョウハン ……21,26,30,31,57,76
ゴ汁 ……9,23
ごじんぎ ……76
ゴジンコウサイ ……106,109
ごぜ ……84,91
コセエ(たん) ……51
ゴタイギブルマイ ……169
子沢山 ……99
こだち(6尺ぎもん) ……10
ゴタネイシ ……64
五反百姓 ……50
コーチ ……62
伍長組 ……87
五徳 ……45
コトジマイ ……201
子どもの遊び ……149
コトハジメ ……201
コト八日 ……201
諺 ……54,231
こなしもの ……34
こなもち ……28
小沼 ……48,62,221
こぬか ……18
御年始 ……171
コネマキ ……50
コノメ ……155
コバガイ ……65,80,83
こばち ……76,192
コビキ ……92
コブ ……128
古峯講 ……80,85,96,114
五平どり(昔話) ……225
ゴボウ ……28
ゴボウの節供 ……171,182,211
ゴボッパヤキモチ ……26
こぼれまつば ……16
ゴマ ……102,203
こまいかき ……105
駒下駄 ……12,19
ゴミトリ ……52
小麦田 ……55
小麦蒔き ……76
こめかき ……37
コメヌカ ……185
米の飯 ……22
米味噌 ……23
コモ ……207

萱場 ……39
カヤ葺き ……72
茅葺寄棟造 ……240
蚊遣 ……47
カユカキ棒……56,103,180,190,192,193,203
カヨイ(通帳)……83
ガラ(鳥骨)……22
唐糸 ……16
カラス ……32,119,173,231
からみもち ……28
カラムシ ……51
刈り上げ祝 ……29,63
仮親 ……156
刈り分け ……53
カルタ会 ……164
家例 ……101,102,186
カロウト ……46
川神さま ……126,199
川崎大師 ……162,163
川ざらい ……89
川棚 ……35,36,120,126,199
川ネズミ ……129
カービタリ餅 ……215
かわりもん ……27,30
棺 ……20,41,87,175
簡易水道 ……35
寒稲荷 ……117
願掛け ……131
冠婚葬祭 ……38
カンシチ(かまきり) ……129
かんそう ……24
元旦祭 ……186
ガンヅメ ……63
ガンドウ ……46
願流し ……173
神無月 ……213
寒念仏 ……121
観音様 ……107
カンピョウヤ ……83
鑑別士 ……65
寒ぼたもち ……117
願ほどき ……153
願戻し ……153,173
甘楽桑 ……68

き

祇園 ……113
キクガラ ……199
キゴザ ……60,106,110,111
木小屋 ……33
キジマ(木綿じま) ……159
きしやご ……149
気象予知 ……132
キジリ ……39,41,42,43,44,74
キタザシキ ……242,244
北しょうぎ ……173
キタボリ桑 ……68
北枕 ……120,173
キナ粉 ……32
絹笠様 ……44,69,200,201
祈年祭 ……109
キハダ ……18,130
きばづけ ……38
貴船様 ……28,69
キミ ……51
鬼門 ……33,126,165
客座 ……42
脚絆 ……13
救荒食 ……22
きょうかたびら ……174
行商人 ……80,92
兄弟庚申 ……85,95
郷土芸能 ……135
共同水車 ……89
共同の仕事 ……76
共同墓地 ……175
凶年 ……32
きょうばし ……122
矯風青年会 ……92
共有林 ……71
魚粉 ……52
清水観音 ……164,213,214
清め ……176
キラワズ ……29,121
切りあげ屋根 ……242,246
切り替え畑 ……50
キリボシ ……24
禁忌 ……120,126
禁忌作物 237,242,243,246,247
近所づきあい ……103
近所まわり ……170
近所よび ……170
キンピラ ……25

く

ダアノ(鳥の糞)……52
食い講 ……115
クイゾメ ……160
区会議委員 ……87,88
九月盆 ……182,206
くぐり戸 ……41
クコ ……24
草刈り ……57,76,210,211
草刈りかご ……81
草刈り鎌 ……158,201
草刈り縄 ……78,103,196
草刈場 ……71
草丁半 ……149
草葺入母屋造 ……247
草餅 ……202
くされ彼岸 ……202
草分け ……86,247,249
グシ ……38,173
グシ祝い ……37
クシマルキ ……38,73
ぐしもち ……36,37,104
九十九夜 ……203
クジュウシコ(九十四戸)……91
クズ ……49
クズカキ ……49,51,77,94
くずまゆ ……17,100
クズリュウ権現 ……119
薬屋 ……83
クソッ皮 ……51
クゾフジ ……47
クチガタメ ……152,166
クチサダメ ……166
クチナシ ……18
区長 ……87
くっつきあい ……165
くね ……33,34
区の役員 ……87
区費 ……89
首切り道具 ……167
首なし地蔵 ……211
クボタ ……54
ぐみ ……24
組長 ……88
組づきあい ……103
組離れ ……91
クモト(九株)……58
区有文書 ……89
クライ星 ……158
倉ビラキ ……38,75,189
クリ ……18,24
クリッパヤキモチ ……26
グルッポ(馬)……70
車通い ……100
車井戸 ……35

オヒヤ参り……158
オビンズル様……119
お札売り……92
オヘヤガミ……35
オヘヤマイリ……117
オボガミサマ……159
オボスナ笑い……160
オミキスズ……117,119
おみたまさま……42
おみやげっ子……155
お宮まいり……15,152,159
表鬼門……126
オモテザシキ……39,74,183,243
お山づき……80,94,114
お札がえし……76
御嶽講……80
女一見……152,170
女カシラ……135
女仲人……172
女のクチアケ……120
女の正月……195
女の年始……171
女のよばい……94
女松……185
オンリョウ……112

か

カアラチゴアタマ……125
家印……100
蚕神……190,191,192,203
蚕神様……65,114,123,200
蚕の病気……66
蚕ビョウ……67,198
開墾……49
開通様(便所神)……38
回転マブシ……66
改良一之瀬……68
改良ネズミ返し……68
蛙の目……57
川降り神事……106
カカリゴ……98
カギ竹……41,42,43,121,127,132,178,198,200
カキバナ……190
鍵番……62
カギンボウ……190
角帯……11
かくしガネ……100
かくしぜに……175
かくし田……54,100
神楽……84,92,137
神楽講中……139
カクラン……121,128,129
カケ(干蕪菜)……24
掛口……57
かけした(うちかけの下に着る)……11
陰膳……80
カゲの俵……25,27
かご……81
カゴ飼い……65,67
カゴキ……188,191
カゴタ(水もちの悪い田)……54
カゴメ鍛冶……76
かさねぎ……15
重ね戸棚……43
カサヌギの祝……94
かざりかえ……190,195
火事……75
カジカ……22,107,112,150
かしの実……24
鍛治屋……52
迦葉山……69
頭付き……208
柏倉マキ(麦のまき方)……50
柏もち……28
風邪……129
風除け……121,133
肩あげ……10
カタカケケリ(縄)……81
かたがけなわ……103
片こびん……91
片月見……212
片ホケエ……36
片まゆげ……91
形見分け……176
カタワッコ……197
カチキ……55
家長……97,98
ガッタン……169
カッチキ……52
カッチキ刈り……77
カッツオ(麻)……51
割烹着……15
カツラ……135
カテ飯……30,95,96
家伝薬……131
カドイレ……152,166
門うたい……168
カド神様……215
門付け……84
カド火……208
門松……35,185,190
カド迎え……168
カナゴギ……52,215
金槌の川流れ……53
カナババ……160
カネコーバイ……73
カネダマ(ヒトダマ)……230
カケツケ……104
カネツケ祝い……170
かねつけのおこわ……172
カネのワラジ……172
カノエ塚……223
ガバゴザ……155
兜石……222
かぶりもの……9,18
壁ぬり……37,105
鎌……112
釜神様……58,133,249,250
カマキリ……232
カマス……200
カマド……20,41,44,49
カマド神……42,182
釜の口あけ……206,208
釜柱……238,240,249
カマヤ……83
紙位牌……176
神送り……213,215
髪型……19
カミゴウカ(便所)……34
神様の戦さ……132
カミソリ縄……78
神棚……41,43,58,64,159,190,192,193,199
雷……133
雷よけ……70,121
神の鉢……103,184
紙のます……66
神迎え……213,214,215
髪結い……20
かめのこ(袖無着)……16
家紋……100
カヤ……38,49
カヤ刈り……38
かやすぐり(萱)……39
カヤノ……38,39
カヤの串……215
カヤの巻きワラ……112

エゾ桑 ……67
エチゴッチョイ（背負い方） ……80
越後屋根屋 ……72
越中ふんどし ……14
江戸褄 ……12
エナ ……156
エビス講 ……19,20,22,23,196,197,213
えびすこうよめご ……173
エビス様 ……120,190,196
エビス大黒 ……43
エンガ ……52,55
エンキリ ……172
縁切りなわ ……175
エンジ ……201
煙突飼い ……65
縁の綱 ……153
えんぴき ……101

お

オイガミ（地名説語） ……224
お稲荷の嫁入り ……231
オオゲタ ……77
オオコシマキ ……49,54
大胡人形 ……203
大島 ……68
往生寒念仏 ……121
大せえかご ……81
大堰 ……61,62
大世話 ……88
大掃除 ……217
オオダテ ……67
黄だん ……129
大戸 ……41
おおばこ ……24
大判の餅 ……104,187,202
大晦日 ……30,42,103,200,219
オオヤド ……84
オカオカクシ ……183,185
おかざり ……103,184,191
オカザリカエ ……38,190
尾頭付き ……117
オカッテ ……39,41
オカッパ ……20
陸稲 ……50,51
オカマサマ ……43,51,58,59,118,153,182,185,191,198,199,203,205,213,214
オカマ様の灰 ……178
オカマ様の留守行 43,213,214
オカマノクチアケ ……206
オカモチ ……57
お仮屋 ……49,59,94,95,107,114,115,116,117,181,204,215,216
お願はたし ……154
オキナヅケ ……152,172
オキリコミ ……9,25,30
オクウマヤ ……246
オクザシキ ……33,38,39,41,97
オクジョウザシキ ……39
屋内の神 ……43
臆病口 ……43
臆病座敷 ……43
オクマンサマ ……91,102
送り一見 ……168
送り火 ……210
送り盆 ……210
オクンチ ……34,113,213
おけかつぎ ……98
オケシ（頭の毛） ……162
オコアゲ祝い ……64,66
オコサマ ……81
オコシカケ ……109
オコト八目 ……215
オゴリ ……30
オコンマヤ ……41
オサキ ……122,126,134
オサゴ ……94,124,158,160,210,213
オサナブリ ……43,48,49,57,58,59,75,115,143,182,204,205
オサメギ ……177
お産 ……154
お産の神様 ……115
お産の禁忌 ……157
おさんぼろ ……15
お産見舞 ……98,104
おしこめ嫁御 ……172
お七夜 ……117,126,151,156,158
押し初め ……106,108
オシムギ ……20,21
おしめ ……77
おしめり祝い ……91
お釈迦祭 ……203
お正月様 ……192
オシヨウバン ……169
オシラ神 ……216
オシラマチ ……200
オシラキ ……43,213,214
おすまし汁 ……23
お洗米 ……193
お膳モチ ……177,195
お蒼前様 ……43,103,118,188
おそうでんじめ ……218
オタ ……62
オタギ ……61,126
おたきあげ ……192
お棚あげ ……176,177,178
お棚サガシ ……103,187,196
お棚ばらい ……198
オタワケ ……62
オチャ坊主 ……125
オチューゲン ……152,167
オッカケ ……50
お筒粥神事 ……181,193
お筒びらき ……193
おっぱめ仲人 ……165
オテマル ……214
お寺の田植 ……57
お天道様 ……18,96,122
オトウカ様 ……217
オトキ（葬式米） ……31
オトゲナシ（クワイ） ……63
おとこかぶり ……19
男仲人 ……172
オトコバシラ ……70
男松 ……185
オトモ ……109
オドロ ……48,50
オドロ刈り ……48,50,76
オドロチラシ ……50
オナイジン ……108,109
オニッコ ……160,161
鬼ごわめし ……28
鬼の首 ……195
鬼の豆 ……43,198
鬼麦 ……50
オハオリ ……53
お歯黒 ……19
オハツウ ……125
お針子 ……17
おバンシ ……42,74,198
オヒガミサマ ……158
オヒキ（蛙） ……22
おびだし ……12
おひねり ……188
お日待 ……96
オヒヤサマ ……158

いっちようら ……12
一日の食事 ……21
一人前 ……76,77,133
一の田 ……205
一番ざく ……50
一番番頭 ……75
イチバンドウシ ……63
イチマケ ……101,102
一万ドウ ……94
イチミナクチ ……58
一夜飾り ……218
一夜ゼリ ……188
一夜餅 ……218
一輪車 ……81
イッケ …101,102,117,118,217
一尺句配 ……73
一升マキ ……133
一升まきの田 ……55
一食の基準 ……21
イッチョウマエ ……47,94,208
イツツ坊主 ……125
イツモト(五株)……58
井戸 ……35
井戸神 ……35,118
井戸替 ……35,203
井戸ヤマメ ……35
糸買い ……17
イトザマ ……243,244,246,247,249,256
糸とり ……67
糸ひき ……247,249
イトヒキバ …243,244,246,249
イトヤ ……249
いとこかわせ ……172
いとこ結婚 ……165
いなかまんじゅう ……91
稲含サン ……69
稲荷様……60,107,117,131,168,181,200,213,214
稲荷神社 ……113
稲荷藤ぶし ……142
稲荷祭 ……22,60,117,215,216,217
イヌイグラ ……33,37
イヌハジキ ……153,176
稲刈り ……13,63,76
稲こき ……76
稲の初穂 ……43
イノコロ餅 ……183,215
祈り釘 ……119
位牌 ……101
位牌分け ……176
一杯飯 ……125
一把線香 ……120,133
いぶし飼い ……49
イボ ……128
忌み詞 ……121,127
イモカキ臼 ……27
イモカキ車 ……27
芋から ……91
イモグシ ……27
イモデンガク ……27
芋っ葉 ……207
芋畑 ……117,118
いもめし ……27
イロリ …10,41,42,44,121,127,153,165,178,181,199,200,207,238,244
いろりの神 ……42,118
いろりの禁忌 ……127
いろりの俗信 ……42
いわし ……22,198
岩つつじ箒 ……47
隠居 …89,98,99,102,237,242
インキョメン ……98,99
隠居屋 ……38
インゲン料理 ……25

う

浮草 ……63
ウキス(石材)……71
ウケトリ仕事 ……56
ウコギ(山菜)……24
ウサギッチリ ……89
ウサギ肉 ……22
ウシオイ ……149
氏神 ……107,113,116,117,215,216,217
氏子 ……194
氏子総代 ……107,113
臼スキ餅 ……214
ウズラ山 ……223
失せ物 ……132
内馬屋 ……10,41,47
うちかけ ……11,12
ウチザシキ……39,41,43,242,244,246
うちみ ……136
ウツギ ……71
ウド ……24
ウドン ……30,210
ウドンゲ ……132
ウドン粉 ……208
ウドンブチ ……29
うどんのゆで湯 ……20
ウナギ ……22
ウナギバリ ……150
ウバ石 ……119
ウブアケ……15,122,152,155
ウボヤキ 156,159,160
産着 ……15,104,158,159,160
ウブ毛 ……159
産土の神 ……156
産立飯 ……151,158
ウブ湯 ……43,158
馬市 ……82
馬入れ道 ……79
馬小屋の肥出し ……182,195,210,211
馬捨場 ……69
馬の足 ……58
馬の神様 ……43
馬のくせ ……70
馬の守護神 ……123
馬のタテゴ ……70
馬の特徴 ……70
馬の荷 ……70
馬の鼻取り ……57
馬持ち ……123
うまや ……38,41,70,123,199
馬屋神様 ……118
ウマヤ肥 ……80
ウマヤトボ ……41
ウミッコ ……66
産み綱 ……151,155
梅の木沼 ……230
埋薪法 ……65
梅若 ……202
ウラ鬼門 ……126
ウラケエド ……79
ウラトリ ……65
ウルシ ……25,42
うるちもち ……28
運送車 ……69,81

え

エエ ……56,58,59,75
エエガエシ ……75
エエ仕事 ……39,75
エカキ(養蚕カゴ) ……67,81
疫病 ……193,205
エゴの実 ……63
エゴの木 ……191

索　　引

あ

あいばらみ……153
アオソ(カラムシ)……51
アオッケ(馬の毛色)……70
アオフ(まむし)……32
青柳講……96
青柳大師……162,187
赤アザ……157
赤城型民家……10,37
赤城型屋根……242,244,246,247
赤城講……46,106
赤城様……60,114,119,204
赤城山……206
赤城信仰……106
赤城神社……46,60,139,180,186,188,198,213,214,220
赤城の神様……223
赤城の山開き……204
赤城真石……49,71
赤米……49
赤シバ刈り……76
赤抱き……159
アカフ(まむし)……32
あがり苗……58,73
アガリハナ……39,41
秋上げ……53,109,171,202,215
秋ウナイ……68
アキノカタ……158
秋彼岸……77
秋祭り……112
あく……18
悪疫退散……137
あぐり……159
アゲアゲ(稲刈り祝)……63
アゲイロリ……41
アゲザク……50
アゲミ……81
アゲロ……42
アサ……51
浅井戸……35
朝エビス……196,197
朝草刈り……77
朝蜘蛛……120
アサクワ……68
朝ソバ……186,187
朝づくり……77
麻の葉……15
アサミケ……186
アサムコ……167
朝湯……186
足入れ……152,166,167
アシゲ……70
足駄……19
足なか……15,19,78
アシナガバチ……132
小豆粥……38,50,63,95,103,187,192,193
アズキトギババア……223
小豆ボウトウ……30
小豆飯……27,29
畦上げ……71
アセモ……129
アタマ洗い……152,170
アタマスキ……66
アタリバチ……121
アッケ……129
アッタメガユ……196
アテナンゴ……149
後産……151
あととり……98
あとまる……12
穴掘り……87,157,175
穴まわり……175
あねさんかぶり……9,19
あばれ神様……43
暴れ神輿……206
油皿……46
油餅……28,217
あべかわ……28
アーボヘーボ……181,190,200
雨乞い……49,60,91,106,110,111,119,137
雨乞石……60,79
甘酒……32,110
余り苗……49
雨っぷり祝い……91
操浄瑠璃人形……135
アラジロ……57
新盆……103,177,178,207
新盆棚……182,208
新盆見舞……208,209
新盆迎え……182
アワ……51,162
粟ごわめし……29,30,197,200
淡島様……84,119,232
あわせ……13,75
アワセンボウ……168
アワヌカ……83
粟飯……30
アワ餅……28,187
行火……45
安産……121,151,154
行燈……46
アンドン飼い……49,65
アンピン餅……203
安楽飼い……65

い

イイツギ……82,89
許嫁……172
イカダマブシ……66
息ぬき……36
イキボン……104,152,171,172,209
胃けいれん……129
イゴタ……54
イザリバタ……16
石臼……32,47,156
石垣石屋……71
石合戦……94
石神……108
石車……52
石俵……52
石ベッツイ……45
伊勢講……94
伊勢まいり……80,114
出雲大社……214
イタカソバ……25,26
いた砂糖……23
イタチバコ……149
市……82
市がさかえ申した……224
イチジク……121
一之瀬……68
イチバングサ……63
イチクチ……54
イチゲン……11,12,22,102
イチゲンザシキ……243
一見葬礼火事見舞……12
一ダンマキ……81

群馬県民俗調査報告書第二十三集

宮城村の民俗

昭和五十六年三月二十八日印刷
昭和五十六年三月三十日発行　（非売品）

編集発行　群馬県教育委員会
前橋市大手町一丁目一番一号
電話　〇二七二(二三)一一一一

印刷所　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町六七番地
電話　〇二七二(五〇)一二一二